

東松島市文化財報告書第 27 集

# 里 浜 貝 塚

総 括 報 告 書

令和 7 年度

東松島市教育委員会



# 里浜貝塚

総括報告書





里浜貝塚遠景

□ : 史跡指定範圍



里浜貝塚全景





北貝塚全景



東貝塚全景

## 序 文

宮城県東部にある東松島市は、石巻市と松島町に挟まれた仙台湾沿岸地域に位置します。特別名勝松島の一角を占め、とくに松島湾の入り口に浮かぶ宮戸島は「奥松島」と呼ばれ、松島本来の姿をとどめる重要な地域となっています。

松島湾沿岸は、縄文時代の貝塚が密集する地域としても全国的に著名な地域ですが、この「奥松島」にあるのが里浜貝塚です。日本最大級の規模を誇ります。松島がほぼ現在の形になった約6,800年前からムラが営まれ、4,500年以上にわたる海に暮らした縄文人の生活の跡がしっかりと残されている遺跡です。大正7年の松本彦七郎博士による発掘調査に始まり、これまで多くの研究者や研究機関によって調査が行われてきました。古くから多数の人骨や漁具、装身具などの多彩な骨角器が出土することでも知られ、我が国における貝塚研究の先駆的な役割を果たしてきました。

平成7年2月に国指定史跡に指定され、今年指定から30年を迎えました。東松島市では、これまで史跡の保存と管理に努めるとともに、史跡の環境整備を行い、今も縄文の原風景が残る自然環境の中で「里浜貝塚ならではの」の活用を進めているところであります。

本書は、松本博士以来の調査と研究成果を『里浜貝塚総括報告書』としてまとめたものです。本書の成果がこれからの調査研究に活かされ、併せて里浜貝塚の保存と活用につながることを願います。

最後に、本書を刊行するにあたりご指導ご協力いただきました関係者の皆様に、感謝の意を表します。

令和7年6月

東松島市教育委員会

教育長 相沢 進

## 例 言

1. 本書は、宮城県東松島市宮戸字里地内外に所在する国指定史跡里浜貝塚の、平成8年度から令和3年度まで国庫補助を受けて実施した発掘調査を中心に、これまでの発掘調査や研究成果をもとに新たに判明した内容を含めて総括した報告書である。
2. 本書の作成は、東松島市教育委員会を事務局として、東松島市内遺跡発掘調査指導委員会および里浜貝塚総括報告書執筆検討委員会の指導の下、国庫補助を受けて実施した。
3. 発掘調査は、第1～6次調査（平成8～11年度）を会田容弘、第7～30次調査（平成13～令和3年度）を菅原弘樹が担当した。各年度の調査箇所、調査の経緯・経過等は、第3章第1節のとおりである。
4. 里浜貝塚総括報告書執筆検討委員会の組織は、以下のとおりである。

委員 岡村道雄（奥松島縄文村歴史資料館名誉館長）、会田容弘（郡山女子大短期大学部教授）、菅野智則（東北大学埋蔵文化財調査室特任准教授）、奈良貴史（新潟医療福祉大学教授）、松本秀明（元東北学院大学教授）、吉川昌伸（古代の森研究舎代表）

事務局 五ノ井勝浩（東松島市教育委員会生涯学習課課長）、川口貴史（生涯学習課文化財係長兼奥松島縄文村歴史資料館副館長）、菅原弘樹（生涯学習課奥松島縄文村歴史資料館文化財専門官）、松崎哲也（生涯学習課奥松島縄文村歴史資料館学芸員）
5. 本書の執筆は、東松島市教育委員会職員ならびに里浜貝塚総括執筆検討委員会委員が分担して行い、編集は菅原が担当し、永沼奈緒子が補助した。なお、第4、5章については、委員および外部機関の以下の方々に分析と執筆をしていただいた。第4章第2節1：菅野、2～4：会田、6(1)(3)：奈良、6(2)：澤田純明・佐伯史子、6(4)：佐宗亜衣子・水嶋崇一郎、6(5)：米田穰、6(6)：安達登、7：吉川、第5章第1節1・第2節2(1)：松本、第1節2：吉川、第2節1：会田、第4節：奈良。
6. 遺構の整理は会田と菅原が行った。遺物の整理については、土器は会田、菅野、墓田裕二、澤口美幸、石器は会田、岡村、骨角牙貝製品は会田、菅原、動物遺存体は松崎、川口、菅原が行った。
7. 里浜貝塚の調査成果については、以下の概報を刊行してきたが、本書の内容が優先する  
鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 1997「里浜貝塚－平成8年度発掘調査概報」  
鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 1998「里浜貝塚－平成9年度発掘調査概報」  
鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 1999「里浜貝塚－平成10年度発掘調査概報」  
鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 2000「里浜貝塚－平成11年度発掘調査概報」  
鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 2003「里浜貝塚－平成13・14年度発掘調査概報」  
東松島市教育委員会 2008「里浜貝塚VI－平成15-17年度発掘調査概報」  
東松島市教育委員会 2010「里浜貝塚－宮城県東松島市里浜貝塚寺下囲地点の調査概報」  
東松島市教育委員会 2016「里浜貝塚－平成23・26年度発掘調査概報」  
東松島市教育委員会 2021「東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告書Ⅲ」
8. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は、奥松島縄文村歴史資料館が一括して保管している。
9. 本書の刊行に際し、以下の方、機関にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表す。（五十音順・敬称略）  
相澤清利、会田容弘、安達登、阿部芳郎、生田和宏、市川健夫、岡村道雄、忍澤成視、海部陽介、菅野智則、日下和寿、近藤修、斎藤慶史、佐伯史子、佐宗亜衣子、佐藤則之、澤田純明、鈴木雅、鈴木三男、須田良平、千葉直樹、長直信、奈良貴史、根本潤、萩原康雄、早瀬亮介、藤澤敦、松本秀明、水沢教子、水嶋崇一郎、村上裕次、山崎健、山田晃弘、山田凜太郎、吉川昌伸、米田穰、文化庁文化財部文化財第二課、宮城県教育庁文化財課、東北大学総合学術博物館、東京大学総合研究博物館、東北歴史博物館、新潟医療福祉大学自然人類学研究所
10. 表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

## 第1章 里浜貝塚の概要

第1節 遺跡の位置と自然環境	1
1. 遺跡の位置と立地 (松本)	1
2. 自然環境 (吉川)	6
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境 (菅原)	9
1. 松島湾沿岸の貝塚群	9
2. 里浜貝塚の概要	12

## 第2章 里浜貝塚の歴史

第1節 調査研究の歴史 (会田、菅原)	14
第2節 保存、整備と活用 (菅原)	21

## 第3章 調査の内容

第1節 調査に至る経緯と調査経過 (菅原)	24
第2節 北貝塚の調査	29
1. 西畑・西畑北地点 (会田、菅原、川口)	29
2. 里地点 (会田、菅原、菅野、松崎)	128
3. 寺下圃地点 (菅原、菅野、松崎、川口)	169
第3節 西貝塚の調査	212
1. 台圃地点 (会田、菅原、菅野、松崎、川口)	212
2. 台圃東地点 (菅原)	282
第4節 東貝塚の調査	287
1. 梨木・畑中地点 (菅原、菅野)	287
2. 梨木東地点 (菅原)	303

## 第4章 これまでの発掘成果のまとめ

第1節 集落・生産地等の分布と変遷 (菅原)	305
1. 時期ごとの遺跡の概要	305
2. 製塩跡の分布と概要	310
第2節 遺物の特徴	315
1. 里浜貝塚の土器 (菅野)	315

2. 土器・土製品（会田）	342
3. 石器（会田）	356
4. 骨角貝製品（会田、菅原）	364
5. 動物遺存体（松崎）	384
6. 人骨（奈良、澤田・佐伯、佐宗・水嶋・菅原、米田、安達）	394
7. 植物遺体群（吉川）	452

## 第5章 総括

第1節 集落をめぐる地形と生態系の変遷	470
1. 小谷底の堆積層にみる海岸地形の変化（松本）	470
2. 里浜貝塚の植生史と人為生態系（吉川）	476
第2節 集落と変遷	484
1. 里浜貝塚の集落景観（会田）	484
2. 災害の歴史（松本、菅原）	494
第3節 生業と交易	505
1. 漁具・漁獲物および漁撈活動の変遷（松崎）	505
2. 縄文時代および古代の製塩（菅原）	511
第4節 里浜貝塚人骨（奈良）	515
1. 里浜貝塚人骨の人類学的	515
2. 里浜貝塚人骨の理化学的分析	517

## 第6章 まとめ（菅原）

1. 里浜集落の時期と空間利用	519
2. 里浜貝塚を取り巻く地形と生態系の変遷	519
3. 里浜人の生業活動	520
4. 里浜人の交易	520
5. 里浜人骨	521

## 挿 図 目 次

第1図 特別名勝松島と里浜貝塚の位置	1	第8図 宮城県内の貝塚分布	10
第2図 松島湾沿岸の地形分類図	2	第9図 松島湾沿岸の縄文時代遺跡と里浜貝塚の位置	11
第3図 野蒜海岸における陸繋砂州の発達過程	4	第10図 宮戸島の遺跡	12
第4図 松島湾沿岸の沖積平野における後氷期海面変動	4	第11図 里浜貝塚全体図	13
第5図 松島湾の沈水過程	5	第12図 貝層断面図	14
第6図 里浜貝塚周辺の地形分類図	5	第13図 人骨の出土状況スケッチ	14
第7図 宮戸島の2013年植生図	8	第14図 里浜貝塚調査区全体図	16

第 15 図	奥松島縄文村歴史資料館による調査地点……………	25	第 57 図	里 66 地点のアサリ殻高分布……………	149
第 16 図	北貝塚・西貝塚調査区配置図……………	29	第 58 図	里 66 地点の魚類組成……………	149
第 17 図	西畑・西畑北地点第 1・3 次調査区……………	30	第 59 図	里 66 地点のアイナメ属体長分布……………	150
第 18 図	西畑・西畑北地点第 1 次調査層序対比図……………	31	第 60 図	里 66 地点のスズキ属体長分布……………	150
第 19 図	第 1、2 トレンチ平面図および断面図……………	32	第 61 図	里 29・2 地点 I 区北・東壁断面図……………	156
第 20 図	2 号土坑、3 号土坑、3 号竪穴建物……………	38	第 62 図	里 16 地点調査区……………	159
第 21 図	第 3 トレンチ平面図・断面図……………	42	第 63 図	里 64 地点調査区位置図……………	162
第 22 図	G51-25 区と西畑北地点の平底製塩土器底部直径……………	44	第 64 図	里 64 地点出土土器……………	163
第 23 図	西畑地点北区・南北トレンチ遺構配置図……………	54	第 65 図	寺下囲地点調査区位置図……………	169
第 24 図	1 号竪穴建物……………	57	第 66 図	寺下囲（里 74 地点）調査区と断面図……………	170
第 25 図	1 号製塩炉、3 号製塩炉、埋設土器平面図……………	58	第 67 図	寺下囲（里 74）地点出土土器・土製品（1）……………	173
第 26 図	2 号製塩炉……………	59	第 68 図	寺下囲（里 74）地点出土土器・土製品（2）……………	174
第 27 図	西畑地点南北トレンチ断面図・6 層遺物出土位置平面図……………	61	第 69 図	寺下囲（里 74）地点出土土器・土製品（3）……………	175
第 28 図	2 号竪穴建物……………	61	第 70 図	寺下囲（里 74）地点出土土器・土製品（4）……………	176
第 29 図	3 号竪穴建物とト骨出土状況……………	62	第 71 図	寺下囲（里 74）地点の貝類組成……………	187
第 30 図	西畑地点東西トレンチ（東区）層序断面図および 8 層平面図……………	64	第 72 図	寺下囲（里 74）地点の魚類組成……………	188
第 31 図	西畑地点南区断面図、遺構配置図……………	66	第 73 図	寺下囲地点（里 72 地点）調査区第 29 次調査位置図……………	196
第 32 図	西畑地点南区人骨出土状況平面図……………	68	第 74 図	寺下囲（里 72）地点調査区平面図・断面図……………	196
第 33 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（1）……………	71	第 75 図	土坑墓平面図……………	197
第 34 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（2）……………	72	第 76 図	寺下囲（里 72）地点の貝類組成……………	203
第 35 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（3）……………	73	第 77 図	寺下囲（里 72）地点のアサリ殻高分布……………	204
第 36 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（4）……………	74	第 78 図	寺下囲（里 72）地点の魚類組成……………	205
第 37 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（5）……………	75	第 79 図	寺下囲（里 72）地点のスズキ属体長分布……………	205
第 38 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（6）……………	76	第 80 図	寺下囲（里 72）地点のアイナメ属体長分布……………	205
第 39 図	里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物（7）……………	77	第 81 図	台囲地点調査区位置図（第 4・5・9 次調査区）……………	212
第 40 図	里浜貝塚南区出土遺物（1）……………	78	第 82 図	台囲地点（第 4 次調査区）遺構配置図……………	213
第 41 図	里浜貝塚南区出土遺物（2）……………	79	第 83 図	台囲地点（第 4 次調査）竪穴建物、土坑平面図・断面図……………	215
第 42 図	里浜貝塚東西トレンチ（西区）出土遺物……………	80	第 84 図	台囲地点竪穴建物、土坑平面図……………	215
第 43 図	西畑・西畑北地点調査区位置図……………	107	第 85 図	台囲地点遺構出土遺物……………	216
第 44 図	調査区全体図……………	108	第 86 図	台囲地点 P32・6・1 区層分布図……………	217
第 45 図	西畑北地点第 8 次調査区断面図……………	108	第 87 図	台囲地点 P32・21 区層分布図……………	220
第 46 図	西畑北地点出土土器（1）……………	111	第 88 図	P32-21 区の貝類組成……………	228
第 47 図	西畑北地点出土土器（2）……………	112	第 89 図	P32-21 区の魚類組成……………	229
第 48 図	史跡整備工事に係る西畑・台囲地区の調査区位置図……………	118	第 90 図	台囲地点（第 5 次調査区）発掘区位置図……………	277
第 49 図	西畑西地点調査区平面図および断面図……………	119	第 91 図	2 号、3 号竪穴建物、配石遺構平面図……………	277
第 50 図	西畑－西 II 区（第 10・12 次調査）平面および断面図……………	122	第 92 図	里浜貝塚台囲地点出土土器……………	279
第 51 図	1 号溝跡出土土器……………	122	第 93 図	台囲東地点遺構平面図……………	282
第 52 図	HSO 地点調査区平面・断面図……………	130	第 94 図	S K 1 土坑断面図……………	282
第 53 図	里・寺下地区調査区……………	144	第 95 図	台囲東地点出土土器……………	283
第 54 図	里 21 地点ポーリング調査箇所……………	144	第 96 図	東貝塚調査区位置図……………	287
第 55 図	里地点（里 66、29-2 地点）調査区……………	145	第 97 図	7 トレンチ断面図……………	289
第 56 図	里 66 地点の貝類組成……………	149	第 98 図	梨木東地点調査区（第 25 次調査）の位置……………	303
			第 99 図	里浜貝塚各地点の時期と変遷……………	306

第 100 図	北貝塚の変遷と遺構の分布	308	第 137 図	西畑北 SNH-D 地点の主要花粉分布図	462
第 101 図	里浜貝塚および松島湾沿岸の製塩土器	312	第 138 図	里 13 地点の主要花粉分布図	465
第 102 図	里浜貝塚西畑・西畑北地点の製塩遺構	313	第 139 図	堆積層の調査を行った谷底低地	470
第 103 図	里浜貝塚梨木東地点出土土器	316	第 140 図	大畑付近の谷底低地のボーリング地点	471
第 104 図	里浜貝塚台頂部地点出土土器	316	第 141 図	大畑付近の谷底低地の堆積層柱状図	472
第 105 図	水沢 (2013) による土器変遷の理解	319	第 142 図	宮田付近を通る低地のボーリング調査地点	473
第 106 図	梨木圃地点出土土器	320	第 143 図	宮田付近を通る低地のボーリング柱状図 (1)	473
第 107 図	林謙作による「袖窪式」	325	第 144 図	宮田付近を通る低地のボーリング柱状図 (2)	474
第 108 図	小笠原好彦による「袖窪 I・II 式」	325	第 145 図	宮田付近を通る谷の海成堆積物の垂直分布	475
第 109 図	山居遺跡第 VI・VII 群土器一部	326	第 146 図	里浜貝塚と植物遺体試料採取地点	477
第 110 図	六反田遺跡における X 字状のモチーフ	326	第 147 図	里浜貝塚の低地の層序と分析試料採取層準	477
第 111 図	里浜貝塚台頂部地点出土土器	328	第 148 図	里浜貝塚の主要花粉分布図	478
第 112 図	後藤 (1960) 時の宮戸 III・IV 式の基準資料	331	第 149 図	里浜貝塚における大型植物化石の産出状況	479
第 113 図	里浜貝塚台頂部地点等出土土器の後藤 (1962) 時の分類	332	第 150 図	大浜 No.9 コアの主要花粉分布図	481
第 114 図	斎藤 (1968) による分類	335	第 151 図	西畑北地点周辺の丘陵の植生と低地の環境変遷モデル	482
第 115 図	伊東信雄 (1957) による後期編年基準資料	336	第 152 図	里浜貝塚発掘調査および立会・試掘調査位置図	486
第 116 図	『宮城県史』(1981) 宝ヶ峯遺跡出土宝ヶ峯式基準資料	337	第 153 図	里浜貝塚遺構 (縄文時代後・晩期) 詳細図	488
第 117 図	里浜貝塚各地点の貝類組成	386	第 154 図	里浜貝塚遺構 (縄文時代後・晩期) 配置図	491
第 118 図	里浜貝塚各地点の魚類組成	386	第 155 図	土層断面調査地点	494
第 119 図	96-1 号人骨出土部位	395	第 156 図	西畑北地点における堆積層分析	495
第 120 図	96-2 号人骨出土部位	396	第 157 図	仙台湾岸の海水準変動	497
第 121 図	96-3 号人骨出土部位	398	第 158 図	ボーリング調査実施地点	498
第 122 図	96-2 号人骨頭蓋骨計測値の縄文各集団および現代日本人平均値からの偏差折線	399	第 159 図	津波堆積物の対比	500
第 123 図	97-1 号人骨出土部位	400	第 160 図	津波襲来時期の推定	500
第 124 図	97-3 号人骨出土部位	402	第 161 図	西畑・西畑北地点周辺の地形と調査箇所	502
第 125 図	97-4 号人骨出土部位	403	第 162 図	西畑北地点入江奥低地の変遷図	502
第 126 図	98-1 号人骨出土部位	405	第 163 図	西畑・西畑北地点の基本層序柱状図	503
第 127 図	98-2 号埋設土器人骨出土部位	410	第 164 図	西畑北地点堆積層の変遷	504
第 128 図	梨木東 1 号人骨出土部位	429	第 165 図	松島湾沿岸の縄文～弥生時代の製塩遺跡	511
第 129 図	里浜貝塚出土人骨の炭素・窒素同位体比	444	第 166 図	仙台湾周辺の製塩土器出土遺跡分布図	512
第 130 図	里浜貝塚出土人骨の較正放射性炭素年代の確率密度分布	444	第 167 図	松島湾沿岸の古代の製塩遺跡	513
第 131 図	里浜貝塚人骨の炭素・窒素同位体比と放射性炭素年代 (未較正) の対応	445	第 168 図	里浜貝塚・江ノ浜貝塚出土の古代製塩土器	514
第 132 図	縄文時代晩期・弥生時代人骨における炭素・窒素同位体比の性差	445			
第 133 図	里浜貝塚人骨の出土地点ごとの較正放射性炭素年代	446			
第 134 図	里浜縄文人骨にみられた mtDNA ハプログループと、それらの縄文時代人における出現頻度	449			
第 135 図	西畑北地点の地質柱状図と分析試料採取層準	452			
第 136 図	西畑北 (SNH-A・B・C) の主要花粉分布図	455			

# 目 次

第 1 表	里浜貝塚発掘調査の歴史	17	第 36 表	寺下囲 (里 72) 地点動物遺存体集計表 (鳥・哺乳・爬虫類)	210
第 2 表	東北歴史資料館の里浜貝塚調査一覧表	20	第 37 表	台囲地点 P32 - 6・1 区土層注記	218
第 3 表	調査年度・回数と調査地点	26	第 38 表	台囲地点 P32 - 6・1 区層の重なりを示す表	218
第 4 表	確認・試掘・立会調査地点と概要	27	第 39 表	台囲地点 P32-21 区土層注記	221
第 5 表	G51-25 区層別製塩土器出土状況	44	第 40 表	台囲地点 P32-21 区出土土器層別個体出土表	222
第 6 表	西畑地点北区層序観察表と製塩土器底部出土状況	55	第 41 表	台囲地点 P32-21 区層の重なりを示す表	223
第 7 表	西畑北地点出土土器観察表 (1)	112	第 42 表	台囲地点出土石器・骨角牙貝製品属性表	224
第 8 表	西畑北地点出土土器観察表 (2)	113	第 43 表	台囲地点 (P32-21 区) 貝層層位別出土一覧表	229
第 9 表	西畑西地点出土動物遺存体一覧表	120	第 44 表	台囲地点 (P32-21 区) 魚類集計表	232
第 10 表	H S O 地点出土石器・骨角器属性表	133	第 45 表	台囲地点 (P32-21 区) 鳥類集計表	236
第 11 表	里 66 地点出土土器属性表	146	第 46 表	台囲地点 (P32-21 区) 哺乳類集計表①	239
第 12 表	里 66 地点動物遺存体集計表 (貝類)	151	第 47 表	台囲地点 (P32-21 区) 哺乳類集計表②	245
第 13 表	里 66 地点動物遺存体集計表 (魚類)	152	第 48 表	台囲地点 (P32-21 区) 爬虫類集計表	245
第 14 表	里 66 地点動物遺存体集計表 (鳥・哺乳・爬虫・両生類)	154	第 49 表	台囲東地点出土縄文土器観察表	284
第 15 表	里 29-2 地点出土動物遺存体種名表	157	第 50 表	梨木・畑中地点出土縄文土器一覧表	290
第 16 表	里 29-2 地点ブロックサンプル貝類出土集計表 (近世)	157	第 51 表	梨木・畑中地点出土縄文土器観察表	298
第 17 表	里 16 地点ブロックサンプル貝類出土集計表 (縄文晩期)	160	第 52 表	鹿角素材獲得方法	366
第 18 表	里 64 地点出土骨角牙製品観察表	168	第 53 表	鹿角切断法	366
第 19 表	寺下囲 (里 74) 地点出土土器観察表 (1)	180	第 54 表	角器組成比較	366
第 20 表	寺下囲 (里 74) 地点出土土器観察表 (2)	181	第 55 表	貝輪の地点別出土一覧表	382
第 21 表	寺下囲 (里 74) 地点出土土器観察表 (3)	182	第 56 表	貝輪の時期別・素材別出土状況	382
第 22 表	寺下囲 (里 74) 地点出土石器観察表	184	第 57 表	貝輪の製作段階別出土状況	382
第 23 表	寺下囲 (里 74) 地点出土骨角器観察表	185	第 58 表	分析対象とした動物遺存体の概要	384
第 24 表	寺下囲 (里 74) 地点貝類出土一覧表	187	第 59 表	里浜貝塚各地地点の動物遺存体種名表	392
第 25 表	寺下囲 (里 74) 地点魚類出土一覧表	188	第 60 表	2 号人骨頭蓋の計測値	397
第 26 表	寺下囲 (里 74) 地点両生類出土表	190	第 61 表	2 号人骨頭蓋の非計測的形態小変異	397
第 27 表	寺下囲 (里 74) 地点爬虫類出土表	190	第 62 表	1・2 号人骨の歯の計測値	397
第 28 表	寺下囲 (里 74) 地点鳥類出土表	190	第 63 表	里浜 97- 1・3・4 号人骨、98-1 号人骨頭蓋の計測値	412
第 29 表	寺下囲 (里 74) 地点哺乳類出土表	190	第 64 表	里浜 97- 1・3・4 号人骨、98-1 号人骨頭蓋における形態小変異の出現頻度	413
第 30 表	寺下囲 (里 72) 地点出土土器観察表	199	第 65 表	西畑地点南区焼骨重量	413
第 31 表	寺下囲 (里 72) 地点出土骨角・貝製品観察表	202	第 66 表	里浜 97-2・3 号人骨、98-1 号人骨四肢骨計測値	414
第 32 表	寺下囲 (里 72) 地点動物遺存体集計表 (貝類)	207	第 67 表	里浜貝塚出土人骨歯冠計測値	415
第 33 表	寺下囲 (里 72) 地点動物遺存体集計表 (魚類①)	208	第 68 表	袖窪地点表採人骨永久歯計測値	432
第 34 表	寺下囲 (里 72) 地点動物遺存体集計表 (魚類②)	209	第 69 表	袖窪地点表採人骨鎖骨計測値	432
第 35 表	寺下囲 (里 72) 地点動物遺存体集計表 (魚類③)	210	第 70 表	東京大学総合研究博物館収蔵の里浜貝塚出土人骨の一覧	435
			第 71 表	2001 年報告データ (米田 2001)	440
			第 72 表	1999 年分析試料リスト	440
			第 73 表	東北大学総合学術博物館 (松本発掘資料) 分析試料リスト	440

第 74 表	東京大学総合研究博物館 (UMUT) 分析試料リスト	440	第 83 表	西畑北 SNH-C 地点周辺より産出した大型植物化石の組成表	457
第 75 表	里浜貝塚出土人骨の炭素・窒素の濃度・同位体比と慣用・較正放射性炭素年代 (1)	441	第 84 表	西畑北 SNH-D 地点から産出した花粉化石 (1)	460
第 76 表	里浜貝塚出土人骨の炭素・窒素の濃度・同位体比と慣用・較正放射性炭素年代 (2)	442	第 85 表	西畑北 SNH-D 地点から産出した花粉化石 (2)	461
第 77 表	里浜貝塚出土人骨の炭素・窒素の濃度・同位体比と慣用・較正放射性炭素年代 (3)	443	第 86 表	西畑北 SNH-D 地点出土木材の樹種同定結果	462
第 78 表	分析に用いた人骨と DNA 試料	447	第 87 表	SNH-D 地点産出大型植物化石一覧表	463
第 79 表	里浜人骨にみられたミトコンドリア DNA 多型	448	第 88 表	SNH-D 地点現地取り上げ試料	464
第 80 表	西畑北 (SNH-A・B・C) より産出した花粉化石の組成表 (2)	453	第 89 表	里 13 地点から産出した花粉化石 (1)	466
第 81 表	西畑北 (SNH-A・B・C) より産出した花粉化石の組成表 (2)	454	第 90 表	里 13 地点から産出した花粉化石 (2)	467
第 82 表	西畑北 SNH-B 地点周辺より産出した大型植物化石の組成表	456	第 91 表	里浜貝塚時期別遺構・貝層・包含層	487
			第 92 表	年代値とコード番号	499

## 写 真 目 次

写真 1	高島多米治コレクション	14	写真 23	西畑地点第 3 トレンチ出土遺物 (2)	53
写真 2	松本彦七郎博士	14	写真 24	西畑地点 (第 3 次調査) (1)	81
写真 3	石膏取上げ人骨 (東北大学総合学術博物館)	15	写真 25	西畑地点 (第 3 次調査) (2)	82
写真 4	石膏取り上げ人骨 (国立科学博物館)	15	写真 26	西畑地点 (第 3 次調査) (3)	83
写真 5	東北大学理学標本館	15	写真 27	西畑地点 (第 3 次調査) (4)	84
写真 6	松本資料の保管状況	15	写真 28	西畑地点 (第 3 次調査) (5)	85
写真 7	標本箱のラベル	15	写真 29	西畑地点出土土器 (1) S = 1/3	86
写真 8	層位的発掘の検証	15	写真 30	西畑地点出土土器 (2) S = 1/3	87
写真 9	「土器文様論」に図示された土器	15	写真 31	西畑地点出土土器 (3) S = 1/3	88
写真 10	宮戸島遺跡調査会の調査 (梨木地点)	19	写真 32	西畑地点出土土器 (4) S = 1/3	89
写真 11	西畑地点調査区	20	写真 33	西畑地点出土土器 (5) S = 1/3	90
写真 12	「さとほま縄文の里史跡公園」全景	22	写真 34	西畑地点出土土器 (6) S = 1/3	91
写真 13	貝塚の屋外露出展示	22	写真 35	西畑地点出土土器 (7) S = 1/3	92
写真 14	貝層観察館	22	写真 36	西畑地点出土土器 (8) S = 1/3	93
写真 15	「里浜貝塚ならでは」の体験講座	23	写真 37	西畑地点出土土器 (9) S = 1/3	94
写真 16	西畑地点 (第 1 次調査) (1)	46	写真 38	西畑地点出土土器 (10) S = 1/3	95
写真 17	西畑地点 (第 1 次調査) (2)	47	写真 39	西畑地点出土土器 (11) S = 1/3	96
写真 18	西畑地点 (第 1 次調査) 出土彩文皿型土器 (L52-10 区 3a 層)	48	写真 40	西畑地点出土土器 (12) S = 1/3	97
写真 19	西畑・里 HSO 遺構出土遺物	49	写真 41	西畑地点出土土器 (13) S = 1/3	98
写真 20	西畑地点第 1 トレンチ出土遺物	50	写真 42	西畑地点出土土器 (14) S = 1/3	99
写真 21	西畑地点第 2 トレンチ出土遺物	51	写真 43	西畑地点出土土器 (15) S = 1/3	100
写真 22	西畑地点第 3 トレンチ出土遺物 (1)	52	写真 44	西畑地点出土土器 (16) S = 1/3	101
			写真 45	西畑地点出土骨角器 (1)	102

写真 46	西畑地点出土骨角器 (2) ……………	103	写真 90	台圃地点調査 (第 4 次調査) (1) ……………	248
写真 47	西畑地点出土土製品・石製品・金属製品 ……………	104	写真 91	台圃地点調査 (第 4 次調査) (2) ……………	249
写真 48	西畑地点出土木製品、植物遺体 ……………	105	写真 92	台圃地点調査 (第 4 次調査) (3) ……………	250
写真 49	西畑北地点 (第 7・8 次調査) 出土土器 ……………	114	写真 93	台圃地点調査 (第 4 次調査) (4) ……………	251
写真 50	里浜貝塚全景と西畑北地点の位置 ……………	115	写真 94	台圃地点調査 (第 4 次調査) (5) ……………	252
写真 51	西畑北地点 (第 7・8 次調査) (1) ……………	116	写真 95	台圃地点遺構出土遺物 ……………	253
写真 52	西畑北地点 (第 7・8 次調査) (2) ……………	117	写真 96	台圃地点出土土器 ……………	254
写真 53	西畑 - II 区 (第 10・12 次調査) 出土遺物 ……………	123	写真 97	台圃地点出土土製品、石製品、骨角器 ……………	255
写真 54	西畑地点 (第 10・12 次調査) (1) ……………	125	写真 98	台圃地点出土骨角器、鹿角 ……………	256
写真 55	西畑地点 (第 10・12 次調査) (2) ……………	126	写真 99	台圃地点出土鹿角 ……………	257
写真 56	西畑 - 東区 (第 15 次調査) ……………	127	写真100	台圃地点出土鹿角、動物遺存体 ……………	258
写真 57	HSO 地点 (第 2 次調査) (1) ……………	135	写真101	台圃地点 P32-6・1 区出土土器 (1) ……………	259
写真 58	HSO 地点 (第 2 次調査) (2) ……………	136	写真102	台圃地点 P32-6・1 区出土土器 (2) ……………	260
写真 59	HSO 地点出土縄文土器 (1) ……………	137	写真103	台圃地点 P32-6・1 区出土土器 (3) ……………	261
写真 60	HSO 地点出土縄文土器 (2) ……………	138	写真104	台圃地点 P32-6・1 区出土土器 (4) ……………	262
写真 61	HSO 地点出土遺物 (1) ……………	139	写真105	台圃地点 P32-21 区出土土器 (1) ……………	263
写真 62	HSO 地点出土遺物 (2) ……………	140	写真106	台圃地点 P32-21 区出土土器 (2) ……………	264
写真 63	HSO 地点出土遺物 (3) ……………	141	写真107	台圃地点 P32-21 区出土土器 (3) ……………	265
写真 64	里 13 地点出土遺物 ……………	143	写真108	台圃地点 P32-21 区出土土器 (4) ……………	266
写真 65	里 66 地点出土土器 ……………	146	写真109	台圃地点 P32-21 区出土土器 (5) ……………	267
写真 66	里 66 地点出土土器・観察表 ……………	148	写真110	台圃地点 P32-21 区出土土器 (6) ……………	268
写真 67	里 66 地点出土骨角貝製品・観察表 ……………	148	写真111	台圃地点 P32-21 区出土土器 (7) ……………	269
写真 68	里 66・29-2 地点発掘調査状況 (第 19・20 次調査) ……………	158	写真112	台圃地点 P32-21 区出土土器 (8) ……………	270
写真 69	里 16 地点発掘調査状況 (第 27 次調査) ……………	161	写真113	台圃地点 P32-21 区出土土器 (9) ……………	271
写真 70	里 64 地点貝層の検出状況 ……………	162	写真114	台圃地点 P32-21 区出土土器 (10) ……………	272
写真 71	里 64 地点出土土器 (1) ……………	164	写真115	台圃地点 P32-21 出土土器 (11) ……………	273
写真 72	里 64 地点出土土器 ……………	165	写真116	台圃地点 P32-21 区出土土器 (12) ……………	274
写真 73	里 64 地点出土土器・観察表 ……………	166	写真117	台圃地点 P32-21 区出土土器 (13) ……………	275
写真 74	里 64 地点出土骨角牙製品 (1) ……………	167	写真118	台圃地点 P32-21 区出土土器 (14)、1 号竪穴建物出土 遺物 ……………	276
写真 75	里 64 地点出土骨角牙製品 (2) ……………	168	写真119	里浜貝塚台圃地点出土遺物 ……………	280
写真 76	寺下圃 (里 74) 地点出土土器・土製品 (1) ……………	177	写真120	台圃地点調査 (第 5 次調査) ……………	281
写真 77	寺下圃 (里 74) 地点出土土器・土製品 (2) ……………	178	写真121	台圃東地点出土土器 ……………	285
写真 78	寺下圃 (里 74) 地点出土土器・土製品 (3) ……………	179	写真122	台圃東地点調査 (第 9 次調査) ……………	286
写真 79	寺下圃 (里 74) 地点出土土器 ……………	183	写真123	梨木・畑中地点調査区 ……………	288
写真 80	寺下圃 (里 74) 地点出土骨角器 ……………	185	写真124	7 トレンチ堆積状況 (津波層) ……………	289
写真 81	里浜貝塚寺下圃地点遠景 ……………	193	写真125	梨木・畑中地点出土土器 (1) ……………	291
写真 82	寺下圃 (里 74) 地点調査 (第 17 次調査) ……………	194	写真126	梨木・畑中地点出土土器 (2) ……………	292
写真 83	寺下圃 (里 72) 地点出土土器 ……………	198	写真127	梨木・畑中地点出土土器 (3) ……………	293
写真 84	寺下圃 (里 72) 地点出土土器・観察表 ……………	199	写真128	梨木・畑中地点出土土器 (4) ……………	294
写真 85	寺下圃 (里 72) 地点出土骨角貝製品 (1) ……………	200	写真129	梨木・畑中地点出土土器 (5) ……………	295
写真 86	寺下圃 (里 72) 地点出土骨角貝製品 (2) ……………	201	写真130	梨木・畑中地点出土土器 (6) ……………	296
写真 87	寺下圃 (里 72) 地点 (第 29 次調査) ……………	211	写真131	梨木・畑中地点出土土器 (7) ……………	297
写真 88	台圃地点 (第 4 次調査) 発掘区全景 ……………	247	写真132	畑中 (畑中 4) 地点の調査状況 ……………	302
写真 89	台圃地点 (P 32-21 区) 貝層完掘状況 ……………	247	写真133	梨木東 (扇田 29) 地点の調査と出土遺物 ……………	304

写真134	里浜貝塚台圃地点 P32・21 区出土土器 (1) ……	317	写真160	角器製作動作連鎖 (4) - 鹿角・未製品・製品・工具 ……………	374
写真135	里浜貝塚台圃地点 P32-21 区出土土器 (2) ……	318	写真161	角器製作動作連鎖 (5) - 鹿角・未製品・製品・工具 ……………	375
写真136	梨木圃地点地点出土土器 (1) ……	321	写真162	角器製作動作連鎖 (6) - 鹿角・未製品・製品 ……	377
写真137	梨木圃地点地点出土土器 (2) ……	322	写真163	骨角牙製装身具 ……	379
写真138	梨木圃地点地点出土土器 (3) ……	323	写真164	アカガイ製貝輪未製品を用いた製作の動作連鎖 ……	380
写真139	台圃地点出土土器 (1) ……	329	写真165	里浜貝塚出土のアカガイ製貝輪 ……	381
写真140	台圃地点出土土器 (2) ……	330	写真166	アカガイ製貝輪製作の工程 ……	382
写真141	台圃地点出土土器・土製品 ……	331	写真167	内縁・外縁の研磨状況 (V段階) ……	382
写真142	西の浜貝塚出土西ノ浜式基準資料 ……	334	写真168	貝輪の製作工具 ……	382
写真143	台圃地点出土土器 ……	334	写真169	96- 1号人骨 ……	416
写真144	沼津貝塚出土後期土器 ……	337	写真170	96- 2号人骨頭蓋骨 ……	417
写真145	里浜貝塚の土器作り (1) ……	343	写真171	96- 2号人骨 ……	418
写真146	里浜貝塚の土器作り (2) ……	346	写真172	96- 3号人骨 ……	419
写真147	里浜貝塚の土器作り (3) ……	347	写真173	97- 1号人骨頭蓋 ……	420
写真148	里浜貝塚 (縄文中期後半) の土器製作工具 ……	348	写真174	97- 3号人骨 ……	421
写真149	里浜貝塚 (縄文後期後半から晩期) の土器製作工具 と土器 ……	349	写真175	97- 4号人骨 ……	422
写真150	中期中葉深鉢製作の動作連鎖 (1) ……	351	写真176	出土焼骨 ……	423
写真151	中期中葉深鉢製作の動作連鎖 (2) ……	352	写真177	98- 1号人骨頭蓋 ……	424
写真152	中期中葉浅鉢製作の動作連鎖 ……	353	写真178	98- 1号人骨上顎歯 ……	425
写真153	里浜貝塚出土土製品 ……	355	写真179	98- 1号人骨上顎歯 ……	426
写真154	里浜貝塚剥片石器製作動作連鎖 ……	357	写真180	埋設土器 (土器棺) 出土人骨 ……	427
写真155	里浜貝塚の剥片石器 ……	359	写真181	98- 1号埋設土器 (土器棺) 内部のCT画像 ……	428
写真156	磨製石斧・石棒・石剣製作動作連鎖 ……	361	写真182	梨木東地点出土人骨 ……	430
写真157	角器製作動作連鎖 (1) - 鹿角・未製品・釣針・針 ……………	370	写真183	袖窪地点表採人骨 ……	431
写真158	角器製作動作連鎖 (2) - 鹿角・未製品・製品 ……	372			
写真159	角器製作動作連鎖 (3) - 鹿角・未製品・製品・工 具 ……	373			

# 第1章 里浜貝塚の概要

## 第1節 遺跡の位置と自然環境

### 1. 遺跡の位置と立地

#### (1) 遺跡の位置

里浜貝塚は松島湾の北東部にあたる宮城県東松島市宮戸島にある。東松島市は宮城県の県都仙台市の北東にあり、広域石巻圏の西端に位置する。広域仙台都市圏に隣接するとともに、東は石巻市、西は松島町に隣接している。市の南部に位置する宮戸島は東西約4.5km、南北約4.3km、周囲12km余り、面積にして約7.9km<sup>2</sup>の規模をもつ湾内最大の島で、「奥松島」とも呼ばれ、特別名勝「松島」の一角を占めている（第1図）。

「松島」の自然的名勝の価値は、大小230あまりの島々からなる多島海と、白い岩肌と松林が青い海に映える、自然景観の美しさにある。近年、様々な開発等によって、松島の美しい景観が失われつつある中、松島本来の姿を留める、極めて重要な地域となっている。島の外洋側には、日本三大溪の一つ「嵯峨溪」があり、松島湾内の穏やかな景観とは対照的な、雄大な景観を見ることができる。

遺跡は、島の中央西寄りに位置する里地区の集落を中心に、標高10～20mの丘陵上から低地にかけて立地する。



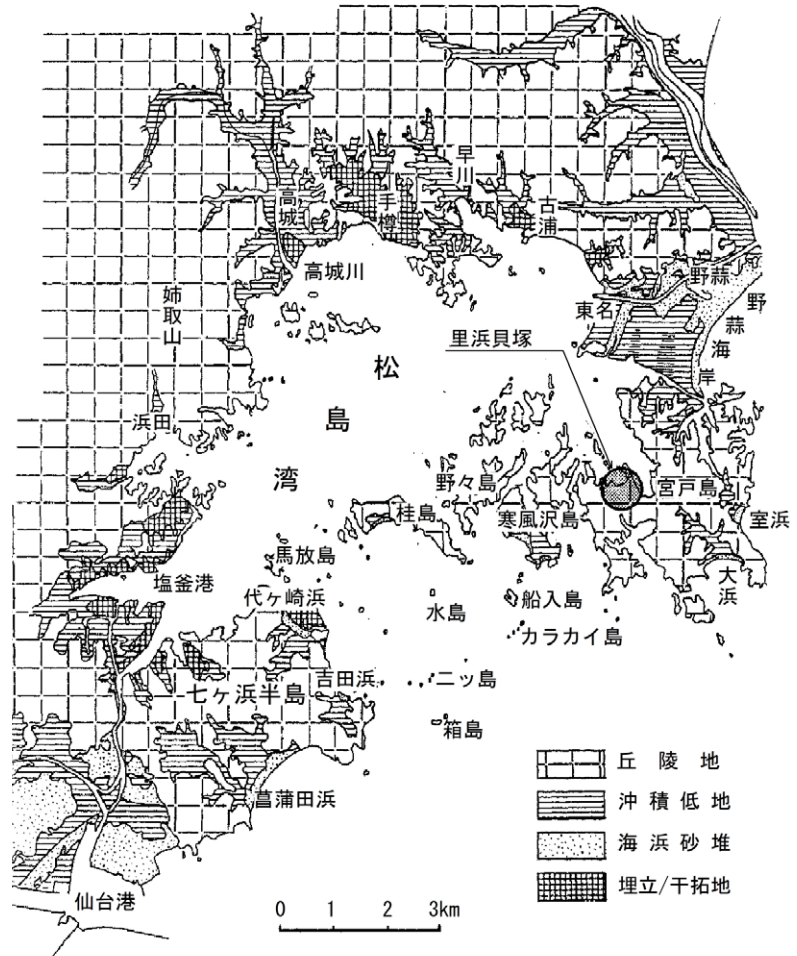
第1図 特別名勝松島と里浜貝塚の位置  
(宮城県 2023『特別名勝松島保存活用計画』を改変)

## (2) 松島湾とその周辺の地形

### 1) 松島湾の地形

松島湾は仙台湾に面する東西約 10 km、南北約 8 km の小湾であり、海岸線が複雑に入り組むいわゆるリアス海岸あるいは沈水海岸の形態をもつ。湾口部には宮戸島、寒風沢島、野々島、桂島および馬放島などの比較的大きな島々が東北東-西南西方向に並び、外洋からの波浪を遮断している。湾内外の潮の出入りは上記列島の間にある狭い水道を通じて行われている。湾の内外には 230 を超える島々が点在し、多島海の様相を呈している。里浜貝塚は松島湾最大の面積を有する宮戸島の北岸に位置する。

時代の異なる地形図や空中写真判読をもとに作成された地形分類図(松本 1984)を第 2 図に示した。分類された地形は丘陵地、沖積低地、海浜砂堆および埋立地/干拓地である。湾の北岸に位置する高城、早川、古浦、南西岸の塩釜、そして宮戸島の大浜などには溺れ谷を埋積した小規模な沖積低地が分布している。



第 2 図 松島湾沿岸の地形分類図(松本 1984 による)

### 2) 松島湾を囲む丘陵と流入する河川

松島湾の北～西方には中新世や鮮新世の凝灰質砂岩、粘板岩などからなる海拔 80～120 m の起伏の大きな丘陵地が連なり、湾の南には海拔 30～60 m の緩やかな起伏をもつ七ヶ浜半島が位置する。これらにより、松島湾はその北・西・南を丘陵に囲まれ、外界から遮断された閉鎖的な湾となっている。流入する河川は丘陵斜面を湾に向かって流下する小規模なものに限られる。唯一外来の河川として位置づけられるのが松島湾を取り巻く丘陵の外側に源をもつ小河川群である。それらは姉取山北西から流れ出ており、その下流では近世以降の品井沼干拓事業で掘削された潜穴から続く排水路と接続され、高城川として松島湾に注いでいる。潜穴から流下する排水路を除く自然河川の幹線流路長は約 12 km、流域面積は約 30 km<sup>2</sup>である。また、松島湾の総集水面積は 65 km<sup>2</sup>である。湾に流入する河川の規模が小さく、総集水面積も狭いことにより、湾の埋積は進行せず、沈水海岸の形態が長く維持されている。

### 3) 松島湾の水深と底質

松島湾の水深は、宮戸島から馬放島に至る列島を境に外洋部では 5～15 m 以上、内湾部では浚渫された航路を除くと 1～4 m である。内湾部で最も水深が大きな地点は野々島の北西 1.5 km 付近にあり水深は 4 m である。また、湾口部の列島にみられる水道の部分は潮流による浸食作用をうけ、周囲より水深は深く、桂島-馬放島間で 15 m、野々島-桂島間で 10 m 前後である。外洋部の海底には樹枝状の海底谷が刻まれており、その主谷にあたるものは、桂島-馬放島間を通り、外洋部のカラカイ島-二ツ島間(水深 12 m)を経て仙台湾の海底に至る。底質は内湾部のほとんどが泥質堆積物であるが、外洋部の海底谷には砂質堆積物、海底谷の壁面や尾根部には基岩が露出している。

#### 4) 沖積低地を構成する沖積層

高城川河口部には25 mの層厚をもつ沖積層が堆積しているが、-18 m以浅には陸成堆積物を覆って堆積する貝殻や貝殻片を含む海成堆積物が確認される。すなわち高城川河口付近では海面が-18 mに到達した時点で海域の侵入が始まったと考えられる。そのほか、五大堂西側の観光栈橋付近には16 mの層厚をもつ沖積層が認められ、海成堆積物は-8 m以浅に認められる。浜田付近では12 mの層厚をもつ沖積層が認められ、海成堆積物は-9 m以浅に、そしてJR塩釜駅付近では16 mの層厚を持つ沖積層が認められ、-14 m以浅に海成層が堆積している。一方、東名海岸の地下には層厚45 mの沖積層が確認され、-43 m以浅に海成堆積物が認められる（松本 1988）。このことから、当地区における海域の侵入は海面が-43 mに達した時期である。

#### 5) 海浜砂堆の分布

外洋に面した野蒜海岸、宮戸島の大浜、室浜、そして七ヶ浜半島の菖蒲田浜、吉田浜などには波浪の影響を強く受けて形成された海浜砂堆が発達している。とくに野蒜海岸に分布する海浜砂堆については、明治9（1876）年の海図において東名や松原付近から宮戸島方向に向かって伸びる砂堆の存在が示されており、明治34（1901）年にはその外洋側に付加されるように砂堆が発達し、昭和13（1938）年には島嶼として存在していた鰯山、鷺ノ巣岩を取り込み、昭和33（1958）年には現在に近い状態となったことが示されている（八島 1988）。このような地形は陸繋砂州と呼ばれるが、生保年間に描かれた「奥州仙台領絵図」（仙台市博所蔵）には、野蒜と宮戸島の間を通過する航路の存在が示されており、その時点において当該陸繋砂州は発達していなかったと考えられる。これらのことから、野蒜海岸に北東方向から供給された沿岸漂砂は、明治9（1876）年頃以降、陸繋砂州を形成・拡大させるように堆積したが、松島湾内への漂砂の侵入はなかったと考えられる（第3図）。

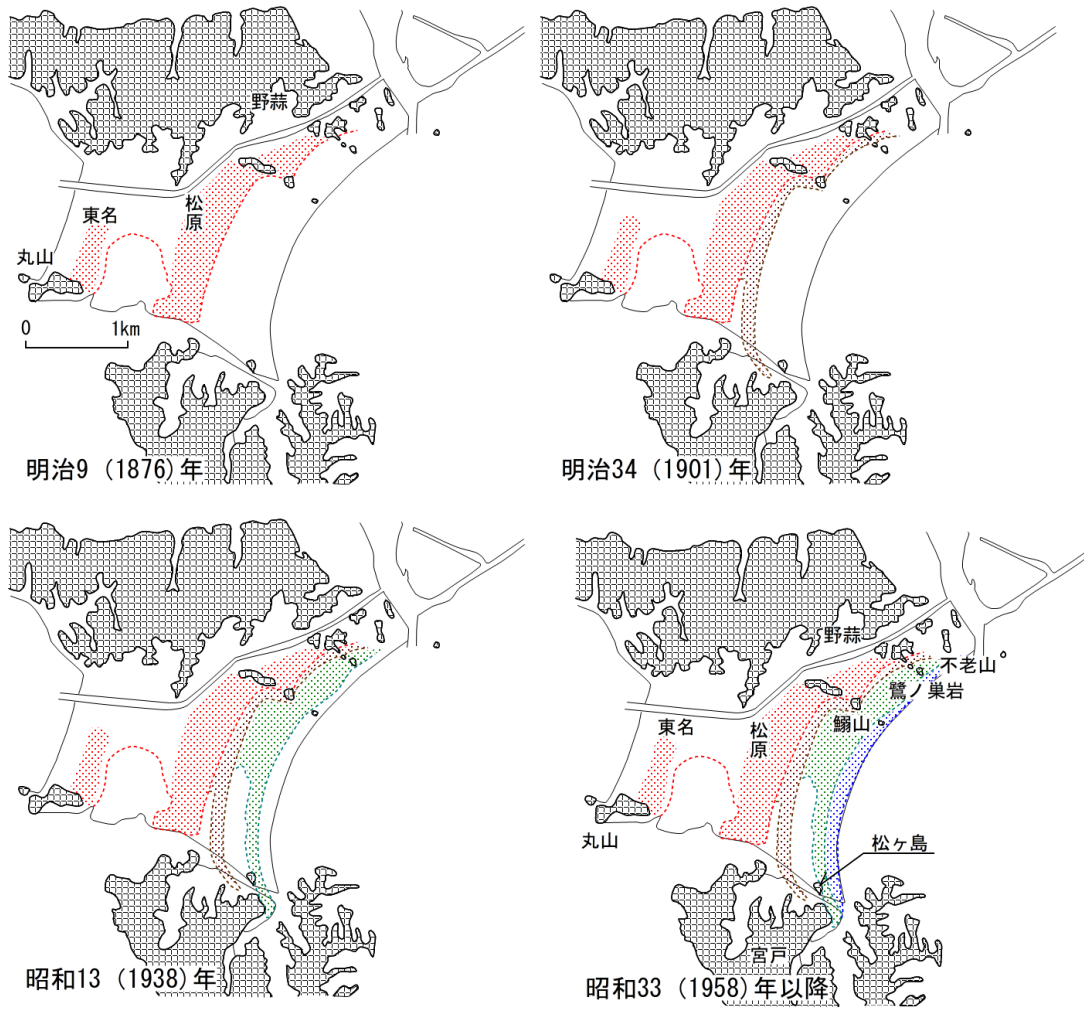
### （3）海面上昇と松島湾の沈水過程

約2万年前とされる最終氷期最盛期以降の急速な海面上昇は、汎世界的に海岸線を陸側に後退させた。第4図は、仙台湾岸の沖積層から得られた100点を超える堆積物の深度と年代をもとに復元された海面変動曲線である（松本・伊藤 1998にもとづく概略図）。

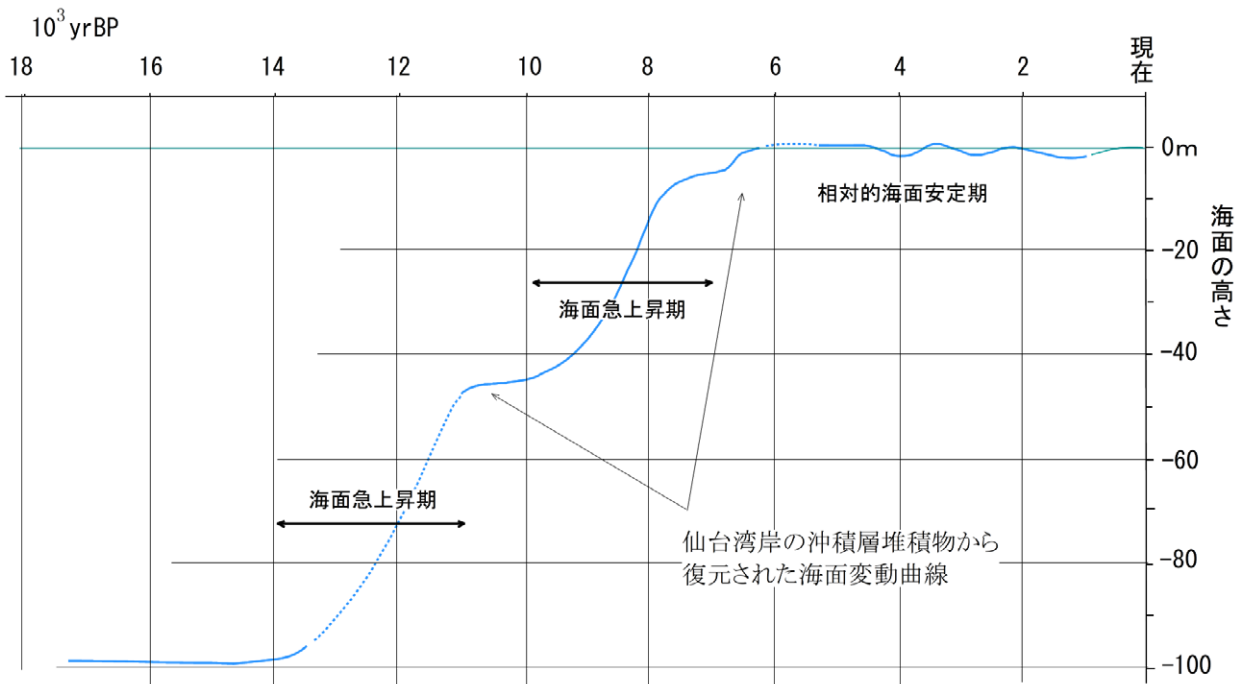
図中の最も古い時期である18,000年前から16,000年前にかけて、海面は現在より100 m程度低位にあり、当時の海岸線は宮戸島の東端から約35 km沖合に位置していた。その後海面は急速に上昇し、約10,000年前には-45 m付近に到達し、上昇速度は一時的に緩慢になった。約9,000年前頃から海面は再び上昇に転じ、約6,000年前には現在の海面を僅かに上回るレベルに達している。その後、海面の高さに微変動はあったものの、現在とほぼ同様のレベル前後で安定していたと考えられる。

沖積層の層相から求められた湾岸各地の海域侵入深度と、外洋部における水深と底質から断片的に推定される各海面高度に対応した海岸線の位置をもとに復元された松島湾の沈水過程は次の通りである。

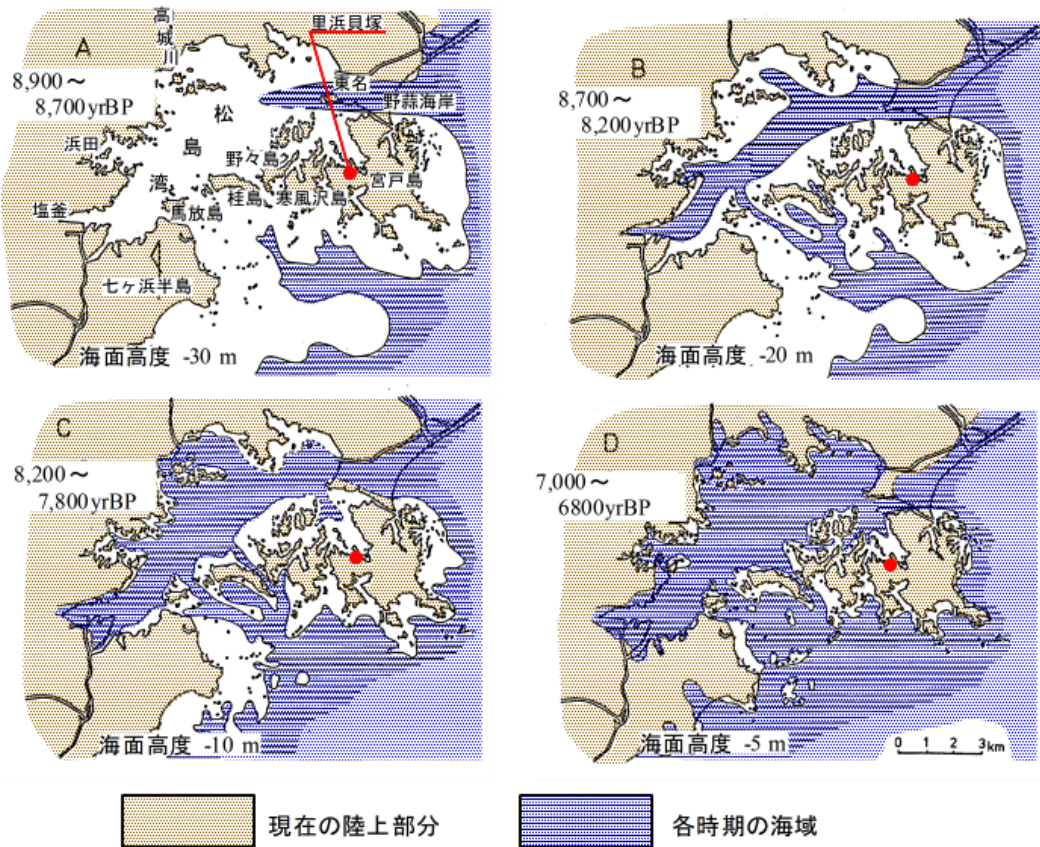
海面は約10,000年前に-45 mに達していることから、松島湾内に海の侵入が開始された時期は約1万年前を過ぎたあたりである。侵入の位置は野蒜と宮戸島を結ぶ陸繋砂州の地下であった。その後、海面は8,900～8,700年前に-30 mに達し、カラカイ島ー二ツ島間を通る海底谷を遡るように海が侵入した。8,700～8,200年前には海面は-20 mに達し、浜田や塩釜方面へも海域は拡大したが、その時点において現在の宮戸島を含む広い範囲が海に囲まれた状態となり、いわば「古宮戸島」が形成されていた。海面が-10 mに達する8,200～7,800年前には内湾部に広い海域が形成され、さらに海面が-5 mに達した7,000～6,800年前には野蒜海岸付近の陸繋砂州を除く松島湾全体において、ほぼ現在に近い海陸分布となったと考えられる（第5図）。なお、松島湾については、過去1万年間において有意な陸地の沈降は存在せず、もっぱら海面の上昇により形成された沈水地形である。



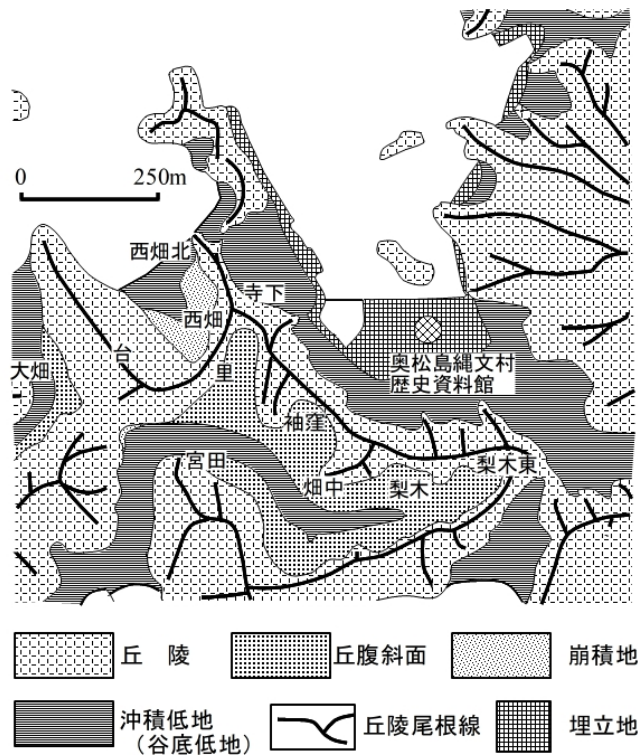
第3図 野蒜海岸における陸繋砂州の発達過程 (八島 1988 を改変)



第4図 松島湾沿岸の沖積平野における後氷期海面変動 (松本・伊藤 1989 を簡略化)



第5図 松島湾の沈水過程



第6図 里浜貝塚周辺の地形分類図

#### (4) 里浜貝塚周辺の地形

里浜貝塚は宮戸島の北岸に位置する。宮戸島は標高 105 m の大高森を最高点とする松島湾最大の島である。地形は主に丘陵と低地からなり、丘陵の尾根部の標高は 50 ～ 100 m で、それらの間に狭い低地が分布している。地形は空中写真判読により、丘陵、丘腹斜面、崩積地、沖積低地（あるいは谷底低地）に分類される（第 6 図）。

**丘陵：**里浜貝塚周辺の丘陵頂部の標高は 20 ～ 50 m であり、台付近にも見られるように丘頂の尾根部は丸みを帯びたなだらかな形態をもつ。尾根の高度には定高性がみられ、緩やかに広がる丘頂の存在もこの地域の特徴である。また、丘陵地が海に面する部分は海食により垂直に近い急崖をなす。

**丘腹斜面：**丘陵尾根部を下ると、傾斜遷緩線を経て勾配の緩やかな斜面が広がる。袖窪、畑中、梨木、宮田の東方には、海拔 10 ～ 20 m 程度の緩斜面が広がる。丘腹斜面の下方は沖積低地あるいは谷底低地へと明瞭に遷移する。

**崩積地：**勾配が急で標高差の大きな丘陵斜面の麓部に分布する。丘陵地を構成する堆積物が斜面下方に崩れ落ちることにより形成されたと考えられる。豪雨や地震による斜面崩壊により落下した土砂の堆積の場と捉えられる。丘腹斜面を欠く西畑にみられる。

**沖積低地および谷底低地：**海岸に面した沖積低地と、丘陵地内部に細長く連続する谷底低地に分けられる。これらの低地には砂質～粘土質の堆積物が 2 ～ 5 m の厚さで認められ、部分的に自然貝層、泥炭層や凝灰岩質の小角礫層を挟む場合がある。それらの堆積層は、数千年間にわたり概ね連続的に堆積しており、層中に過去の突発的災害の痕跡が見いだされることがある。

**埋立地：**奥松島縄文村歴史資料館周辺や、港湾部、主要道路沿いには埋立地が見られる。

#### 引用参考文献

松本秀明・伊藤晶文 1998 「宮城県沖積平野に於ける後氷期の海面変動。」日本地理学会発表要旨集、53、pp.392-393

松本秀明 1984 「宮城県松島湾の沈水過程。」『東北地理』、36、pp.46-53

松本秀明 1986 「宮城県松島湾の沈水過程に関する再検討。」『東北地理』、40、pp.290-291

八島邦夫 1988 「野蒜洲崎浜の急速な地形発達とその要因についての一考察。」『季刊地理学』、50、pp.329-337

## 2. 自然環境

宮戸島の植生は、宮城県教育委員会（1970）の植生図、第 6・7 回自然環境保全基礎調査による植生図を基に宮城県教育委員会が作成した 2000 年までのデータによる植生図（宮城県教育委員会 2010）、さらに震災後の 2013 年現在の植生図（鈴木 2014）が作成されている（第 7 図）。また、宮戸島の植物相は米倉・牧（2015）によりまとめられている。ここでは現在の里浜貝塚と宮戸島の植生について、既存の植生図と報告書及び里浜貝塚周辺の植生調査に基づき里浜貝塚の現存植生をまとめた。

### (1) 宮戸島の 1948 年以降の植生史

1948 年の宮戸島の空中写真（国土地理院）をみると、大高森や島の北部から北東部分など部分的にマツ林があるものの、島の北西部にある里浜、南に位置する大浜・月浜、東にある室浜の 4 つの集落とその周囲はほとんどが「はげ山」に近い状態であった。また、1960 年代までは島の中央部では薪炭林や柴刈が行われており、コナラやクリなどを主体とする落葉広葉樹の低木林または柴山であったとされている（鈴木 2014）。1960 年代の後半以降には燃料が薪炭から化石燃料に変わったため薪炭林の伐採が行われなくなり落葉広葉樹林となっている。また、2000 年植生図（宮城県教育委員会 2010）にはかつてはげ山状態であったところの一部がアカマツ林になっている。クロマツはクロマツ林をなしているほどの面的広がり無くアカマツが優占する植生で海際の所にクロマツが点在している程度である。一方、大浜にはクロマツの植林があったものの 2011 年の津波で失われている。

常緑広葉樹林は 1970 年植生図（宮城県教育委員会 1970）で小規模なタブ林が数か所であったが、2013 年植生図（鈴木、

2014) では島内各地にかなりの広がりを持って描かれている。2000年植生図でも半島や島嶼部に崖地植生の上に幅狭いまがら連続して全島を取り巻くように描かれているが、鈴木(2014)は全くゾーンとして認識できないとしている。現在、常緑広葉樹は落葉広葉樹林およびアカマツ林内で生長し次第に顕在化しつつあり、近年の松枯病によるアカマツの枯死などにより常緑樹林化へと進行している(鈴木2014)。加えて一部の林分ではモミが優占するようになり、暖帯上部における極相としてモミ-常緑広葉樹林へと進行している(鈴木2014)。

## (2) 里浜貝塚の現存植生

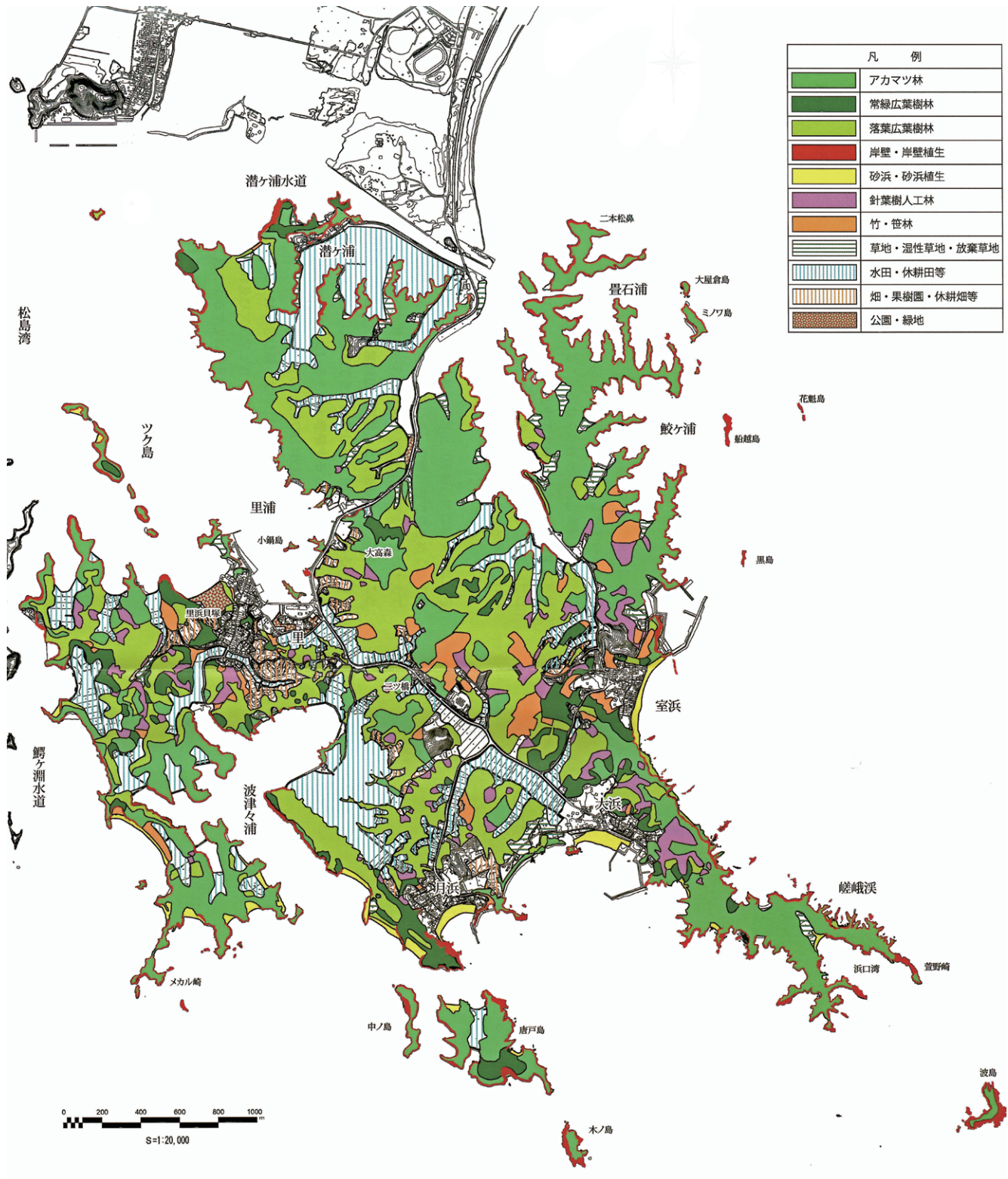
宮戸島にみられる植物群落は、2013植生図ではアカマツ林、常緑広葉樹林(タブ、シロダモ、ウラジロガシ、ヤブツバキなど)、落葉広葉樹林(コナラ、ケヤキ、エノキ、ヤマザクラなど)、崖壁植生(アカマツ、クロマツ、トベラなど)、砂浜植生(ハマヒルガオなど)、針葉樹人工林(スギ、ヒノキ)、竹・笹林(マダケ、モウソウチク、ハチク)、草地・湿性草地、水田・休耕地、畑・果樹園、公園・緑地等に区分している(鈴木2014)。里浜貝塚とその周辺地域では、北貝塚は市街地を主体とし一部に常緑広葉樹林と落葉広葉樹林、西畑北は公園・緑地、西貝塚は常緑広葉樹林を主とし畑と落葉広葉樹林、竹林、崖壁植生からなり、東貝塚は畑を主とし東側には常緑広葉樹林と落葉広葉樹林、竹林、西側の谷は水田であった。つまり、里浜貝塚の範囲は、現在は市街地と公園、畑を主体とし西貝塚の北側の丘陵と岬にまとまった常緑広葉樹林広がりアカマツは稀である。

里浜貝塚の周辺でまとまった森林があるのは西貝塚が位置する丘陵とその北側の岬部分である。この地域の植生は、タブノキやアカガシの高木、ヤブツバキ、シロダモ、アオキなどの常緑広葉樹が多く、他にスギやサクラ属(カスミザクラなど)などが分布し、アカマツは岬の先端付近に少量みられ、丘陵西側には竹林がある。

2022年の調査によると岬東側の崖下部には、ヤブツバキ、アオキ、クマノミズキ、オオシマザクラ、イタヤカエデ、ハリギリ、コクサギ、サンショウ、フジが多く、他にニワトコ、シロダモ、カヤ、ムラサキシキブ、テイカカズラ、アカメガシワ、サルナシなどからなる。また、丘陵西側の畑貝塚付近の林縁にもコクサギ多く分布していた。他方、西畑北の東側岬にはアカマツの小林分が数か所あるが大高森周辺に比べ極めて少ない。また、東貝塚付近は、畑が広がり周囲にタブノキ、シロダモ、エノキなどの小林分があり、道沿いにヤブツバキが生えていた。一方で、米倉・牧(2015)の宮戸島の植物相によると、里浜貝塚の縄文前期で産出したアサダや縄文後期のトチノキは分布していないなど縄文時代の植物相は現在と違っていた。縄文時代以降に森林資源を利用して生活を営んできており、島の大部分は人工林、二次林、あるいは放棄されて二次林が遷移して自然林化し、少なくとも縄文時代の里浜貝塚周辺の植生は現在とは大きく異なっていた。

## 引用参考文献

- 宮城県教育委員会. 1970. 松島-特別名勝松島調査報告書.
- 宮城県教育委員会. 2010. 特別名勝松島保存管理報計画(宮城県教育庁文化財保護課編). pp.119
- 鈴木三男. 2014. 宮戸島の植生. 宮戸・野蒜地域の文化遺産の再生・活用検討実行委員会「宮戸・野蒜地域の文化遺産の再生・活用検討事業報告書Ⅰ. 奥松島-自然・景観・歴史・文化-」(奥松島縄文村歴史資料館編) pp.99-129.
- 米倉浩司・牧 雅之. 2015. 宮戸島の植物相-宮戸島の植物相と東日本大震災による津波と地盤沈下によるそれへの影響-. 宮戸・野蒜地域の文化遺産の再生・活用検討実行委員会「宮戸・野蒜地域の文化遺産の再生・活用検討事業報告書Ⅱ. 奥松島Ⅱ-自然・景観・歴史・文化-」(奥松島縄文村歴史資料館編) pp.9-58.



第7図 宮戸島の2013年植生図(鈴木2014)

## 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

### 1. 松島湾沿岸の貝塚群

#### (1) 遺跡の位置

宮城県内の現在の沖積平野は、6000年前頃にピークを迎える縄文海進によって、その大部分が海中となり、複雑な海岸線によって形成された浅い入江は、縄文人の食料資源となる魚貝類の生息地となった。東北地方の太平洋沿岸は多様な海岸地形に加え、暖流と寒流双方の影響を直接受けるため、四季を通じて豊富な水産資源に恵まれた地域である。とりわけ三陸沿岸から仙台湾周辺にかけての地域は、縄文海進による海況の変化によって良好な漁場がもたらされ、縄文時代早期末以降、数多くの貝塚が形成された。

宮城県内には216か所の貝塚がある。全国的にみても千葉・茨城県に次いで貝塚の数が多し。牡鹿半島から松島湾にいたる仙台湾の沿岸や気仙沼湾から女川湾にかけての三陸沿岸、古石巻湾に相当する北上川中流域、伊豆沼・長沼周辺の湖沼地帯、阿武隈川下流域で貝塚が集中して確認されている(第8図)。

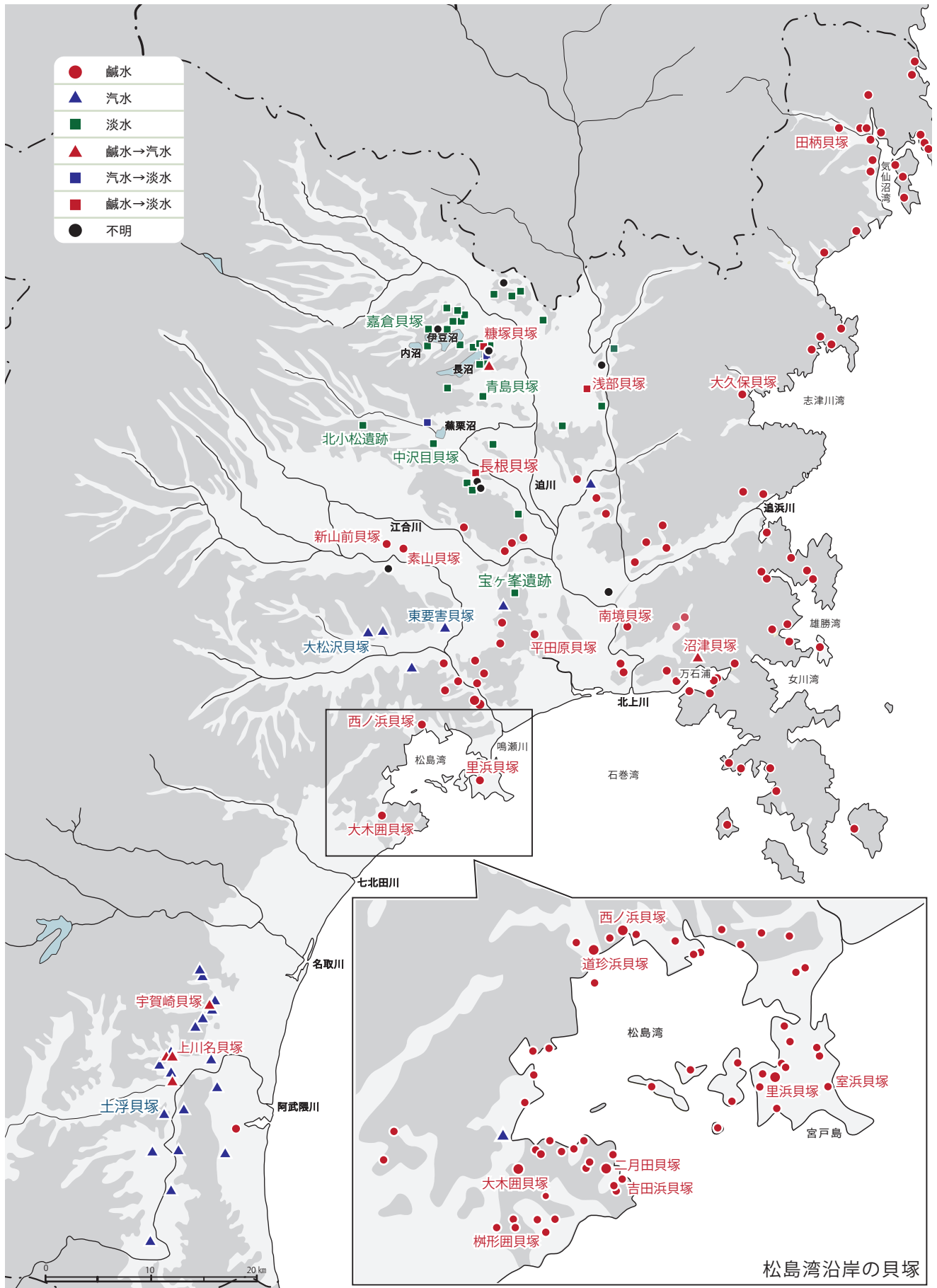
仙台湾や三陸沿岸の貝塚群の多くはアサリ・カキ・スガイなどの鹹水性貝類を主体とし、青島貝塚(登米市)や中沢目貝塚(大崎市)など内陸の湖沼地帯にはタニシ・ヌマガイ・イシガイなどの淡水性貝類を主体とする貝塚が集中している。中には、糠塚貝塚・浅部貝塚(登米市)、長根貝塚(涌谷町)などのように縄文時代早期から前期初めはハマグリ・カキ主体の鹹水性の貝塚で、前期中頃から中期はヤマトシジミ主体の汽水性、後・晩期にはタニシ・イシガイ主体の淡水性へと変化する貝塚もある。縄文海進によって奥深くまで入り込んでいた古石巻湾が沖積作用によって後退(海退)し、しだいに湖沼地帯へと変わっていった状況がうかがえる。

県南の阿武隈川下流域の貝塚群はヤマトシジミ主体を主体とする貝塚が多い。上川名貝塚(柴田町)、宇賀崎貝塚(名取市)など縄文早期にハマグリを主体とした貝塚も、前期にはヤマトシジミへと変化する傾向がみられ、中期以降はほとんど貝層が形成されなくなる。海面上昇の鈍化と阿武隈川などによる沖積作用で遺跡周辺の地形環境が変化したものとみられる。(

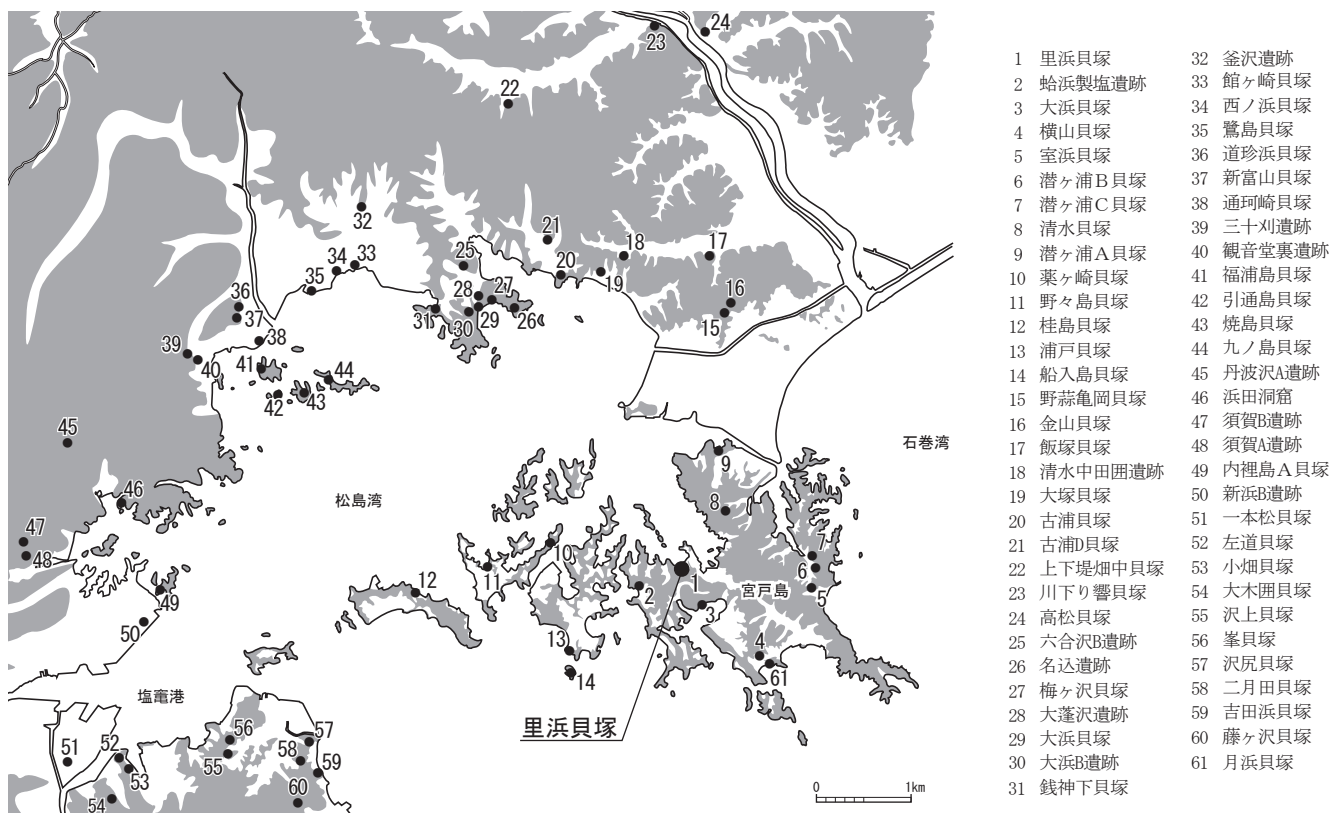
#### (2) 松島湾沿岸の遺跡分布と変遷

東北地方の太平洋沿岸は多様な海岸地形に加え、暖流と寒流双方の影響を直接受けるため、四季を通じて豊富な水産資源に恵まれた地域である。こうした良好な漁場は縄文海進による海況の変化によってもたらされ、縄文時代前期以降、いわき地方から仙台湾沿岸、三陸海岸などの地域には数多くの貝塚が形成された。とくに、仙台湾の支湾の一つである松島湾沿岸には、東西10km、南北8km程の小湾に約70ヶ所もの貝塚が集中して分布しており、東京湾や霞ヶ浦沿岸とならび縄文時代貝塚が密集する地域として知られている(第9図)。

松島湾沿岸に貝塚が形成されるようになるのは、松島がほぼ現在の形になる前期初頭以降のことで、宮戸島、松島湾奥、七ヶ浜半島の各地に中核的な大規模貝塚が出現し、一定のまとまりをもった遺跡群がそれぞれの領域を保ちながら縄文時代晩期まで継続して営まれた。これは、湾内に流れ込む川の規模が小さいために沖積作用が鈍く、海岸線をはじめ自然環境がほとんど変わらなかったことが大きい。湾内の自然環境が変わらなかったことが、松島湾に貝塚が集中し、定着性のある集落が営まれた大きな要因の一つになっている。集落はおもに海を望む高台に立地し、貝塚は集落縁辺の丘陵斜面に形成されることが多い。ただし、晩期中葉頃になると汀線近くの海浜低地や海蝕洞窟に、製塩と貝剥き作業を行うための小規模な出作り作業場的な貝塚が出現するようになり、貝塚の数が急激に増加する。これらの中には、弥生時代まで継続して営まれるものもみられるが、弥生時代中期には貝塚の数が半減し、製塩遺跡も減少する傾向にあり、後期になると貝塚や製塩遺跡のほとんどが姿を消す(菅原2005)。



第8図 宮城県の貝塚分布

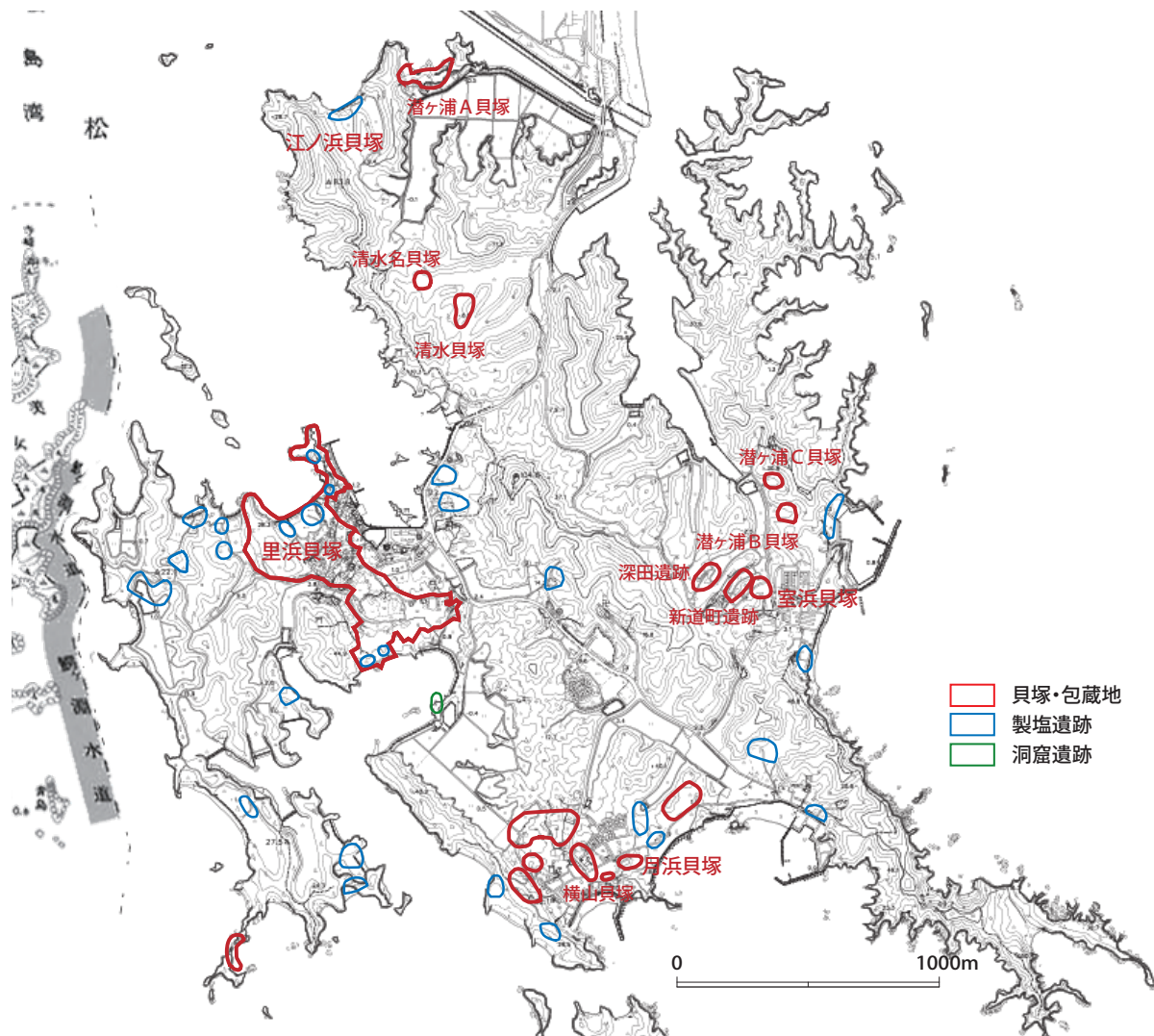


第9図 松島湾沿岸の縄文時代遺跡と里浜貝塚の位置

### (3) 宮戸島の遺跡

宮戸島では、縄文時代から近世にいたる40遺跡58地点の遺跡が知られている(第10図)。松島湾の成立とともに、縄文人は島に移り住み、湾内を見下ろす標高20m程の里浜の高台と、外洋を望む標高約10mの室浜と月浜の高台に集落を営み、貝塚を形成した。貝塚はそれぞれ長径で30mほどの規模があり、定住生活が安定し、縄文集落が形成されるようになった時期の貝塚としては大きい。里浜貝塚ではその後も集落は継続し、縄文時代の終わりまで営まれた。室浜貝塚では居住域や貝層の有無は明らかではないものの、前期から中期、後期、晩期、弥生時代中期の遺物も確認されており、断続的に集落が営まれた可能性が高い。このほか縄文時代の遺跡としては、島北部の潜ヶ浦に面して潜ヶ浦A貝塚(晩期)、潜ヶ浦B貝塚(前・中期)、潜ヶ浦C貝塚(晩期)、清水貝塚(晩期)、月浜の横山貝塚(中期)が知られているが、いずれも小規模な貝塚で、拠点集落としての里浜貝塚や室浜貝塚との関係が想定される。また、晩期中葉以降には、里浜貝塚をはじめ海浜低地に小規模な貝塚を伴う製塩遺跡が特徴的に見られるようになる。

弥生時代以降の遺跡については、里浜貝塚で弥生、古墳、奈良・平安時代の遺構(一部で貝塚)や遺物、中近世の墓などが確認されているが、いずれも断片的であり集落の実態については明らかではない。一方で、奈良・平安時代(とくに9世紀代)には、海浜低地で24遺跡(29地点)の製塩遺跡が確認されている。松島湾全体では奈良時代後半から平安時代前半にかけて約140箇所の製塩遺跡が発見されており、多賀城跡出土の木簡から陸奥国府多賀城の管理の下で行われていたと考えられている(高野・菅原1997)。江ノ浜貝塚では古墳時代から平安時代にかけての貝層とともに、平安時代の製塩遺構や製塩に係わる遺物(製塩土器、支脚)、漁具(鹿角製銚、土錐)などが検出されている。国府の津(塩竈港)から最も離れた松島湾の東端に位置する宮戸島も、多賀城直轄の塩生産の一端を担っていたと考えられる。



第 10 図 宮戸島の遺跡

## 2. 里浜貝塚の概要

里浜貝塚は、縄文時代前期初頭から弥生時代にかけての集落で、東西約 640 m、南北約 200 m の規模をもつ。大小の谷や入江によって、大きく西貝塚（台囲頂部・東斜面・風越地点）、東貝塚（袖窪・畑中・梨ノ木地点）、北貝塚（寺下・西畑・里地点）の 3 つの貝塚群に区分される。古くは、それぞれの小字名をとって台貝塚、風越貝塚、袖窪貝塚、畑中貝塚、梨ノ木貝塚、寺下貝塚などと呼ばれてきたが、現在はこれらの貝塚を「里浜貝塚」と総称している。

集落の変遷としては、縄文時代前期初頭に台囲（東斜面）地点と梨木東地点に小規模な集落と貝塚が営まれ、台囲地点の頂部と東斜面には中期中葉まで貝塚が形成される。その後、中期中葉から後期初頭にかけては貝塚東部の袖窪・畑中・梨ノ木地点、後期初頭から晩期中葉にかけては再び西部の台囲（風越）地点、そして後期末から弥生時代中期にかけては北部の寺下囲・西畑・里地点と、標高 15～30 m の丘陵上に複数のムラを形成し、居住域を変えながら継続して集落を営み、各地点に大規模な貝塚を残した（第 11 図）。弥生時代以降、貝塚は小規模になるが、浜辺には製塩や貝剥き作業場が少なくとも弥生時代中期まで継続して営まれたことが明らかになっている（岡村 1994、会田 2007）。

大正 7 年に東北帝国大学の松本彦七郎博士らが初めて発掘調査を行い、約 14 坪の調査区から 18 体もの埋葬された縄文人骨を発掘するとともに、我が国で最初の層位的発掘が実践された遺跡である。古くから多数の縄文人骨や漁具・装身具などの多彩な骨角器が出土することでも知られる。平成 7 年に史跡に指定され、平成 12 年出土遺物の一部が重要文化財に指定された。



## 第2章 里浜貝塚の歴史

### 第1節 調査研究の歴史

#### 1. 里浜貝塚調査前史

里浜貝塚は明治時代から注目されていた。東京銀座で開業していた歯科医高島多米治の収集が有名である。高島コレクションは東京帝国大学農学部教授岸上鎌吉の著した“Prehistoric Fishing in Japan”に実測図が掲載されている。高島コレクションは滋賀県の下郷伝兵衛に売却され、施設博物館「鐘宝館」に展示されたが、戦後下郷がコレクションを手放した。それらは大阪市立博物館、天理参考館、名古屋市立博物館、辰馬考古資料館に売却された（写真1）。高島コレクションの漁具類は大阪市立自然史博物館に、鹿角製腰飾りは天理参考館に所蔵されている。特に天理参考館の鹿角製腰飾りは戦前から多くの文献に掲載され、縄文時代の装飾品として著名である。そのほかにも里浜貝塚出土資料を保管している施設に京都大学総合博物館、関西大学博物館本山コレクションなどがある。

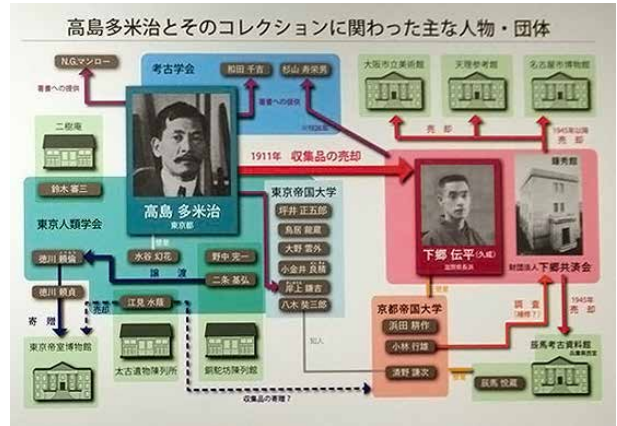


写真1 高島多米治コレクション

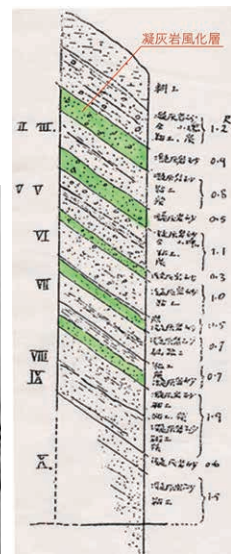
#### 2. 松本彦七郎博士の発掘

里浜貝塚の最初の学術的な発掘調査は1918・19年に東北帝国大学理学部地質学古生物学教授（発掘時は講師）松本彦七郎博士が行った（第14図a、写真2、第1表）。松本彦七郎は明治22年（1888年）生まれ、東京帝国大学理学部動物学科を卒業している。卒業論文は「クモヒトゲの分類」で、それは学士院恩賜賞を受けている。大正3年東北帝国大学理学部古生物学講師として仙台に着任する。分類学から出発した研究は、人類進化、哺乳類の進化へと至る。大正7年（1918年）から宝が峰遺跡、里浜貝塚の発掘調査を行っている。

里浜貝塚を調査したきっかけは当時東北帝国大学大学院生早坂一郎が貝の調査のために宮戸島を訪れた際、7尺（約2.1m）の貝層断面の路頭に出会ったことによる（第12図）。当時、里浜漁港の工事中で、土取りを行った際に貝層も掘り起こされたようである。巨大な貝層とともに、人骨も散見されたという。この早坂の知らせが松本博士を里浜の調査に駆り立てたようである。早坂の報告を受け、すぐさま松本博士は発掘調査を行っている。その結果、10数体の縄文人骨が発掘されたのである（第13図）。これだけ大量の縄文人骨が発見されたことは東北地方でははじめてのことである。この発掘報告をかねた論文が『現代之科学』や『理学界』『人類学雑誌』に出土状況、縄文人の抜歯、土器文様論、人種論について1年間に驚くべき数の論文を発表している。この調査では貝層を10層に区分している。松本博士は里浜縄文人をそのままの形で取り上げるという画期的な方法も用いている。出土人骨に石膏をかけ固め、反転して持ち帰っているのである。それが3組現存する。ひとつは東北大学総合博物館自然史標本館（写真3）、もうひとつは斎藤報恩会自然史博物館、さらに2体合葬



写真2 松本彦七郎博士



第12図 貝層断面図



第13図 人骨の出土状況スケッチ

の縄文人は上野の科学博物館（写真4）に保存され、現在も屈葬された埋葬状態で見ることができるのである。科博の合葬人骨は発掘直後に東京帝国大学医学部解剖学教室小金井良精教授に松本博士が寄贈したとの記録がある。後に東大から科博に移管されたのであろう。私たちは里浜縄文人も発掘された状態で今も見ることができるのである。

松本博士は里浜調査の記述の中で全出土資料を持ち帰らなかったことを反省している。松本博士を弁護するが、当時の調査では文様のある土器だけを持ち帰るのが通常であった。しかし、松本博士はそれをよしとしなかったのである。層位的出土を確認できたが、資料をすべて持ち帰らなかった調査の欠点を自ら恥じている。それを受けて、大正8年（1919）に2回目の里浜貝塚の発掘が行われた。これが目的を持った貝塚の層位的発掘である。この成果を松本博士は『人類学雑誌』誌上に2回にわたって「宮戸島里浜介塚の分層的発掘成績」として報告している。この論文は詳細な数量的記載が行われ、土器の様々な属性の層位的変化が示されている。宝が峰、里浜に始まる松本博士の層位的研究について、後年岡本勇氏は「松本彦七郎博士は、それまでの研究にかけていた重要な方法、すなわち遺跡の層位的観察に基いた土器「型式」の新古を決めるという、「層位的」な原理を採用して宮城県宝が峰遺跡、里浜貝塚などの発掘を行い、注目すべき成果をえた。」と評価している。しかしながら、この松本博士の論文には「本編に図を添ふるが可なりしなかなれど、添ふる程ならば甚だ多数を添ふるに非れば、徹底せざるべきを以てぜんぜん省略する事とせり。」として、実測図、写真が全く添えられていなかったのである。



写真3 石膏取上げ人骨（東北大学総合学術博物館）



写真4 石膏取り上げ人骨（国立科学博物館）



写真5 東北大学理学標本館



写真6 松本資料の保管状況

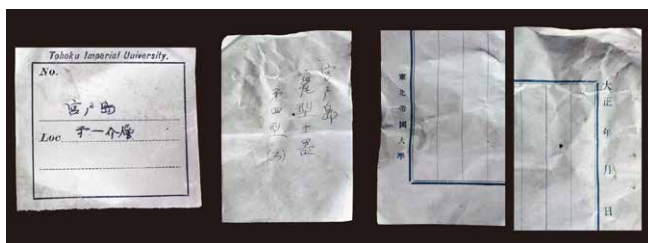


写真7 標本箱のラベル

松本博士の資料が東北大学理学部、東北大学標本館に収蔵されていた。松本博士の考古関係の資料はひとつの部屋内にまとめられ、標本箱にきちんと収められていた（第5、6図）。標本箱にはしっかりとラベルが入りどこから出土したものかほとんどわかった。多くは粗製土器。赤白のタコ糸で縛られた土器がある。箱の中には印刷されたラベルに注記がある。「宮戸島」「第一介層」と万年筆で記されている。さらにその印刷されたラベルには「Tohoku Imperial University」とある。「東北帝国大学」



写真8 層位的発掘の検証

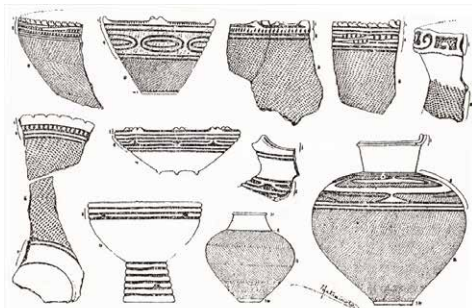
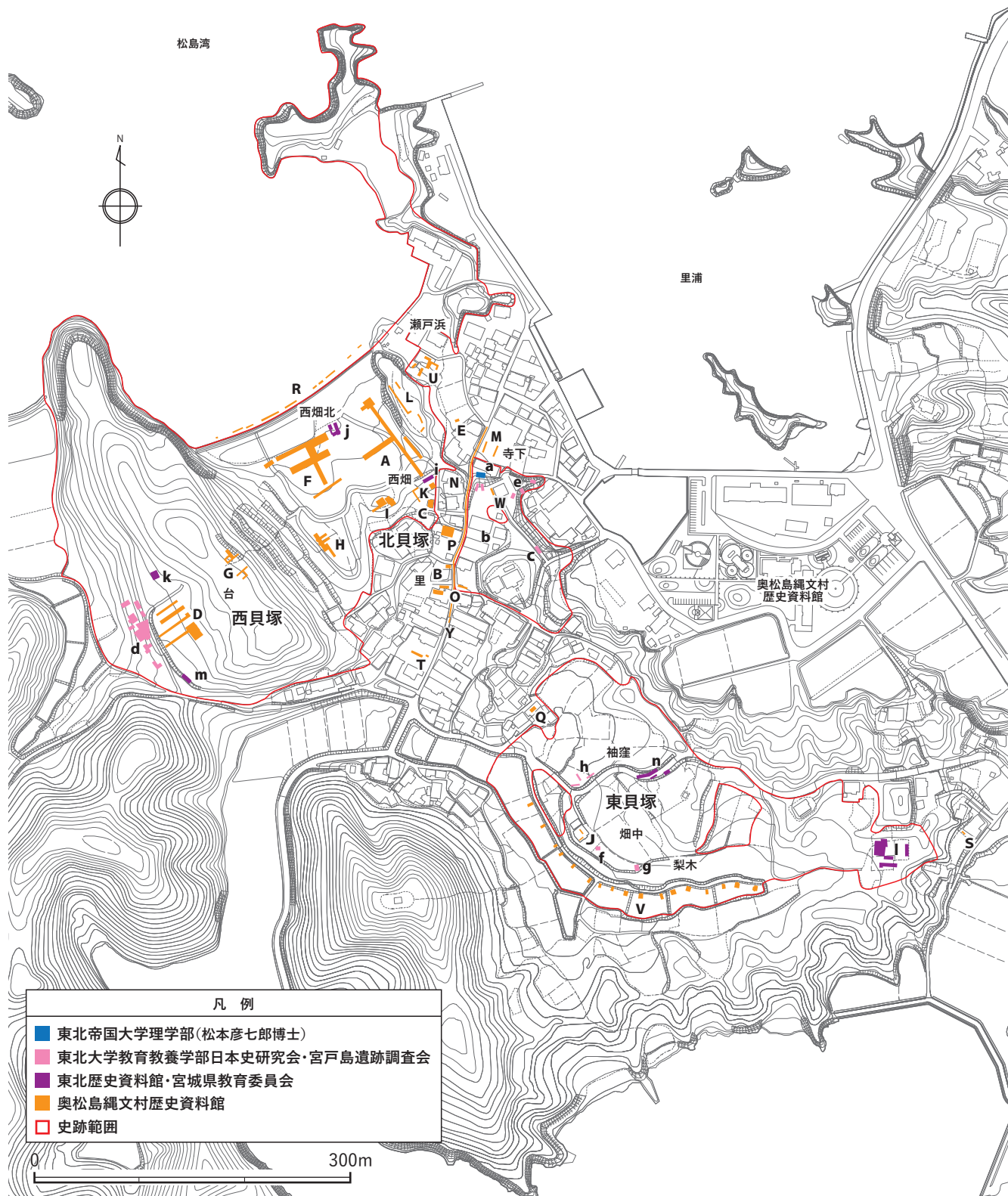


写真9 「土器文様論」に図示された土器

ではないか。さらに、万年筆で「宮戸島 甕形土器 第四型 (ろ)」などと手書きのラベルがはいた箱がある。それは縦罫線事務箋を4分割した裏を用いている。事務箋の左下には「東北帝国大学」上には「大正 年 月 日」と印刷されている。これは松本博士が分類した里浜の資料がそのまま保管されていたという明らかな証拠である(写真7)。



第 14 図 里浜貝塚調査区全体図

第1表 里浜貝塚発掘調査の歴史

調査年		主な調査者	調査地区		概要	
明治39年(?)		高島多米治	不明		多数の骨角器・土器・土偶などを採集	
大正7年	1918	松本彦七郎・早坂一郎・長谷部 言人	a	寺下圃地点北部中央(東北帝国大学学用地)	14坪から18体の人骨が出土	最初の学術調査 (編年学的研究の基礎)
大正8年	1919				層位の発掘調査の実践	
大正末年		山内清男	台圃地点		縄文晩期の遺物多数発掘	
昭和4年	1929	斎藤忠	台圃地点		台圃東斜面貝塚の位置を確認	
昭和8年	1933	山内清男	不明			
昭和9年	1934	角田文衛	b	寺下圃学用地の南70m地区	縄文晩期の製塩土器が多量に出土	
昭和14年	1939	斎藤報恩会博物館、北村千代治	台圃(風越)地点、里浜南西地点		貝層中から多数の土器片・石器・骨角器が出土	
昭和26年	1951	加藤孝・後藤勝彦ら (東北大学教育教養学部日本史研究室)	c	寺下圃地点	縄文晩期の貝層、骨角器、製塩土器	
昭和27年	1952		d	台圃地点中央	縄文後期末～晩期初の貝層、骨角器	
昭和28年	1953		d	台圃地点中央	縄文後・晩期の貝層、藍胎漆器	
昭和30年	1955	加藤孝・後藤勝彦・斎藤良治ら (宮戸島遺跡調査会)	e	台圃地点中央(B・Cトレンチ)	縄文後・晩期の貝層、石組遺構	
昭和31年	1956		e	寺下圃地点北東部(A班)	13体の埋葬人骨と埋葬犬1体	
昭和31年	1956	加藤孝・工藤雅樹(宮戸島遺跡調査会)、鈴木尚(東京大学)	d	台圃地点中央(G・C2.Tトレンチ)	縄文後期末～晩期初の貝層	
昭和31年	1956		e	寺下圃地点北東部	8体分の埋葬人骨、縄文晩期・弥生時代の遺物	
昭和33年	1958	宮戸島遺跡調査会	e	寺下圃地点(石神社の北西)	弥生時代を主体とする土器	
			d	台圃(地点Lトレンチ)	縄文後・晩期の遺物	
			f	畑中地点	縄文中期の遺物	
昭和34年	1959	宮戸島遺跡調査会	d	台圃地点	台圃地点の層位の確認	
			g	梨木圃地点(第1次)	縄文中期の遺物多量に出土	
昭和34年	1959	加藤孝・小野力	e	寺下圃地点(石神社の北西)	弥生中期主体の土器、鉄製銚、古墳中期の土器	
昭和36年	1961	宮戸島遺跡調査会	g	梨木圃地点(第1次調査に隣接)	縄文中期の遺物多量に出土	
昭和37年	1962	宮戸島遺跡調査会	h	袖窪地点	仰臥伸展葬の頭なし人骨検出	
昭和50～53年	1975～78	東北大学教養部考古学研究会	里浜貝塚およびその周辺を悉的に遺跡分布調査		範囲確認のための詳細な分布調査	
昭和53年	1978	東北歴史資料館・宮城県文化財保護課	宮戸島詳細遺跡分布調査			
昭和54～59年	1979～84	東北歴史資料館 (現東北歴史博物館)	i	西畑地点	第1～2, 4～6次調査(縄文晩期の貝層を精密に採取)	東北歴史資料館による 縄文人の生業・食生活の解明 を目的とした発掘調査
昭和59～61年	1984～86		j	西畑北地点	第3次調査(地形観察、遺物分布調査、ボーリング調査)	
昭和61～62年	1986～87		k	台圃頂部地点	第1・2次調査(縄文中期の貝層調査)	
平成元～2年	1989～90		l	梨木圃東地点	第1・2次調査(縄文前期の貝層調査)	
平成3年	1991		m	台圃(風越)地点	縄文後期の貝層	
平成8年	1996	奥松島縄文村歴史資料館	A	西畑・西畑北地点(第1次調査)	縄文晩期～弥生時代の製塩土器・製塩遺構	奥松島縄文村歴史資料館による 縄文時代のムラの構造 を明らかにするための発掘調査
平成9年	1997		B	へアーサロン尾形(HSO)地点(第2次調査)	縄文晩期の人骨3体と後期の貝層	
平成10年	1998		A・C	西畑・西畑、西畑地点(第3次調査)	縄文晩期～弥生時代の製塩遺構、縄文中・後期の泥炭層と植物遺体、中・近世の人骨	
			D	台圃地点(第4次調査)	縄文中・後期の貝層、縄文後・晩期の竪穴住居跡2棟	
平成11年	1999		D	台圃地点(第5次調査)	縄文晩期の竪穴住居の確認	
平成13・14年	2001・02		E	里地点(第6次調査)	植物遺体層	
平成15～18年	2003～06		F	西畑北地点(第7・8次調査)	縄文前期の泥炭層(クリ花粉) 縄文中～後期の高潮跡(津波跡?)	史跡整備に伴う確認調査
			G	台圃東地点(第9次調査)	縄文中期の包含層	
			H・I	西畑南西、西畑南地点(第10次調査)	平安前期の貝層、古墳前・中期の遺構遺物	
			J	袖窪地点(第11次調査)		
		I	西畑南地点(第12次調査)	古墳前・中期の区画溝	史跡整備に伴う確認調査	
		K	西畑地点(第13・14次調査)	縄文晩期の貝層		
L	西畑東地点(第15次調査)	古代の土坑				
K	西畑地点(第16次調査)	東歴史調査区貝層断面(貝層剥ぎ取り)の精査				

平成19年	2007	奥松島縄文村歴史資料館	M	寺下冊地点（第17次調査）	縄文晩期の貝層と古墳中期の包含層	範囲確認調査
平成23年	2011		N	里地点（第18次調査）	縄文晩期の貝層(ボーリング調査)	震災復旧・復興に伴う発掘調査
			O	里地点（第19・20次調査）	縄文後期末～晩期の貝層、近世の貝層	
平成24年	2012		P	里地点（第21次調査）	縄文後期末～弥生中期の包含層、土坑墓	
			Q	里地点（第22次調査）	古墳中期の包含層	
平成25・26年	2013・14		R	西畑北地点（第23・24次調査）	砂礫層確認(津波堆積層?)、縄文土器・製塩土器片	
			S	梨木東地点（第25次調査）	縄文前期の土坑(二次堆積or墓)	
平成26年	2014		T	里地点（第26次調査）	縄文晩期晩期の土器	
			U	里地点（第27次調査）	縄文晩期・古代の製塩・貝層	範囲確認調査
平成29年	2017		V	畑中・梨木地点（第28次調査）	縄文前期初～晩期の包含層(二次堆積層)	震災復旧・復興に伴う発掘調査
令和3年	2021	W	寺下冊地点（第29次調査）	縄文後・晩期の貝層、土坑墓	内容確認調査	
令和4年	2022	Y	里地点（第30次調査）	縄文晩期の貝層(末端の二次堆積層)	工事に伴う確認調査	

その資料を一括して借用し、保管状況の写真撮影、ほこりをおとす水洗、箱記号のネーミング、そして接合。接合は整理箱毎に行い、調査した大正8年（1919）の里浜貝塚発掘資料のほぼ半分が保管されていることがわかった（会田1993）。大正8年資料は層を越えた接合はなかった。その点から自然層による層位的発掘が正しく行われていたことがはっきりした（写真8）。大正7年（1918）資料も、その中には「土器文様論」に図示されている資料も含まれていた（写真9）。まさしく、松本博士の研究は日本考古学史上最初の貝塚の層位的発掘調査であり、それをもとにして縄文土器編年を正しく企てたのであった。

### 3. 山内清男、角田文衛、斎藤忠の調査

当時第二高等学校学生だった斎藤忠博士は踏査の記録を喜田貞吉博士編集の『東北文化研究』に寄せている。里浜の分校裏に新しい貝層の広がりを見つけたことでも重要である。現在畑中・梨の木地点と呼ばれている場所である。仙台一中生徒であった早熟な考古学徒、角田文衛博士は里浜貝塚の発掘調査を行い、その報告を『史前学雑誌』に発表している。発掘場所は里浜地区である。住宅地の畑を調査しているようである。後に製塩土器と考えられるようになる不思議な無文尖底土器発見の第一報である。山内清男博士は宮戸島室浜貝塚の発掘調査を行っている。その際、里浜貝塚の調査も行っているようであるが、発掘は台地地点で行われたようである。

### 4. 地域史研究の実践の場として－東北大学教育教養部日本史研究室の調査－

戦後、皇国史観の頸木から解放され、考古学は歴史の表舞台に立つことになる。仙台では東北帝国大学、第二高等学校、宮城師範学校、宮城女子師範学校が合体して東北大学が生まれた。東北大学教育教養部は新制大学の教員養成学部であった。そこに古代史学者大塚徳郎、歴史学者平重道が教官として在職していた。民衆史の立場に立つ大塚は学生に向かって「社会科の先生になるのなら、発掘調査くらいできなくてはならない。地域研究のリーダーとやらなくてはならない。」と喝破したそうである。考古学の授業を担当したのは、宮城学院女子大学（後に東北学院大学）で教鞭をとっていた加藤孝が非常勤講師としてそれにあたった。加藤は若き日に奥羽資料調査部にいた喜田貞吉の書生として薫陶を受けていた。

昭和26年（1951）宮戸島調査のために東北大学教育教養部日本史研究室が訪れる。当時、宮戸島に渡るには塩釜から定期船に乗らねばならなかった。宿舎は医王寺や観音寺の本堂を利用したという。当初は漁村調査に始まり、里浜貝塚の発掘も行うようになった。昭和37年（1962）まで毎年夏休みに約1週間ほど調査を行っている。日本史研究室の第一期生である後藤勝彦によれば、里浜貝塚調査の目的は山内清男が行った縄文土器編年の欠を補うというものであった。編年の欠とは陸前地方の山内編年表を見ると、縄文後期が（+）と記されている。これは、型式は存在するが未命名にあることを示している。さらに言うならば、山内は大正13年に福島県新地貝塚を調査し、この時期の基準資料を確保していた。ところが、新地貝塚の資料は戦時中の疎開の際にラベルが外れ、混乱してしまい、提示することができなくなってしまったのである。昭和27年の台地地点の発掘調査により良好な縄文後期貝層を確認し、それ以後継続的に台地地点の調査をおこなった。その層位的出土資料を整理し、後藤は宮戸編年を提示する。それに後続して行なわれ

た松島町西の浜貝塚の調査結果をあわせて齋藤良治が編年案を提示した。貝塚から出土する遺物は土器だけではない。明治期にコレクターを魅了した骨角器も多数出土する。特に漁具の出土が特筆される。ヤスの形態分類とその着柄方法を論じたのが齋藤良治である。また、動物遺存体の同定には戦前に大山史前学研究所所員であり、戦後宮城県立図書館に奉職していた大給尹氏があたった。その後早稲田大学の金子浩昌が動物遺存体の分析を行っている。

昭和26年に発掘調査が行われている。寺下圀地点を小規模な調査であるが、その時に豊かな資料が得られている。大洞C2式土器の時期である。

昭和27年から34年まで継続して台圀地点の調査を行っている（第13図）。縄文時代後期初頭から晩期初頭までの連続した層を確認している。毎年2m×6m程度のトレンチ調査を行っている。それぞれ昭和27、28、30（B、C）、31（G、C2、T）、33（L）、34年調査と呼称している。この調査で後藤勝彦、齋藤良治、榎照要らにより層的に出土した縄文土器型式に宮戸Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳa、Ⅳb式を提唱している。齋藤良治により骨角器の型式学的研究が行われた。

日本史研究室の調査と並行して、加藤孝氏が中心におこなった、塩釜市史編纂事業関連の発掘また宮戸島遺跡調査会の発掘がある。加藤氏が組織した宮戸島遺跡調査会の組織は著名な研究者の名前が連ねられている。昭和33年の調査会名簿によれば調査会会長古田良一（東北大学名誉教授）、副会長渥美馨（鳴瀬町長）、副会長桜井辰治（塩釜市長）、副会長伊藤政治（松島町長）、顧問河合繁樹（塩釜神社宮司）、顧問高橋良夫（松島水族館館長）、顧問粟野豊助（宮城県議会議員）、顧問門間重義（同）、顧問吉田平四郎（塩釜市議会議員）、顧問阿部米寿（塩釜汽船専務）、顧問伊東信雄（東北大学教授）、顧問山内清男（東京大学講師）、顧問遠藤源七、顧問毛利総七郎、正会員理学博士富田義郎（東北大学教授・地理学）、正会員理学博士畑井小虎（東北大学理学部・地質学）、正会員平重道（東北大学教授・日本史）、正会員医学博士鈴木尚（東京大学教授・人類学）、正会員大塚徳郎（東北大学助教授・日本史）、正会員田辺健一（東北大学教授・地理学）、正会員加藤孝（宮城学院大学助教授・考古学）、正会員横山弘（東北大学講師・地理学）、正会員後藤勝彦（塩釜第二中学校教諭・考古学）、正会員齋藤良治（宮城県大内小学校教諭・考古学）というメンバーである。この会がどのように機能していたのか活動報告などはないので実態は不明である。しかし、このメンバーが里浜貝塚調査をおこなっていたことは間違いない。

昭和30・31年に行われた寺下圀地点の調査では松本博士以来の墓域の調査が行われ、十数体の縄文人骨が出土した。晩期中葉の浅鉢をかぶった子どもの埋葬もあった。その子どもはヒスイの玉を身につけていた。縄文晩期の墓域が明らかになったのである。これらの調査は宮戸島遺跡調査会によって行われたが、人骨調査は東京大学の鈴木尚教授によって行われ、それらの人骨は東京大学総合研究博物館に保管されている。この寺下圀地点の調査では里浜でこれまで確認されていなかった弥生時代中期の土器がまとまって出土した。特徴的な磨消縄文を持つことから寺下圀式の型式名が与えられた。

さらに調査は畑中・梨木・袖窪地点の調査もおこなった（第13図e~g、写真10）。こちらは縄文時代中期から後期初頭の貝層が形成されている地点で、発掘の手が加えられたのは初めての場所である。その結果、縄文中期後半の貝層、及び後期初頭の貝層が検出され、中期後半から後期初頭の山内編年を再検討する資料が得られた。また、この時の調査では袖窪地点から珍しい、頭部の欠損した人骨が検出された。「首なし人骨」としてマスコミにも取り上げられた。この人骨は新潟大学故小形保教授によって報告が行われている。



写真10 宮戸島遺跡調査会の調査(梨木地点)

## 5. 東北歴史資料館の調査

東北歴史資料館が宮城県多賀城市に建設されたのは昭和49（1972）年のことである。東北地方の歴史を一堂に展示

するこの資料館は陸奥国府多賀城のお膝元に建設され、東北古代史と著名な縄文貝塚遺跡が展示の中心であった。東北歴史資料館が研究テーマとして「仙台湾沿岸の貝塚の研究」が選ばれ、昭和54（1979）年から里浜貝塚西畑地点の発掘調査が始まった。

東北大学教育教養部の調査から10年以上の時間が経過していた。その間日本の遺跡を取り巻く状況が激変していた。東北地方には東北自動車道、東北新幹線が開通し、各地で圃場整備事業、宅地開発が行われ大規模行政発掘調査の

時代を迎えていた。開田工事で石巻市南境貝塚が消えた。貝塚の保存が強く求められた。宮城県文化財保護課では気仙沼市田柄貝塚の大規模発掘調査を行い貝塚のコラムサンプリングを実施していた。東北大学考古学研究室では田尻町中沢目貝塚の調査で微細層位発掘の試行錯誤と水洗選別の実践を行っていた。貝塚の重要性と調査方法についていくつかの重要なターニングポイントを経過していた。

東北歴史資料館の里浜貝塚調査は昭和54（1979）年から平成3（1991）年まで12年間継続して続けられる。調査内容及び担当者は表の通り（第2表）である。この一連の調査は時期別里浜貝塚の内容と縄文晩期の土器製塩が大きな柱である。貝層の調査方法の特徴は微細層位発掘と悉皆採集である（写真11）。具体的な調査方法は「里浜貝塚Ⅰ」に示されている。遺跡の発掘とは土壌を掘り、遺物を取り上げ持ち帰り、大地に刻まれた遺構は実測と写真により記録する。調査が終了すれば現状に復旧するために埋め戻す。貝塚でも主だった大型自然遺物は採取されたが、貝類や微細魚骨などは廃棄された。それがこれまで捨てていた土壌と自然遺物を全て取り上げ持ち帰り、水洗選別を行うのである。発掘の終わった遺跡には埋め戻す土壌がないことになる。貝塚から持ち帰る資料の量は莫大なものになる。

貝塚から出土するものは全てが研究対象であるという考え方は、これまでの貝塚は土器編年の重要な遺跡から、縄文人の生業の復元的研究対象への大転換であった。世間の発掘調査はどこまでも大規模に広く深くと向いていた時代に、狭い範囲の資料を全て分析対象とするという方法を提示したことは時代の仇花のようにも見えるが、貝塚の考古資料としての重要性を再認識する上で重要であったといえる。

（会田）

## 6. 奥松島縄文村歴史資料館の調査

平成4（1992）年に奥松島縄文村歴史資料館が開館し、これ以降里浜貝塚の調査は鳴瀬町教育委員会が主体となり、資料館が担当することになった。当初は住宅建築や浄化槽設置に係る試掘・確認調査のみであったが、平成7年の史跡指定を受けて、平成8（1996）年度からは国・県の補助を受けて史跡整備のための調査を行うこととなった。調査はあくまでも整備のためのものであり、発掘する面積も最小限にとどめ、里浜貝塚全体の面的な広がりを把握することを目的とした。この調査は薄く広く里浜貝塚のペールを剥ぐもので、北貝塚の西畑・西畑北地区および西貝塚の台田地区を中心に、貝層の分布範囲と堆積状況、製塩域、居住域、墓域の構成、旧地形や災害の歴史等、里浜に暮らした縄文人

第2表 東北歴史資料館の里浜貝塚調査一覧表

調査年	調査地点	調査日数	調査内容	時期	調査担当	資料箱数
昭和54年	西畑北地点	22日	A B C区貝層調査	晩期中葉	藤沼邦彦・岡村道雄	557箱
昭和55年	西畑地点	21日	A B区貝層調査	晩期中葉	藤沼邦彦・岡村道雄	449箱
昭和56年	西畑地点	18日	古環境調査	晩期中葉	藤沼邦彦・岡村道雄	
昭和57年	西畑地点	19日	A B区貝層調査	晩期中葉	小井川和夫・岡村道雄	210箱
昭和58年	西畑地点	59日	A区貝層調査	晩期中葉	小井川和夫・岡村道雄	513箱
昭和59年	西畑地点	41日	層位検討	晩期中葉	小井川和夫・岡村道雄	
昭和59年	西畑北地点	37日	製塩遺跡調査	晩期中葉	桑原滋郎・小井川和夫・岡村道雄	
昭和60年	西畑北地点	26日	製塩遺跡調査	晩期中葉	小井川和夫・岡村道雄	
昭和61年	西畑北地点	53日	製塩遺跡調査	晩期中葉	岡村道雄・笠原信男	
昭和62年	台田頂部地点		貝層調査	中期前葉	笠原信男・山田晃弘	448箱
昭和63年	台田頂部地点		貝層調査	中期前葉	笠原信男・山田晃弘	
平成元年	梨木東地点	38日	貝層調査	前期初頭	加藤道男・山田晃弘	698箱
平成2年	梨木東地点	38日	貝層調査	前期初頭	加藤道男・山田晃弘	
平成3年	風越地点	36日	貝層調査	後期後葉	加藤道男・山田晃弘	814箱



写真11 西畑地点調査区

たちの空間利用の一面が明らかになった（第13図A～Y、第1表）。

史跡整備終了後、国庫補助事業による里浜貝塚の調査は一旦終了し、平成21年度からは島の東岸に位置する室浜貝塚の確認調査に着手した。昭和初期に山内清男博士によって発掘調査が行われ、縄文時代前期初頭の「室浜式土器」が設定されるなど学史的にも著名な貝塚である。遺跡の範囲や内容、保存状況等を明らかにするための調査を実施し、平成22年度には遺跡周辺の旧地形や縄文時代前期初頭の貝層の広がりを確認するとともに、貝層の上面で縄文時代後期の人骨13体を検出した。翌23年度から貝層の詳細な調査を行う計画だったが、3月に東日本大震災が発生し、これ以降、里浜貝塚地内の被災した住宅や倉庫、農地復興等に係る調査に追われることとなった。

震災によって史跡指定地内の丘陵斜面の一部が崩落したが、貝塚や遺構、包含層等への影響はなく、里浜貝塚の史跡および埋蔵文化財への影響は少なく済んだ。ただし、現在の里集落における家屋等の被害は大きく、多くの箇所では調査が必要となった。狭い範囲での部分的な調査がほとんどであったが、里地区の広範囲に調査が及んだことで、当時の地形と貝層および包含層の分布状況や変遷、同時期に併存した集落の存在等が明らかになった。

## 第2節 保存、整備と活用

### 1. 奥松島縄文村構想

松本博士は発掘調査を実施した場所を、東北大学の学用地として調査研究のために、保存することをめざしたとされるが、鳴瀬町（旧・宮戸村）や地元の里地区の方々に調査を行ったが、記録はなかった。

昭和35年に文化財保護法が設定され、埋蔵文化財もその保護対象となった。里浜貝塚を含む特別名勝松島を抱える鳴瀬町は、おもに特別名勝松島の保護とセットにして、里浜貝塚の保護を行ってきた。

鳴瀬町では里浜貝塚保護のひとつの方法として、昭和50年代に里浜貝塚の各地点に標柱を立て、その位置を明示し、保存啓蒙活動に努めてきた。

平成2年鳴瀬町は「奥松島縄文村構想」を発表した。それは里浜貝塚を中核にして、文化財保護、社会教育、文化観光、地域づくり、考古学研究を旗印にし、資料館、史跡公園（野外博物館）、物産館、漁業研修所、貝塚研究所などの複合施設作りをめざすという壮大な計画であった。それを鳴瀬町が単独で立ち上げたのである。当時バブル景気の最盛期で世間は土地開発で沸き返っていた。鳴瀬町宮戸島は日本三景で有名な特別名勝松島に含まれ、その景観の美しさは松島町をしのぐものを持っていたが、観光施設はほとんどなくのんびりとした漁村で、片手間に民宿を営む家々が連なっていた。大高森からの眺望は松島四大観のうち壯観と呼ばれた。そこから望む松島湾の夕焼けは絶景で、自然のままの松島と海の幸を堪能するには絶好の穴場であった。それは地元の方々が文化財保護法を遵守し、景観の保存に努めた結果なのである。しかし、そのような手厚く保護された場所にも土地ブローカーが押し寄せていた。特別名勝地内で開発が不可能とわかっていても、大手不動産業者は獲得に奔走していた。鳴瀬町では民間による乱開発を未然に防ぐ意味と地域振興策を絡めて、当時地域振興策の切り札となっていた国の補助金「ふるさと創生基金」（所謂竹下1億円）をほぼすべてこの「奥松島縄文村」建設に投入する条例を成立させた。里浜貝塚を中核にした地域おこしの実践であった。

この計画は資料館の建設から始まり、里浜貝塚の国史跡指定、史跡地の公有化、遺構確認のための発掘調査、史跡整備へと進む。これだけ著名で重要な里浜貝塚が「史跡」に指定されていなかったのである。実は文化庁では三陸沿岸貝塚が危機に瀕している状況を鑑み、広域保存の可能性を模索していた。宮城県では東北歴史資料館を中心に貝塚の分布調査と保存状況の調査をおこない、『宮城の貝塚』を発表するにいたっていた。里浜貝塚は特別名勝松島指定地内にあったことと、地元の方々の努力により、景観を含めたその保存状況は全国屈指のものであった。里浜貝塚の保存策については別々な動きがあったものの国、県、町は同じ方向を向いていた。里浜貝塚を保存し整備活用することが重要課題であるという認識は共通していた。最終的に地元がどのような方向性を打ち出すかという問いかけに、鳴瀬町では「奥松島縄文村構想」で答えたというわけである。当然ながら地元の発想は文化財保護を掲げながらも、地域振興策が衣の下の鎧であることは明白である。当初の史跡公園整備計画はさながら縄文テーマパークであった。そこを如何に実際の考古学的成果に合わせて整備を行ってゆくのが埋蔵文化財行政の妙でもあった。

「奥松島縄文村構想」を受けて平成3年度に建設されたのが奥松島縄文村歴史資料館であった。同年に10月に資料館が開館した。その展示の中核になったのは東北大学教育教養部日本史研究室と宮戸島遺跡調査会により調査され長く宮城教育大学に保管されていたものが鳴瀬町に移管された資料である。平成6年4月には奥松島縄文村建設ゾーン（縄文村交流館、石の広場、中庭美術館、里区公民館）が完成し、全体オープンとなった。約15万平方メートルの里浜貝塚の史跡指定は平成7（1995）年2月に官報告示がなされた。これを受けて地権者から買い上げを求められている約9万平方メートルについて国・県の補助を受け、公有化が開始された。

## 2. 里浜貝塚の整備

里浜貝塚の土地の公有化は、史跡整備および整備地との一体的な保存管理と活用を考え、6～8年度に西畑・台囲・牛山崎・畑中地区90,178.11㎡、18年度に西畑地区720.77㎡、19年度に台囲地区5,891.00㎡、令和2年度に寺下囲地区2,477.47㎡を公有化した。これまでに公有化した面積は101,744.72㎡で、史跡指定面積153,067.71㎡のうち、約65.5%にあたる。とくに西畑・台囲地点および資料館と史跡公園とを結ぶ連絡路として寺下囲地点の公有化を優先して行った。

里浜貝塚の保存と整備・活用は、平成3年（1991）に策定した「奥松島縄文村構想」をもとに進められた。史跡整備は、貝塚や製塩域など遺構の分布状況が明らかで、公有化が進んだ西畑・台囲地点の約4万㎡を対象として行った。平成10年（1998）に基本計画の策定、13年（2001）に整備指導委員会を設置し検討を始め、14年（2002）に実施設計、工事は14年度から6ヵ年計画で行い、20年（2008）4月に「さとはま縄文の里 史跡公園」としてオープンした（写真12）。

里浜貝塚の特徴は、貝塚の規模や多種多様な遺物、良好な堆積・保存状況もさることながら、発掘調査によって縄文人の生業や食生活の実態、活動の場（行動領域）が復元可能なこと、そして当時の地形環境や景観が良く残されていることにある。

整備にあたっては、縄文文化を象徴する貝塚への理解を深めるとともに、里浜貝塚の特徴を活かし、縄文から現代に続く歴史と自然を体感、縄文人の生活を体験できる空間を作ることの基本方針として事業を行った。具体的には、①貝塚と製塩炉の野外展示（貝層剥ぎ取りと平面露出展示による貝塚の立体的な展示、製塩炉の範囲表示、サイン表示）、②縄文的景観の復元（砂浜と葦原の復元、植生復元）、③体験施設の整備（大型四阿、多目的デッキの整備）、④便益施設の整備（四阿、トイレ、園路・階段等の整備）等の整備工事を行った（写真13、14）。

整備事業を行ったエリアは、里浜貝塚の集落域（居住域）ではなく、里浜縄文人が様々な活動を行った場所の整備である。よって、縄文の史跡公園の定番ともいえる竪穴住居の復元はない。一見、史跡公園らしからぬ公園と映るかもしれないが、貝塚だけではなく、史跡をとりまく里浜の海や森を利用して初めて生きる体験型の史跡公園を目指した。

## 3. 里浜貝塚の管理と活用

里浜貝塚の管理は、史跡公園を含め、平成18年度に策定した「史跡里浜貝塚保存管理計画」に従って行っている。整備後の管理と活用方法については、保存管理計画の策定の際にも検討を重ねたが、整備の計画段階から史跡整備指導委員会の助言指導の下、史跡への理解と積極的な活用を図るための施設の整備や整備後の管理方法、利用計画（ソフト事業計画）の検討を行った。



写真12 「さとはま縄文の里史跡公園」全景



写真13 貝塚の屋外露出展示



写真14 貝層観察館

活用については、現在、奥松島縄文村歴史資料館の主たる事業として、人数や滞在時間に合わせた体験学習プランを作成し、「資料館見学+貝塚見学（史跡公園）+モノづくり体験」を基本とした体験を行っている。また、史跡や史跡をとりまく自然環境を活用した体験講座・イベントも、月1～2回程のペースで継続的に開催している。とくに、“地の利”を活かした海の縄文食体験や塩作り、漁り体験（釣り針作り+海釣り）は、調査成果にもとづく「里浜貝塚ならではの」体験であり、貝紫染め体験やつる編み体験も、海と山をもつ里浜の自然環境を活かした体験メニューである（写真15）。家族ぐるみで参加できることが多く、リピーターや県外からの参加者もみられる。

#### 4. 市民の参画と地域との連携

里浜貝塚ファンクラブは体験イベントのリピーター家族を中心に発足したもので、資料館の活動に家族ぐるみで参画してもらう組織である。小中学生の子供を抱える家族が世帯ごとに入会するケースが多く、現在県内外の169世帯、519人（令和2年2月現在）が、縄文村の「村びと」として会員登録している。入会のきっかけや歴史に対する関心・

知識レベルなど、従来の博物館友の会における会員構成とは大きく異なる。家族でイベントに参加し、アンケートや直接寄せられる生の声は、史跡の活用や資料館活動を行う上で大変参考になっており、今や館外モニター的な存在である。

地域柄、都市部のような個人を主体としたボランティア体制（遺跡案内ガイド・体験インストラクターなど）の構築は難しいが、地域全体で史跡の維持管理や資料館活動を支えてもらっている。とくに“地の利”を活かした海の縄文体験やイベントは、地元漁師や漁協の理解と協力はなしには行うことができない。また、地元からの提案で「奥松島縄文村菜種保存会」が組織され、島の春の風物詩である「菜の花（菜種栽培）」を継承しながら、史跡指定地や整備後の広大なエリアの維持管理に関わってもらっている。史跡指定および整備後の維持管理に、地域づくりの一環として市民（地域）が参画する取り組みといえる。

#### 5. 今後の課題と展望

里浜貝塚の最初の発掘から106年、史跡指定から30年、整備から17年が経過しようとしている。これまでの調査面積は史跡全体の1～2%に過ぎず、しかもそのほとんどが貝層部分を対象としたもので、遺跡の集落構造をはじめ史跡全体の様相を明らかにするに至っていない状況にある。平成18年度に「史跡里浜貝塚保存管理計画」を策定したが、策定から17年が経過し、震災の影響もあって史跡をとりまく状況も変化してきている。今後の調査計画や史跡の追加指定、整備活用の方針等の見直しが必要になってきた。

震災から14年。地域における震災からの復興、ハード面での復興事業は完了した。史跡を活用した取り組みも、体験講座やイベントへの参加者は戻りつつあるが、館を訪れる観光客や学校等の団体による利用は減少したままで、震災による影響は未だ大きい。資料館では、震災後、史跡のある高台は津波による被害を受けなかったことや震災前からの調査で明らかになった島の震災履歴をもとに、「縄文に学ぶ防災教育」に取り組んでいるが、時間の経過とともに求められる講話の回数が減少傾向にある。一方で、明るい兆しもある。平成30年（2018）には宮城オルレ奥松島コースが開設され、史跡全体が「縄文の古から続く、松島の原風景を肌で感じるコース」の一部として利用されるようになった。中高年を中心に年間約8千人が訪れ、縄文の歴史と風景を体感している。

今後も、「里浜ならではの」特徴を活かしつつ、「村びと」や地域との連携の下、観光資源としての活用や体験学習型観光の推進、災害の歴史等を題材にした学習プログラム・メニューの実践、史跡を核とした地域イベントの開催等、地域の復興に資する史跡および博物館の活動を展開し、史跡への理解を深めていく予定である。

（菅原）



写真15 「里浜貝塚ならではの」の体験講座

## 第3章 調査の内容

### 第1節 調査に至る経緯と調査経過

#### 1. 調査に至る経緯

史跡整備に向けて基本的な里浜貝塚の範囲、貝層の分布域、製塩域、居住域、墓域の構成を確認するために、発掘調査が計画された。東松島市（旧鳴瀬町）教育委員会ではこの調査を適正に行うために学術的見地から指導する「里浜貝塚調査指導委員会」を設置した。平成8年7月に委員会を開催し、史跡整備に向けて貝層の分布範囲、堆積状況、製塩域、居住域、墓域の構成を確認するため、委員会、国、県の指導の下、発掘調査計画の検討を行った。

調査は8年度から開始した。8年度は公有化の完了した里浜貝塚西畑地点を対象に、貝層の分布範囲、堆積状況、製塩遺構の範囲や遺構の確認、旧地形の復元を目的とした調査を実施し、翌9年度からは史跡の保存と環境整備工事計画の策定のためと西畑北地点、台囲地点の調査を行った。史跡整備が終了する19年度からは、遺跡の範囲確認と史跡内における遺構遺物の分布状況、内容把握を目的とした確認調査を実施した。また、個人住宅等の建替えや平成23年3月の東日本大震災の発災以降は復旧復興事業に伴う確認等の調査を実施した（第15図、第3・4表）。

#### 2. 調査経過

##### 平成8（1996）年度〈1・2次調査〉

西畑地点の貝層分布の範囲、堆積状況、製塩遺構の範囲や遺構の確認を目的として、10mの大グリッドを設定し、地形の傾斜に沿った2m幅のトレンチを発掘した（第15図）。調査の結果、大洞C2式からA式の貝層分布（末端部）を確認するとともに、縄文時代、古墳時代、古代の遺物包含層を確認した。併せて、大洞C2式、A式、弥生時代榊形罎式、平安時代の製塩土器が確認することができた。また、里地点（HSO地点）では、縄文時代後期後葉の廃棄層（貝層）とともに、晩期初頭から前葉にかけての墓域が明らかになった（B）。

##### 平成9（1997）年度〈3次調査〉

西畑地区の南区では遺構確認、北区では製塩遺構の確認、南北トレンチでは製塩廃棄層の広がりや再確認、東西トレンチでは新たな遺物分布域の有無の確認を目的として調査を行った（A）。調査の結果、古代の竪穴建物跡3棟、弥生時代寺下罎式の製塩遺構1基、大洞A式の製塩遺構2基および製塩に伴う廃棄層を確認した。また、奈良時代の鹿角製離頭モリ、卜骨、榊形罎式に伴う離頭モリが出土した。南区からは中世・近世の土坑墓、中世の火葬墓を確認し、人骨が出土した（C）。

##### 平成10（1998）年度〈4次調査〉

台囲地区で4本のトレンチを8m間隔で設定して調査を行った（D）。その結果、竪穴建物跡2棟、土坑墓、埋設土器などを確認した。また、縄文中期後半の貝層と後期初頭の貝層を検出し、中期後半の貝層を微細層位発掘法で調査し、中期中葉から後葉にかけての一括土器を層位的に取り上げた。

##### 平成11（1999）年度〈5・6次調査〉

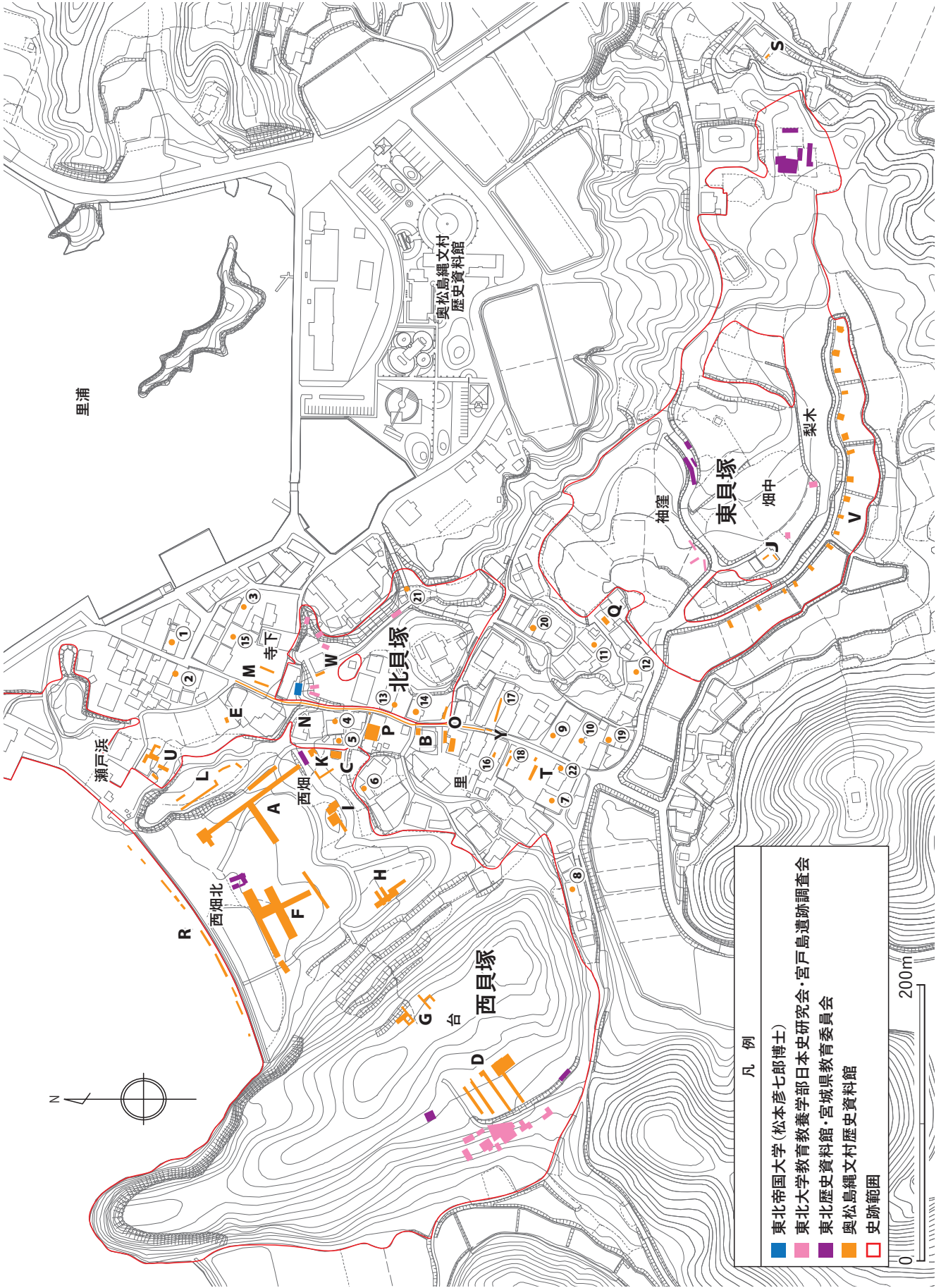
台囲地点で確認された竪穴建物跡の全体像を明らかにすること（5次調査）と、里浜貝塚の指定範囲外の状況を確認するため里地点の調査を行った（6次調査）。里13地点の調査（E）では、植物遺体層を含む平安時代と縄文時代晩期中葉の遺物包含層を確認し、縄文時代後期以降の集落周辺における植生の変遷が明らかになった。

##### 平成13（2001）年度〈7次調査〉

西畑北地点の入江状地域に形成された泥炭層の広がりや堆積状況を把握するため、海から約20m、35m付近にそれぞれ東西に横断するトレンチを設定（F）。入江奥側の調査区で縄文時代前期の泥炭層を検出した。

##### 平成14（2002）年度〈8次調査〉

西畑北地点の泥炭層の広がりや堆積環境等を明らかにするため、新たに直行する南北トレンチを設定し調査を行った（F）。調査の結果、入江状地域は少なくとも縄文時代前期（約5,700年前）には干



第15図 奥松島縄文村歴史資料館による調査地点(平成8～令和5年度) ※アルファベットおよび○数字の箇所は、第3・4表に符合する。

第3表 調査年度・回数と調査地点

※ゴシック表記が本報告書に掲載する調査。

調査年度	調査回数	調査地点	調査目的・原因	概要	報告書
1996	H8	A 西畑地点 (西畑1-1)	内容確認	縄文晩～弥生の包含層、製塩土器	鳴瀬町教委・縄文村(1997)
		B 里地点 (HSO地点、里28)	住宅建築	縄文後期末の貝層と晩期の人骨	
1997	H9	A 西畑地点 (西畑1-1・7)	内容確認	縄文晩～弥生の製塩炉、古代の竪穴建物、縄文中・後期の泥炭層と植物遺体	鳴瀬町教委・縄文村(1998)
		C		中近世の人骨	
1998	H10	D 台圃地点 (台12・8)	内容確認	縄文中期・後期の貝層、晩期の人骨・埋設土器	鳴瀬町教委・縄文村(1999)
1999	H11			縄文晩期の竪穴建物	鳴瀬町教委・縄文村(2000)
1999	H13	E 里地点 (里13)	範囲確認	植物遺体層	鳴瀬町教委・縄文村(2003)
2001					
2002	H14	F 西畑北地点 (西畑7)	内容確認	縄文前期の泥炭層(クリ花粉)	鳴瀬町教委・縄文村(2003)
2002	H14			縄文中・後期の津波跡	
2003	H15	G 台圃東地点 (台10・11)	内容確認	縄文中期中葉の土坑	東松島市教委(2008)
		H 西畑南西地点 (西畑12)	内容確認	古代(9C後半)貝層	
		I 西畑南地点 (西畑1-1)	内容確認	古墳前・中期溝跡、土器	
		J 畑中地点 (畑中4)	住宅建築	岩盤・遺構遺物なし、貝層の範囲確認	
2004	H16	I 西畑南地点 (西畑1-1)	内容確認	古墳前・中期溝跡、土器	東松島市教委(2025)
		K 西畑地点 (西畑1-1)	内容確認	西畑地点貝層の範囲確認	
2005	H17	L 西畑東地点 (西畑1-5)	内容確認	東歴調査区南(縄文晩期中葉)	東松島市教委(2008)
				古代の土坑	
2006	H18	K 西畑地点 (西畑1-1)	史跡整備	東歴調査区断面(貝層剥ぎ取り)の精査	-
2007	H19	M 寺下圃地点 (里74)	範囲確認	縄文晩期後葉の貝層、古墳中期の包含層	東松島市教委(2010)
2011	H23	N 里地点 (里21)	住宅建築	貝層分布確認(ハンドオーガー)	東松島市教委(2016)
		O 里地点 (里66)	倉庫建築	縄文晩期前葉の貝層	
		O 里地点 (里29-2)	住宅建築	近世貝層(一部晩期貝層)、遺物小破片	
2012	H24	P 里地点 (里23)	住宅建築	縄文晩期末～弥生中期の包含層、土坑墓	東松島市教委(2021)
		Q 里地点 (里58)	住宅建築	古墳中期の包含層	
2013	H25	R 西畑北地点	堤防復旧	砂礫層確認(津波堆積層?)、縄文土器・製塩土器片	東松島市教委(2019)
2014	H26	S 梨木東地点 (扇田29)	側溝工事	縄文前期の土坑(二次堆積or墓)	東松島市教委(2016)
		T 里地点 (里33)	住宅建築	縄文晩期晩期中葉(大洞C2)の土器	東松島市教委(2021)
		U 里地点 (里16)	範囲確認	縄文晩期・古代製塩、貝塚	東松島市教委(2016)
		V 梨木・畑中地点 (宮田24～31)	農地復旧	前期初～晩期の包含層(二次堆積層)	東松島市教委(2025)
2020	R2	W 寺下圃地点 (里72)	住宅撤去	縄文後期末～晩期の貝層、土坑墓	
2021	R3	Y 里地点 (里64)	水道付替	縄文晩期の貝層(末端の二次堆積層)	

鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 (1997)：「里浜貝塚－平成8年度発掘調査概報」『鳴瀬町文化財調査報告書』第2集  
 鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 (1998)：「里浜貝塚－平成9年度発掘調査概報」『鳴瀬町文化財調査報告書』第3集  
 鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 (1999)：「里浜貝塚－平成10年度発掘調査概報」『鳴瀬町文化財調査報告書』第5集  
 鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 (2000)：「里浜貝塚－平成11年度発掘調査概報」『鳴瀬町文化財調査報告書』第6集  
 鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館 (2003)：「里浜貝塚－平成13・14年度発掘調査概報」『鳴瀬町文化財調査報告書』第8集  
 東松島市教育委員会 (2008)：「里浜貝塚VI－平成15-17年度発掘調査概報」『東松島市文化財調査報告書』第6集  
 東松島市教育委員会 (2010)：「里浜貝塚－宮城県東松島市里浜貝塚寺下圃地点の調査概報」『東松島市文化財調査報告書』第8集  
 東松島市教育委員会 (2016)：「里浜貝塚－平成23・26年度発掘調査概報」『東松島市文化財調査報告書』第14集  
 東松島市教育委員会 (2019)：「江ノ浜貝塚ほか－宮戸地区農地海岸災害復旧事業関連遺跡発掘調査報告書」『東松島市文化財調査報告書』第22集  
 東松島市教育委員会 (2021)：「東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告書III」『東松島市文化財調査報告書』第24集  
 東松島市教育委員会 (2025)：「里浜貝塚総括報告書」『東松島市文化財調査報告書』第27集 (本書)

第4表 確認・試掘・立会調査地点と概要

調査地点		調査原因	概要	調査地点		調査原因	概要
①	里地点（里77）	住宅建築	盛土、遺構遺物なし	⑫	里地点（里47-1）	住宅建築	縄文中期土器片若干
②	里地点（里9）	住宅建築	2m下に中世の泥炭層	⑬	里地点（里68-4）	住宅建築	縄文晩期貝層
③	里地点（里75-2）	住宅建築	盛土、遺構遺物なし	⑭	里地点（里66）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし
④	里地点（里21）	浄化槽設置	岩盤、北西部に縄文晩期貝層	⑮	里地点（里75-1）	タンク設置	貝層(二次堆積層?)
⑤	里地点（里22）	タンク設置	岩盤、遺構遺物なし	⑯	里地点（里31）	住宅建築	近世の貝層(厚60cm)
⑥	里地点（里25）	民宿建築	岩盤、遺構遺物なし	⑰	里地点（里53-1）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし
⑦	里地点（里35）	民宿建築	遺構遺物なし	⑱	里地点（里32）	住宅建築	遺構遺物なし
⑧	里地点（里41-1）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし	⑲	里地点（里45）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし
⑨	里地点（里51）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし	⑳	里地点（里56-2）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし
⑩	里地点（里50）	住宅建築	縄文晩期中葉土器片若干	㉑	寺下囲地点	水道付替	岩盤、遺構遺物なし
⑪	里地点（里57-2）	住宅建築	岩盤、遺構遺物なし	㉒	里地点（里34）	浄化槽設置	盛土、遺構遺物なし

潟が形成され、その後満ち干と縄文時代中期、後期の2回に及ぶ津波等の堆積によって埋没形成されたものであることが明らかとなった。また、縄文時代前期初頭頃の泥炭層の堆積土中に多量のクリ属花粉が含まれていることが明らかとなった。周辺にクリ林の存在と縄文人によるクリの管理・維持(栽培)が行われていた可能性が考えられた。

#### 平成15(2003)年度〈9・10・11次調査〉

史跡整備工事に係る台囲東地点、西畑地点の住宅建築に伴う畑名地点の確認調査を行った。台囲東地点の四阿建設計画地(G)では縄文時代中期後葉の土坑と遺物を検出した(9次調査)。また、西畑南地点の大型四阿建設計画地(I)では古墳時代前期から中期にかけての遺構遺物が確認され、園路計画地の台囲斜面の裾部(西畑南西地点、H)では長径15m以上、短径約6mの規模をもつ9世紀後半頃の貝層が確認され、畑名地点(J)は遺構遺物は検出されなかったが、周辺の地形と貝層の分布状況を確認した(第11次調査)。

#### 平成16(2004)年度〈12・13次調査〉

西畑南地点で確認された古墳時代の遺構を明らかにするため、調査区を拡張した(I)。その結果、古墳時代前期(塩釜式期)から中期(南小泉式期)にかけてのL字に巡る溝跡であることが明らかになった。溝跡からは、土師器(高坏、甕、壺)や管玉などがまとまって出土した(12次調査)。また、東北歴史資料館が調査した西畑地点の貝層分布の範囲と年代を明らかにするため、南側に4×5mの調査区と西側に1mのトレンチを設定し調査を行った(K)。その結果、東西約25m、南北約35mの規模をもつ貝塚であることが明らかになった(13次調査)。

#### 平成17(2005)年度〈14・15次調査〉

16年度に引き続き西畑地点貝塚(K)と、西畑地点東側の丘陵上の確認調査を行った(L)。西畑地点貝塚のからは東北歴史資料館調査区と同様、晩期中葉(大洞C2式)の土器が出土した。ただし、晩期前葉(大洞B式)や後期末の瘤付土器の破片も認められることから後期末まで遡る可能性が考えられた(14次調査)。西畑地点東側の調査区からは平安時代の土坑1基と時期不明の炭窯と貝層が確認されたが、縄文時代の遺構遺物は検出されなかった(15次調査)。

#### 平成18(2006)年度〈16次調査〉

史跡の環境整備に伴い東北歴史資料館の旧調査区(A区)の壁3面を剥ぎ取るにあたって、貝層断面を精査するとともに、剥ぎ取りによって生じた遺物の回収を目的として行った(K)。剥ぎ取りに伴って、ほぼ完形の赤彩された壺をはじめ、多量の土器(大洞C2式)や石棒、釣り針・ヤス・固定銚・骨篋等の骨角器、猪牙製装身具等が出土した。

#### 平成19(2007)年度〈17次調査〉

寺下囲地点貝塚の北側低地への広がりを確認するため、4m幅の南北トレンチを2本設定して行った(M)。調査の結果、現在の地表面から約1m下で、縄文時代晩期後葉(大洞A式)の貝層と、さらに北側の低地部分で、波にさらわれて再

堆積した貝混じりの層を確認した。検出された晩期の貝層は、南側の斜面上から続く貝塚の末端部分にあたり、約3 mの範囲、最大で40cm程の厚さをもつが、状況からみて二次堆積と考えられた。製塩に関わる遺構遺物は認められなかった。

#### 平成 23 (2011) 年度〈18・19・20 次調査〉

東日本大震災後の住宅再建に向けて里地点の確認調査を行った。調査の結果、里地点北端部の里13地点(18次調査、N)ではハンドオーガーによるボーリング調査で貝層の分布状況が明らかになり、南端部の里66地点(19次調査)と里29-2地点(20次調査)では谷の東斜面に沿って晩期前葉から中葉にかけての貝層を検出した(O)。

#### 平成 26 (2014) 年度〈25・27 次調査〉

震災で崩落した西畑地点東側の丘陵の東側斜面下に隣接する宅地内(里16地点、U)の確認調査を行った。調査の結果、現在の海岸線から約50 m奥まった場所で縄文時代晩期中葉の貝塚と製塩土器の分布を確認した。貝層の上面からは9世紀前半頃の製塩土器片も出土し、周辺で古代の製塩も行われていたことが明らかになった(25次調査)。また、周知の遺跡外の梨木東地点(扇田23地点、S)では、縄文時代前期の土器片と石器、時期不明の人骨が出土した(25次調査)。

#### 平成 29 (2017) 年度〈28 次調査〉

農地復興に伴う梨木・畑中地点の確認調査で、貝層が分布する丘陵の末端部に沿って総長約300 mを対象に確認調査を行った(V)。その結果、貝層の広がりには認められなかったが、縄文時代前期初頭、中期前葉から後期中葉、晩期中葉から後葉にかけての時期の遺物が出土し、東貝塚全体に長期にわたって集落が営まれていることが明らかになった。

#### 令和 2 (2020) 年度〈29 次調査〉

住宅の浄化槽撤去に伴う寺下囲地点(里72地点)の確認調査で、大正7・8年の松本彦七郎らの調査区、昭和30・31年の宮戸島遺跡調査会(東大人類学教室)の調査区と一連の貝層を確認した。縄文時代後期末から晩期初頭にかけての良好な貝層で、動物遺存体を含む多くの土器、骨角器などの遺物が出土した。また、頭部に鉢を被せた晩期中葉の土坑墓が検出された(W)。

#### 令和 3 (2021) 年度〈35 次調査〉

水道管入替え工事に伴う里地点(里64地点)の確認調査で、貝塚の南端部を確認するとともに、旧水道管理設の際の攪乱された貝層中から晩期中葉から後葉にかけての土器、骨角器などの多量の遺物が出土した(Y)。

## 第2節 北貝塚の調査

### 1. 西畑・西畑北地点

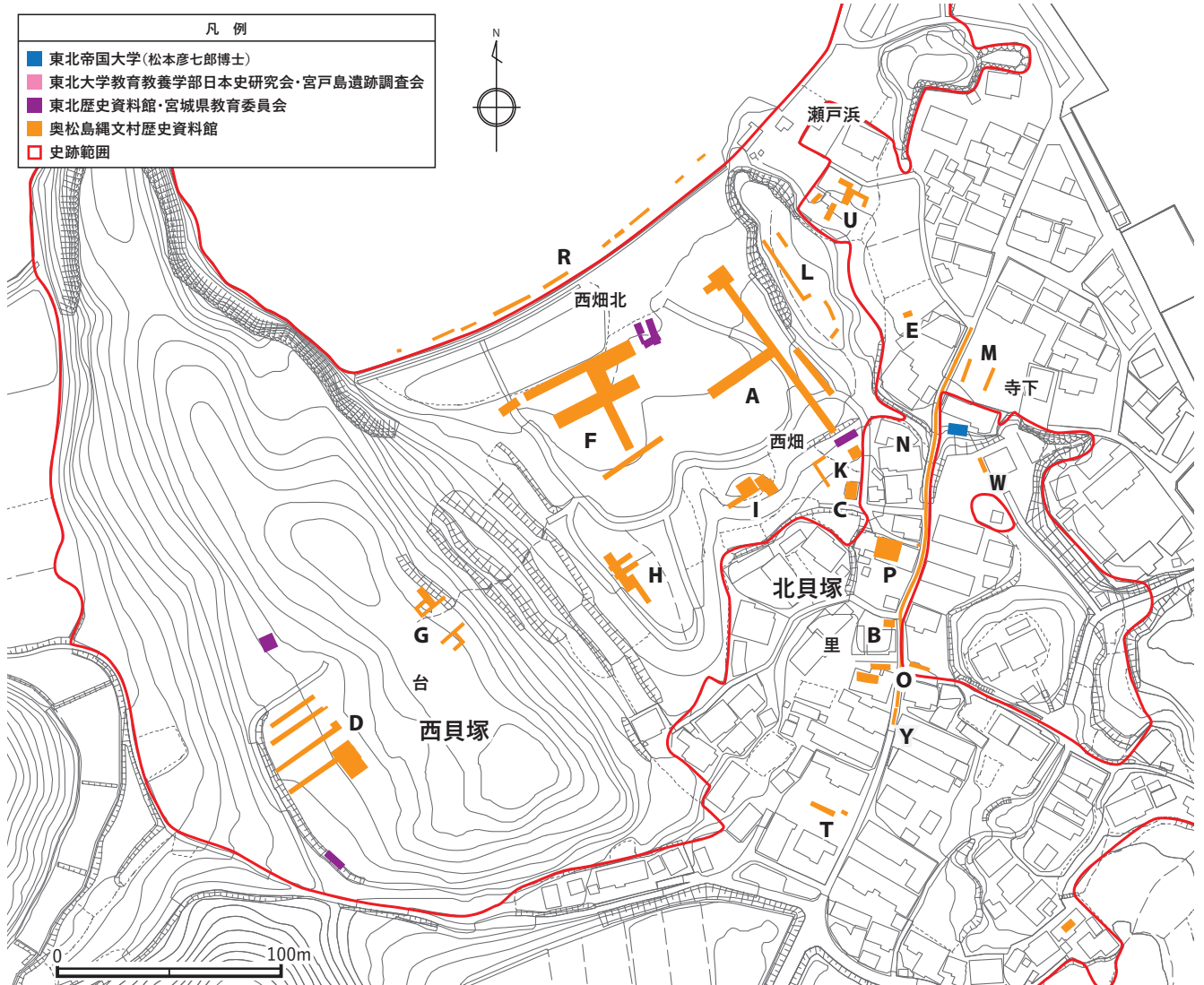
#### (1) 平成8年度調査〈第1次調査〉

##### 1) 調査の経緯

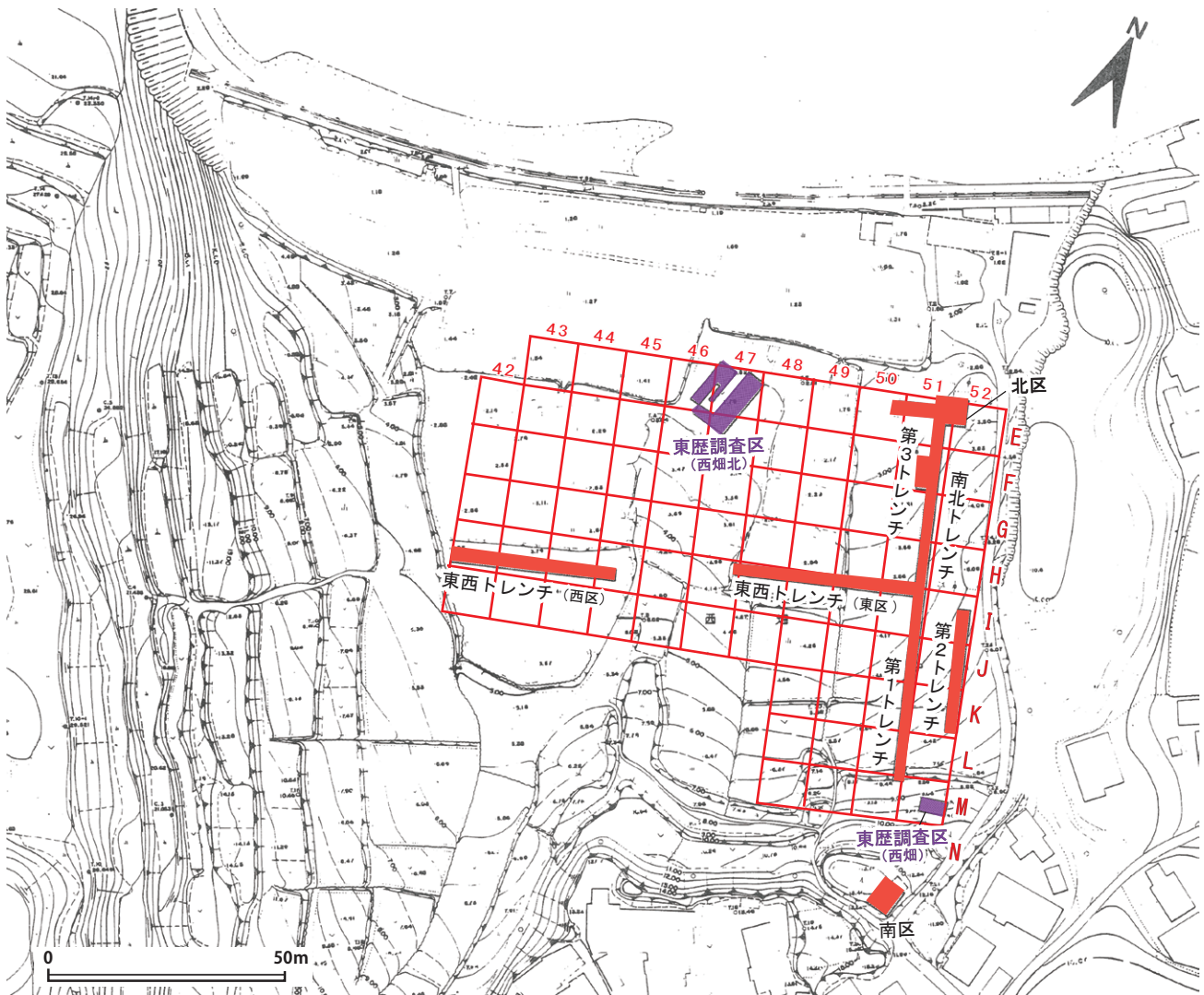
史跡整備に向けて基本的な里浜貝塚の範囲、貝層の分布域、製塩域、居住域、墓域の構成を確認するために、発掘調査が計画された。平成8年7月に里浜貝塚発掘調査指導委員会を設置し、委員会・国・県の指導の下、10月から発掘調査を実施した。8年度は公有化の完了した西畑・西畑北地点において貝層の分布範囲、堆積状況、製塩遺構の範囲や遺構の確認、地形の復元を目的として調査を開始した。

##### 2) 第1トレンチ（第17図）

最小限の発掘調査で遺構を確認するため、10mの大グリッドを設定し、地形の傾斜に沿った2m幅のトレンチを発掘した。第1トレンチ（2m×26m）は西畑地点を取り囲む東丘陵の裾に近い部分に設定した。（第16・17図、写真16-1）



第16図 北貝塚・西貝塚調査区配置図



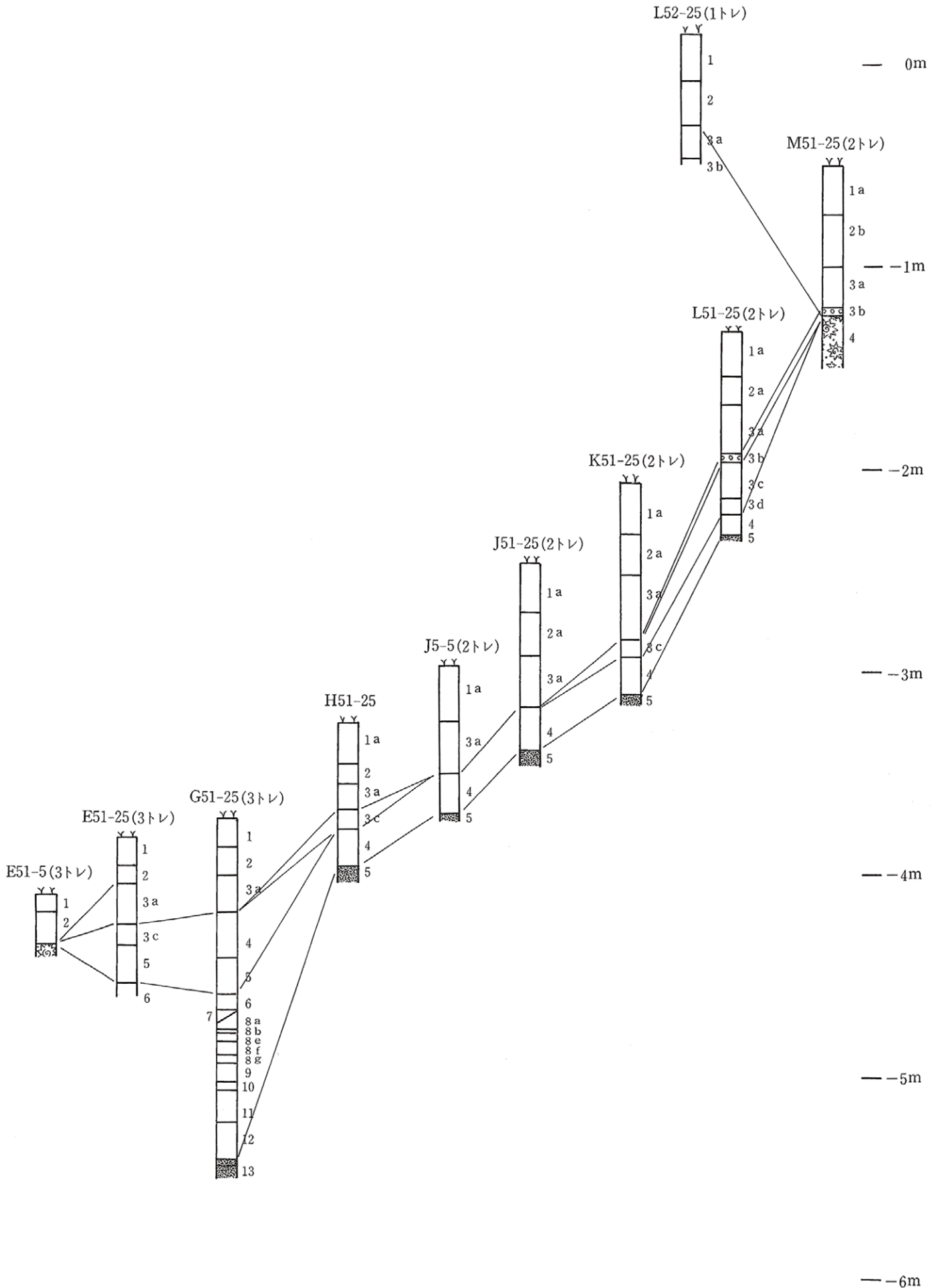
第17図 西畑・西畑北地点第1・3次調査区

① 層序 (第18・19図)

基本層序は以下の通りである。

- 1層 : 7.5YR4/4 褐色砂質シルト。粘性、しまり弱。径2～3mmの凝灰岩粒を多く含む。
- 2層 : 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト。粘性、しまり弱。1層よりややしまり強。径2～3mmの凝灰岩粒をやや含む。  
遺物包含層。
- 3a層 : 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト。粘性弱。しまりやや強。径2～3mmの凝灰岩粒をやや多く含む。縄文時代遺物包含層。
- 3b層 : 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト。特注やや強。しまりやや強。3a層よりも黒い。獣骨、貝層ブロックを含む。  
縄文時代遺物包含層。
- 4層 : 7.5YR5/6 明褐色砂層。粘性、しまり弱。4～5mmの凝灰岩粒を多く含む。縄文時代の遺物を少し含む。
- 5層 : 7.5YR4/4 褐色砂質シルト。粘性、しまり弱。径4～5mmの凝灰岩粒をやや含む。縄文時代の遺物を少し含む。
- 6層 : 凝灰岩基盤。

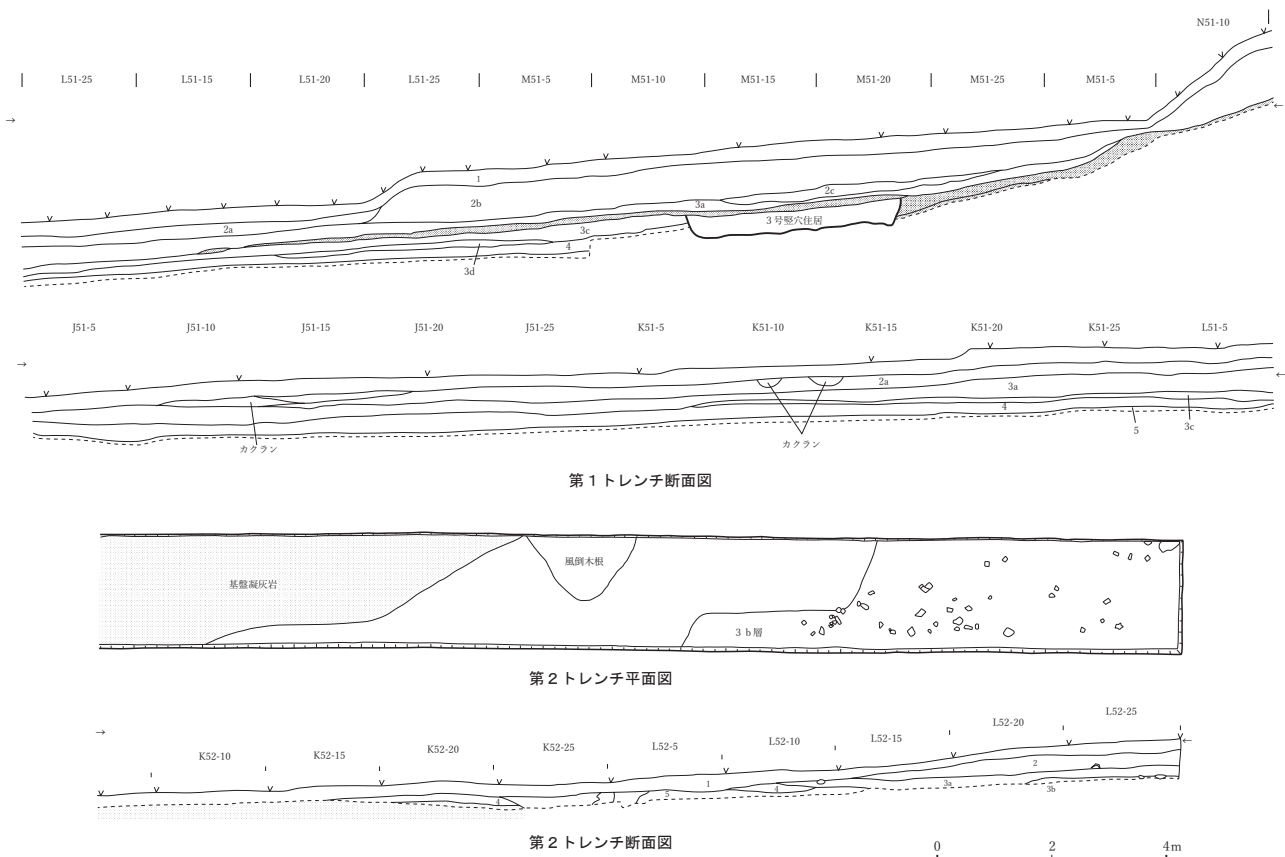
第1トレンチの南端部(L52-20、25区)の3a層下部から貝層ブロックを検出した。3a層は多量の土器類を含み、さらに獣骨を包含することもわかった(写真16-2)。第1トレンチで確認された3a層は西に向かって傾斜している。3a層及び貝層ブロックの帰属時期は共伴する土器から縄文晩期中葉(大洞C2式期)である。出土遺物は土器、礫石器を中心に、土偶、白玉などがある。



第18図 西畑・西畑北地点第1次調査層序対比図

## ② 出土遺物

縄文土器(写真20): 1 (L52-15区3a層出土)は高さ202mm、口径190mm、底径59mm、器壁厚4.8mmの深鉢。胎土は径3~4mmの白色岩片(凝灰岩粒?)を含む。器面には上方からRL、LR、LR、LR、LRの単節縄文が5段にわたり施文されている。1段目から4段目の下端には結節が認められる。1段目の原体長は40mm(節長3.3mm)、2段目は47mm(節長3.5mm)、3段目は48mm(節長3.0mm)、4段目は47mm(節長3.0mm)、5段目は26mm(節長3.2mm)である。1段目と2段目以下の2種の原体を利用していたと言える。内面調整は上半部に斜め方向の草本科植物の茎と推定されるナデの痕跡が認められる。さらにそのナデの上にナデ痕(指)がある。底部近くでは砂粒の動いた跡があり、ケズリ痕と考えられる。底部外面は縄文施文面の上にも粘土がめくれ上がっている。縄文施文後に底部に圧力が加えられた結果と推定される。このような加圧は底部を設置した状態で内面のケズリを行った痕跡と推定される。粘土のめくれ具合から、そのケズリの時期は半乾燥時と考えられる。底部外面にはかなり擦れた摩耗があり、使用の結果と推定される。外面には赤色化した二次焼成痕がある。2 (L52-15区3a層出土)は口径340mm、器壁厚6.6mmの深鉢口縁部破片である。幅3.5mmの沈線が巡り、口縁端部には幅約6mm、深度2mmの連続したU字状のケズリがある。外反する口縁部内側の口縁直下に幅10mmの無文帯があり、横方向のミガキが行われている。無文帯と縄文部の境には区画のための幅5mmの沈線が巡る。縄文部は原体長43mmのLR単節縄文(節長3.9mm)が施文されている。その下段もLR単節縄文と推定される。外面は口縁部以外は磨かれている。内面は口縁部下36mmまでは横方向のミガキ、それ以下は縦方向のミガキが施されている。横方向のミガキが縦方向のミガキを切っている。3 (L52-10区2層出土)は口径320mm、器壁厚6mmの深鉢口縁部破片である。外反する口縁部の内側に幅5.5mmの沈線が巡り、口縁端部には幅約7mm、深度1mmの連続したU字状のケズリがある。口縁直下に幅6mmの無文帯があり、横方向のミガキが行われている。無文帯と縄文部の境には区画のための幅5mmの沈線が巡る。縄文部はRL単節縄文(節長3.8mm)が施文されている。外面は口縁部以外磨かれている。内面は横方向に磨かれているが、ややざらつきがある。4 (L52-10区2層出土)は口径340mm、器壁厚6.5mmの深鉢口縁部破片である。外反する口縁部の内側に幅5mmの沈線が巡り、口縁端部には幅約8mm、深度1.5mmの連続したU字状のケズリがある。口縁直下に幅8mmの無文帯あり、横方向のミガキが行われている。無



第19図 第1、2トレンチ平面図および断面図

文帯と縄文部の境には区画のための幅4mmの沈線が巡る。縄文部にはRL単節縄文(節長3.4mm)が施文されている。外面は口縁部以外は磨かれている。内面は横方向に磨かれているが、ややざらつきがある。5(L52-10区2層出土)は口径360mm、器壁厚6mmの深鉢口縁部破片である。口縁部の内側には幅6mmの沈線、口唇部には幅3mmの沈線がそれぞれ巡る。口縁端部には大小2種の突起が付く。小突起頂部間の幅は20mm、大U字形にえぐられている。大小の突起ともに磨かれている。目録部直下には幅4.4mmの沈線が巡り、幅5mmの無文帯をおいて、幅4.4mmの沈線で縄文部と区画している。1段目の縄文はRL単節、原体長39mm(節長3.2mm)、2段目はLR単節(節長3.5mm)である。内面沈線下幅16mmは横方向のミガキ、以下は縦方向のミガキである。縦方向のミガキが横方向のミガキを切っている。6(L52-10区2層出土)は口径380mm、器壁厚6.5mmの深鉢口縁部破片である。やや外反する口縁部の内側に幅4.5mm、幅5.5mmの浅い沈線が段をなすように2本巡る。口縁端部には幅広の波状にやや高めの二つの突起がある。突起頂部間の幅は21.5mm、浅いU字形にえぐられている。突起は磨かれている。口縁部下外面には幅6.3mmの無文帯の下に、幅6.1mmの沈線が巡り、縄文部と区画している。1段目の縄文はRL単節、原体長34mm(節長3.1mm)、2段目はLR単節(節長3.5mm)である。内面沈線下幅21mmは横方向のミガキ、以下は縦方向のミガキである。縦方向のミガキが横方向のミガキを切っている。7、8(52-10区2層出土)は口径140mm、器壁厚5.6mmの鉢目録部破片である。口唇部には幅2.3mmの沈線が巡る。目録部は幅4mmの突帯が3mmほどの厚さで取り巻き、その上に縦に長さ3mm、幅1.8mmのV字状キザミが約3mm間隔で全周を巡っている。その下には幅5.8mmの無文帯を挟んで、幅5.5mmの凹帯部が巡る。凹帯部には長さ5mm、幅1.3mmの鋭角のキザミがやや斜めに0.8mm間隔で施文されている。そのキザミは部分的に間隔が2.8mmと広がる部分がある。キザミ帯の下には幅2.7mmの沈線、2.7mmあけて幅2.5mmの沈線、さらに3mmあけて幅2.5mmの沈線が施文されている。この部分はやや張り出している。その下の縄文部は、順に原体長23.3mmのLR単節縄文(節長3.6mm)、原体長29mmのRL単節縄文(節長3.8mm)、LR単節縄文が施文されている。内面は口縁部下29mmまで横方向のミガキ、以下は縦方向のミガキが施されている。横方向のミガキが縦方向のミガキを切っている。写真(7)左上の口縁部には直径6.4mmの補修孔が両側から穿孔されている。9(L52-10区2層出土)は口径200mm、器壁厚5mmの深鉢口縁部破片である。口縁部内面には幅2.6mmの沈線が巡り、口縁端部には突起がある。突起の高さは7.4mm、突起頂部間の幅は24mm、大U字形にえぐられている。口縁部下12.1mmの無文帯の下に縄文部と区画する幅3.2mmの沈線が巡っている。この沈線の内部には残沈線が残っている。突起部、無文帯はナデによる調整である。縄文帯一段目は原体長27.9mm LR単節縄文(節長2.9mm)が施文されている。2段目も同様の原体が施文されている。これらの縄文の施文は重なり合ったり、斜めにずれたりしており、作業が簡便化されている。内面は口縁部下17mmまで横方向のナデ、その下は縦方向のミガキが認められる。ミガキは光沢がなく簡略化されている。ナデ調整はミガキに切られている。内面には口縁部下56.3mmまで炭化物が付着している。10(L52-10区2層出土)は口径360mm、器壁厚6.9mmの深鉢口縁部破片である。外反する口縁部の内側には幅4mmの沈線が巡る。口縁部は緩やかな波状を呈し、表面は横方向のミガキによる無文帯となる。口縁部下15.9mmの凹帯に長さ12mm、幅1.3mmの鋭角のV字状キザミがやや斜めに1.2mm間隔で施文されている。そのキザミは部分的に間隔が7.2、2.8mmと広がる部分がある。キザミ帯の下には幅3.9mmの沈線、2.8mmあけて幅4mmの沈線、さらに3.2mmあけて幅4mmの沈線が施文されている。その下にRL単節縄文が施文されている。内面は口縁部下45mmまで横方向ミガキが認められる。その下は欠損して不明である。11(L52-10区2層出土)は口径130mm、器壁厚4mmの鉢口縁部破片である。口唇部内面には幅2.7mmの沈線が巡り、内部に残沈線が認められる。口縁部は幅3.9mmの突帯が3.5mmほどの厚さで取り巻き、その上に縦に長さ3.3mm、幅2.4mmのU字状キザミが約1.4mm間隔で全周を巡っている。その下には幅4.7mmのナデ調整の無文帯があり、さらにその下の幅3.3mmの凹帯部には長さ2.9mm、幅2mmの平面形が卵形のキザミがやや斜めに0.6mm間隔で施文されている。キザミ帯の下には、幅1.7mmの無文帯をはさんで幅3.8mmの沈線が施文されている。この部分はやや張り出している。縄文部は上から順に原体長12.7mmのLR単節縄文(節長2.1mm)、RL単節縄文(節長2.0mm)が施文されている。内面は口縁部下27.8mmまで横方向ミガキ、その下には縦方向のミガキが施されている。横方向のミガキが縦方向のミガキを切っている。ミガキは簡略的で砂粒の移動痕跡が残る程度である。口縁が内湾する部分では粘土帯を内側に積み上げた痕跡が認められる。また、口縁部の突帯部は目録を外に折曲げて作りだしている。12(L52-15区3a層出土)は口径340mm、器壁厚5.8mmの深鉢口縁部破片である。外反する目録部の内側には幅4mmの沈線が巡る。口縁端部には幅6.8mm、深度1.8mmのV字状キザミが4mm

程度の間隔で全周を巡っている。目縁部下には7.3mmの無文帯かおり、横方向のミガキにより調整されている。その下に長さ12mm、幅2.6mmの鋭角のV字状キザミがやや斜めに1.2mm間隔で施文されている。そのキザミは部分的に間隔が2.5、3.5mmと広がる部分がある。キザミ帯の下には幅4.3mmの沈線、3mmあけて幅5.6mmの沈線、さらに1.7mmあけて幅3.8mmの沈線が施文されている。その下にLR単節縄文(節長4.1mm)が施文されている。内面は口縁部下44.4mmまで横方向ミガキが認められる。その下には縦方向のミガキかおる。縦方向のミガキが横方向のミガキを切っている。

13(L52-10区2層出土)は口径100mm、高さ102mm、底径49mm、器壁厚5mmの完形深鉢形土器である。口唇部には長さ3.5mm、幅2.5mm、深度1.5mmのV字状キザミが約3mm間隔で全周を巡っている。口縁部は2mmほど外反し、その下が幅約8.5mmの無文帯となる。無文帯は縦方向のやや粗いミガキにより調整されている。このミガキは縄文を切っている。無文帯の下は原体長22mm、RL単節縄文(節長3.5mm)、原体長30mm、LR単節縄文(節長4.5mm)、原体長30mm、RL単節縄文(節長3.5mm)が順に施文されている。各縄文下端には原体端部の結節痕も認められる。底面と縄文の間約10mmの部分は指によるナデ、及びおさえの痕跡がある。底面はケズリの後ナデ調整がなされている。内面は横方向の粗いミガキが中央部下まで行われている。ミガキが十分なされていない部分には斜め方向に砂粒が移動したケズリ痕跡が認められる。この土器は底部から18mmのところの長さ56mmにわたる亀裂がある。これは粘土輪積み接合不十分に起因する焼成時の亀裂と推定される。この亀裂は内面にまで達し、液体用容器としての役割をはたせなかったと推定される。底部は摩滅痕がなく、焼成後製品としてほとんど使用される事なく廃棄された可能性が高い。

14(L52-15区3a層出土)は口径115mm、高さ133mm、底径50mm、器壁厚5mmの無文深鉢形土器である。外面は粗い横方向ミガキにより調整されているが、部分的に横方向に砂粒が移動したケズリの痕跡が認められる。内面は外反ぎみの口縁部からやや張り出す胴部まで、横方向のミガキが認められるが底部はナデ調整のみである。内外面に認められるミガキは光沢がないことから、粘土がまだ水分を含んでいる段階でミガキが行われたことを示している。このような小型の深鉢が無文であることは大変珍しい。沈線と縄文で装飾されるのが一般的である。また、土器外面にケズリ調整を行うことも無文土器以外には行えない。この土器は工程上の何等の手違いから、無文にしか仕上げられなかった可能性が強い。手違いとは文様施文以前に土器の乾燥が進行しすぎ、施文ができなくなり、表面を削って厚さを調整し、無文化せざるを得なかったなどが考えられる。底面の摩耗もほとんどないことから、使用時間も極めて短かったと推定される。

15(L52-10区2層出土)は口径90mm、高さ78mm、底径100mm、器壁厚5.4mm、底中央部厚4.2mmの鉢形土器である。筒状の鉢形土器は珍しい。ほぼ半分残存している。外面の口縁部下30mmの範囲に沈線で工字文が施文されている。また、底面上部12mmの範囲にも工字文が施文されている。その間の36mmは丁寧にミガキ調整が施され、光沢がある。沈線の幅は約2.5mmである。沈線内部はミガキによる光沢があるが、工字文の粘土をえぐった部分はミガキ調整がなされていない。工字文の沈線部に部分的に朱が残っている。全面に朱彩された可能性もあるが、沈線工字文部分にのみ朱が塗り込められた可能性もある。口唇部内側に幅2.3mmの沈線が巡っている。内面は口縁から底部まで横方向のミガキで調整されている。

16(L52-5区3a層出土)は口径90mm、高さ66mm、底径31mm、器壁厚4.2mmの鉢形土器である。ほぼ半分残存している。やや外反した口縁部には高さ3mm、幅15mmの山形突起と高さ4mm、幅15mmのB突起を交互に配置している。残存状況から推定すると、それぞれ4単位、合計8単位配置したものと考えられる。突起間の口唇部には長さ2.3mm、幅1mmのV字状キザミに切れ込んだミザミが全周を巡る。さらにその下に2mmの無文帯を置いて、幅2.2mmの沈線が巡る。沈線の中には幅0.6mmの残沈線が部分的に認められる。以下原体長16mmの単節RL縄文(節長1.8mm)、原体長26mmの単節LR縄文(節長1.3mm)、原体長16.6mmの単節RL(節長1.2mm)が施文されている。最下段の縄文の端部は底部の沈線に切られている。底部沈線の幅は4mmである。口縁部下の無文部はミガキにより光沢がある。底面はミガキによりなめらかである。口唇部内面に幅2.8mmの沈線が一周している。内面口縁部下30mmまでは横方向のミガキ、それ以下は右方向のミガキである。縦方向のミガキは雑でミガキ以前のナデ痕が部分的に残っている。横方向のミガキが縦方向のミガキを切っている。土器中央部にはぜたような剥離痕がある。内面にも同様の剥離痕がある。さらに右側端部中央にも内面がはぜた痕跡がある。二重の底部は内面が剥がれている、二のように半分の個体の3ヵ所にはぜた痕跡が認められる。これは13同様焼成時の破損の可能性が高い。底面はほとんど摩耗の痕跡がない。

17(L52-15区3a層出土)は口径100mm、高さ125mm、底径45mm、器壁厚4.8mm、底中央部厚3.6mmの鉢形土器である。外面口縁部下から原体長36.4mmのLR単節縄文(節長4mm)力1全周を巡り、2段目は原体長42.2mmのRL単節縄文(節長4.4

mm)、3段目は原体長28.3mmのLR単節縄文(節長4.8mm)4段目は原体長16.8mmのRL単節縄文(節長4mm)が施文されている。原体の端部結節痕が認められる。底面はケズリ痕の上にナデによる調整がある。内面は上半部に未乾燥時の斜方向の粗いミガキが認められる。その下には幅5mm程度を単位としたケズリ痕が認められる。底部近くではそのケズリ痕はナデ痕により部分的に消されている。底面には使用による摩耗痕がほとんど認められない。18(L52-15区2層出土)は口径80mm、頸部高28mm、底径54mm、高さ131mm、器壁厚3.3mm、底部厚4.2mmの壺形土器である。口唇部には幅2.2mmの沈線が巡っている。口縁部は外側に厚さ3mm、長さ3mm程度突出している。頸部はほぼ垂直にさがり、幅25mmの無文帯となる。横方向の丁寧なミガキで調整されている。幅2mmの沈線が2mmの間隔をあけて2本頸部を全周する。そこから器形は球形にひろがる。器面には縄文が施文される。1段目は原体長34.4mmのLR単節縄文(節長2.6mm)、2段目は原体長34.4mmのLR単節縄文(節長2.3mm)、3段目は原体長35mmのRL単節縄文(節長2.7mm)、4段目は原体長34.8mmのLR単節縄文(節長2.4mm)である。その下に幅2mmの沈線が巡り、幅4mmの無文帯があり、底部となる。底部には底の周辺に沿った幅3mmの円が沈線で描かれている。頸部内面はミガキにより調整されている。体部内面にはナデ調整の跡が残る。体部下半はナデで消されない、ケズリ痕あるいは工具によるナデ痕(砂粒が動くような調整痕)が残っている。外部底面外縁部は使用による摩耗が認められる。19(L52-10区2層出土)は口径66mm、高さ51mm、器壁厚4.4mmの注口土器である。やや外反する口縁部の内側には幅2.6mmの沈線が巡り、幅3.4mmの口唇部には長さ1.6mm、幅2.3mm平面形が卵形のキザミが約1mm間隔で施文されている。その間にB突起(推定4個)がある。同様のキザミとB突起は器体中央の上下文様を区画する突帯にも認められる。上半の文様はX字文が施文され、内部にLR単節縄文(節長1.5mm)が充填されている。この文様を施文できる幅が20mm程度しかないことから、正しくX字文が描けず、X字の下半部のみ4ヵ所に描かれていた。文様を区画する沈線は幅3.5mm内外である。中央突帯部の注目部が取り付けられる部分にはキザミがない。この部分は直線的である。欠損しているが約10mmの長さの注口部が取り付けられている。注口の径は5.9mmである。接続後、外側から内側に棒状の工具で突き刺し、貫通させている。下半部は丸底で、省略された大腿骨文が施文されている。内部にはLR単節縄文(節長1mm)が充填されている。区画する沈線の幅は約3mmである。丸底の外面には摩耗痕が少ないが、注口先端が破損していることや、口縁部や突帯部が摩耗していることから、ある程度長期の使用が推定される。破損のひとつの原因は突帯部下の接続部の亀裂である。20(L52-20区3a層出土)は口径90mm、高さ(推定)50mm、器壁厚3.1mmの注口土器である。やや外反する口縁部の内側には幅2.4mmの沈線が巡り、幅2.9mmの口唇部には長さ2.6mm、幅2mm、平面形が卵形のキザミが0.7mm間隔で施文されている。その間にB突起がある。同様のキザミとB突起は器体中央の上下文様を区画する突帯にも認められる。上半の文様はX字文が施文され、内部に原体長21mm程度のLR単節縄文が充填されている。文様を区画する沈線は幅3mm内外で、部分的に残沈線が観察できる。無文部はミガキ調整がなされている。中央の区画線の上下には沈線が施文されている。上は2.7mm、下は2.8mm、2.7mm幅である。部分的に残沈線が観察できる。下半部の磨消し文様は失われ明かでない。LR単節縄文が充填してある。中央の突帯は底部側の粘土帯を6.7mmほど外に残しておき、上半部の粘土帯を接合して形成している。粘上紐の貼付けではない。縄文部には朱彩の痕跡が認められる。内面は全体に横方向のミガキ調整が施されている。21(L52-10区2層出土)は器壁厚5mmの注口土器である。胴部中央(外側)の推定径は130mmである。上半部と下半部を区画する突帯がある。上半部には連携工字文が施されている。文様を区画する沈線幅は2.9mm内外である。残沈線が認められるものもある。内部にはLR単節縄文が充填されている。中央区画突帯は幅2.8mm内外の沈線と長さ4.9mm、幅3mmの断面U字形のキザミ、及び種々の突起などで立体的に装飾される。突帯部は上半と下半の粘土を接合し、接合部に粘土帯を張り付けたものである。内面は残存している部分は横方向のミガキ調整がなされている。22(L52-10区3a層出土)は口径215mm、高さ68mm、底径41mm、器壁厚5mmの皿形土器である(写真18)。全体の3/4程度残存している。文様は口縁部下に幅2mm、1.8mm、2.5mmの沈線がほぼ2mm間隔で3本全周を巡っている。最上段の沈線には半径4.1mm程度の管状のものを斜めに差込んだ高さ4mm程度の二等辺三角形のキザミが5~6mm間隔で全周を巡っている。沈線の下には雲形文が施文されている。雲形文の内部は原体長20mm程度のLR単節縄文(節の最大幅が1.5mm程度の細かい縄文)が充填されている。区画する沈線の幅は約2.6mmである。雲形文の下の底部には幅2.6mm程度の沈線が5mm間隔で3本施文されている。内面は口縁部下51mm程度まで横方向のミガキ、以下は縦方向のミガキが行われている。さらにミガキの後、黒色の顔料により、大腿骨文に類似した文様が描かれている。文様は幅19.5

mmの刷毛状の工具で描かれている。内面底近くは使用により摩耗しており、文様が描かれていたのかどうか判然としない。底部は使用により摩耗している。23 (L52-10区2層出土)は口径240mm、器壁厚52mmの皿形土器である。胎土には長さ1mm程度の海綿状骨針が含まれている。口唇部に幅1.4mmの浅い沈線、口縁部下に2mm内外の沈線分3本、1本目と2本目の間の3.4mmの無文部分に、長径5mm、短径4mmの楕円形のキザミが約8mm間隔でそれぞれ巡っている。このキザミの施文工具は22同様の管状施文工具を用いているが、22は突き刺す動作、23は突き刺しはね上げる動作により施文され、この違いが文様効果の違いとして現れたものである。その下は雲形文が施文されている。内部には原体長10mm程度のLR単節縄文(節の最大幅が1.7mmの細かい縄文)が充填されている。区画沈線は幅4.6mmである。内部に幅1mmの残沈線が認められる。内面は横方向のミガキ調整が施されている。24、25 (L52-10区2層出土)は接合しないが同一個体と推定される無文の壺形土器である。24は口縁部、25は底部である。口径100mm、頸部高26mm、底径60mm、器壁厚5mmである。外面は口縁部から底面にいたるまで横方向のミガキが行われている。内面は口縁部下67mmの部分まで横方向のミガキで調整されている。一方底部内面は指によるおさえとナデが認められる。底部外面は使用による摩滅が少ない。

石製品：白玉(写真20-26a・b L52-15区2層出土)は直径7mm、厚さ3.9mm、孔直径3mm、青緑色の石材を素材としている。

### 3) 第2トレンチ(第17図)

第2トレンチ(2m×44m)は第1トレンチの西8mの位置に平行して設定した。このトレンチは、東北歴史資料館が昭和54年に発掘調査を行った、里浜貝塚西畑地点で確認された縄文晩期の貝層の北側の範囲確認と平坦面の遺構確認を目的として設定した(第17図、写真16-3)。

#### ① 層序(第18・19図)

基本層序は以下の通りである。

1層：7.5YR3/3暗褐色砂質シルト(混破碎貝土層)。粘性、しまり弱。表土層。

2a層：7.5YR4/3褐色シルト。粘性、しまり弱。径2～3mmの凝灰岩粒を含む。貝は含まない。

2b層：7.5YR3/3暗褐色砂質シルト(混破碎貝土層)。粘性、しまり弱。盛り土。

2c層：7.5YR3/3暗褐色砂質シルト(混貝土層、破碎貝を少量含む)。粘性、しまりやや強。

3a層：7.5YR3/4暗褐色砂質シルト。2c層よりもやや明るい。粘性やや強。しまり弱。ほとんど貝は含まない。

3b層：7.5YR7/2明褐色粘土(灰白色火山灰：十和田a)。粘性弱。しまりやや強。遺物は含まない。7.5YR4/3褐色シルト(粘性、しまりやや強)をベースに灰白色火山灰(十和田a)を含む。

3c層：7.5YR4/2黒褐色シルト。粘性、しまりやや強。径3～5mm程度の凝灰岩粒、径2～3mmの炭化物を含む。遺物包含層。

3d層：7.5YR2/3極暗褐色シルト。粘性、しまり強。色調は3c層より暗い。径2～3mmの凝灰岩粒と径4～5mmの炭化粒をやや含む。

4層：7.5YR3/4暗褐色シルト。粘性やや強。しまり強。縄文時代の遺物包含層。M51-25付近かにかけて4層中に貝層ブロックや獣骨を多く含むようになる。

5層：7.5YR4/6褐色砂質シルト。粘性、しまり強。無遺物層。

6層：7.5YR6/8橙色砂質シルト。粘性弱。しまり強。径5～7mmの凝灰岩粒を含む無遺物層。

#### ② 遺構

トレンチ南半部から10世紀の十和田火山噴火による灰白色火山灰(十和田a)層(3b層)が確認された。その上面で確認できた遺構は、1号竪穴(確認のみ)、2号土坑(直刀、高台坏)がある。そのほかの遺物には土師器、須恵器、スラッグなどがみられる。2号土坑には直刀が直立して埋納され、その横に高台坏がふせて置かれていた。

灰白色火山灰(十和田a)層(3b層)下の遺構には、平安時代の3号土坑、3号竪穴建物がある。さらに3b層の下からは散乱した牛骨が認められた。3号土坑、3号竪穴建物埋没後の散乱である。縄文時代の貝層分布域の先端から

製塩遺構までの地形は海岸に向かって緩やかに傾斜している。布域の先端から製塩遺構までの地形は海岸に向かって緩やかに傾斜している。

トレンチ南端では縄文晩期大洞C 2、A式期の貝層端部が確認されている。トレンチ中央部に、縄文土器（大洞C 2式）が集中する部分がある。層毎の主要遺物は、3c層：獣骨、土師器、須恵器、3d層：古式土師器（塩釜式）、管玉（2点）、4層：弥生土器（榊形罎式）、縄文土器大洞C 2、A式主体、（縄文後期・中期末の土器も少数確認）であり、5層は無遺物層である。

#### a. 3b層（灰白色火山灰）上面で確認された遺構

##### 2号土坑（第20図1、写真16-4、5）

3層の上面で確認された遺構である。確認面では埋納されていた鉄刀の茎が既に5cmほど掘り出された状態にあり、掘り込み面は確認面のさらに上位と考えられる。2号土坑の平面プランは直径約50cmの円形に近い。断面形は浅い部分と深い部分の2段に分かれている。浅い部分の東側土坑壁面近くに高台付坏が伏せて埋納してあった。さらに中央の二段に掘り分けられた深い部分の壁面にほぼ垂直に立てかけた鉄刀が埋納されていた。土坑埋土は2層に分けられる。埋土1：10YR2/3 黒褐色砂質シルト。粘性中、しまり弱。この中に灰白色火山灰（十和田a）（3b層）をまだらに含む。埋土2：10YR2/2 黒褐色粘質シルト。粘性中、しまり中。埋土1よりも黒い。この層の中には貝や縄文土器、炭化物が含まれている。このうち、埋土1は土坑への二次の流れ込み土と考えられる。

出土遺物は高台付坏と鉄刀である。高台付坏（ロクロ土師器）（写真19-2）は坏部直径98mm、高さ9mm高台直径58mm、高さ16mmで、高台部が発達し、坏部の高さがあまりない。坏部、高台ともにロクロ成形である。高台部の中程に低い段が認められる。高台部と坏部の接合部にやや亀裂が認められる。表面は赤褐色に焼成され、焼きは良好である。坏の口縁部内側に幅33mm、深度7mmの破損部がある。外側からの加圧による破損である。鉄刀（写真19-1）は全長305mm、茎長77mm、最大茎厚8mm、背関高4mm、刃関高6mm、最大背厚8mmである。目釘穴は1つ、直径4mmである。刀身は直線的で直刀の部類である。

2号土坑の年代は層位的な所見から10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰（十和田a）（3b層）以後の年代が与えられる。遺物からは高台付坏の形態において、坏部に対し高台部が発達する特徴から、関東地方のロクロ土師器の編年に従えば、11世紀頃の年代が与えられよう。鉄刀は小刀で直刀であること、背関があることなどから、古代のものであることが推定される。

2号土坑に関連する遺構は今回の調査では確認することができなかった。また、同時期の遺物などもほとんど出土していない。古代の埋納遺構は大型の建物を建築する際の地鎮に伴う埋納、胞衣の埋納などがあるが、里浜には同時期の大型建物の痕跡はなく、胞衣埋納も平城京などの都市部の習慣のようであり、本遺構との直接の関連は考えられない。遺体等が埋納されたのであれば、本遺跡の特質から骨組織の遺存は十分考えられるがそれは確認されていない。直刀と高台坏との組合せから、何等かの祭祀が考えられるが、本資料だけではそれを特定することはできない。

#### 1号竪穴建物

3b層（灰白色火山灰）の上面で確認された。発掘区に一部かかっていたのみなので、上面で確認し、掘り下げずに保存しておいた。

#### b. 3b層（灰白色火山灰）下で確認された遺構

##### 3号土坑（第20図2、写真16-6・7）

3b層を除去した面で確認された。3c層上面から掘り込まれている。平面形は直径120cmのほぼ円形を呈し、深さは確認面から37cmを計る。掘り込みは2段掘りになっている。堆積土は焼土、灰層、炭化物を含む層が互層に堆積する人為堆積層である。堆積土は以下の通りである。

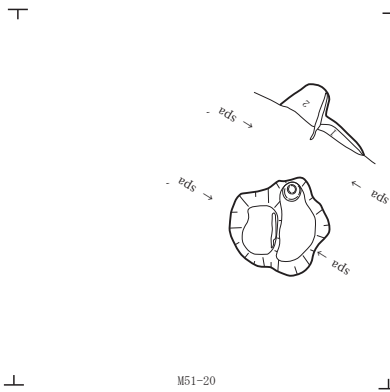
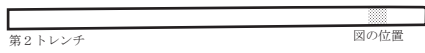
埋土1：7.5YR3/2 黒褐色粘土。粘性強、しまり弱。

埋土2：5YR4/8 赤褐色粘土。粘性強。しまり弱。焼土。上部に灰層がある。平安時代の遺物を含む。

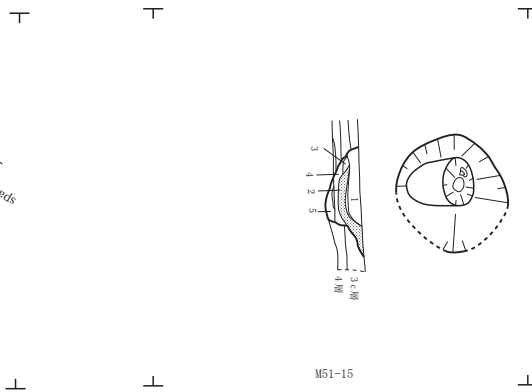
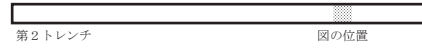
埋土3：黒褐色粘土（炭化物層）

埋土4：7.5TR3/3 暗褐色粘土。粘性強、しまり弱。焼けた貝殻、炭化物、遺物を大量に含む。

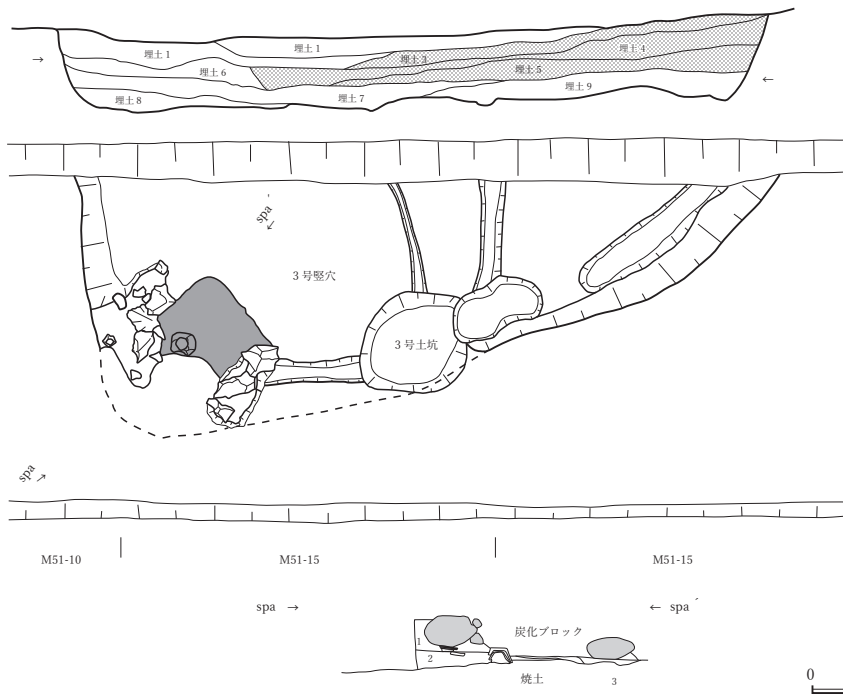
埋土5：7.5YR3/5 暗褐色粘土。粘性強、しまり弱。灰をブロック状に含む。



1. 2号土坑平面図・断面図



2. 3号土坑平面図・断面図



3. 3号竪穴建物平面図・断面図・カマド断面図

### 第20図 2号土坑、3号土坑、3号竪穴建物

埋土1と埋土2の間には純粋な灰層、埋土4と埋土5の間には純粋な炭層がある。

#### [出土遺物]

出土遺物は埋土毎に取り上げたが内容に差はない。ロクロ成形の土師器甕の破片が量的に多く、ついで製塩土器が多い。須恵器は篋切りの坏が3点出土しているのみである。代表的遺物について記述する。

須恵器坏：口径142mm、底径72mm、高さ41mm、内外面ロクロナデ調整、底部回転篋切りである。底面に墨書が認められる。文字は判然としない。

帰属時期：灰白色火山灰の下位で検出されていることから、10世紀前半以前。3号竪穴建物を切っていることから、3号竪穴以後の年代が与えられよう。形態の明らかな須恵器から推定できる年代は9世紀前半である。

### 3号竪穴建物（第20図3、写真16-8、17-1）

3c層上面から掘り込まれている。3号土坑と切り合っており、3号竪穴建物の方が古い。竪穴建物の隅の部分だけ検出されており、主要部分は発掘区外に広がっている。平面形は方形と推定され、一辺の長さは4m以上あろう。掘り込みの深さは約40cm。一部に周溝がある。柱穴は調査区内では確認できなかった。床面には周溝につながる排水用の小さな溝が認められる。覆土の堆積層は9層を数える。そのうち、埋土3、4、5は破碎貝を含んでいる。斜面上方に堆積している縄文時代貝層の再堆積と考えられる。

竪穴建物内堆積土は以下の通りである。

埋土1：7.5YR3/2 暗褐色シルト。粘性、しまり弱。径5mm程度の炭化粒を少し含む。貝は含まない。

埋土2：7.5YR3/3 暗褐色シルト。粘性、しまり中。径2～3mmの凝灰岩粒を少し含む。埋土1よりも明るい。

埋土3：7.5YR4/3 褐色シルト。粘性やや強。しまり弱。破碎貝を含む混貝上層。埋土5よりも貝は少なく、土色は明るい。縄文時代の貝層の再堆積。

埋土4：7.5YR3/3 暗褐色シルト。粘性、しまりやや強。破碎貝を多く含む混貝土層。縄文時代の貝層の再堆積。

埋土5：7.5YR3/4 暗褐色シルト。粘性やや強。しまり弱。埋土4よりもやや明るい。破碎貝を含む混貝上層。縄文時代の貝層の再堆積。

埋土6：7.5YR4/2 褐色シルト。粘性、しまり弱。埋土7よりも明るい。径2～3mmの砂粒と炭化物を中程度含む。

埋土7：7.5YR2/2 黒褐色シルト。粘性、しまり弱。径4～5mmの砂粒を含み、径2～3cmの風化凝灰岩ブロックを少し含む。貝はほとんど含まない。

埋土8：7.5YR4/4 褐色シルト。粘性、しまり弱。貝はほとんど含まない。

埋土9：7.5YR4/4 褐色シルト。粘性、しまり中。径10mm程度の炭化粒を少し含む。

竪穴建物のカマドは北西隅で確認された。煙道は北西の方向に延びている（調査区断面で確認）。カマドのそでには基盤の凝灰岩礫を大量に用いていた。カマド奥壁には破損した土師器片が用いられていた。天井は完全に崩落していた。カマドの支脚には破損した須恵器坏と土師器甕底部を用いていた（写真17-1）。須恵器坏の底面には墨書が認められた。カマド周辺の床面には破損した土師器類が認められた。

#### [出土遺物]

鉄製ヤス（写真19-6）：埋土7出土。長さ68.5mm、先端部長11.0mmである。先端部は片側に三角形に刃部が作り出されている。軸は先端に行くに従いやや外反する。類似した形状のものに鉄鏃があるが、先端が外反することから、同形の物を3ないし数本組み合わせ用いるヤスの可能性を指摘しておきたい。

土師器：ロクロ成形による甕が多数出土している。

須恵器（7）：糸切りの坏が出土している。この須恵器は竪穴建物のカマド支脚として用いられていたものである。底面には墨書が認められ、「高」と推定される。

製塩土器（4、5）：二次焼成を受けた赤色の土器片が大量に出土している。バケツ形の製塩土器の破片である。器形の明らかな2点について記述する。4（埋土7出土）は高さ122mm、底径90mmである。口径は残存部位が少なく推定できないが、口縁に向かってやや開くことから底径よりやや大きい程度の大きさと推定される。器壁厚は目録部で4mm、中央部で7.2mm、底部付近で8.5mm、底部で4mmと底部が薄い。外面は幅30mm前後の輪積み痕を残すほどのラフなナデ調整を行っているにすぎない。底部外面は直径4mm前後の砂粒痕が残る程で調整は全くなされていない。粘土を地面にじかに置いた跡がそのまま残っているようである。それに対して内面は器壁面、底面ともに幅12mm程度の篋状工具によるナデによって整形されている。5（埋土7出土）は高さ91mm、底径85mmである。口径は97mmと推定される。目縁は不規則な波状である。器壁厚は目録部で3mm、中央部で4mm、底部付近で4.5mm、底部で4mmである。4にくらべて薄手である。

帰属時期：層位的所見では10世紀前半に降下した灰白色火山灰（3b層）以前の年代となる。さらに遺構との切り合いから、3号土坑以前の構築である。出土遺物の検討から9世が前半の年代が与えられよう。

### c. 遺構外出土の遺物

第2トレンチからは多量の遺物が出土している。多くは縄文時代晩期中葉の土器である。これらの土器は表土から4層にかけて、全ての層で出土していると言ってよい。本来包含されていたのは4層であるが、それ以外は再堆積と考えられる。遺構以外で一次堆積資料と推定される資料を層別に記述する。

### 3 c 層出土遺物

ウシ (写真 17 - 2、21 - 1 ~ 3)

ウシ (*Bos taurus*) の左下顎骨 (写真 21 - 1)、右距骨 (2)、右橈骨 (3) などが出土している。L51-25、M51-5 区にややまとまって出土し、M51-15 区に2点まとまっている。それぞれ解剖学的位置を離れていることから、解体され放置された可能性が高い。また、橈骨端部にはイヌの噛んだ痕跡もあり、地表面に散乱していたと考えられる。このウシは層位的な所見から、灰白色火山灰降下以前、3号竪穴建物、3号土坑廃絶後の散乱と考えられ、ほぼ10世紀頃と推定される。平安時代の水田遺構ではしばしばウシの足跡が確認されており、農耕用家畜として飼育されていたことがわかっているが、10世紀の宮戸島の集落は主に製塩に従事する人々であったと考えられる。水田耕作の有無は不明である。家畜としてのウシがどのように用いられていたのか、今後注意してゆく必要がある。

14 (M51-5 区出土) は石剣の基部である。最大長 71.6 mm、最大幅 28.6 mm、最大厚 14 mm である。ホルンフェルス製。基部端には剥離痕があり、摩滅している。折れ面は新しく、折れの方向は不明である。

### 3 d 層出土遺物

剣型石製模造品 (写真 21 - 4)

残存長 51 mm、最大幅 18 mm、最大厚 4.6 mm、粘板岩製と推定される。両表面には中央に一本の稜線が形成されるように、斜め横方向から研磨により作り出されている。

管玉 (写真 21 - 5・6)

2点出土している。5はM51-20区、6はM51-10区から出土している。両者とも深緑色をしており、滑石製と推定される。5は最大長 24 mm、直径 7.8 mm、穿孔の一端の直径は 4.3 mm、他端の直径は 3.2 mm である。一端は複数の剥離により欠損しているが、稜線は摩耗している。欠損後も使用されていた可能性がある。管は両側から穿孔されている。6は最大長 2.7 mm、直径 6 mm、穿孔の一端の直径は 2 mm、他端の直径は 2 mm である。両端からの穿孔と推定される。

古式土師器 (写真 21 - 7)

壺が1個体出土している。2片は複合口縁壺の口縁部から頸部までが残存する。1片は頸部から体部までが残存する。口縁部には2本一単位の棒状浮文が貼り付けられているが、何単位巡っていたかは不明である。口縁端部には内面に三角形の粘上紐が貼り付けられる。また頸部と体部の間には突帯が巡らされる。この土器は、その特徴から塩釜式に分類される。特に棒状浮文をもつ壺は、その口縁の形態から、大廓系の壺と考えられる。美里町山前遺跡や名取市鶴巻前遺跡に類例がみられる。この他にも、器台、高坏が出土しており、同時期のものと推定される。

これらの遺物は、遺構外からの出土で古墳時代前期のものでも時間的な幅が推定される。石巻平野や仙台平野沿岸部においても古墳時代前期の遺構、遺物が多く出土しており、鳴瀬川流域地区や沿岸部においても古墳時代前期の遺構や古墳時代の製塩遺構の確認が期待される。

## 4 層出土遺物

縄文土器

縄文土器が集中して出土した場所は第2トレンチには2ヵ所ある。貝層が分布する限界にあたるM51-25区付近までと、J51-25区からK51-25区(第19図)の間である。前者は土器以外にも動物遺存体を包含している。後者は主に土器のみを包含している。前者は捨て場の縁辺部分であり、後者は土器捨て場と考えられよう。

図版 13 - 8 は壺形土器 (L51-20 区出土) である。残存高 95 mm、頸部高 25 mm、口径 67 mm、器壁厚 3.8 mm である。色調は灰黄褐色。口縁部にはやや大きめの突起をはさんで、左右に1対のB突起がある。口縁部内面に1本の沈線(幅

1.2 mm)、口唇部にも1本の沈線(幅1.2 mm)が巡る。頸部は口縁部に向けてやや外反する。内外面共に磨かれている。頸部接合部付近に3本沈線が巡り、その下に幅12 mmの縄文帯を有する。沈線で区画した後、縄文を充填した楕円文(推定6単位)から成る文様帯が胴部上半を廻る。その下に3本沈線を有し、以下縄文である。縄文はLR単節(原体長約19 mm、節長1 mm)を一種類だけ用いている。沈線幅は1.2 mmから1.8 mm、部分的に幅0.8 mmの残沈線が残るところもある。頸部の接合法は胴部に頸部を継ぎ足し、頸部を内面に折り込んで接合している。大洞C2式に属する。9は皿形土器(L51-15区出土)である。口径200 mm、底径120 mm、器高41 mm、器壁厚5.5 mmである。口縁はやや肥厚し、頂部にジグザクの沈線と内外の口縁部に幅2~3 mmの連続した浅い抉りが施されている。頂部の沈線は、本来直線であったものが、この抉りにより結果的にジグザグを呈している。口縁には小突起がある。外面には口縁部下に区画のための沈線が2本巡り、その下に全体のモチーフは判然としないが雲形文が施文されている。雲形文内にはLR単節縄文(原体長不明、節長1 mm)が充填されている。この下は2本の沈線で区画され、底面となる。沈線幅は2.5 mmから3 mmで、部分的に幅0.8 mmの残沈線が残る。内面は口縁下24 mmのところ幅3.6 mmの沈線で区画された、縄文帯がある。縄文はLR単節(原体長不明、節長1 mm)である。縄文帯以外はミガキ調整が行われており、縄文突帯に見える効果がある。内面ミガキは胴部では横方向、底面は放射状である。外面には加熱による可能性が高い表面剥落痕がある。底部外面の外縁が摩耗しているので、使用されたことがわかる。大洞C2式に属する。10~13はJ51-25からK51-15区から出土した土器の一部である。大洞C2式に属する一群の土器である。器種構成は深鉢が多い。器面の保存状態はよくない。10や12は受熱によると推定される表面剥落が認められる。このようなある程度復元できる土器が複数個出土している。

#### 石製品

15(J51-25区出土)は完形の石棒である。最大長327 mm、中央長径24.7 mm、中央短径21.2 mm、先端部長径31.7 mm、先端部短径16.8 mm、基端部長径26.2 mm、基端部短径19.2 mmである。粘板岩製。器体は敲打により整形された後に、研磨調整が行われている。両端部に研磨面を切った頂部からの加撃による剥離痕がある。それらは摩耗していることから、剥離痕形成後も使用されていた可能性が高い。この石棒の出土位置は遺物包含層からも離れた単独出土であることから、使用法を推定する上で重要であろう。

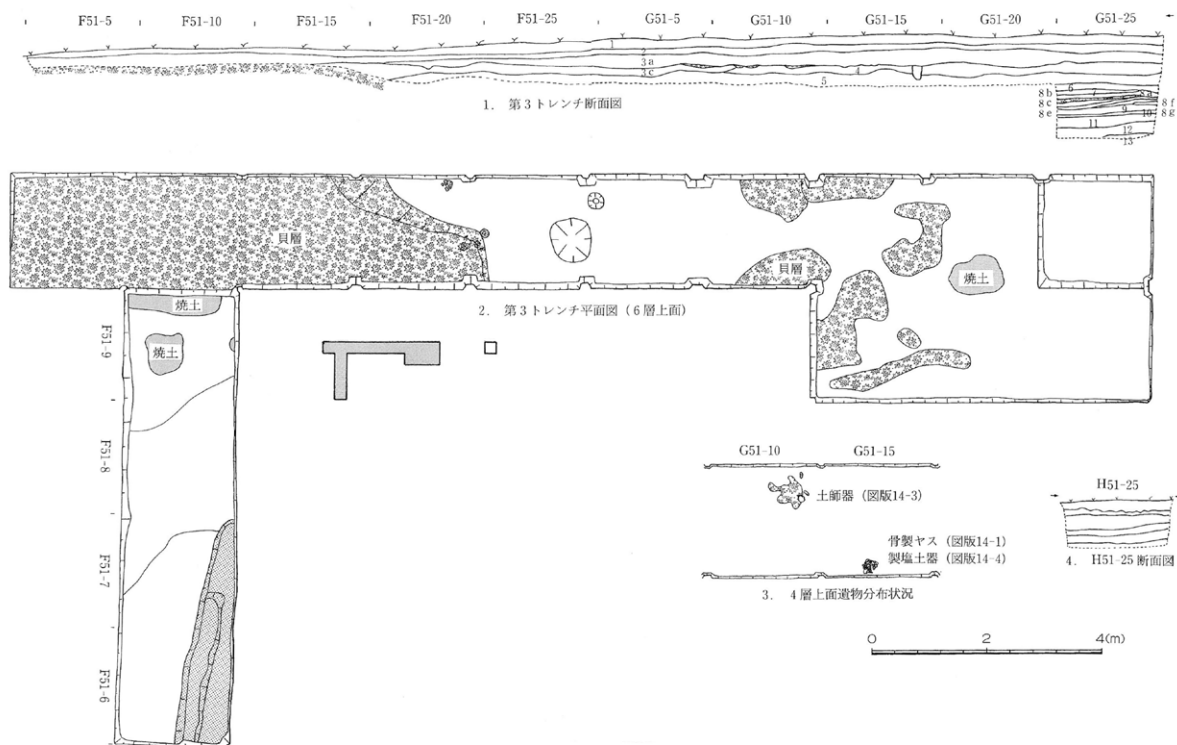
#### 4) 第3トレンチ(第17図)

第3トレンチは地表面に現れていた貝層と製塩遺構の広がりを確認するために設定した。(第21図、写真17-4~6)

##### ① 層序

基本層序は以下の通りである。層名は第2トレンチとは対応しない。層序対比は別項で行う。

- 1層 : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。粘性、しまり弱。耕作土。
- 2層 : 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。粒陸弱。しまりやや弱。
- 3a層 : 10YR4/3 黄褐色シルト。粘性弱。しまりやや弱。径10 mmの赤色凝灰岩粒をわずかに含む。径5 mmの白色土粒を少量含む。
- 3b層 : 灰白色火山灰
- 3c層 : 10YR4/3 黄褐色シルト。粘性、しまり弱。3a層よりごくわずかに明るい。径10 mmの赤色凝灰岩小礫をわずかに含む。
- 4層 : 10YR3/4 暗褐色シルト。粘性やや弱。しまり中。径10~20 mmの赤色凝灰岩小礫を含む。径5~10 mmの白色土粒をやや多く含む。径5 mmの炭化物を少量含む。遺物包含層。
- 5層 : 10YR4/4 褐色シルト。粘性やや弱。しまり中。径10~20 mmの赤色凝灰岩小礫、径5~10 mmの白色土粒をやや多く含む。径5 mmの炭化物をわずかに含む。
- 6層以下の層序はG51-25区(深掘り区 写真17-7)の層序である。
- 6層 : 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト。粘性、しまり中。径10~20 mmの赤色凝灰岩小礫をやや多く含む。径1 mmのガラス質土粒を少し含む。製塩土器多数を包含する。
- 7層 : 10YR3/3 暗褐色粘質シルト。粘性やや強。しまり中。径10~20 mmの赤色凝灰岩小礫をやや多く含む。径10 mmの炭化物を少し含む。製塩土器をきわめて多く含む。
- 8a層 : 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土。粘性やや強。しまりやや弱。径5~20 mmの炭化物をやや多く含む。場所に



第 21 図 第 3 トレンチ平面図・断面図

より炭化物がブロック状に見える部分もある。製塩土器を少量包含する。

8b層：純貝層。粘質シルト、及びシルト質粘土をわずかに含む。貝はイガイを主体とし、カキ、アサリが若干混じる。それらの貝は碎片となっている。製塩土器片、獣骨をわずかに含む。

8c層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土。焼土層。粘性やや強。しまり弱。径5～10mmの炭化物を少量含むがほぼ均質なシルト質粘土である。

8d層：10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。粘性やや強。しまりやや弱。製塩土器をきわめて多く包含する。径1mm程度のガラス質粒子をわずかに含む。

8e層：10YR5/6 黄褐色粘質シルト。灰まじり焼土層。粘性やや強。しまりやや弱。径2～5mmの炭化物をわずかに含む。

8f層：7.5YR3/4 黒褐色シルト質粘土。焼土層。粘性やや強。しまり弱。径2～5mmの炭化物をわずかに含む均質な層。

8g層：10YR4/3 褐色粘土質シルト。焼土層。粘性やや強。しまりやや弱。7.5YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトがブロック状に入り込む。

9層：10YR3/3 黒褐色シルト質粘土。粘性やや強。しまり弱。上部には炭化物ブロックを多く含む。層の中程には10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト（焼土）がまだらに入る。製塩土器を包含する。

10層：10YR4/3 褐色砂質シルト。粘性中。しまりやや弱。径1mm程度の白色止粒を少量含む。遺物をわずかに包含する。

11層：10YR3/2 黒褐色シルト質粘土。粘性やや強。しまり中。径5～10mm程度の凝灰岩小礫を少し含む。遺物をわずかに包含する。

12層：2.5Y4/3 オリーブ褐色砂。粘性弱。しまりやや強。径20～50mmの凝灰岩小礫をわずかに含むがほぼ均質な砂。無遺物層。

13層：2.5Y4/3 黄褐色砂。粘性弱。しまりやや強。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトや7.5YR5/6 明褐色シルトがまだらにはいる。無遺物層。

第3トレンチの北端部には縄文時代晩期（大洞A式）の貝層が広がっている。その下には焼土と灰層が相互に重なりあう製塩の痕跡を示す層が厚く堆積している。縄文晩期の面は南方向、西方向に傾斜しているが、傾斜にそって製塩関

連廃棄層が広がっている。製塩に関連する層の南側の限界は、H51区付近で確認できた。西の限界はトレンチ内では確認できず、水田下にまで広がり、先に東北歴史資料館が調査を行った西畑北地点の製塩遺構とつながる可能性がでてきた。時期的にも西畑北地点と第3トレンチ8、9層の製塩土器が近い時期のものであり、西畑地区で縄文晩期の製塩に用いられた空間がかなり広域であることが推定できる。

## ② 遺構

明瞭な遺構はない。3b層上面で柱穴様のピットが数箇所、6層上面で土坑が1基確認されているにすぎない。

## ③ 出土遺物

### 5層出土遺物

写真22-1(G51-15区)は骨製固定モリである。4の製塩土器に乗るようにして検出された。シカの中手骨を用いている。両端を失っている。左右の同じ位置に1mm程度の逆刺を2対作りだしている。表面は金属器で鋭利に削られている(1c)。表面が黒色に焦げており、火の影響が推定される。2(G51-5区)は土師器鉢である。高さ85mm、口径120mm、底径72mm、器壁厚6.8mmである。胎土には海綿状骨針が認められる。外面はヨコナデによる調整が行われている。内面は弱いヨコミガキがなされている。底部内面は磨かれておらず、指のおさえとナデの痕跡がのこる。底部外面の中央はややくぼんでおり、接地しない。幅10mmほどのドーナツ状に接地面がある。接地面は使用により摩耗している。外面は部分的にアバタ状の表面剥離が認められる。3(G51-10区)は両黒の土師器坏である。器高58mm、口径140mm、底径70mm、器壁厚56mmである。目録部がやや内面に湾曲し、碗に近い形状である。内外面ともにミガキ調整がなされている。底部外面は使用による摩滅が認められる。4(G51-15区)は製塩土器である。器高92mm、口径160mm、底径170mm、器壁厚4.2mm、底部厚5mmである。口縁がやや内育するバケツ形である。外面は積み上げた粘上板を押さえただけの調整である。ただし接合痕はみとめられない。粘上板の幅は約35mm前後である。内面の下半部はハケ目が生じる工具で横方向にナデ調整がなされている。上半部のハケ目痕は消されている。ハケ調整の後にナデが行われたようである。底面も同様のナデが行われ、平滑である。底部外面は粘土が平面に押し付けられ剥されたような状況である。製塩土器の製作は平坦な板上のものの上に粘土をおし広げて底部とし、そこに粘上板を3段ほど積み上げている。粘土が軟らかい段階で、内面はハケ目の残る板状工具(工具幅は約9mm)で掻き削られ、平滑にされ、後にナデ調整がなされている。5(G51-5区)は土師器高坏脚部である。脚は中空で、内面にケズリ痕が認められる。裾は屈曲して開いている。脚の外面は縦方向に磨かれ、裾は内外面ともに横方向に磨かれている。5層から出土する遺物は古墳時代の遺物と奈良時代の遺物の両者である。

### 6層出土遺物

写真22(F51-25区)は偏平片刃石斧である。残存長43mm、最大幅35.6mm、最大厚14mmである。出土層位は貝層上面である。この場所は貝層が発達し、G51-25区などに比べると、かなり高い。よって、6層が貝層に相当すると推定される。この偏平片刃石斧は写真6aの面に刃部作出研磨痕が明瞭である。弥生時代のもので推定できる。6層以下を掘り下げたのはG51-25区だけである。以下の遺物はそのグリッドから出土したものである。7は柵形囲式の蓋である。口径130mm、器壁厚4.5mmである。沈線で区画された帯状の文様が施文されている。沈線の幅は約1mm、粘土未乾燥状態で引かれている。その間はLR縄文(節長0.6mm)が充填されている。無文部分は磨かれている。内面には口縁部に沈線が1本(幅1mm)巡り、他はミガキ調整がなされている。8は柵形囲式の蓋の頂部である。頂部径80mm、器壁厚7mmである。沈線の幅は12mmである。沈線間の間隔約5mmの部分では無文帯を交互に磨いている。沈線間の間隔約10mmの部分ではその間を連弧文で埋めてある。無文部分の連弧文の内側はミガキ、外側はナデを行っている。ミガキとナデのコントラストで文様を際だたせている。底部外面にはLR縄文(節長1.5mm)が施文されている。9は柵形囲式の蓋である。口径220mm、器壁厚6.8mmである。文様は口縁部下に沈線が2本、その下に3本1単位として山形の文様が交互に施文されている。沈線の幅は約1mm、無文部分は沈線施文後に磨かれている。内面の口縁から5mmのところに幅0.6mmの沈線が巡っている。他は磨かれている。また内面の目録から20mmの範囲に炭化物が付着している。10は大洞C2式の深鉢と推定される。口径180mm、器壁厚5mmである。口縁部には大きめのB突起が推定4つある。口

唇部には斜めに断面U字形のキザミがはいる。その下には幅3.2mm前後の沈線が5条巡る。沈線下に粘土粒を張り付け、幅3.7mm、長さ10mmの沈線を引いた瘤が推定8つ装飾される。その下はLR単節縄文（節長2mm）が施文される。内面には口縁部下に幅3.3mmの沈線が巡る。器体表面は赤褐色を呈し、内面は口縁部下43mmから黒色の炭化物が付着している。11～16は尖底の製塩土器である。

6層出土遺物の多くは弥生時代榊形冢式期に属する。1個体（10）のみがより古い時期のものである。よって、これらの土器に伴う尖底の製塩土器は弥生時代榊形冢式期のものである可能性が大きいといえる。

### 7層出土遺物

写真22-17は大洞A式の台坏鉢脚部である。18は鉢口縁部である。19は大洞C2式鉢口縁部である。20は刷毛目文の深鉢、21・22は同一個体の可能性がある無文の深鉢である。13から25は尖底の製塩土器である。

### 8d層出土遺物

写真23-1は大洞C2式の鉢である。2は壺の体部破片である。3～8は底先端に平坦面がある製塩土器である。

### 9層出土遺物

写真23-9・11・12は尖底の製塩土器である。10は底に平坦面がある製塩土器である。

以上の層位的出土状況からそれぞれの層の時期を推定すると、5層は古墳時代から奈良時代、6層は弥生時代榊形冢式期、7層は大洞A式期、8d層は大洞C2式期、9層は大洞C2式期かそれ以前となる。

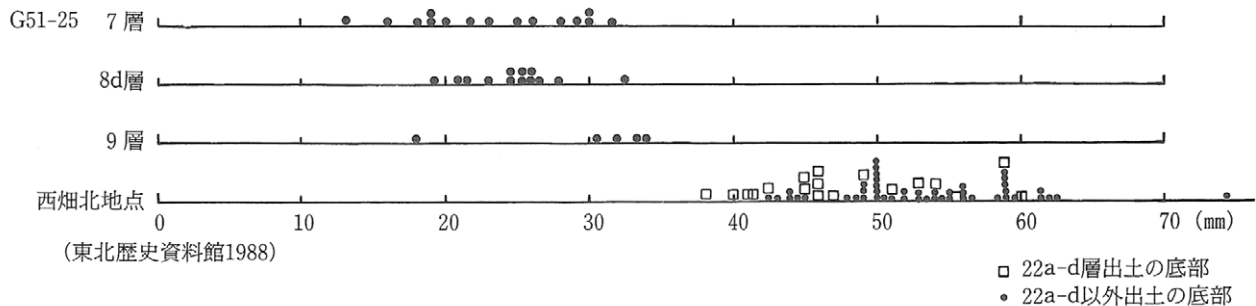
### G51-25区出土の製塩土器

G51-25区では無遺物層の13層まで掘り下げることで縄文時代晩期大洞C2式から弥生時代までの製塩土器を層位的に把握することができた（第5表）。ここでは6層（弥生時代榊形冢式）、7層（縄文晩期大洞A式）、8d層（大洞C2式）、9層（大洞C2式）出土の製塩土器底部の特徴を検討したい。対象とする製塩土器底部資料は6層18点、7層130点、8d層15点、9層9点である。7層が特に多い。底部の形状を検討すると尖底と平底に大別できる。9層では尖底3点、平底6点、8d層では尖底1点、平底14点、7層では尖底114点、平底16点、6層では尖底18点、平底0点である。8d層から7層に変わるのに伴い、尖底が多くなっている。尖底の中でも尖底をケズリで調整するもの（写真23-13・14）と、ナデで調整するもの（18・19）がある。その量的な変化は9層はケズリ2点、ナデ1点、8層はナデ1点、7層はケズリ81点、ナデ33点、6層はケズリ4点、ナデ14点である。ケズリによる調整は7層で多くなり、6層では逆転する。

第5表 G51-25区層別製塩土器出土状況

	N	尖底	平底	二重底	尖底部調整ケズリ	ナデ
6層	18	18	0	14	4	14
7層	130	114	16	52	81	33
8d層	15	1	14	3	0	1
9層	9	3	6	0	2	1

製塩土器の底部には独特の特徴が認められるものがある。それは、粘上板を2枚貼り合わせて底部を作るものである（15～17、20～22）。尖底の製塩土器の作り方には古くは角田（1936）の指摘がある。「扇形の粘上板で尖底を作る」とある。これらの資料は2枚の扇形の粘上板を重ねて底部を作ったことを示している。さらに底部が尖底では、土器を



第22図 G51-25区と西畑北地点の平底製塩土器底部直径

立てて粘土を積むことができないので、小さな平坦な底部を作り、目縁まで粘土を積み上げ、最終的に口縁を下にして、つまみとナデにより尖底部を作りだしている。さらにその後ケズリ調整を行うものもある。よって、7層から6層へのケズリ調整の減少は、工程の手抜きが多くなったといえることができる。

9、8d、7層からは平底の製塩土器が出土している。この底部直径を計測し、東北歴史資料館の調査した西畑北地点の平底製塩土器と比較してみた（第22図）。その結果大洞C2式に伴う西畑北地点の製塩土器の底部直径は40mmから60mmに集中しているのに対し、9層は30mmから40mm、8d層は20mmから30mm、7層は13mmから30mm付近に集中していることがわかる。徐々に底径が小さくなり、漸移的に尖底形へ変化している有様が見て取れる。8d、7層の平底直径は20から30mmであることから、ほとんど平底としての意味をなさない大きさである。先ほどの底部製作工程を考えれば、ナデ、ケズリ残しともとれるものである。このような底部形態の変化は、製塩方法の変化をも喚起したものと考えられる。西畑北地点で検出されたとは異なる製塩炉の存在も考えなくてはならない。また、6層から弥生時代柵形囲式土器が検出されていることから、共伴する製塩土器は同時期のものと推定できる。弥生時代の製塩土器には尖底と平底の両者が報告されているが（加藤 1995）、ここでは尖底のみのようである。

#### 4) 平成8年度（第1次調査）のまとめ

##### ① 層の対比

西畑地区のトレンチではそれぞれ層名を付けたが、大局的には層の対比を行うことができる。信頼度の高いのは灰白色火山灰土である。第2、3トレンチの3b層がそれである。第1トレンチセクションでは灰白色火山灰は明確には確認できなかったが、部分的に残っている所もある。第1トレンチの2層と3a層の間に位置するようである。よって、第1トレンチの3a層以下は第2トレンチの3c層以下に対応すると考えられる。また、5層は遺物を若干含む土層に近く、第2トレンチ5層に対比されよう。第1トレンチは3b層が分布するL52-5～25区に縄文時代の遺物包含層（部分的に貝層を含む）が広がっているといえる。第2トレンチは3c層が平安時代の遺物包含層、3d層が古墳時代の遺物包含層、4層が縄文時代の遺物包含層である。ただし、3c層、3d層は部分的に形成された層で、第3トレンチまで直接的につながらない。出土遺物を勘案すると第3トレンチ3c、4、5層が第2トレンチ3c、3d層に対応する。G51-25区では6層から12層までが第2トレンチの4層に対応する。旧地形を推定するとF51-5区よりもG51-25区付近が低くなっていたようである。よってそこに製塩に関連する厚い廃棄層が形成されたと言ってよさそう。

##### ② 第1トレンチ

大洞C2式期の貝層分布の末端が確認できた。貝層の外側に貝や獣骨を含まない、いわゆる遺物包含層が広がること明らかになった。L52-25から5区に広がる遺物包含層は丘陵部が3方を取り囲み、北西方向に開く谷地形の北端の部分である。この谷地形を埋めるような形で廃棄場としての貝塚が形成されたようである。この部分の廃棄方向は東から西方向への傾斜を利用している。今回の調査では廃棄層の最上面でその広がりを確認したが、形成期間を知るためには一部でも完掘する必要がある。これは今後の課題である。

##### ③ 第2トレンチ

3b層（灰白色火山灰）の上下から平安時代の遺構を確認することができた。さらにこれまで里浜貝塚では知られていなかった古墳時代前期（塩釜式）の遺物を確認することができた。

M51-10区まで広がる大洞C2式からA式の貝層の末端部が明らかになった。さらに貝層端部の外側（L51-15区付近まで）には貝を含まない獣骨含みの遺物包含層がひろがることがわかった。また、J51-5、K51-25～15区に貝層を伴わない土器包含層があることがわかった。廃棄場の斜面下の状況が明らかになったので、今後廃棄場の上の平坦面にある廃棄位置の確認が必要であろう。

##### ④ 第3トレンチ

大洞C2式、A式、弥生時代柵形囲式の各時期の製塩土器が明らかになり、その変遷を層位的に確認できた。さらに、製塩遺構に伴うとされる貝層がマウンド状に形成されている姿が明らかになった。今次の発掘では製塩遺構そのものが明らかにできなかったため、尖底の製塩土器の製塩遺構を検出することが今後の課題である。



1. 第1トレンチ全景



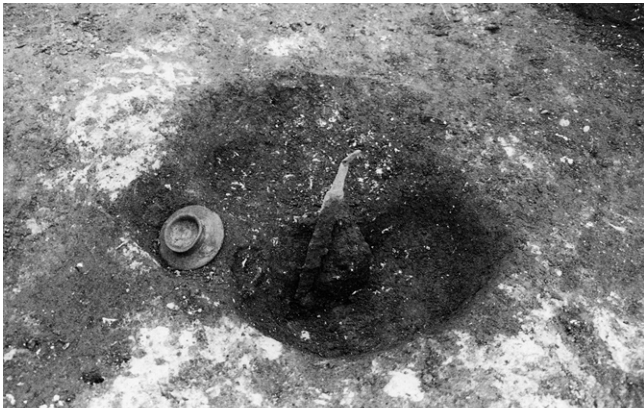
2. 第1トレンチ (L52-25区) 貝層ブロック検出状況



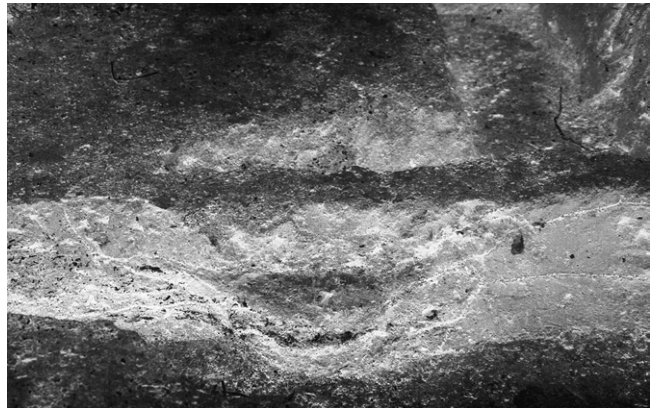
3. 第2トレンチ全景



4. 第2トレンチ 2号土坑半截状況



5. 第2トレンチ 2号土坑完掘状況



6. 第2トレンチ 3号土坑セクション

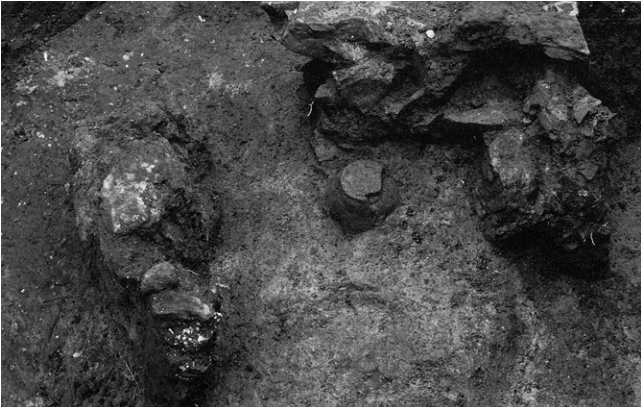


7. 第2トレンチ 3号土坑完掘状況



8. 第2トレンチ 3号竖穴建物完掘状況

写真16 西畑地点 (第1次調査) (1)



1. 第2トレンチ 3号竖穴建物カマド完掘状況



2. 第2トレンチ 3c上面 (M51-25区) の散乱獣骨 (ウマ)



3. 第2トレンチ 石棒 (J51-25区4層) 検出状況



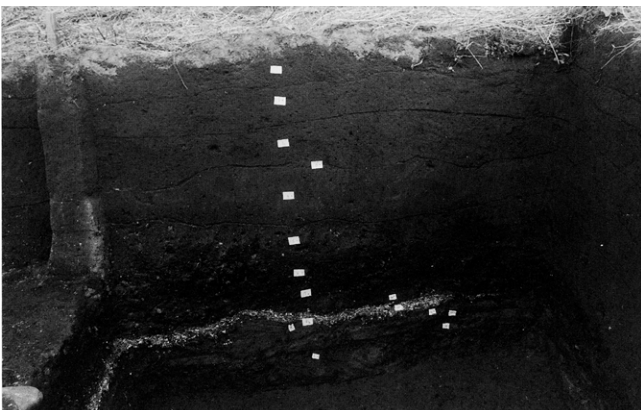
4. 第3トレンチ全景



5. 第3トレンチ全景



6. 第3トレンチ 6層貝層ブロック検出状況



7. 第3トレンチ G51-25区深掘りセクション

写真17 西畑地点 (第1次調査) (2)



彩文皿形土器 (L52-10区 3a層出土)

写真 18 西畑地点 (第 1 次調査) 出土彩文皿型土器 (L52-10 区 3a 層)

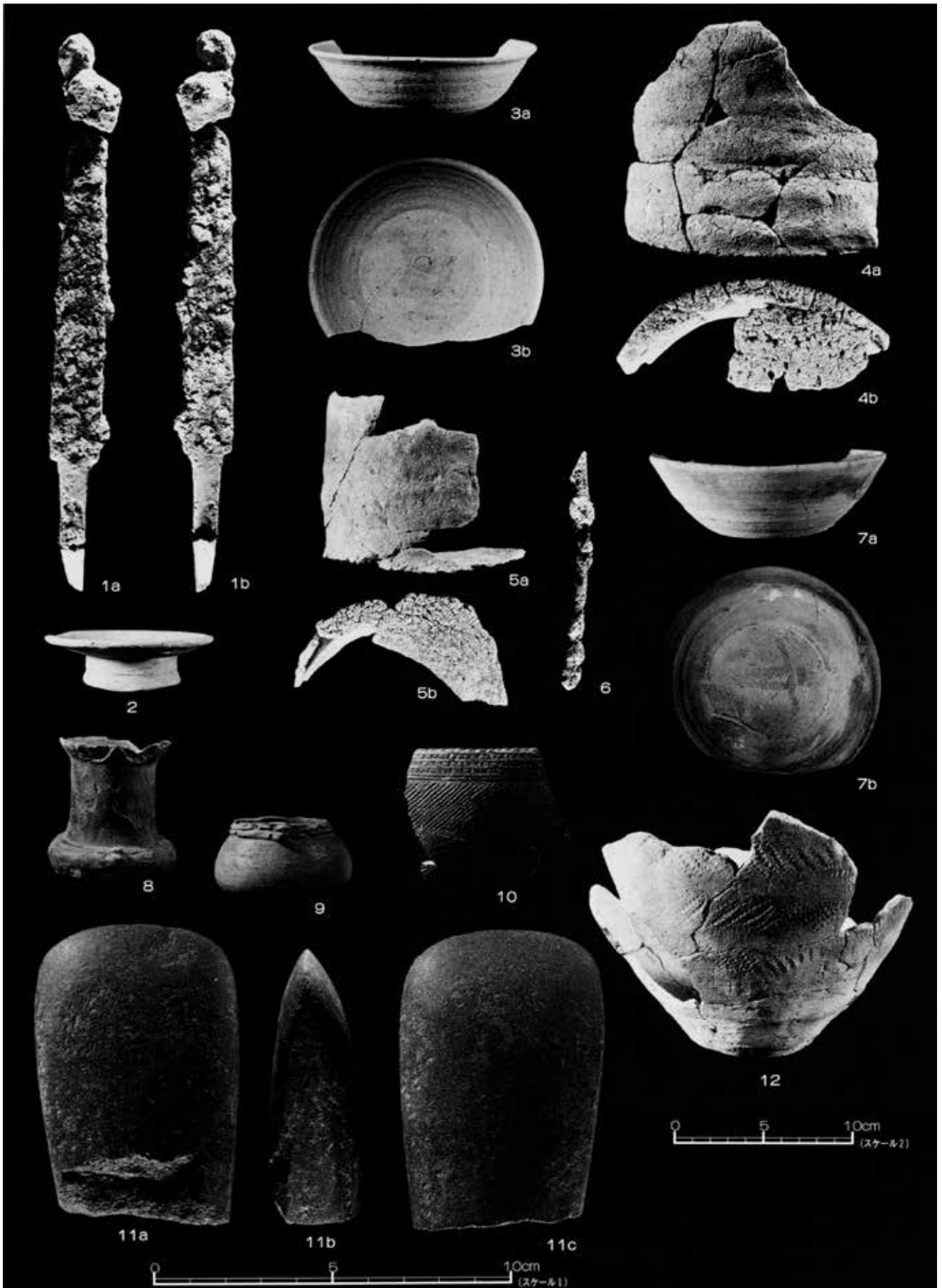


写真 19 西畑・里 HSO 遺構出土遺物

1：西畑地点第2トレンチ2号土坑出土鉄刀 2：2号土坑出土高台杯 3：西畑地点第2トレンチ3号土坑出土須恵器杯（墨書） 4、5：西畑地点第2トレンチ3号竪穴建物出土製塩土器 6：3号竪穴建物出土鉄製ヤス 7：3号竪穴建物出土須恵器杯（墨書） 8、9：HSO地点4号土坑出土縄文土器 10：HSO地点8号土坑出土縄文土器 11：HSO地点1号土坑（1号人骨埋葬土骨）出土磨製石斧 12：HSO地点2号土坑出土縄文土器  
 1, 6, 11 はスケール1。他はスケール2。

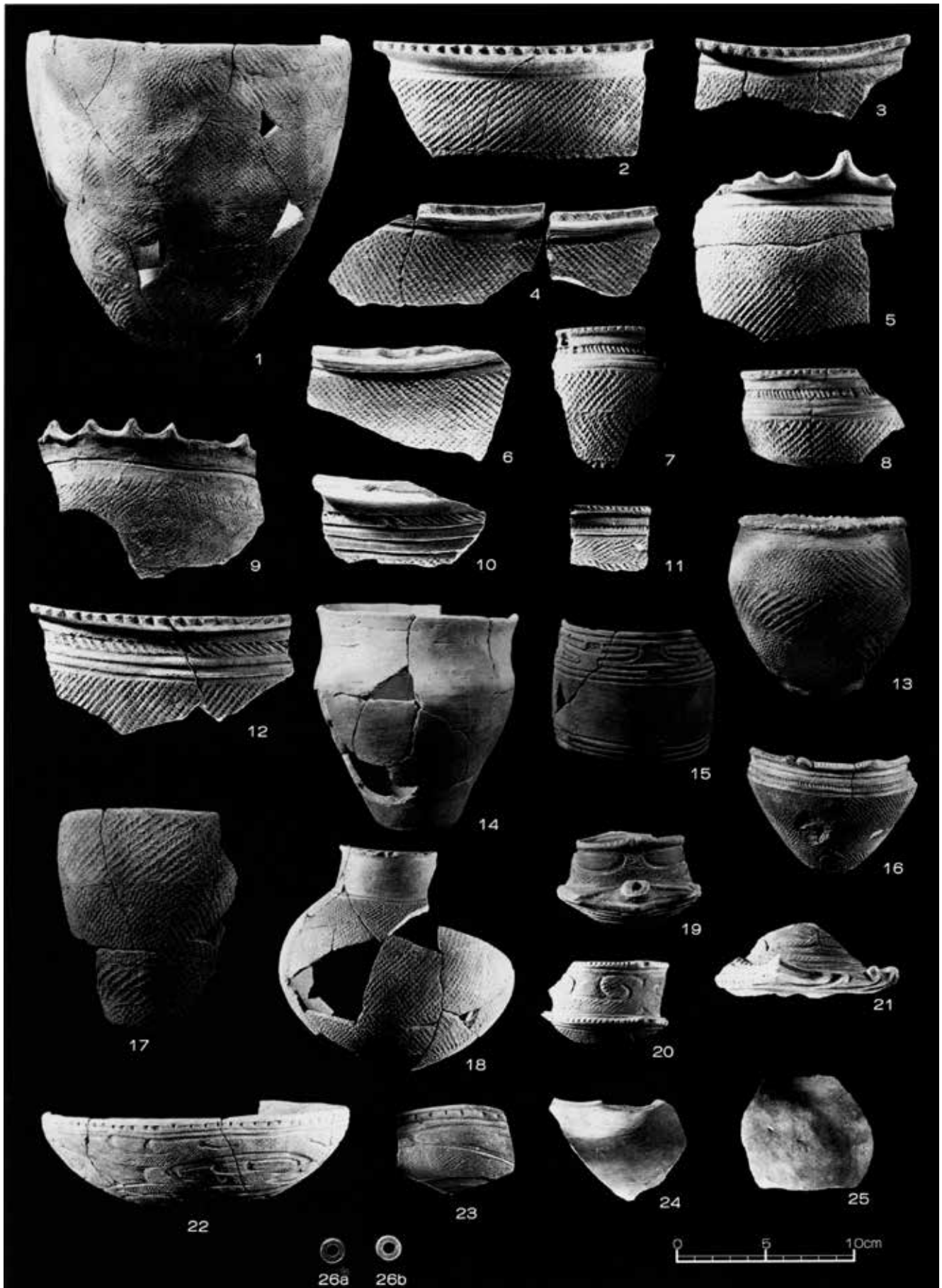


写真 20 西畑地点第 1 トレンチ出土遺物 (26 は写真 19 のスケール 1)

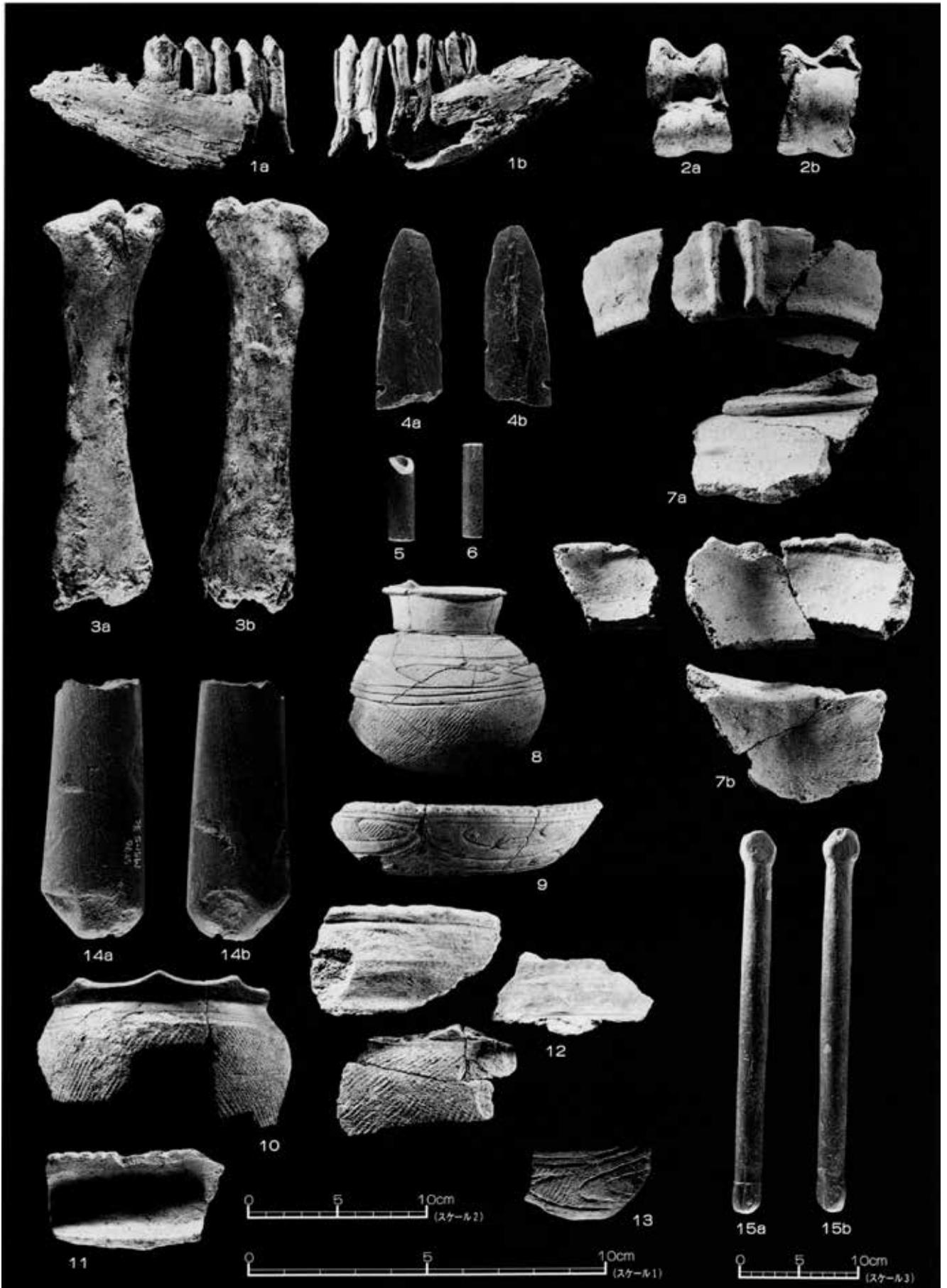


写真 21 西畑地点第2トレンチ出土遺物

1: ウシ下顎骨 2: ウシ右距骨 3: ウシ右橈骨 4: 剣形石製模造品 5・6: 管玉 7: 古式土師器壺形土器 8~13: 縄文土器 14: 石剣 15: 石棒  
1~3: 3c層上面出土 4~7: 3d層出土 8~15: 4層出土  
4・5・14はスケール1。 15はスケール3。 他はスケール2。

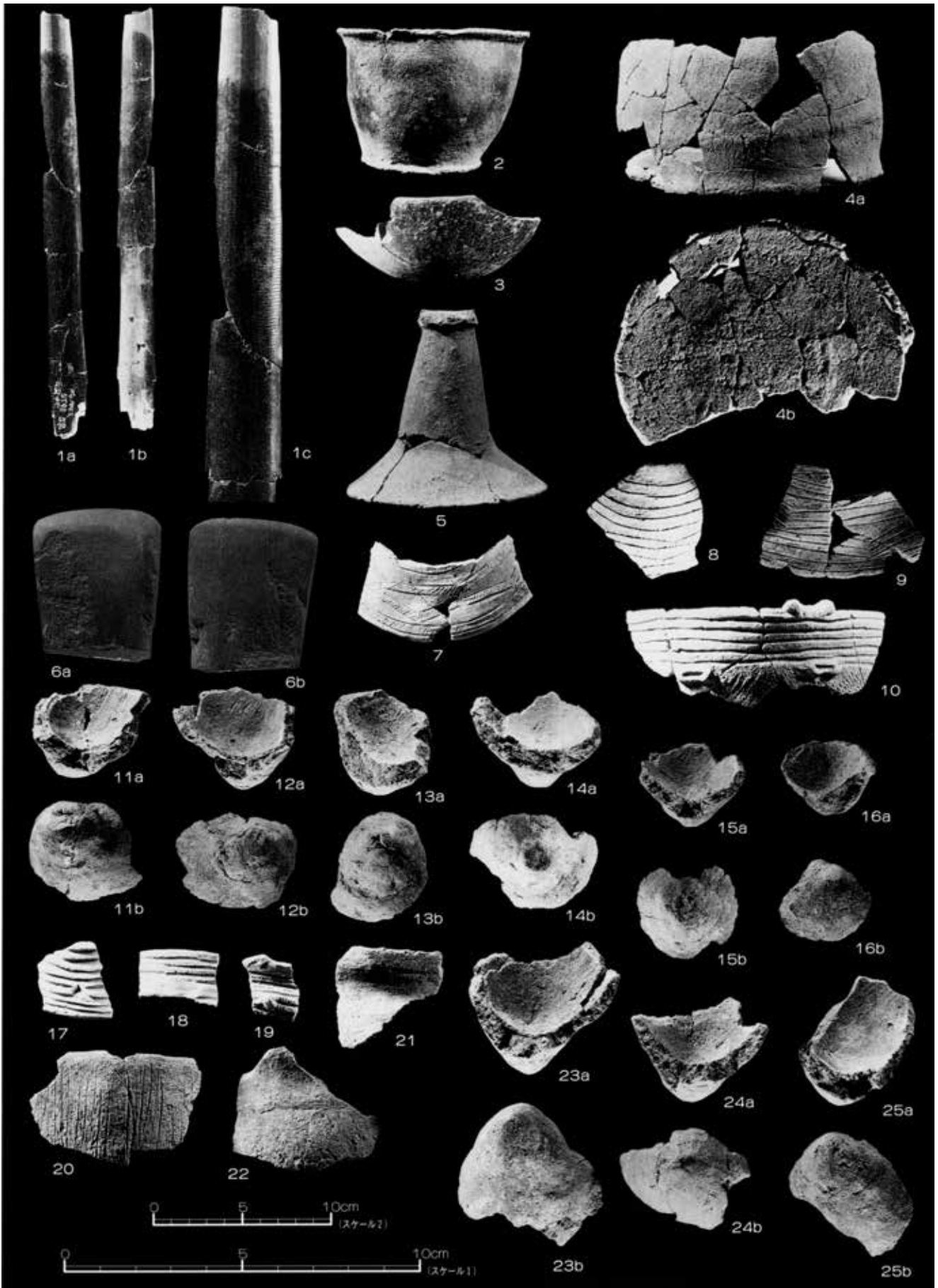


写真 22 西畑地点第3トレンチ出土遺物(1)

1: 骨製固定モリ 2: 土師器鉢 3: 土師器両黒杯 4: 製塩土器 5: 土師器高杯 6: 偏平片刃石斧 7~9: 弥生土器(樹形囲式) 10: 縄文土器(大洞C2式) 11~16: 製塩土器 17~18: 縄文土器(大洞A式) 19: 縄文土器(大洞C2式) 20: 縄文土器 21~25: 製塩土器 1~5: 5層出土 6: 貝層上面4層出土 7~16: 6層出土 17~25: 7層出土 1・6はスケール1。他はスケール2

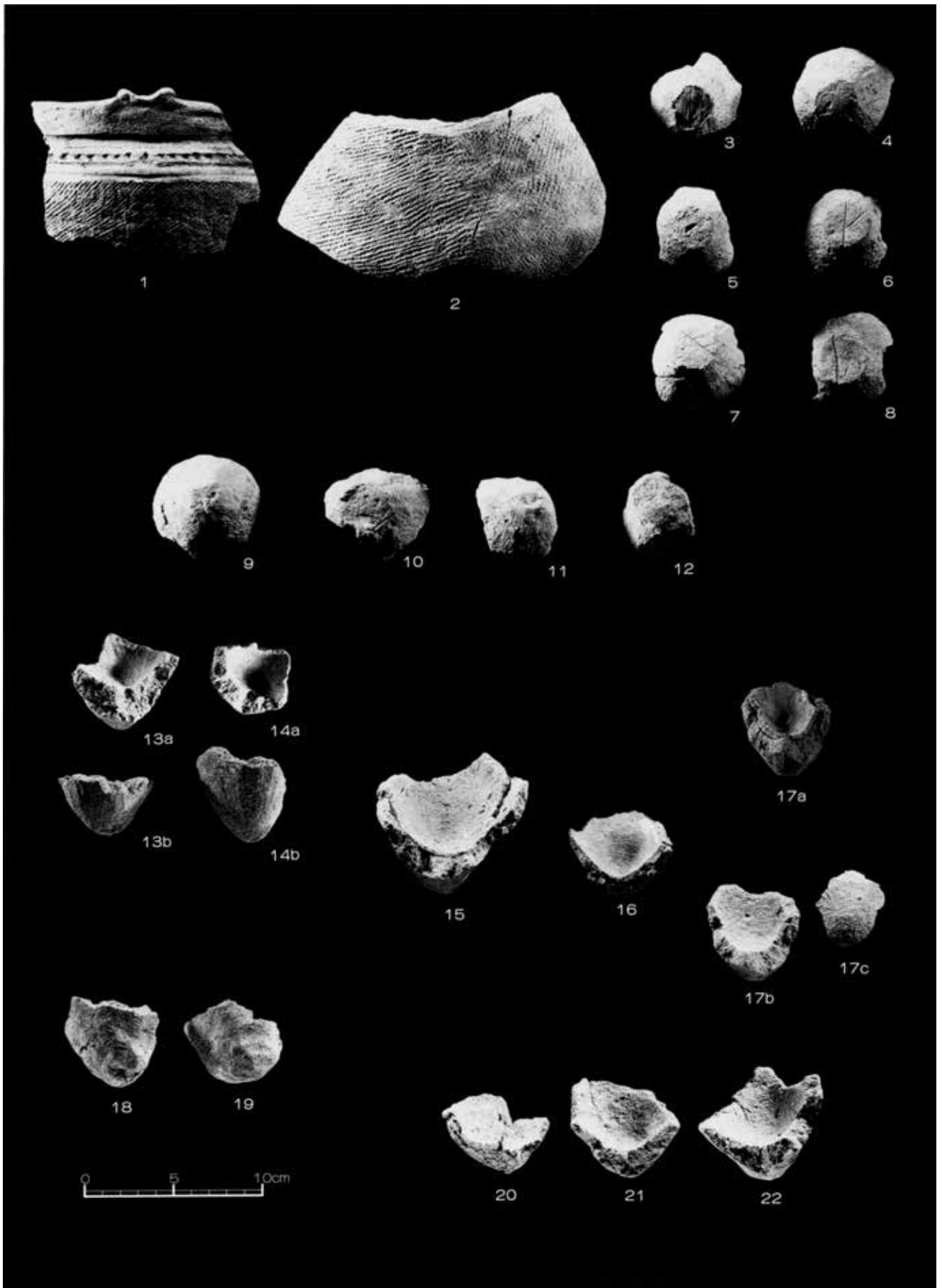


写真 23 西畑地点第3トレンチ出土遺物(2)

1・2：縄文土器（大洞C2式） 3～22：製塩土器 1～8：8d層出土 9～12：9層出土製塩土器の調整技術 13・14：外面ケズリ調整 18・19：外面ナデ調整  
15・16：底部二重底 17：二重底の剥離例 20～22：二重底剥離後資料

## (2) 平成9年度調査〈第3次調査〉

### 1) 北区 (第17、23図)

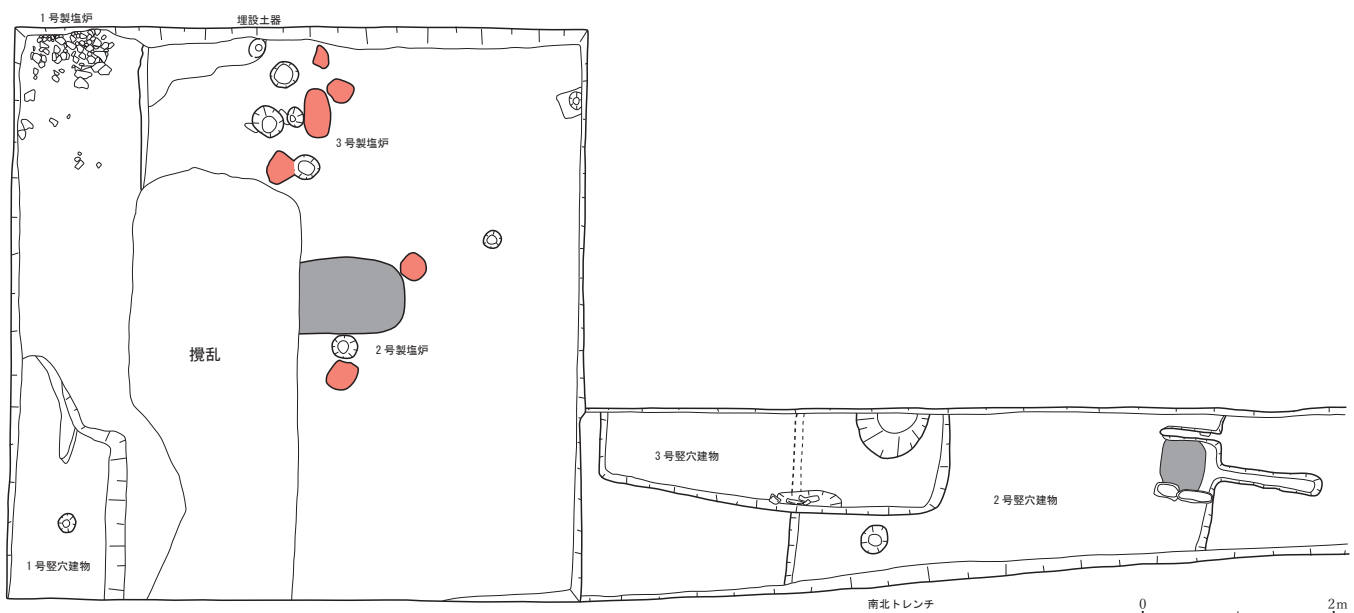
昨年の調査により、北区には縄文時代晩期から弥生時代にかけての製塩遺構及び廃棄層が広がっていることが明らかになっていた (第23図、写真24)。廃棄層は廃棄ブロックの堆積であり、中には貝層、動物遺存体も含まれていることから、東北歴史資料館が里浜貝塚調査で実践してきた、微細層位発掘法と悉皆採集法を採用することにした。調査により採取された土層はその都度奥松島縄文村歴史資料館に運び込み、約2mm目のザルにより水洗選別をおこなった。さらに細かい遺物については1mm目による選別も実験的に行ったが、砂粒が多く残り、選別作業によっても微細遺物の検出がほとんどできなかったことから、採用しなかった。

#### ① 層序

1層を耕作土、2層を全域に広がる層として、3層から微細層位名をつけた。このうち6、10層は1号竪穴建物の覆土とわかり、堆積の連続から除外される。層の傾斜は東から西へ認められる、現地形から判断しても、この傾斜は自然地形に起因するものである。表土除去後、縞状の層の広がり確認できたので、西側から順次層を剥いていった。

層の様相は発掘調査時の所見で、純貝層、混土貝層、混貝土層、土層、灰層、土器層を識別している。水洗をすると土層であっても貝や灰が入っていることがわかった。選別作業が未了なので、層の内容について詳論することはできない。これらの層の中で、製塩炉と判断した、103層 (1号製塩炉)、74層 (2号製塩炉)、93層 (3号製塩炉) からは共通して著しい製塩土器が検出されている。他の層は基本的に貝層、灰層、土層と識別できる。これらの層の中で95～98層の灰層は厚さ4～5cmの硬い面である貼り付けている可能性もある。このような灰を固めたブロックは練り物として、製塩炉の脇に据えられているものや、土層、灰層中にブロックとして存在するものもある。これら以外の層は基本的に製塩作業に係わる廃棄層と考えられる。貝層の貝種はマガキ、アサリ、イガイ、オオノガイ、オニアサリなどがある。レイシ、クボガイなどの巻貝、さらに微小貝類も含まれ、中には被熱しているものもある。貝層は他にわずかの魚骨と獣骨が稀に含まれる。製塩土器以外の土器も含まれる層がある。甕、深鉢、鉢、台付鉢などであるが、量的には少ない。石器、土製品はほとんどなく白玉、凹石が各1点出土しているにすぎない。この点で、北区の堆積層は集落縁辺部に形成される生活廃棄場としての貝層とは様相を異にしている。かつて東北歴史資料館が調査した西畑北区 (東歴 1988) の製塩廃棄層の土器組成と較べると、製塩土器以外の縄文土器が多いという特徴が指摘できる。

貝層、灰層、土層は一連の製塩廃棄層と考えられる。それらが製塩作業のどのような段階に対応するのかは今後の検討課題である。3基確認された製塩炉と廃棄層の関係は層の連続と出土土器の型式、接合によって検討が可能である。1号製塩炉は弥生時代寺下囲式、2、3号製塩炉は縄文晩期大洞A式の土器を共伴しており、その時期のものと考えられる。発掘区内の層名では8、49、62、64、72、83層から弥生土器が肝としているが全体に希薄である (表6)。ただし、1号竪穴建物の覆土から寺下囲式が出土していることから、製塩炉の西側に廃棄層が形成されていたことが推定



第23図 西畑地点北区・南北トレンチ遺構配置図

第6表 西畑地点北区層序観察表と製塩土器底部出土状況

層名	層の種類	土質	土色	体積(ℓ)	土器型式	遺構	製塩土器底部						
							丸底	尖底	尖平底	平底無文	平底木葉痕	平底アンペラ	底部合計
1													
2													
3	混土貝層	砂質シルト	暗褐色	60				4		3			7
4	混土貝層	砂質シルト	黒褐色	50									
5	混土貝層	砂質シルト	暗褐色	340				7			1		8
6	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	240	榊形罎		2			3	10	1	16
7	混貝土層	砂質シルト	褐色	120				11		2			13
8	混貝土層	砂質シルト	褐色	90	榊形罎		1	1		4	6	1	13
9	混貝土層	砂質シルト	褐色	40				5			1		6
10	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	20						1	1		2
11	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	10									
12	混貝土層	砂質シルト	褐色	161	大洞A								
13	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	58				3		1	1		5
14	土層	砂質シルト	褐色	110	大洞A					1			1
15	土層	砂質シルト	暗褐色	60	大洞A			8				0	8
16	土層	砂質シルト	にぶい褐色	60				10	1	1			12
17	土層	砂質シルト	褐色	120	大洞C2			10		1			11
18	土層	砂質シルト	暗褐色	20				2		1			3
19	土・灰層	砂質シルト	にぶい黄褐色	2									
20	土・灰層	砂質シルト	にぶい黄橙色	4									
21	土層	砂質シルト	褐色	60				3					3
22	土層	砂質シルト	褐色	18									
23	土層	砂質シルト	灰黄褐色褐色	6									
24	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	30									
25	混土貝層	砂質シルト	暗褐色					6					6
26	土層	砂質シルト	褐色	20									
27	土・灰層	砂質シルト	褐色	20				3					3
28	土・灰層	砂質シルト	にぶい橙色	28				1	1				2
29	土層	砂質シルト	にぶい褐色	30				1					1
30	土・灰層	砂質シルト	褐色	10	大洞A			6					6
31	土層	砂質シルト	暗褐色	34									
32	土層	砂質シルト	褐色	10				5					5
33	土層	砂	にぶい黄橙色	6				1					1
34	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	25	大洞A・C2			3					3
35	土・灰層	砂質シルト	灰黄褐色	5				2					2
36	土層	砂質シルト	暗褐色	6									
37	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	15			2				1	1	4
38	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	20									4
39	土層	砂質シルト	灰黄褐色	70				5	1				6
40	土・灰層	砂質シルト	にぶい黄橙色	23									
41	土層	砂質シルト	黒褐色	40	大洞A		1	13					14
42	土・灰層	砂質シルト	明褐灰色	20				1					1
43	土層	砂質シルト	褐色	13			1	2					3
44	土層	砂質シルト	にぶい黄褐色	20									
45	土層	砂質シルト	明褐色	18									
46	混貝土層	砂質シルト	褐色	20									
47	土層	砂質シルト	明褐色	25									
48	土層	砂質シルト	褐色	28			2	3					5
49	土層	砂質シルト	褐色	100	榊形罎、土師器			6	1	1			8
50	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	20					1				1
51	混土貝層	砂質シルト	黒褐色	30	大洞A			1		1			2
52	土・灰層	砂質シルト	灰褐色	28									
53	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	25								1	1
54	土層	砂質シルト	暗赤褐色	10									
55	土層	砂質シルト	極暗褐色	18				1					1

層名	層の種類	土質	土色	体積(ℓ)	土器型式	遺構	製塩土器底部						
							丸底	尖底	尖平底	平底 無文	平底 木葉痕	平底ア ンペラ	底部 合計
56	土層	砂質シルト	黒褐色	20	大洞 A								
57	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	30						1	2	3	
58	混土貝層	砂質シルト	黒褐色	15							1	1	
59	土層	砂質シルト	黒褐色	7	大洞 A								
60	土層	砂質シルト	黒褐色	8			1	2				3	
61	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	15									
62	混土貝層	砂質シルト	黒褐色	120	天王山他		1	2		3	3	12	
63	混貝土層	砂質シルト	褐色	28			2				1	3	
64	混貝土層	砂質シルト	褐色	43	楯形囲		2	1			1	4	
65	混土貝層	砂質シルト	暗褐色	38				4				4	
66	混貝土層	砂質シルト	褐色	38				1	1			2	
67	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	45				4				4	
68	土層	砂質シルト	暗褐色	14									
69	土層	砂質シルト	黒褐色	14									
70	混貝土層	砂質シルト	褐色	60				7	1	2	2	3	15
71	貝層	砂質シルト	極暗褐色	90			1	5			1		7
72	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	20	寺下囲			5					5
73	混貝土層	砂質シルト	褐色	74			2	5		3	1		11
74	土層・土器	砂質シルト	赤褐色	100	大洞 A	2号製塩炉	2	49	2			1	54
75	土層	砂質シルト	褐色	15				1			1		2
76	土層	砂質シルト	褐色	13				1					1
77	土層	砂質シルト	暗褐色	12	大洞 A			5					5
78	土層・練物	砂質シルト	灰黄褐色	26				3					3
79	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	40	大洞 A			7	1	1	1		10
80	貝層	砂質シルト	黒褐色	13							1		1
81	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	60	大洞 A		1	4			5		10
82	土層	砂質シルト	褐色	20	大洞 A								
83	混貝土層	砂質シルト	黒褐色	28	楯形囲・大洞A			3			3		6
84	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	30				1					1
85	土層	砂質シルト	褐色	12				6					6
86	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	30				6					6
87	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	16			1						1
88	貝層	砂質シルト	黒褐色	15							1	1	2
89	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	13									
90	土層	砂質シルト	灰褐色	38				1			1		2
91	混貝土層	砂質シルト	暗褐色	3				1					1
92	混土貝層	砂質シルト	にぶい黄褐色	8				2					2
93	土層	砂質シルト	暗赤褐色	40	大洞 A	3号製塩炉	3	5	1	1			10
94	土層	砂質シルト	黒褐色	8					1				1
95	土・灰層	砂質シルト	にぶい褐色	60				8					8
96	土・灰層	砂質シルト	橙色	60	大洞 A								
97	土・灰混土	砂質シルト	褐色	20							1		1
98	土・灰層	砂質シルト	褐色	50				1					1
99	土・灰層	砂質シルト	暗褐色	20				1		1			2
100	土・灰層	砂質シルト	黄橙色	80				3					3
101	土・灰混土	砂質シルト	にぶい褐色	60									
102	土層	砂質シルト	明褐色	70							1		1
103	土層・土器	砂質シルト	褐色	10	寺下囲	1号製塩炉		5					5
104	土層・土器	砂質シルト	明褐色	10				2					2
105	土・灰層	砂質シルト	橙色	10				2					2
106	土層・土器	砂質シルト	暗黄褐色	20				5					5
107	土・焼土	砂質シルト	暗褐色	20									
108	土・灰層	砂質シルト	橙色										
合計							25	312	13	32	46	15	443

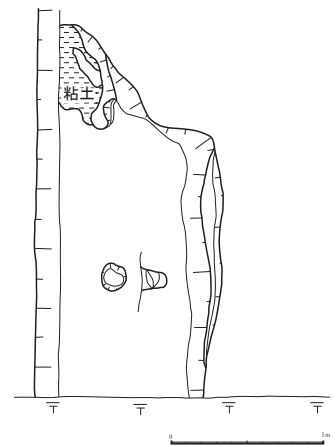
される。2号製塩炉と3号製塩炉との新旧関係は直接的な上下関係はない。しかし、遺物番号392と421の土器が3号製塩炉（93層）及びそれを覆う層から検出され、95層出土の土器と接合し、95層土層の傾斜を加味すれば2号製塩炉（74層）の下位に位置するといえる。よって、3号製塩炉の廃棄層の上に2号製塩炉が作られ、それは新旧を現すと言える。これら3基の製塩炉の同時操業はなかった。

## ② 遺構

### 1号竪穴建物（第24図、写真25-1・2）

北区の北西隅に検出された。東にある丘陵が緩やかに傾斜し海岸につながるやや高まりの部分に作られている。掘り込んでいる層は縄文時代晩期から弥生時代へかけての製塩廃棄層で、貝類を大量に含んでいる。壁面にはその貝層が露出する。

竪穴建物全体の1/4が検出された。北側は発掘区外、西側は削平されて既になくなっていて、残存長の南北が1.1m、東西が2mである。カマドが断面にかかっており、カマドを中央において、方形竪穴の一辺の長さを推定すると2.2mとなり、やや小さすぎよう。カマドは南寄りであったのであろう。4m四方程度の大きさであったと推定される。カマドの土は白色粘土を用いている。竪穴を掘り込んだ土ではカマドの構築は無理だったようである。柱穴は1基確認された。遺物は床面直上から出土している。覆土中の遺物は製塩土器、弥生土器、縄文土器がほとんどである。



第24図 1号竪穴建物

### [出土遺物]

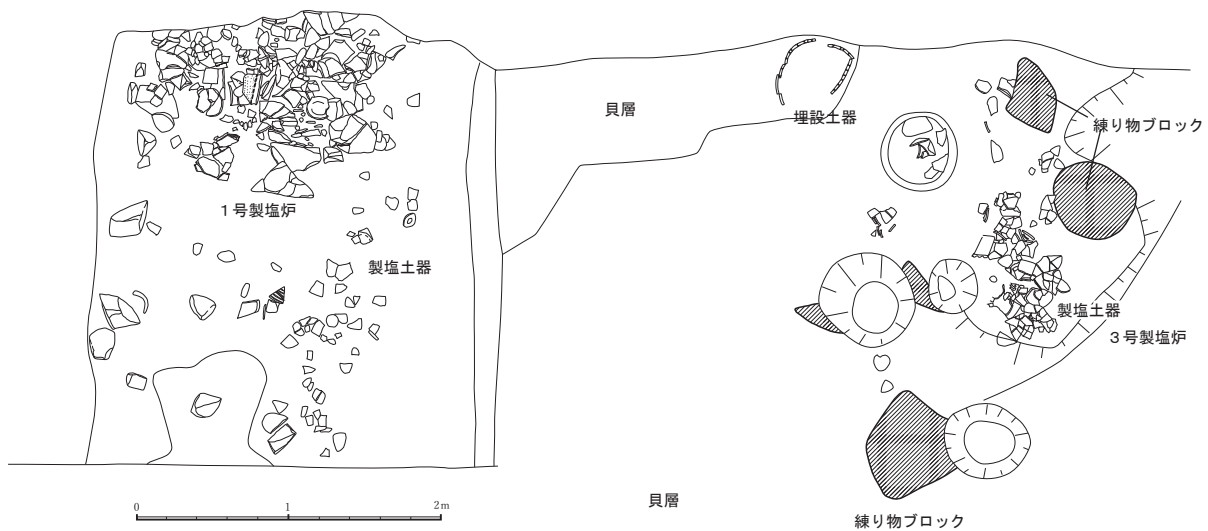
出土した遺物には、須恵器、土師器、製塩土器、ト骨、焼けた獣骨（ウシ？）、鹿角、縄文土器、弥生土器、製塩土器がある。（写真29、45-481・482）須恵器には坏、蓋、壺がある。須恵器坏は篋切りである（第33図1、写真29-2）。土師器には甕がある。製塩土器は平底で、底外面には板状の土で伸ばしたまま引き剥したような亀裂が残る。無調整である（16～18）。内面はヨコナデによる調整がなされている。細い刷毛状の工具痕も認められる（13）。器高が明らかなものはない。ト骨はシカ肋骨を素材としている（写真45-481・482）。両端が欠損している。肋骨を縦に裂いてその一端に長方形の鑽を横幅いっぱいにとり、直線的に配列している。残存する鑽は4つある。鑽の中を観察すると十字に茶褐色に変色している。焼灼をあてた痕跡である。背面には十字の亀裂が観察できる。縄文土器、弥生土器、製塩土器は覆土中から多く出土している（19～26）。弥生土器は寺下囲式が多い。竪穴建物位置に形成された製塩廃棄層に本来含まれていた遺物であろう。

### 1号製塩炉（第25図、写真25-4～6）

北区北東隅（F52-2区）で検出された、一部は発掘区外へ広がる可能性がある。ほぼ正方形の集礫である。一辺の長さ約150cm。凝灰岩角礫を敷き詰めている。凝灰岩は赤または黄色に変色し、一部は黒くなっている。受熱による変色と考えられる。この変色は表面のみで、裏面は凝灰岩本来の緑色である。よって、この礫上で火を焚いたものといえる。礫以外には製塩土器破片、弥生土器が散乱している。礫の西側に灰層が広がる。この方向に1号製塩炉の廃棄層が形成されたものと推定される。その廃棄層を壊して、1号竪穴建物が構築されている。集礫の上にあった弥生土器は寺下囲式であることから、この時期の製塩炉と考えられる。

### [出土遺物]（第38図138～147、写真41-372～400、46-491）

弥生土器は蓋、鉢、甕である。製塩土器には平底のものと尖底二者がある。復元された製塩土器は口径240mm、現存高200mmで、製塩土器としては大きい。内面は磨かれている。2点の製塩土器平底底部は直径約80mmである。底部だけで粗製深鉢土器と製塩土器を識別することは難しいが、赤変している点で製塩土器に共通する。上半部の接合した製塩土器（386）と底部（388・389）の内面はよく似ており、一方は同一個体の可能性がある。尖底の製塩土器（390～400）は、形状は縄文晩期大洞A式に伴うものと全く変わりがない。内面は土器番号459のように丁寧な磨きは認められず、剥落の痕跡がみられる。外面の二次焼成による赤色変化も著しい。より強い熱を受けたと推定される。出土状況から見て、これらの二者は弥生時代寺下囲期の製塩土器で両者は共伴すると考えられる。昨年調査では椀形囲式の層からは平底の製塩土器は確認できなかった（鳴瀬町1997）が、今回の調査では共伴すると判断できる。しかし、



第 25 図 1 号製塩炉、3 号製塩炉、埋設土器平面図

量的には尖底の方が多い。また、これは推定にすぎないが、平底製塩土器と尖底製塩土器の大きさも異なる可能性がある。二次焼成痕跡の違いから考えられるように、両者の機能差も考慮しなくてはならない。

さらに製塩炉に製塩土器の他に日常用いる有文土器（蓋、鉢、甕）、粗製土器（深鉢）も共伴していることも問題である。それらの土器は製塩土器のような強い二次加熱を受けたような赤変は認められず、薄黒い褐色である。これらは製塩土器のような用いられ方をしたものではない。製塩炉、製塩土器と同時に用いられた物かどうか、問題である。

土器以外に製塩炉から貝輪（第 38 図 147、写真 46 - 49）が出土している。ベンケイガイ製である。

### 2 号製塩炉（第 26 図）

北区のほぼ中央（F52 - 6 区）で確認された。一辺が約 80cm の焼土と土器集中部（74 層）を炉と判断した。炉の施設としては直径 30cm 程度の丸い練り物ブロックが 2 個確認できた。そのうちの 1 個はアワビ数個によって、根堅めが行われていた（第 26 図、写真 25 - 7・8）。この練り物ブロックは灰、貝灰などで練って作られたものと考えられる。大型の礫が手に入らない宮戸島で、その代用として用いられたのでなかろうか。この炉の北側は後世の攪乱によって失われている。練り物ブロックの数はさらに多かったものと推定される。

#### [ 出土遺物 ]（74 層出土遺物）

大量の製塩土器に混じり、深鉢（第 36 図 103、写真 38 - 282・286）、矢羽根文様の深鉢（第 36 図 108・113、写真 38 - 283 ~ 285）が伴っている。103 は L R 単節縄文が不整に施文された深鉢である。口径 190mm、残存高 140mm、口縁部外面はヨコミガキ、内面は口縁部がヨコミガキ、体部はタテナデ、一部タテミガキである。外面は黒褐色で、強い熱を受けた痕跡は残っておらず、一般の縄文土器と同じである。写真 38 - 283 ~ 285（同一個体か？）は赤褐色で受熱による赤変と推定される。製塩土器は大量に出土しており、底部だけで 54 個ある（表 6）。内訳は丸底 2 個、尖底 49 個、尖平底 2 個、平底アンペラ圧痕 1 個で、大多数が尖底である。矢羽根文様の鉢は大洞 A 式に多く伴う。よって、2 号製塩炉もその時期が与えられよう。

### 3 号製塩炉（第 25 図、写真 26- 1・2）

北区東側（F52 - 5 区）で検出された。後世の柱穴により一部壊されている。2 号炉同様、練り物ブロックで囲まれた、焼土、土器層である。大きさは一辺 60cm ほどの四角形で、4 個の練り物ブロックがそれを取り巻いている。南西側は後世の溝状遺構により失われている。もう 1 個ほど練り物ブロックがあったのであろう。

#### [ 出土遺物 ]（93 層出土遺物）

深鉢（第 37 図 130、写真 40 - 347）、製塩土器丸底 3 点、尖底 5 点、尖平底 1 点、平底無文 1 点が出土している。他にも深鉢の一部（第 37 図 123）も出土している。製塩土器は受熱により赤変している。123・130 の深鉢も赤変していることは注目される。製塩土器同様の受熱があった可能性が指摘できる。両深鉢ともに口径 200mm を越えるものである。130 の内面は磨き調整、123 はナデ調整が行われている。

### 埋設土器 (第24図)

北区東の壁近くから、埋設土器が確認された。黒褐色土を除去後、オオノガイが広く認められ、それを除去したところ、埋設土器の口縁部が確認できた。埋設土器はアサリを主体とする貝層に埋設されていた。埋設土器内部には灰、焼土、炭化物、アサリが含まれていた。深鉢は底部を欠いた状態で、直立して埋設されていた。深鉢(第37図135、写真40-371)の口縁部は波状を呈し、表面はナデの後にR無節縄文が施文されているが、部分的な施文に終わっている。粗雑な作りといえる。内面はヨコ、タテミガキがある。

埋設土器内部の土壌は1mmフルイで水洗選別を行ったが、動物遺存体等は検出されなかった。もし、幼児等の埋葬に用いたものであれば何らかの骨片は検出できる堆積環境にある。微細水洗選別によってもその可能性ある遺物が検出できなかったことから、埋葬用埋設土器ではないと判断した。3号製塩炉との関係から、近接した時期に設営されたと考えられるが、製塩作業と直接結び付く証拠はない。特に、埋設土器に底部がないことから鹹水の貯蔵等はできない。特異な事例として注目したい。

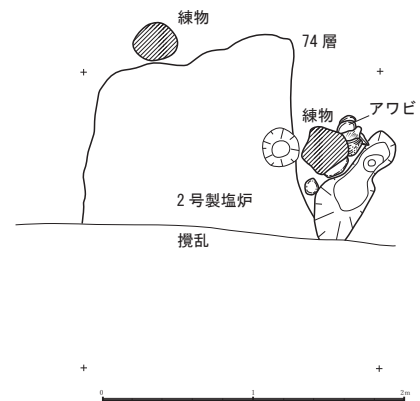
### ③ 北区の出土遺物

北区の出土遺物には大きく古代、弥生時代、縄文時代のものがある。古代のものは表土、2層、及びその直下の層から出土している。弥生時代の遺物は3層から15層、58から64層、70から83層付近で出土している。49層で弥生土器が出土しているのは一部が2層直下にあったため、混入と考えられる。それ以下の層はおもに縄文晩期大洞A式の土器を出土する、天洞A'式も僅かに認められるが、単純層としては把握できない。

古代の遺物としては、土師器、須恵器、製塩土器が僅かに混じる程度である。注目すべき遺物に2層から出土した離頭モリがある(第39図166、写真26-3、45-489)。半開窩式で、索孔はなく、中央上下に段がある。先端部と基部は失われている。製作には金属器が使われたことが明白な削りの痕跡が認められる。古代の漁具は第1次調査の第3トレンチから1点固定モリが出土している(写真22-1)。離頭モリ同様金属器による加工が明白な資料である。

弥生時代の遺物として62層から出土した天王山系土器が注目される(第35図83、写真36-233)。口径258mm、現存高322mmである。器形は広口壺、底部は失われている。出土状況はかなり散乱して出土しているが、本来はまとまっていた可能性が高い。地表面から浅い所であったので、耕作により散乱した物と推定される。埋葬用とも考えられるが、それを証明する人骨の出土は今の所ない。この遺物は二重口縁で、口唇部にはLR単節縄文が施文され、その上に沈線で左開きの矢羽根文が施文されている。二重口縁下半に沈線が施文され、下端から指先による押上を5mm程度の間隔で行っている(233d)。その結果、交互刺突と類似した施文効果を果たしている。頸部は横方向のナデ、頸部下半には斜め方向のナデ痕が残っている。体部にはLR単節縄文が施文されている。内面は口縁部付近のみ丁寧なヨコナデが見られ、体部は粗いナデ調整をそのまま残している(233c・e)。8層から出土した柵形囲式の甕(第33図26、写真32-94)は図上復原した所では口径218mm、器高204mm、底径84mmである。口唇部には縄文が施文してある。体部にはRL単節縄文が施文してある。口縁部下には幅4mm、長さ17mm前後の列点が2~3mm間隔で巡っている。半截竹管のような施文具が用いられている。内面は上半がヨコミガキ、体部下半がタテミガキ、底部はヨコミガキが行われている。底部には本葉痕が認められる。

縄文土器は縄文晩期大洞A式が主体である。15層出土の深鉢(第34図38、写真33-122)は口径175mm、現存高172mm、口唇部は波状を呈し、口縁部はヨコミガキ、体部はLR単節縄文、口縁部内部はヨコミガキ、体部はタテミガキである。鉢(第34図39、写真33-128)は口縁部文様帯に崩れた工字文が施文されている。口径140mm、現存高55mmである。この土器は15、24、25、27、29層から出土している。第34図55(写真34-19)は鉢で、口縁部文様帯に工字文が施文されている。口唇にはキザミが施されている。体部にはLR単節縄文が施文されている。内面はヨコミガキである。口径118mm、現存高53mmである。この土器は38、74、79層から出土している。第34図63(写真35-217)は、口縁部文様帯に三角文が施文された鉢である。全体の1/4ほど出土している。口径252mm、現存



第26図 2号製塩炉

高 175mm である。口唇部にはキザミ、体部には L R 単節縄文が施文されている。内面はヨコミガキで調整されているが、光沢はない外面下半部に受熱による赤変が認められる。第 34 図 70 (写真 35 - 288) は口縁部文様帯が無文の鉢である。体部上半には L R 単節縄文が施文されている。下半部は部分的に縄文が施文されているが、縄文施文以前のナデ痕跡が残っている。粗雑な作りである。口縁部内面がヨコミガキ下半はタテミガキであるが、光沢はない。口径 130mm、底径 56mm、器高 133mm である。内外面共に、器体下半部は受熱による赤色化が認められる。また、内外面共に劣化が進んでいる。第 35 図 86 (写真 37 - 241) は L R 単節縄文が施文された深鉢である。口径 294mm、残存高 290mm である。全体の 1/6 程が残存している。内面上部はヨコミガキ、下半はタテミガキが施されている。外面下半部の底部近くが受熱による赤色化が認められる。第 36 図 115 (写真 39 - 306) は口縁部に二対の突起を待ち、口縁部に工字文、体部に L R 単節縄文が施文された鉢である。口縁内面には一条の沈線が巡り、上半はヨコミガキ、下半はタテミガキで調整されている。口径 404mm、残存高 117mm である。内外面ともに黒褐色を呈する。全体の 1/4 残存している。第 37 図 125 (写真 39 - 321) は L R 単節縄文が不整に施文されている。口径 356mm、残存高 100mm である。口縁は約 16mm 間隔の波状、口縁部外面はヨコナデ、6.5mm 幅の沈線で縄文帯と区画されている。内面はヨコナデ、部分的に粘上帯の接合痕を残す。内外面ともに、受熱により赤色変化が認められる。この個体は 70、82、93 (3 号製塩炉)、95 層から出土している。第 37 図 130 (写真 40 - 347) は L R 単節縄文が整列して施文された深鉢である。口径 284mm、残存高 100mm である。口縁は 10mm 間隔の波状、口縁部外面はヨコミガキで調整され、内面には 1 条の沈線が巡り、ヨコミガキで調整されている。外面は受熱による赤色化が著しい。全周の 1/3 程が残存している。この個体は 82、93 (3 号製塩炉)、95、106、108 層、1 号竪穴建物から出土している。第 37 図 136 (写真 40 - 370) は風倒木痕から出土した、工字文が施文された鉢である。口径 232mm、残存高 85mm、全体の 1/4 が残存している。体部には L R 単節縄文が施文されている。内面はヨコミガキ、外面は黒褐色、内面は灰褐色である。

第 37 図 131 (写真 47 - 518) は半分に割れた白玉で 95 層から出土している。白色を呈し、受熱の可能性はある。

## 2) 南北トレンチ (第 17、19 図、写真 26 - 5)

昨年度の調査により、古代の遺物、縄文時代晩期から弥生時代の製塩関連廃棄層が堆積している事がわかっていた。この地区は、微細層位法を採用せず、大まかな堆積状況を把握することを目的とし、重機による埋め戻し土除去後、従来の調査方法を採用した。その結果、奈良時代の竪穴建物跡が検出されるなどして、最終的には無遺物層まで掘り下げることができなかった。

### ① 層序 (第 13 図)

層は緩やかに北に傾斜しながら、ほぼ水平に堆積している。3b 層 (灰白色火山灰) がブロック状に認められることから年代を知る基準になる。4、5 層からは土師器、須恵器が出土する。この層の下から 2、3 号竪穴建物は掘り込まれている。掘り込み面は 6 層上面である。この 6 層は貝を含む層や焼土、灰層などに細分される。

南北トレンチの 6 層以下が北区 3 層以下の細分層に対応することになる。南北トレンチでは 6 層からは弥生時代の遺物、7 層からは縄文時代晩期大洞 A 式の遺物が出土している。

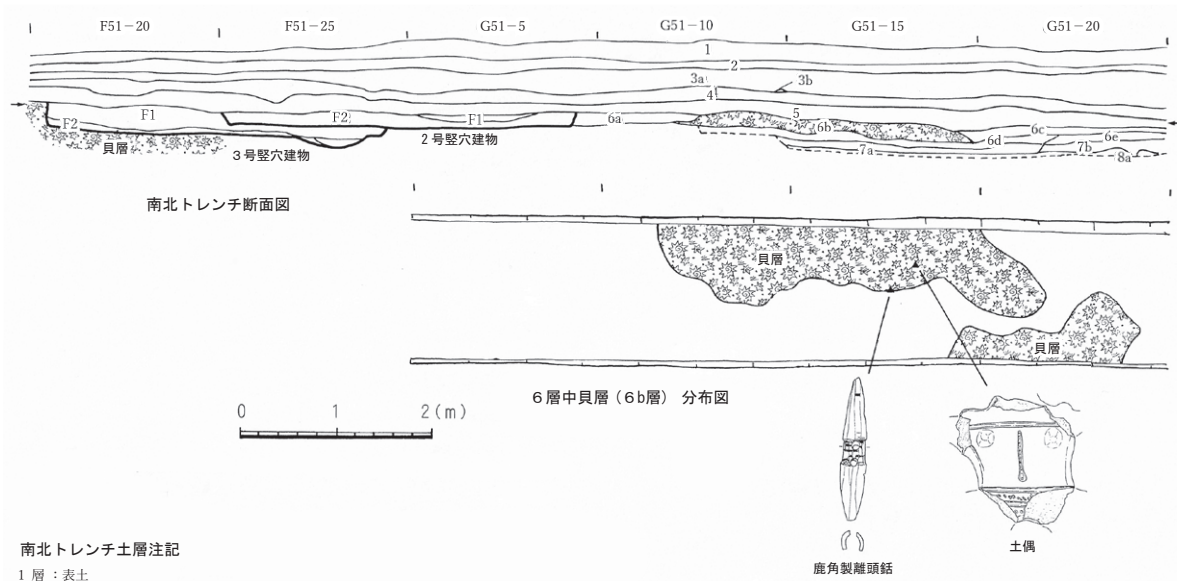
### ② 遺構

#### 2 号竪穴建物 (第 27 図、写真 26 - 4)

6a 層と 3 号竪穴建物覆土に掘り込まれた竪穴建物である。カマドと、南北の壁が確認できたが、東西の壁は調査区外にある。南北長は約 3.25 m である。柱穴と推定されるピットが 1 基、壁際に小ピットが 1 基確認されている。カマドは袖に凝灰岩礫を用い、それを黄褐色粘質土で覆っていた。カマド天井は崩落していた。燃焼部床は受熱により赤く変色していた。煙道は長さ約 1 m、天井は崩落していた。カマド右横に土師器甕下半部 (第 33 図、写真 30 - 35) と須恵器坏 (第 33 図、写真 30 - 41) がおかれていた。この竪穴建物は、出土土器から奈良時代の物と推定できる。

#### [ 出土遺物 ]

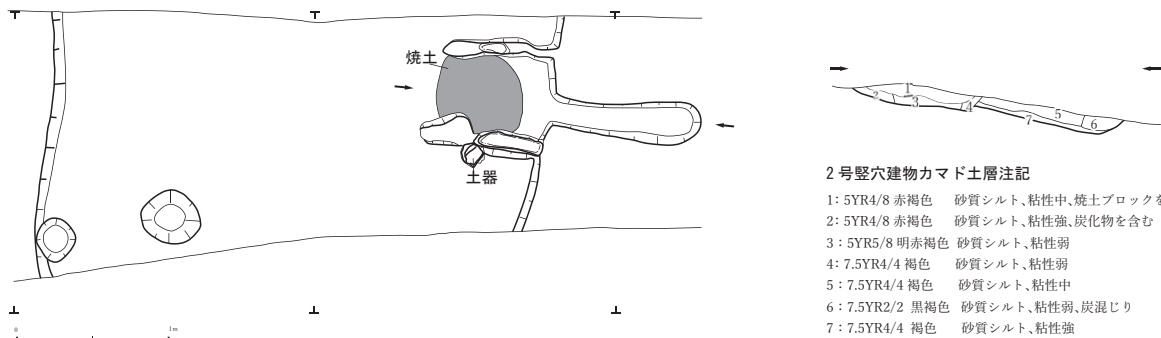
竪穴建物内からは土師器、須恵器、製塩土器、ト骨、馬の蹄骨、弥生土器、縄文土器などが出土している。土師器は坏、甕、須恵器は坏、壺の破片が出土している。須恵器坏は外面がロクロナデ、底部は篋切り後、手持ち篋ケズリで調整さ



南北トレンチ土層注記

- 1層：表土
- 2層：10YR4/2 灰褐色 砂質シルト、粘性弱、しまりやや弱
- 3a層：10YR4/3 黄褐色 砂質シルト、粘性弱、しまりやや弱、径10mmの赤褐色凝灰岩礫を僅かに含む
- 3b層：灰白色火山灰
- 4層：10YR3/4 暗褐色 砂質シルト、粘性やや弱、しまり中、径10～20mmの赤褐色凝灰岩礫、5～10mmの白色粘土粒を少量含む
- 5層：10YR4/4 褐色 砂質シルト、粘性やや弱、しまり中、径10～20mmの赤褐色凝灰岩小礫、5～10mmの白色土粒をやや多く含む。径5mmの炭化物を僅かに含む
- 6層：7.5YR3/4 暗褐色 粘質シルト、粘性中、しまり中、径10～20mmの赤褐色凝灰岩小礫をやや多く含む。製塩土器(尖底)を多量に含む。弥生時代の遺物を含む。貝を含む層がブロック状にあり、細分される
- 7層：10YR3/3 暗褐色 粘質シルト、粘性やや強、しまり中、径10～20mmの赤褐色凝灰岩小礫をやや多く含む。径10mm程の炭化物を少し含む。尖底の製塩土器を多量に含む。縄文晩期大洞A式土器を含む。層は細分される
- 8層：10YR3/4 暗褐色 シルト質粘土、粘性やや強、しまりやや弱、径5～20mmの炭化物をブロック状に含む。製塩土器を大量に含む。層は細分される

第27図 西畑地点南北トレンチ断面図・6層遺物出土位置平面図



2号竖穴建物カマド土層注記

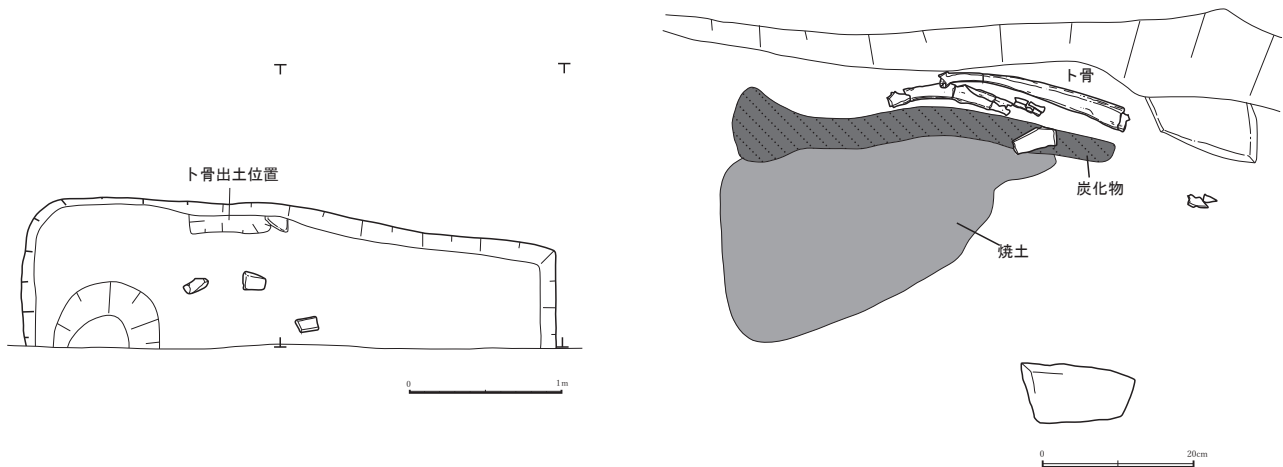
- 1: 5YR4/8 赤褐色 砂質シルト、粘性中、焼土ブロックを含む
- 2: 5YR4/8 赤褐色 砂質シルト、粘性強、炭化物を含む
- 3: 5YR5/8 明赤褐色 砂質シルト、粘性弱
- 4: 7.5YR4/4 褐色 砂質シルト、粘性弱
- 5: 7.5YR4/4 褐色 砂質シルト、粘性中
- 6: 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト、粘性弱、炭混じり
- 7: 7.5YR4/4 褐色 砂質シルト、粘性強

第28図 2号竖穴建物

れている。口径254mm、器高42mm、底径90mmである。製塩土器(第33図、写真30-41)は器高110mm、口径180mm、底径200mm、器壁厚5mmのたらい形である。内面はヨコナゲ調整で工具痕が残る。外面は輪積み痕を残す無調整である。ト骨(写真45-483)は竖穴建物覆土から出土した。シカ肋骨を素材とし、両端が欠損している。現存する鑽は9個あり、そのうち観察可能な7個に焼灼の痕跡があり、部分的に貫通しているものもある。弥生土器、縄文土器、尖底製塩土器は掘り込まれた6、7層起源のものである。

3号竖穴建物(第28・29図、写真26-4・6)

6層を掘り込んで構築されている。発掘区には竖穴建物の東壁がかかっている。方形竖穴建物の一辺の長さは約3.73mである。2号竖穴建物よりやや大きい。また、掘り込み深度も深い。2号竖穴建物深度が約16cmに対し、3号竖穴建物は26cmである。北端では純貝層を掘り込んでいる。竖穴建物内部には南壁際に皿状のピットが確認された。来壁下の所に浅く掘りくぼめたピットから、ト骨2本が折り重とって出土した(第29図、写真26-7)。ト骨はその最大



第 29 図 3 号竪穴建物とト骨出土状況

長よりやや大きめの浅い細長いピットに安置されていた。北端には偏平礫が置かれていた。ト骨を収めたくぼみを取り巻くように幅 4 cm、長さ 52 cm の炭化物の帯が巡り、その外側に焼土が短軸約 12cm、長軸 34cm に広がっていた。ト骨 2 本は両端に焦げた痕跡のある写真 45 - 487 を下に、488 が上に重なって出土した。487 の先端は受熱により脆くなり、一部割れて遊離していた。488 はほぼ完形であったが、先端部は幾分破損し、端部形状をそのままとどめていない。この 2 本のト骨の鑽には両者ともに焼灼の痕跡があり、使用された物であることを物語っている。さらに、出土位置が竪穴建物の床面に浅く掘り込まれた場所にあったことから、使用後、竪穴建物内に遺棄されたものであることがわかる。周りに炭化物、焼土があったことから、この場所でト占が行われ、そして遺棄された物と推定される。竪穴建物の全体像が不明なので竪穴建物内の正確な位置関係を断定することはできないが、一般に貯蔵穴様のピットはカマド付近にあること、掘り込まれた場所にあったことから、使用後、竪穴建物内に遺棄されたものであることがわかる。周りに炭化物、焼土があったことから、この場所でト占が行われ、そして遺棄された物と推定される。竪穴建物の全体像が不明なので竪穴建物内の正確な位置関係を断定することはできないが、一般に貯蔵穴様のピットはカマド付近にあること、2 号竪穴建物のカマドが南の壁にとりついていることを考慮すると、3 号竪穴建物も同一方向にカマドが存在したことが推定できる。とすると、カマドに向かって、右側の壁際がト占の場であったと言える。さらに竪穴建物床面から破損したト骨破片や焼けた骨片が出土していることから、このようなト占は何度も繰り返し行われたようである。この竪穴建物の年代は 2 号竪穴建物以前の奈良時代と推定される。

#### [ 出土遺物 ]

この竪穴建物からは土師器、ト骨、弥生土器、縄文土器、尖底製塩土器が出土している。土師器（第 33 図、写真 31 - 42 ~ 46）は有段丸底で浅く、内面がミガキ調整後黒色処理されたもので、国分寺下層式に属する。ト骨は破片も含めて 4 点出土している。骨角器番号 5（写真 45 - 485）は両端が欠損している。大きさから見てウシまたはウマの肋骨を素材にしている。鑽の配置も特異で 2 列が 1 列になり再び 2 列になる。それらには焼灼の痕跡が認められる。486 はウシまたはウマの肋骨を素材としている。受熱により黒く焦げている。出土位置が骨角器番号 7 の先端に近いことから、同一固体の可能性もあるが接合しない。鑽の配置は中央に 1 列のようであるが、半欠なので所定できない。焼灼による割れ穴が認められるので、使用した物といえる。487 は大きさからウシまたはウマの肋骨を素材にしている。両端が受熱により黒く焦げてその先を欠いている。鑽は中央に 1 列に配置されている。焼灼が十字に動かされたことが明確な焼けた痕跡もあり、使用の結果を示している。両端の焦げた痕跡は焼灼後の受熱が考えられる。この受熱がト占の一連の動きの中に含まれるのかどうか判然としない。488 は 487 同様ウシまたはウマの肋骨を素材としている。大きさは 487 と同じであるが、鑽の配列が異なる。鑽が 3 列格子状に配列されているのである。それらの中には焼灼による痕跡が明瞭に残っている。鑽の格手状配列は肋骨先端に近い広い部分に施されている。487 の先端部分は失われている。487 の鑽が直線的に配列されている部分には加工が施されていない。この二者を較べると 487 は完全に使いきったト骨、488 はこれからまだ使用する可能性を残したト骨とも言える。出土状況を見ても 488 は、487 の上にあつたのである。ト骨は占うたびに鑽を彫り、焼灼をあてたのであろう。488 はこれから占いを行うために保管した状態で遺棄されたの

かもしれない。

弥生土器、縄文土器、尖底製塩土器は本来6層以下に含まれていたもの(写真31-47~52)が、混入したものである。3号竪穴建物から奈良時代の製塩土器が出土していないことに、注目したい。

### ③ 南北トレンチの出土遺物(第38・39図148~164、写真31-53~64)

竪穴建物が検出された以外のG51-15、20区を掘り下げた。6層は貝層、灰層、焼土層など、細分が可能である。6層からは弥生時代の土器・骨角器、7層からは縄文晩期大洞A式土器が出土している。6層から出土した弥生土器は甕、蓋、壺などで、柵形罎式に属する。それと同一層から鹿角製離頭モリ(第39図164、写真45-490)が出土している。その出土位置(第26図)は6層内の細分した貝層に接するところである。形状は半開窩式で、中央部に段があり、その形状は古代の銚によく似るが、そこに二つの索孔がある。索孔の方向は縄文時代のもと同じである。この離頭モリは共伴する土器から弥生時代柵形罎式期のものである。6層からは古代の遺物は検出されていなく縄文晩期大洞A式が混じるだけである。さらに、この離頭モリを観察すると基端が鋭く一面で作り出されていること、先端の削りが直線的であることから、製作工具が金属器であると考えられる。同じく6層から出土した土偶(第39図165、写真47-507)は結髪形土偶の体部破片である。この土偶は縄文晩期大洞A式に伴うものである。

### 3) 東西トレンチ(第17図)

東西の土層堆積状況を把握することを目的に設定した。重機による表土除去後、スコップによる掘り下げを行った。J46、47区の凝灰岩基盤の高まり部分は耕作による削平などにより、遺物包含層が全く残っておらず、この部分は一部表土除去を行っただけで、掘り下げは行わなかった。この高まりを境に東区と西区と分けて呼称する。東区では溝などがわずかに確認されたが、低地にも係わらず灰白色火山灰の堆積もなく、遺物も土師器、須恵器、縄文土器がわずかに得られたにすぎない、その下に凝灰岩基盤が認められた。この地区は遺物包含層の良好な堆積はないと判断し、層の記録を行い調査を終えた(写真27-1)。

西区は東北歴史資料館によるボーリング調査により灰白色火山灰、泥炭層が存在することがわかっていたので、それに留意し、重機による表土除去を行った。状況を見て、灰白色火山灰が広がる部分ではそこまで、重機を利用した。この地区は泥炭層に遺物が伴うかどうか、地層の堆積状況を明らかにすることが目的である。スコップによる掘り下げを行ったが、湧水により調査は困難を極めた。予想以上に泥炭層が厚く堆積していたことから、部分的に小範囲のみ掘り抜くことにした。泥炭層は上部(6a、b層)では木材片が多く、植物遺体をあまり含まなかったが、下半部(8a層以下)には大量に葉、種子、枝などの植物遺体が含まれ、取り上げは極めて困難であった(写真27-2~5)。そこで、1m四方(J43-7区)のブロックサンプリングを行うと共に、遺存状態の良好な植物遺体は小グリッド単位に可能な限り取り上げることにした。

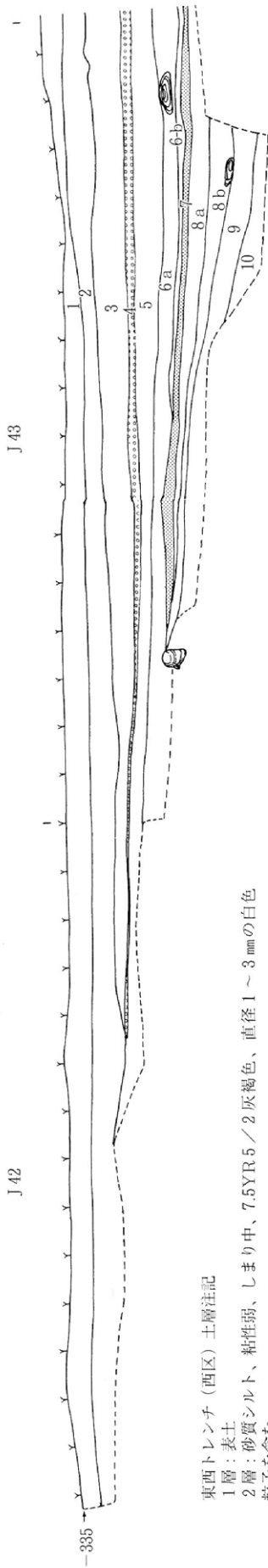
#### ① 層序(第30図)

北に開く浜の最奥部を横断するようにトレンチを設定した。宮戸島を形成する凝灰岩基盤がトレンチの東で検出されている。この基盤は西へ向かって急激に傾斜している。西側では凝灰岩基盤は検出されていないが、西の丘陵から崩落した礫層が検出されている。礫層の掘り下げは実施しなかったが、礫層中から縄文前期大木5式土器(第42図244、写真44-480)が検出されている。西の丘陵上には里浜貝塚台東斜面(縄文前期)の貝層が広がっており、それが崩落して堆積したものと推定される。トレンチ中央部最下層の10層は礫層である。西側で検出された礫層とつながるのかどうか判断できないが、この礫層の検出でおおよそこの場所の地形が明かになった。この場所は凝灰岩基盤と礫層で形成された谷状の入り江といえる。

4層の灰白色火山灰よりも上位はほぼ水平堆積層である。4層の分布する範囲が湿地と想定してよからう。5層は砂質シルトであるので、既に離水していると考えられる。6層のプラントオパール分析から、水田の可能性が指摘されている。奈良時代にこの浜で水稲栽培が行われていたとすると、製塩集落を考える上で重要である。6層以下が有機物を含む層である。ただし、7層は純粋な砂層で全く遺物を含まない。津波などの災害に伴う層であろう。8、9層は粘土で、8b層、9層は大量の植物遺体を含んでいる。10層は基底と推定される。湧き出る水は淡水である。地表面の標高が2.7mほどであるから、8層付近が海拔0mである。この湿地帯は海岸の入り江にできた、小規模な後背湿地と

J 42

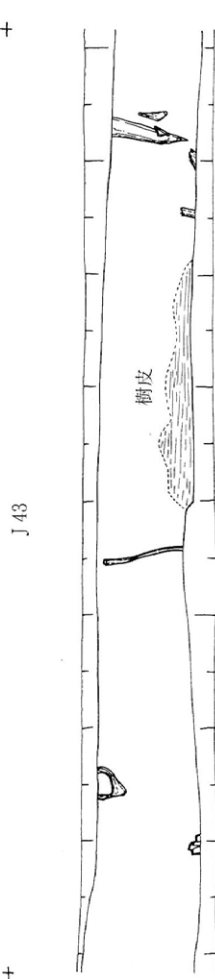
J 43



東西トレンチ (西区) 土層注記

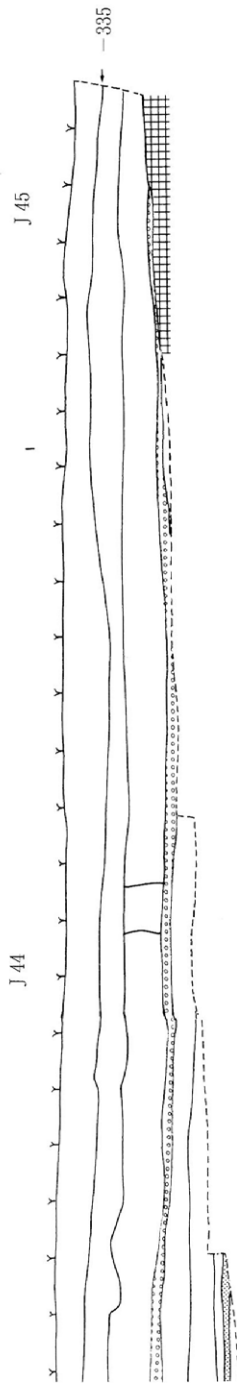
- 1層：表土
- 2層：砂質シルト、粘性弱、しまり中、7.5YR5/2 灰褐色、直径 1～3 mm の白色粒子を含む
- 3層：砂質シルト、粘性弱、しまり中、7.5YR5/3 にぶい褐色、直径 1～2 mm の白色粒子を含む
- 4層：灰白色火山灰、粘性弱、しまり中
- 5層：砂質シルト、粘性強、しまり強、7.5YR5/4 にぶい褐色、直径 2～3 mm の白色粒子を含む
- 6層：粘土、粘性強、しまり強、7.5YR2/1 黒色、木材、縄文後期の土器を含む。
- 7層：砂、粘性なし、しまり弱、凝灰岩礫を含む。無遺物層。
- 8a層：砂、粘性弱、しまり強、5YR2/2 黒褐色。縄文後期の土器を含む。
- 8b層：粘土、粘性強、しまり強、5YR3/1 黒褐色。縄文後期の土器を含む。木の葉、枝などの植物遺体を大量に含む。
- 9層：粘土、粘性強、しまり強、5YR2/3 極暗赤褐色。遺物遺体を大量に含む。直径 10mm 前後の凝灰岩礫を含む。縄文後期、中期の土器を含む。
- 10層：砂質シルト、粘性中、しまり強、7.5YR5/3 灰オリーブ色、直径 5 mm 程度の小礫を多量に含む。遺物は含まない。

J 43



J 44

J 45



第 30 図 西畑地点東西トレンチ (東区) 層序断面図および 8 層平面図

推定される。海岸線に浜堤が形成され、淡水の水が溜まる条件ができあがったものと考えられる。

## ② 東西トレンチの出土遺物

層別に出土遺物を述べる。灰白色火山灰（4層）の下5層からは土師器高坏脚部（写真44 - 467）、縄文晩期大洞B式注口破片（468）、縄文後期南境式の深鉢（469）が出土している。6層から9層の出土土器は縄文中期前葉から後期中葉のものである（470 - 479）。

土器の他に2点の木製品が出土している。両者とも6層の上部から出土したものである。木製品番号1（写真48 - 533）は篋状木製品で、柄の部分は端部に行くに従いやや太くなる。篋状の先端は薄くなる。保存状態は悪い。534は角材である。両端とも叩き切られたようで滑らかではない。両者とも金属で加工された物ではないと考えている。縄文後期中葉の土器（写真44 - 470）が伴う。他に焼け焦げた木片も出土している（写真48 - 535・536）。

植物遺体は8、9層から大量の木片、種子類が検出されている。それらは樹種同定分析を行う予定である。代表的なクルミの実、トチの実、マツの球果を示した（写真537・538・539）。

## 4) 南区（第17、31図）

西畑地区に残された高台部分にあたる。高台部分の多くは現在住宅地として用いられており、調査ができる範囲は極めて少ない。南区は西畑地点の貝層が形成される起点部分にあたり、集落の縁辺部の可能性が考えられた。ここでは遺構検出を目的に調査を計画した。一方で、貝層との関連が考えられたので、微細層位による悉皆調査法も併用することにした。調査予定地は用地買収前までは建物があり、それにより地形が改変されていることがわかっていた。そこは笹や雑木で覆われており、そのまわりは近現代の廃棄場としても用いられ、不燃物なども散乱していた。これらを重機により除去し、さらに表土も取り去った。表土除去時に、南側には凝灰岩基盤が認められ、削平の痕跡と考えられた。

北側には貝混じりの層が認められた。草削りによる何度かの清掃作業により、黄褐色粘質土に掘り込まれた遺構と北側に広がる貝層の輪郭が明らかになった。遺構と推定される部分は輪郭を確認後、半割して掘り下げ、貝層部分については微細層位による平面の広がりを確認し記録した。遺構内埋め土及び貝層は悉皆採集を行い水洗選別を行った。

### ① 層序

1～4層は表土及び江戸から近代の廃棄層である。そこからは温石や陶磁器が出土している。5層からもキセル、陶磁器が出土しており、近世以降に形成された層であろう。5層から10層までは混貝土層である。破碎貝、凝灰岩小礫を含む。11層から20層までは土層である。21層以下の層は混貝土層、混土貝層、貝層であるが、上部の混貝土層に較べて貝の破損もきわめて低く、緻密な貝層である。旧地形を推定すると、凝灰岩基盤がえぐられて形成された北に開く谷の最奥部にあたる。そこに貝層が形成されている。ここで最も多く検出されているのは縄文時代後期後葉の土器である。21層以下の貝層はこの時期に形成された貝層である。最終的に谷は貝層で埋め尽くされるが、窪地として残るようである。そこに11層から20層の土層が堆積している。これらの土層は植物が繁茂して形成される腐植土層である。5層から10層までの貝層は破碎貝がほとんどで、さらに凝灰岩小礫を多く含むことから、貝層と周辺の凝灰岩基盤の再堆積と推定できる。それより上層より近世以降の堆積と攪乱土と考えられる。これらの堆積層からいくつかの遺構が検出されている。貝層部分の最も浅い所で検出されたのが7号土坑である。火葬骨が埋納されている火葬墓である。副葬品はないが同様の状況の1号土坑から永楽通宝が出土していることから同時期の室町時代頃と考えられる。さらに7号土坑と切り合い関係にある8号土坑がある。この土坑には完形の土師器杯が埋納されている。古墳時代と推定できる。7号土坑と直接切り合い関係にはないが、その下層にあるのは12号土坑である。中に鉄製刀子が埋納されており、古代のものと推定される。次いで確認されたのが13号土坑で、幼児人骨が検出されていた。5号土坑、9号土坑、10号土坑からも幼児人骨が出土している。10号土坑埋土からは弥生土器と製塩土器が出土している。9号土坑を覆う13層からも弥生土器、製塩土器が出土している（第17図）。よって、9号、10号土坑は層位的に見て、弥生時代以降に属すると考えられる。13号土坑は古代の12号土坑に切られており、埋土から製塩土器が出土しているので、前二者同様弥生時代以降の可能性が高い。最も浅い所で検出された5号土坑は層位関係から見ると8号土坑（古墳時代）よりも新しいことになる。

その後、米田譲氏により、1996年から99年に調査した里浜貝塚出土人骨について、炭素・窒素安定同位体分析と放

放射性炭素年代測定を行った（米田 2000）。人骨本体の放射性炭素年代測定により、1号人骨は江戸時代、2号から5号人骨は戦国時代の子どもの骨であることが明らかになった。

② 遺構（第 31 図）

a. 江戸時代

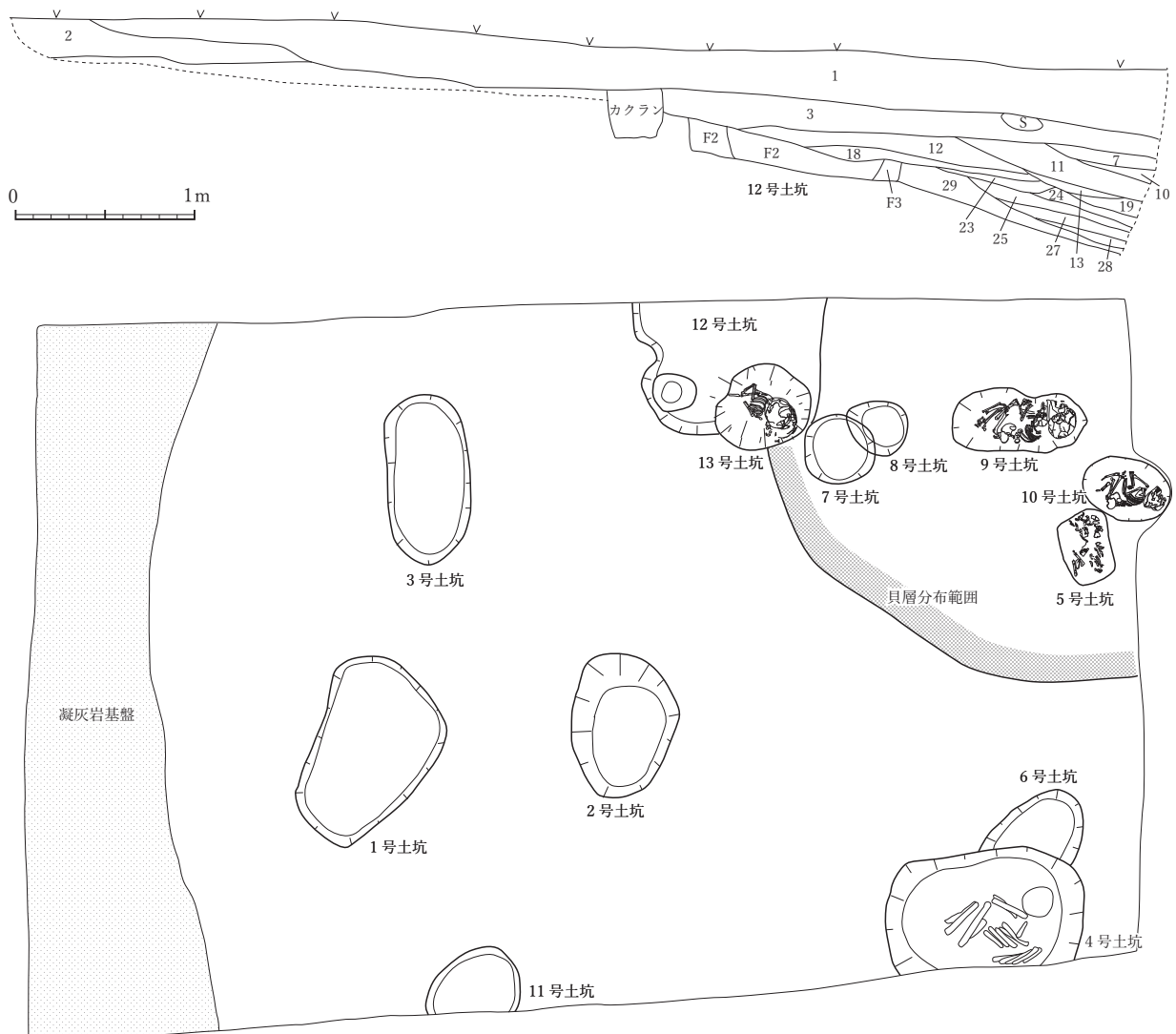
4号土坑（97-1号人骨）（第 32 図、写真 27-8）

江戸時代後半の土葬墓である。埋土は上部には黒色腐植土があり、下部には砂質シルト、粘性中、しまり弱、灰褐色の土層が堆積していた。埋土の中には3個の人頭大円礫があり、その下から人骨が検出された（1号人骨）。このことから、遺体は木棺に入れて葬られ、川原石により蓋を固定していたものと推定される。人骨は熟年後半で、ほぼ全身骨格が検出された。座棺の状態で埋葬されたものであろう。墓坑は隅丸方形に凝灰岩基盤を掘抜いて作られている（115cm × 80cm）骨の遺存状態はあまり良好ではない。副葬品は5枚の完形寛永通宝と1枚の破片寛永通宝が腰の所から検出された（写真 47-526～531）。寛永通宝には布残欠が付着しており、袋状の入れ物に入っていたと推定される。4号土坑の1号人骨は熟年後半の女性である。放射性炭素年代測定により人骨の測定年代は  $340 \pm 45\text{yr.BP}$  との年代が得られた。

b. 戦国時代

1号土坑（写真 28-1）

隅丸方形（110cm × 70cm）に掘り込まれた浅い土坑である。長軸方向は磁北から西に45度振れている。埋土は1枚である。内部には火葬人骨が細片となって疎らに認められた。土坑内に灰や炭化物が認められなかったことから、別



第 31 図 西畑地点南区断面図、遺構配置図

の場所で焼かれたあと、収骨して埋葬されたと推定される。年齢は12歳以降、性別は判定できなかった。火葬人骨に混じって、完形4枚、破片2枚の永楽通宝が検出されている（写真47 - 520 ~ 525）。

### 3号土坑（写真28 - 2）

長円形（80cm × 48cm）に掘り込まれた浅い土坑である。長軸方向は磁北を西に70度振れている。埋土は1枚である。内部には火葬人骨が疎らに認められる。別地点で火葬されたと推定される。年齢は20歳前後、性別は判定できなかった。副葬品はない。

### 7号土坑（写真28 - 3）

円形（36cm × 30cm）に掘り込まれた土坑である。長軸方向はほぼ磁北である。埋土は1枚で砂質シルト、褐色、直径5mmの凝灰岩粒を含む。火葬人骨がかなりまとまって、検出された。別地点で焼かれ、拾骨され埋葬されたと推定される。熟年の男性と推定される。病変として変形性脊椎症が認められた。この里浜人は過酷な労働に従事していた可能性が指摘されている。副葬品はない。

### 5号土坑（97-2号人骨）（第32図、写真28 - 4）

5層の下で確認された土坑である。最初、頭蓋骨の一部が検出され、輪郭を確認し、掘りあげた。土坑平面形は隅丸方形（45cm × 30cm）、埋土は1枚で、砂質シルト、黒褐色、粘性・しまり弱である。土坑内には幼児が埋葬されていた（2号人骨）。頭位は磁北から西に85度振れている。埋葬状態は横位屈葬の状態、顔は右を向いていたと推定している。骨は原位置をやや移動している。埋葬後の多少の攪乱が推定される。5号土坑の帰属時期は、埋土から時期を判定できる遺物が出土していないことから、掘り込まれている9、11層の帰属時期は、埋土から時期を判定できる遺物が出土していないことから、掘り込まれている9、11層の帰属時期から推定するほかない。9層からは縄文晩期大洞C2式土器、11層からは大洞A式、製塩土器が出土している。11層の下層である12、13層から弥生土器が出土しているので、5号土坑の帰属時期は弥生時代以降となる。2号人骨の放射性炭素測定年代は460 ± 50yr.BP、535 ± 110yr.BP、430 ± 115yr.BP、397 ± 103yr.BPである。

### 9号土坑（97 - 3号人骨）（第32図、写真28 - 5・6）

13、14層の下で確認された土坑である。貝層を掘り込んだ長円形（71cm × 46cm）の土坑に幼児（3号人骨）が埋葬されていた。埋土は1枚である。埋土は砂質シルト、しまりやや弱、粘性やや弱、暗褐色、直径0.5mmの白色土粒をわずかに含み、アサリ、魚骨をわずかに含んでいる。頭位は磁北から東に20度振れている。埋葬状態は手足を折り畳んだ右側臥屈葬である。顔面は右を向いている。埋土からは縄文土器（写真42 - 425 ~ 429）、製塩土器（430）が出土している。縄文土器は縄文後期のものである。掘り込まれた19層以下の層は縄文後期の貝層なのでその混入と考えられる。製塩土器は縄文晩期後半から弥生時代に共伴する。他に猪牙製牙鏃（第40図197、写真46 - 504）が出土している。水洗選別で検出したもので、副葬品ではなくより下層遺物の混入と考えられる。埋土出土遺物から推定される9号土坑の帰属時期は、最も新しい時代を示す製塩土器の時期である。土坑を覆う13層からは弥生土器が出土している。製塩土器は晩期大洞C2式から弥生時代榊形囲式まで共伴している。土坑から出土した製塩土器は大洞C2までは遡らない。3号人骨の放射性炭素測定年代は390 ± 50yr.BP、530 ± 130yr.BP、612 ± 107yr.BPである。

### 10号土坑（97 - 4号人骨）（第32図、写真28 - 7）

17層の下で確認された。足の骨を検出し、一部発掘区を拡張して、土坑の輪郭を検出した。土坑は貝層を掘り込んだ長円形（59cm × 42cm）、埋土は1枚で砂質シルト、しまり中、粘性弱、褐色、アサリを含んでいる。幼児が埋葬されていた（4号人骨）。頭位は磁北から東に35度振れている。埋葬状態は手足を折り畳んだ右側臥屈葬である。土坑埋土からは寺下囲式の弥生土器（第40図201、写真42 - 435）、製塩土器（写真42 - 436）、縄文土器、スズキ骨製装身具（写真46 - 501）、離頭モリ未製品（第40図200、写真46 - 498）、固定モリ（写真46 - 501）が出土している。土坑の帰属時期は弥生時代寺下囲式期以降になる。埋土に含まれた離頭モリ未製品、固定モリは縄文後期後葉のもので、土坑が掘られた層に本来帰属していたものが埋め戻されたものであろう。4号人骨の放射性炭素測定年代は505 ± 45yr.BP、505 ± 95yr.BP、492 ± 56yr.BPである。

### 13号土坑（97 - 5号人骨）（第32図、写真28 - 8）

12号土坑の下で確認された土坑である。幼児が埋葬されていた（5号人骨）。13号土坑により西側の一部が失われ

ていたが、土坑底部までは達せず、幼児骨は原位置で確認することができた。土坑は貝層と基盤凝灰岩風化層を一部掘り込んだほぼ円形(55cm×47cm)、埋土は1枚で、砂質シルト、しまり中、粘性弱、にぶい褐色である。埋葬状態は右側臥屈葬と推定される。5号人骨の放射性炭素測定年代は440±50yr.BP、515±152yr.BP、598±76yr.BPである。

### 2号土坑

凝灰岩風化層上面で確認された。平面形は楕円形(80cm×60cm)、埋土は2枚で、埋土1:砂質シルト、粘性・しまり弱、黒褐色、中央に礫、埋土2:砂質シルト、粘性・しまり中、褐色である。縄文土器破片がわずかに含まれていた。

### 6号土坑

4号土坑に切られている。基盤凝灰岩風化土に掘り込んで作られている。平面形は楕円形(50cm×45cm)、埋土は1枚、砂質シルト、粘性。しまり中、褐色。遺物はほとんどない。

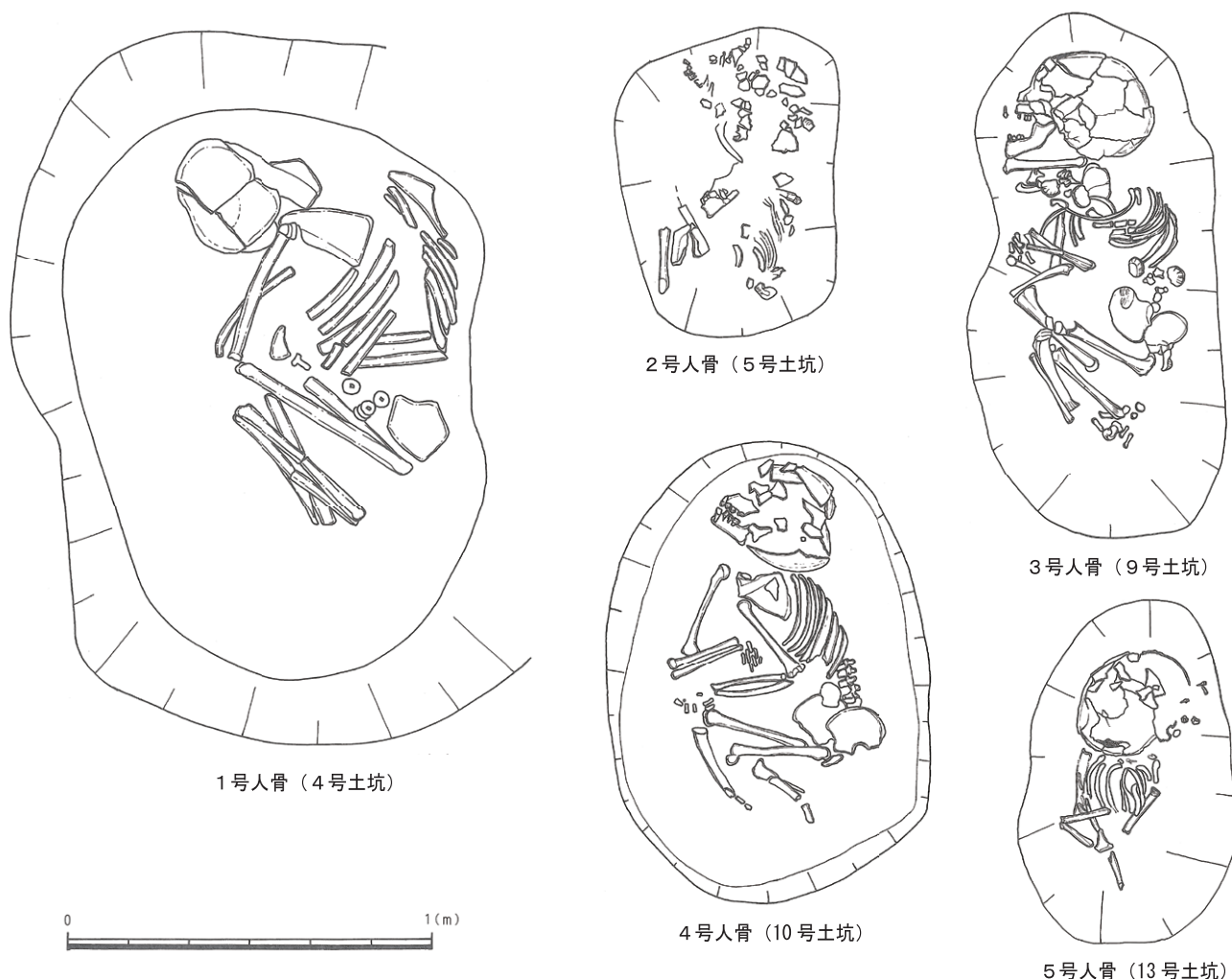
### 11号土坑

調査区外に一部かかっている。凝灰岩風化土を掘り込んでいる。平面形は楕円(50cm×45cm)、埋土は砂質シルト、しまり・粘性弱。褐色。下層に凝灰岩粒(直径5mm)を含む。遺物はほとんど含まない。

### c. 古代

#### 12号土坑

遺構は調査区外に広がるが隅丸方形(75cm以上×107.5cm)に掘り込まれた土坑である。長軸方向は磁北を西に70度振れている。埋土は2枚あり、下層は混土貝層(アサリ主体)である。凝灰岩基盤と貝層の端部に掘り込まれている。基底面にマグロの頭部、椎骨がままとって廃棄されている。土坑の壁近くに鉄製刀子(写真47-532)が置かれていた。



第32図 西畑地点南区人骨出土状況平面図

長さ186mm、幅28.3mm、厚8.6mmである。柄の部分に若干木質部を残している。埋土中の遺物は縄文土器が最も多いが、微細な古代の製塩土器破片も含まれている。また、12号土坑は戦国時代火葬墓と推定される7号土坑と13層、18層を介在させ、層的に下位に位置している。よって、戦国時代まで下ることはない。鉄製刀子と古代の製塩土器からの土坑の帰属時期を古代と推定した。W

#### d. 古墳時代

##### 8号土坑

ほぼ円形(36cm×30cm)の土坑である。長軸方向は磁北を東に40度振れている。7号土坑の下で確認された。埋土は1枚で、砂質シルト、黒褐色、粘性・しまり中、直径10mm程度の凝灰岩粒を含む。土坑の一方の壁近くに土師器杯が正位で埋納されていた。土師器杯(第40図190、写真42-417)は有段丸底で、口縁部には横方向のミガキがある。しかし、粘土が十分乾燥する前にミガキを行ったようで、光沢はあまり生じていない。内部も磨かれているが光沢はない。南小泉式に属すると考えられる。

##### ③ 南区の出土遺物

南区の出土品は弥生時代、縄文時代の遺物が出土している。5層までは現代、近世の遺物が混入している。最近までこの場所は不燃物廃棄場として機能していた。注目すべき遺物について記述する。

土器の多くは縄文時代後期後葉西ノ浜式に属するものが多い。21層以下(32層を除く)から純粋に後期後葉の貝層になる。11層からは土玉(第40図188、写真47-509)、24層から朱塗りの耳栓(第41図216、写真47-510)、他に環状耳飾り(写真47-511~514)が出土している。骨角器は11層から鹿角製離頭モリ3点(写真46-492~494)、鹿角製組合せ釣針先端部1点(第40図184、写真46-504)、32層からは珍しい鹿角製装身具(第41図231、写真46-506)が出土している。石製品番号5は12層から出土した玉である(第40図188、写真47-519)。やや緑色で、ヒスイの可能性もある。土器類には大型の破片は少ない。

#### 5) 平成9年度(第3次調査)のまとめ

平成9年度の里浜貝塚の発掘調査では、北区・南北トレンチから奈良時代の竪穴建物3棟、弥生時代寺下囲式の製塩遺構1基、縄文晩期大洞A式の製塩遺構2基、それに伴う製塩廃棄層を確認した。注目される遺物としては、奈良時代の鹿角製離頭モリ、ト骨、弥生時代樹形囲式に伴う離頭モリがある。東西トレンチ(西区)では縄文中期末から後期初頭の1m以上の厚さの泥炭層を確認し、大量の植物遺体を得た。また、縄文後期の木製品もわずかに出土した。南区では、戦国時代から江戸時代の墓域と古代の土坑1基、古墳時代の土坑1基、縄文後期後葉の貝層を確認した。

##### ① ト骨について

今回の調査ではじめてト骨が出土した。昨年の調査で平安時代の竪穴建物跡を調査したが、ト骨の検出はなかった。奈良時代の2棟の竪穴建物跡からト骨が出土したことは、この時代、里浜でト占の習慣がかなり頻繁に行われていたことを示している。

また、第1次調査の第2トレンチでは灰白色火山灰層直下からウシの下顎骨や距骨、橈骨が出土した。今回は1号竪穴建物から焼けたウシ(?)の橈骨、2号竪穴建物埋土からウマの末節骨とウシまたはウマの肋骨を利用したト骨が出土している。古代には宮戸島は現在とは異なり完全に本土から切り離された島であったと考えられる。その島で牛馬という家畜が飼育されていた可能性に注目しなくてはならない。灰白色火山灰下層において水稻の可能性がプラントオパール分析で指摘された。それを受けて農耕用牛馬の可能性も出て来る。奈良時代のト占が多賀城城内(富岡1992)、山王遺跡(宮城県教育委員会1994)で行われていた事実を考えると、宮戸島に居した集団が陸奥国の政治的中心部と強い関連があった可能性も出て来る。

##### ② 里浜貝塚出土の古代製塩土器

昨年の調査では平安時代の製塩土器が遺構から出土した。今年度の調査では奈良時代の竪穴建物から製塩土器が出土した。まず注目されるのは切り合い関係にある2号竪穴建物では製塩土器が出土したにも拘らず、3号竪穴建物からは製塩土器が出土しないことである。現在の所、里浜貝塚では古墳時代の土器は検出されているが、同時期の製塩土器は検出されていない。ここで、奈良時代前半と考えられる国分寺下層に伴う製塩土器が認められないことに注目すると、

里浜における古代製塩開始時期が具体的に示される可能性がある。

### ③ 製塩炉と廃棄層

今回の調査では3基の製塩炉と考えられる遺構を検出した。その構造は礫敷の1号製塩炉、周辺に練り物を配置した2、3号製塩炉の二者があった。前者と類似した構造を持つ製塩炉は宮城県七ヶ浜町鬼ノ山山貝塚（七ヶ浜町教育委員会 1982）、塩釜市新浜遺跡（宮城県教育委員会 1986）で知られている。後者については未報告ながら、七ヶ浜町二月田貝塚で検出されているという。里浜貝塚では東歴史資料館の調査により、灰土を敷き詰めたたくぼみのある構造の炉が検出されている（東歴 1988）。これらは時期的には礫敷炉が弥生時代寺下囲式、練り物配置炉は縄文晩期大洞A式、灰土を敷き詰めたたくぼみ炉は大洞C2式と時期的な違いと言えそうである。廃棄層出土土器の内製塩土器を除いた、精製、粗製土器の接合の結果、3号製塩炉と廃棄層との間でいくつかの個体の土器が接合した。これは炉と廃棄層の同時性を証明している。さらに、製塩炉内で、製塩土器以外の精製、粗製土器も利用されていた可能性が生じてきた。廃棄層の詳細な遺存体分析は現在進行中であるが、灰層は焼けた微細貝類などを含んでいる、それぞれの層の内容は微妙に異なるようである。これらと製塩作業との対応が証明できるか今後の課題である。

### ④ 東西トレンチ（西区）の泥炭層

里浜貝塚で泥炭層を発掘できたことは画期的なことである。そこに縄文時代の遺物を含むことが明らかになり、泥炭層の年代についても出土遺物に基づき縄文中期末から後期初頭の時期を与えることができた。この泥炭層の内容については、花粉分析、種子分析、樹種同定分析をすすめている。種子にはクルミ、トチなど食糧資源となる可食植物が多く含まれ、当時の里浜集落をとりまく植生環境が具体的に復元できる見通しがついた。8層から大量のマツ球果が出土している。松島の景観を代表するマツの登場は、平安時代以降という研究があったが、宮戸島においては、縄文中期末にはマツが繁っていたものと言える。

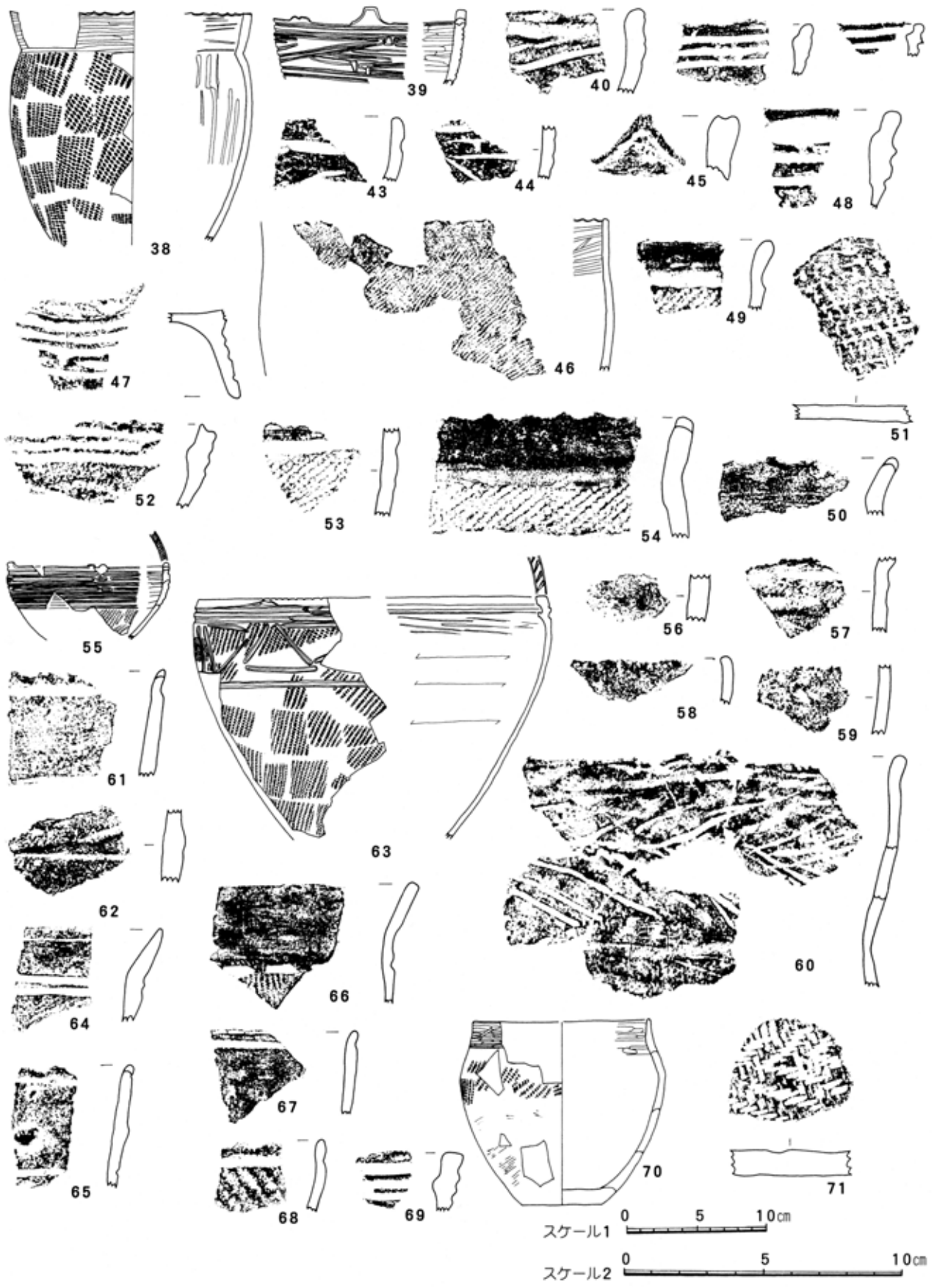
### ⑤ 南区の戦国・江戸時代の墓地

里地区には江戸時代以来の家族墓地が点々と認められる。それらの家族墓地は今でも祖先祭祀が行われているものもあるが、多くは宮戸島の唯一の寺、観音寺に新たに墓を作り、改葬している例が多い。今回検出された土葬墓、火葬墓、幼児墓は戦国時代から江戸時代の墓で、現状では墓碑もなく、地表からその存在を知ることはできなかった。さらに旧地権者もこの墓地の存在は知らなかった。忘れられた墓地である。この墓を含む墓域があったものか、この調査区だけではわからない。この墓域では成人の火葬墓と土葬墓、幼児は土葬される習慣が認められた。宮戸島で土葬以前に火葬の習慣があったことも地元で知る人はいなかった。宮戸島の文献記録はほとんどなく、今後考古学的に解決して行かなければならない問題である。



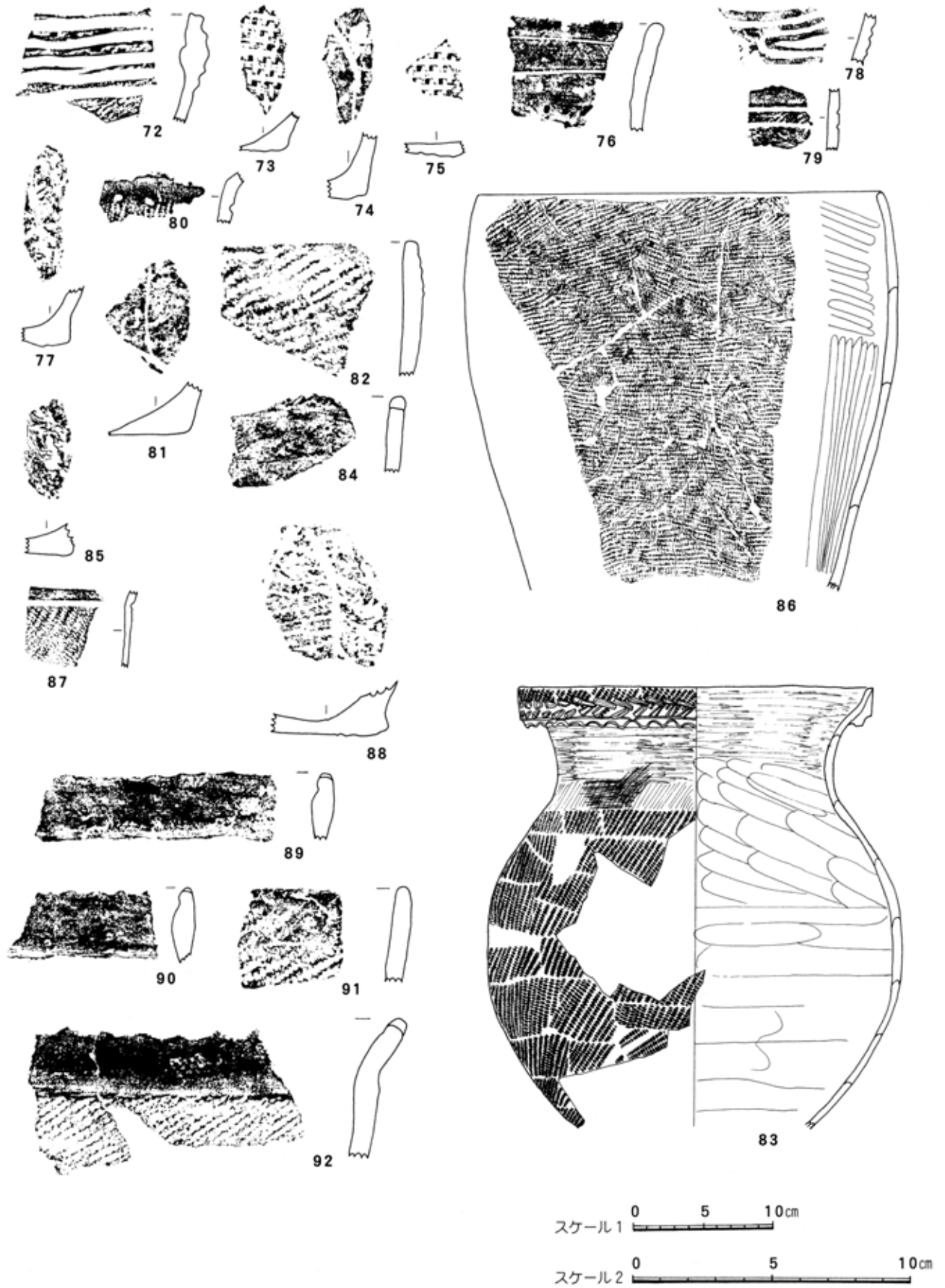
第33図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物(1)

1:1号竪穴建物 2~4:2号竪穴建物 5:3号竪穴建物 6:北区3層 7~11:北区5層 12~25:北区6層 26~32:北区8層  
33:北区10層 34:北区12層 35:北区13層 36:北区14層 37:北区15層  
1~5・26はスケール1 他はスケール2



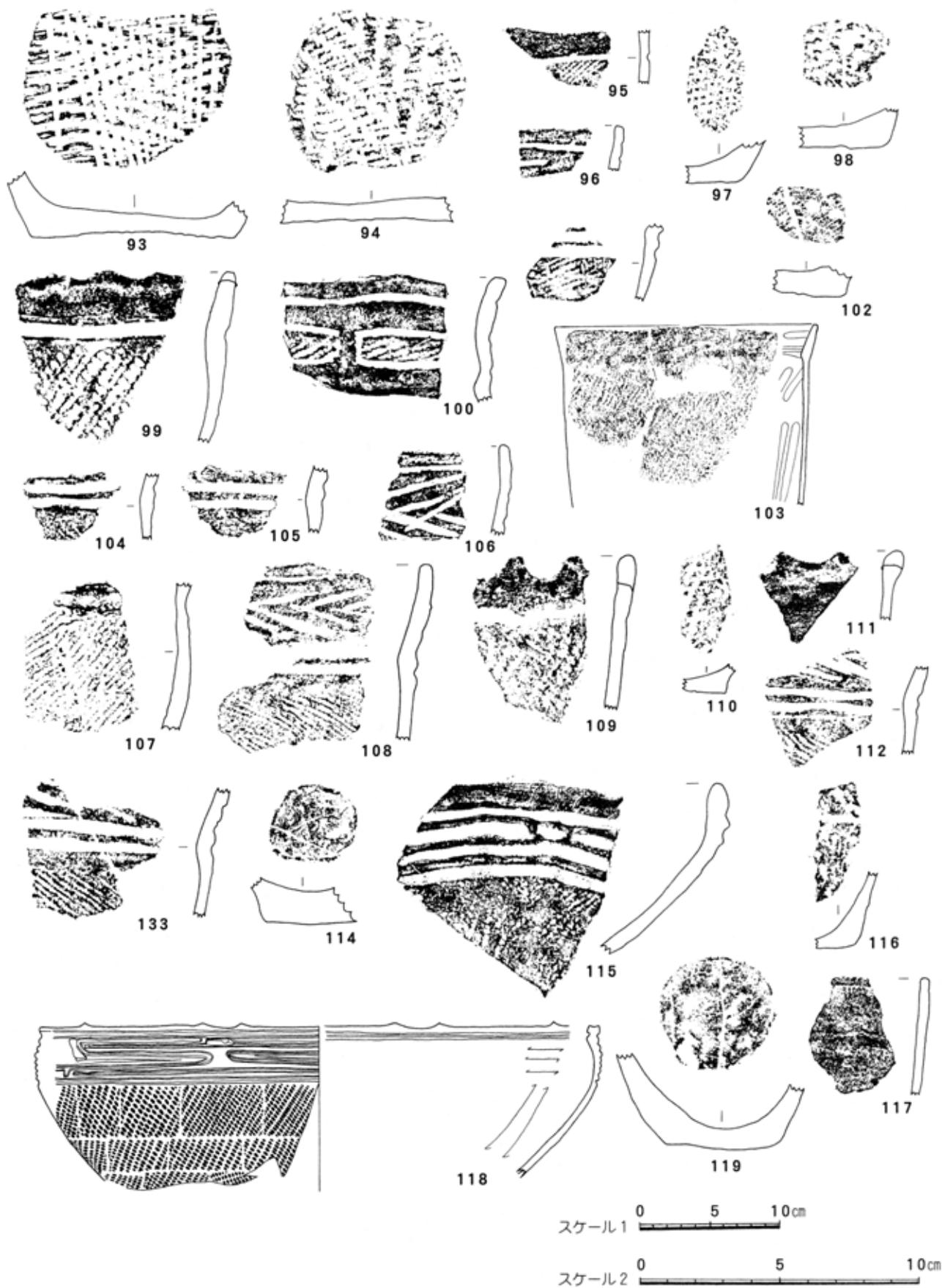
第34図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物(2)

38~44: 北区15層 45: 北区17層 46: 北区21層 47: 北区30層 48~50: 北区34層 51: 北区37層 52~55: 北区38層 56~60: 北区41層  
 61: 北区42層 62: 北区43層 63: 北区44層 64~65: 北区48層 66~68: 北区49層 69~70: 北区51層 71: 北区53層  
 38・39・46・55・63・70はスケール1 他はスケール2



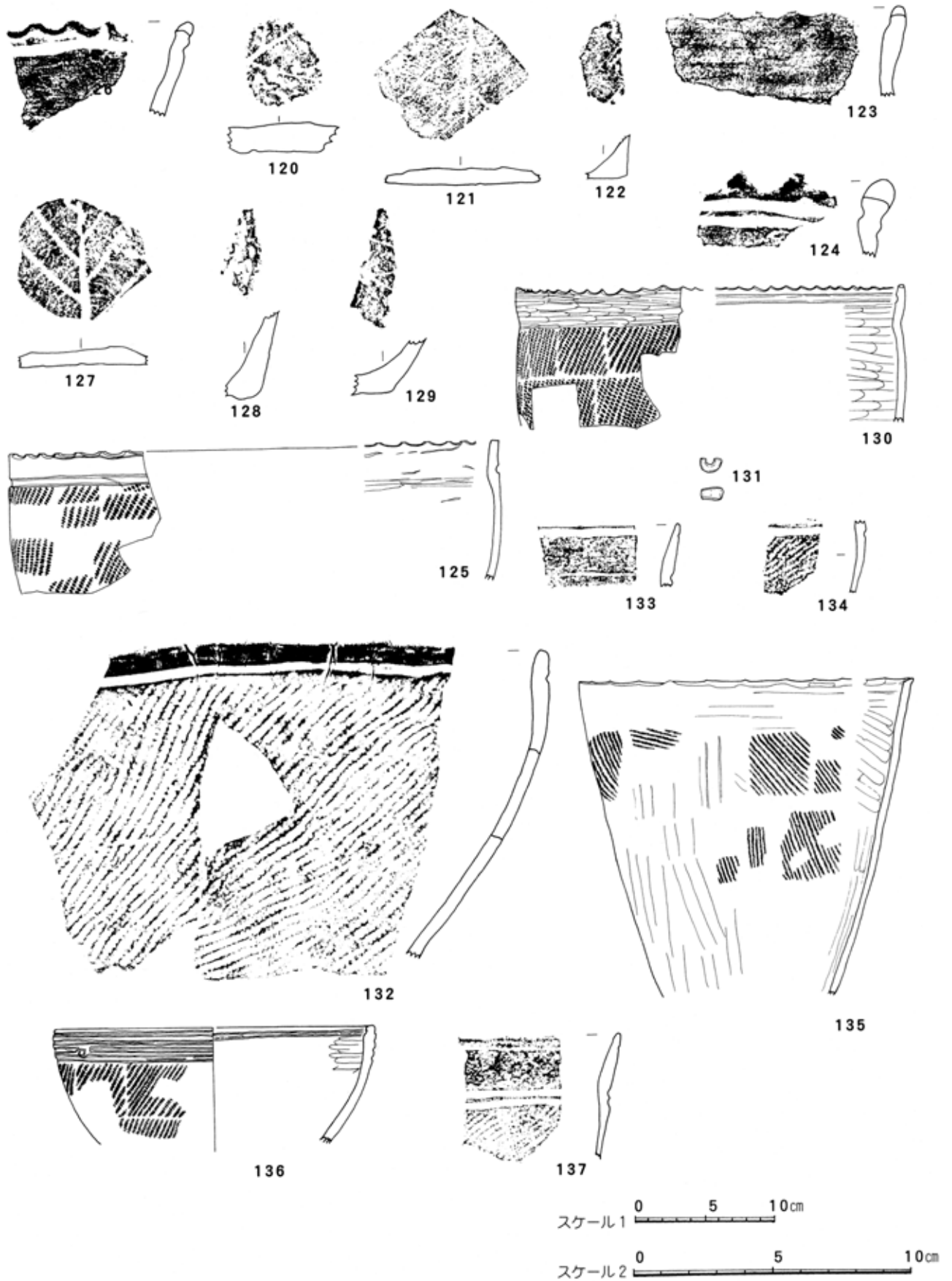
第35図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物(3)

72: 北区56層 73-76: 北区58層 78: 北区59層 79-83: 北区62層 84-85: 北区63層 86-88: 北区64層 89-92: 北区65層  
 83・86はスケール1 他はスケール2



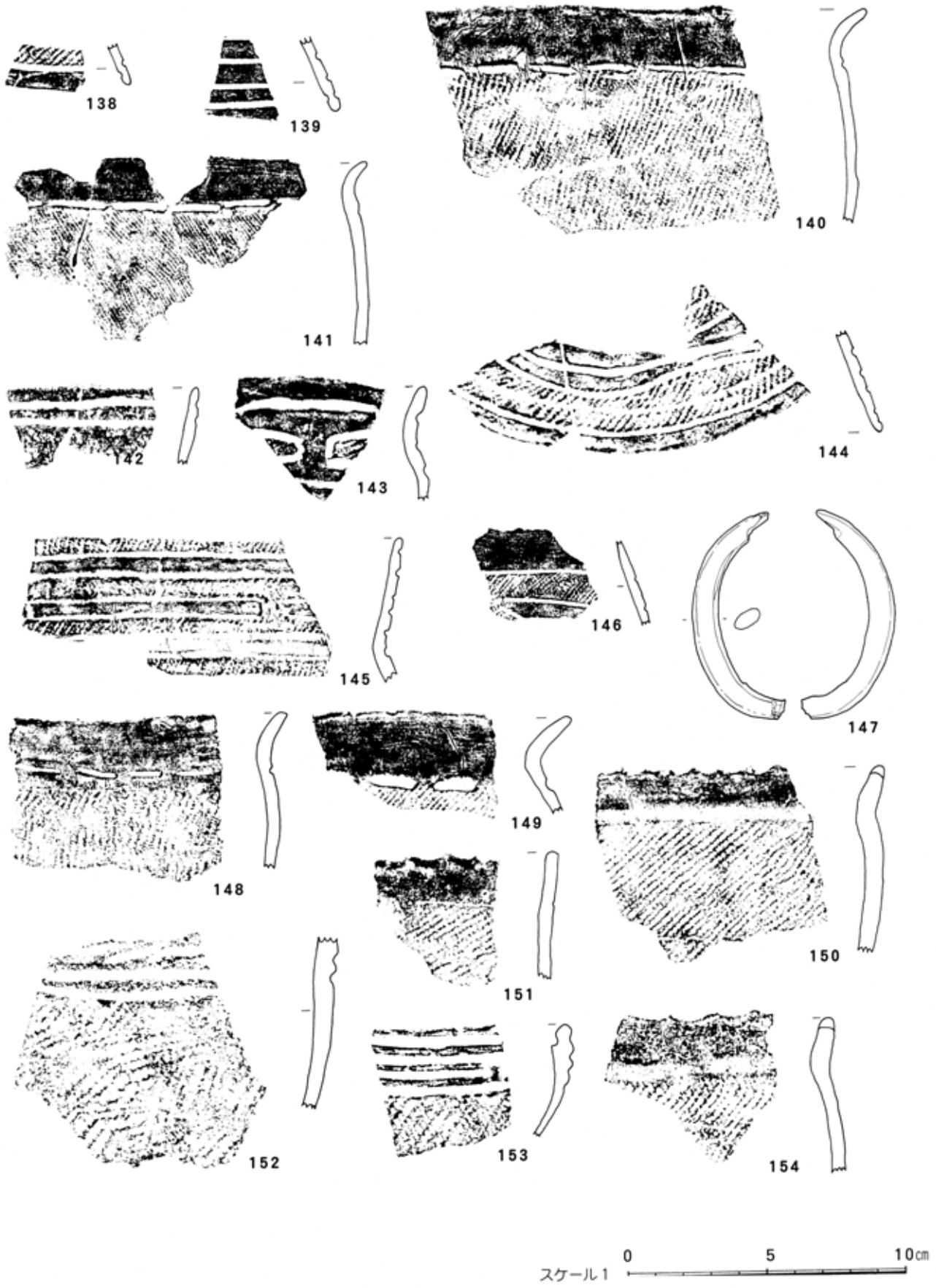
第 36 図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物 (4)

93~99 北区70層 100 北区71層 101、102 北区73層 103~110 北区74層 111 北区75層 112、113 北区77層  
 114、115 北区79層 116、117 北区80層 118、119 北区81層  
 103、118はスケール1、他はスケール2



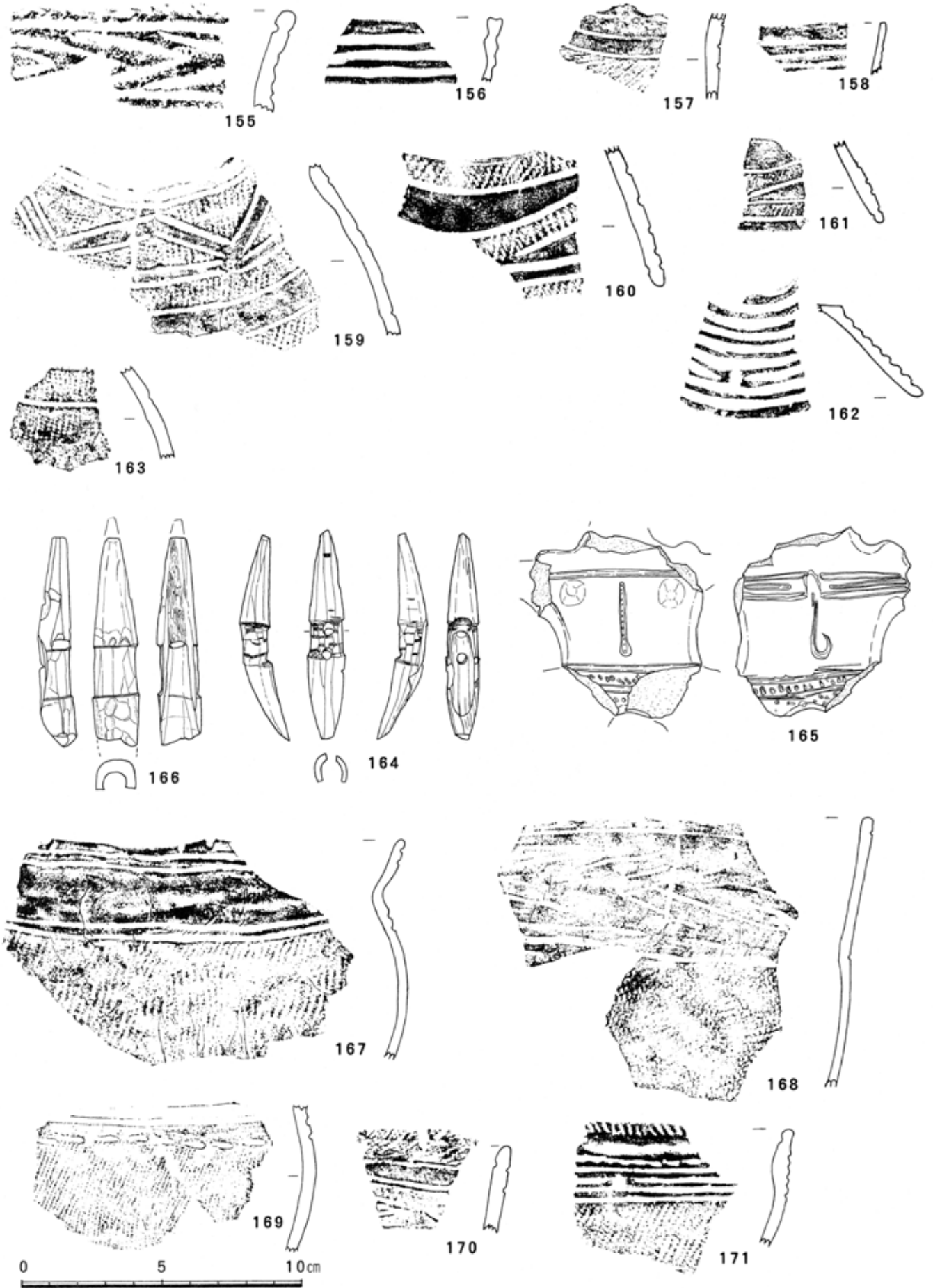
第37図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物(5)

120~122: 北区81層 123~125: 北区82層 124: 北区83層 126~127: 北区84層 128: 北区85層 129: 北区88層 130: 北区93層  
 131: 北区95層 132: 北区96層 133~134: 北区100層 135: 北区埋設土器 136: 北区風倒木痕 137: 北区P1  
 125・130・135・136 はスケール 他はスケール2



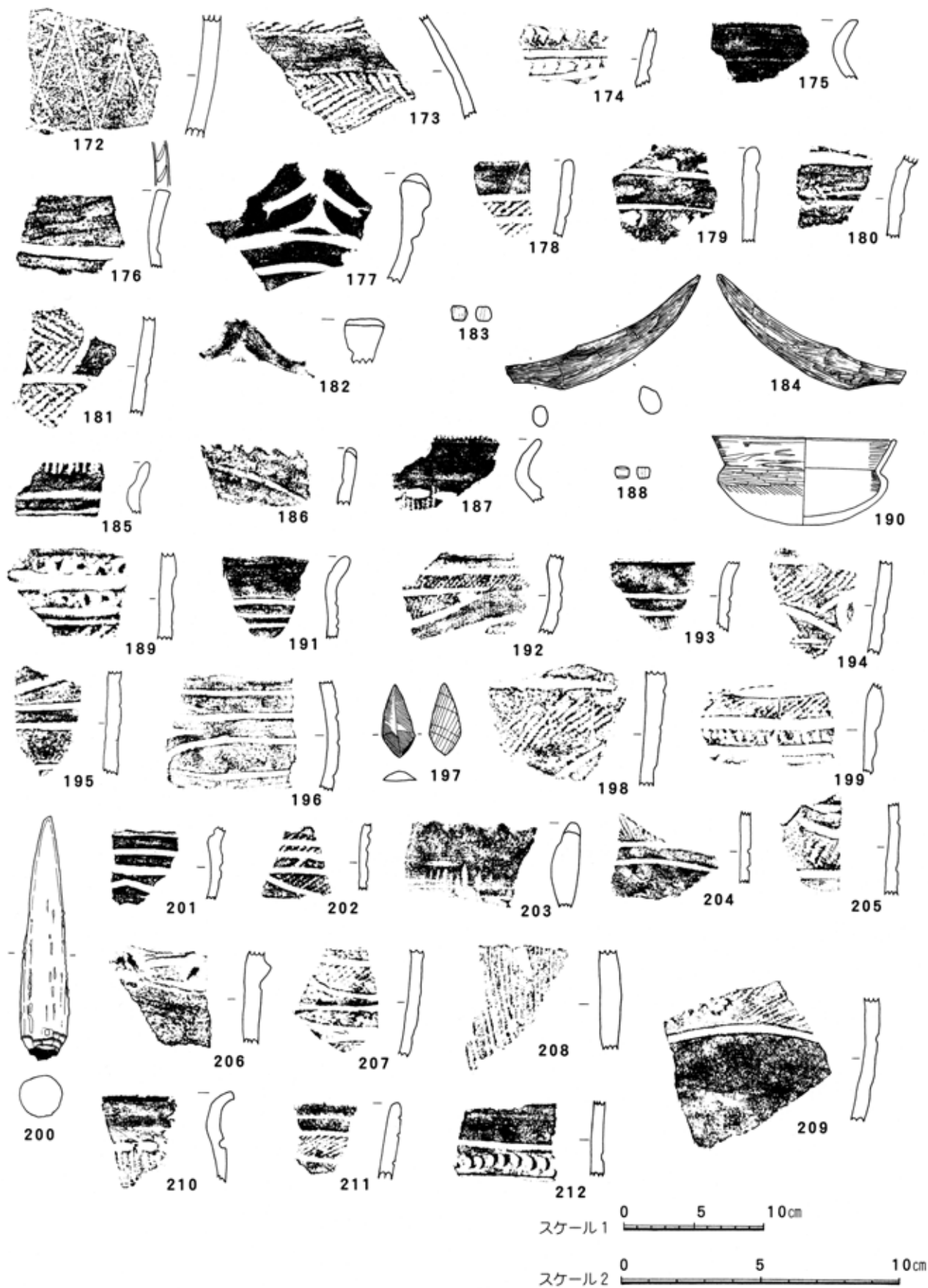
第 38 図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物 (6)

138~147: 北区 1 号製塩炉 148~154: 南北トレンチ 6 層



第39図 里浜貝塚北区・南北トレンチ出土遺物(7)

155~162・164・165・169：南北トレンチ 167~171：北区攪乱



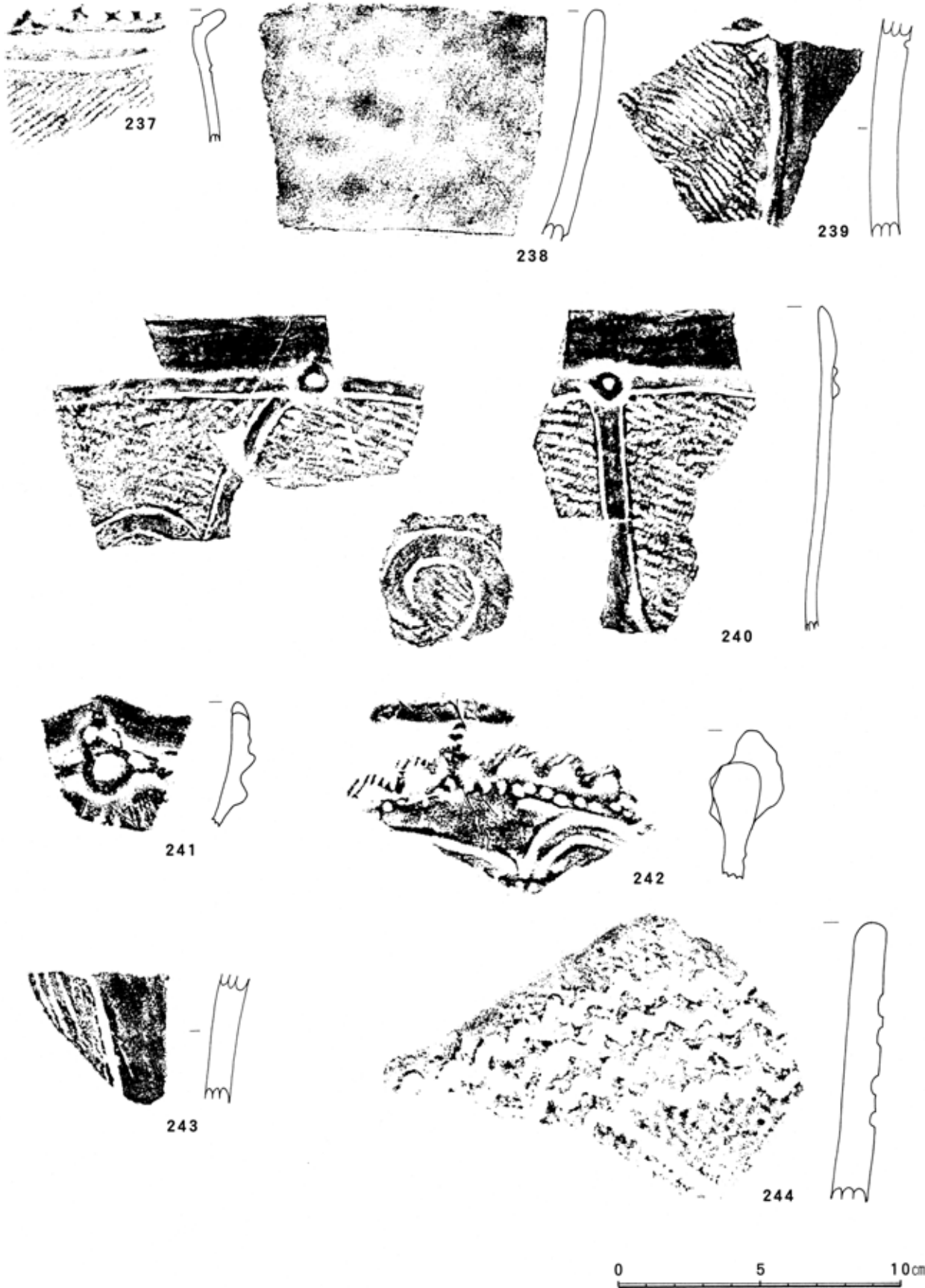
第 40 図 里浜貝塚南区出土遺物 (1)

172~174：南区 7 層 175~181：南区 9 層 182：南区 10 層 183・184：南区 11 層 185~189：南区 12 層 190：南区 8 号土坑 191~195：南区 13 層  
 196：南区 14 層 197：南区 9 号土坑 198・199：南区 17 層 200・201：南区 10 号土坑 202~208：南区 18 層 209：南区 19 層 210~212：南区 20 層  
 190 はスケール 1 他はスケール 2



第41図 里浜貝塚南区出土遺物(2)

213~215: 南区23層 216: 南区24層 217~22: 0南区25層 221~222: 南区26層 223~225: 南区27層 22: 清掃土  
236: 7,8層上面清掃土  
226はスケール1 他はスケール2



第 42 図 里浜貝塚東西トレンチ（西区）出土遺物

237・238：東西トレンチ 6 層 239～242：東西トレ 8 層 243：東西トレ 9 層 244：東西トレ 礫層



1. 里浜貝塚西畑地点全景



2. 西畑地点 97 年度調査区 北区貝層平面分布



3. 西畑地点 97 年度調査区 北区発掘状況

写真 24 西畑地点 (第3次調査) (1)



1. 西畑地点北区 1号竖穴建物



2. 1号竖穴建物カマド



3. 北区 製塩炉検出状況 (全体)



4. 1号製塩炉 (弥生時代)



5. 1号製塩炉



6. 1号製塩炉細部



7. 2号製塩炉 (縄文時代晩期)



8. 2号製塩炉の練り物ブロックの根固めアワビ

写真 25 西畑地点 (第3次調査) (2)



1. 3号製塩炉（縄文時代晩期）



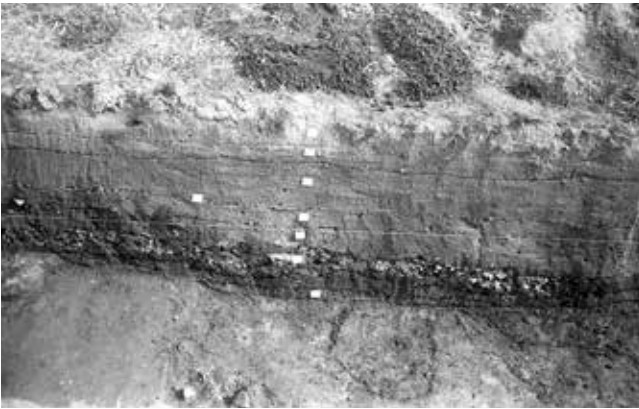
2. 3号製塩炉細部



3. 北区 奈良時代離頭鋸出土状況（2層）



4. 西畑地点南北トレンチ 2・3号竪穴建物全景



5. 南北トレンチ層序



6. 3号竪穴建物全景



7. 3号竪穴建物ト骨検出状況

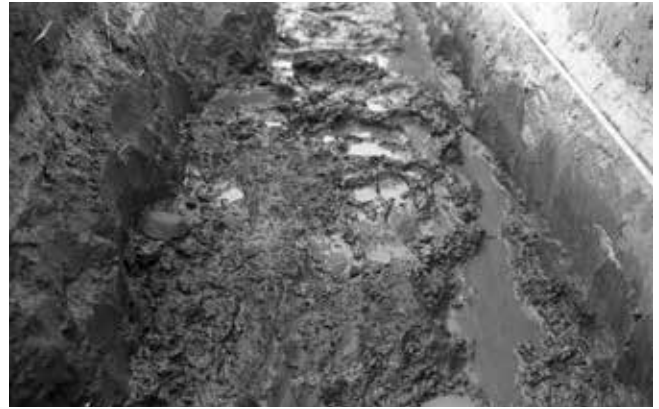


南北トレンチ（GL51-15）土偶出土状況（6層）

写真 26 西畑地点（第3次調査）(3)



1. 西畑地点東西トレンチ（西区）全景



2. 東西トレンチ（西区）6層木材出土状況



3. 東西トレンチ（西区）8層土器出土状況



4. 東西トレンチ（西区）8層木材出土状況



5. 東西トレンチ（西区）8層木材出土状況



6. 西畑地点南区 遺構全景



7. 南区層序



8. 南区4号土坑1号人骨（江戸時代）出土状況

写真 27 西畑地点（第3次調査）(4)



1. 南区1号土坑火葬骨（戦国時代）出土状況



2. 南区3号土坑火葬骨（戦国時代）出土状況



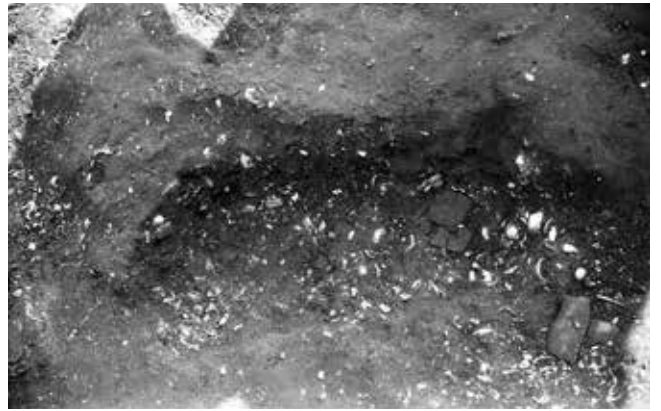
3. 南区7号土坑火葬骨（戦国時代）出土状況



4. 南区5号2号人骨（戦国時代）出土状況



5. 南区9号土坑3号人骨（戦国時代）出土状況



6. 9号土坑完掘状況



7. 南区10号土坑4号人骨（戦国時代）出土状況



8. 南区13号土坑5号人骨（戦国時代）出土状況

写真28 西畑地点（第3次調査）(5)

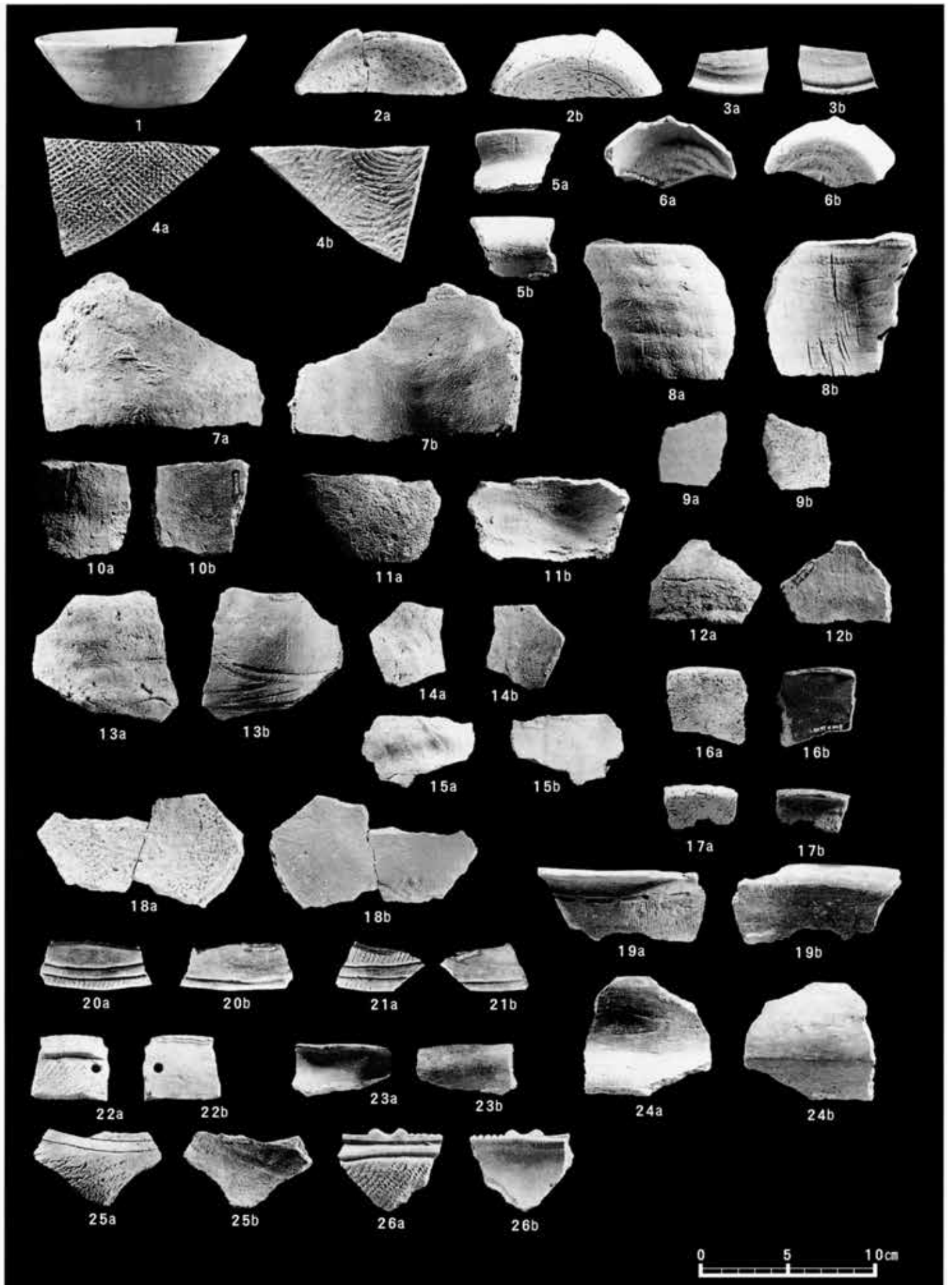


写真 29 西畑地点出土土器(1) S= 1/3

1~26: 1号竖穴建物

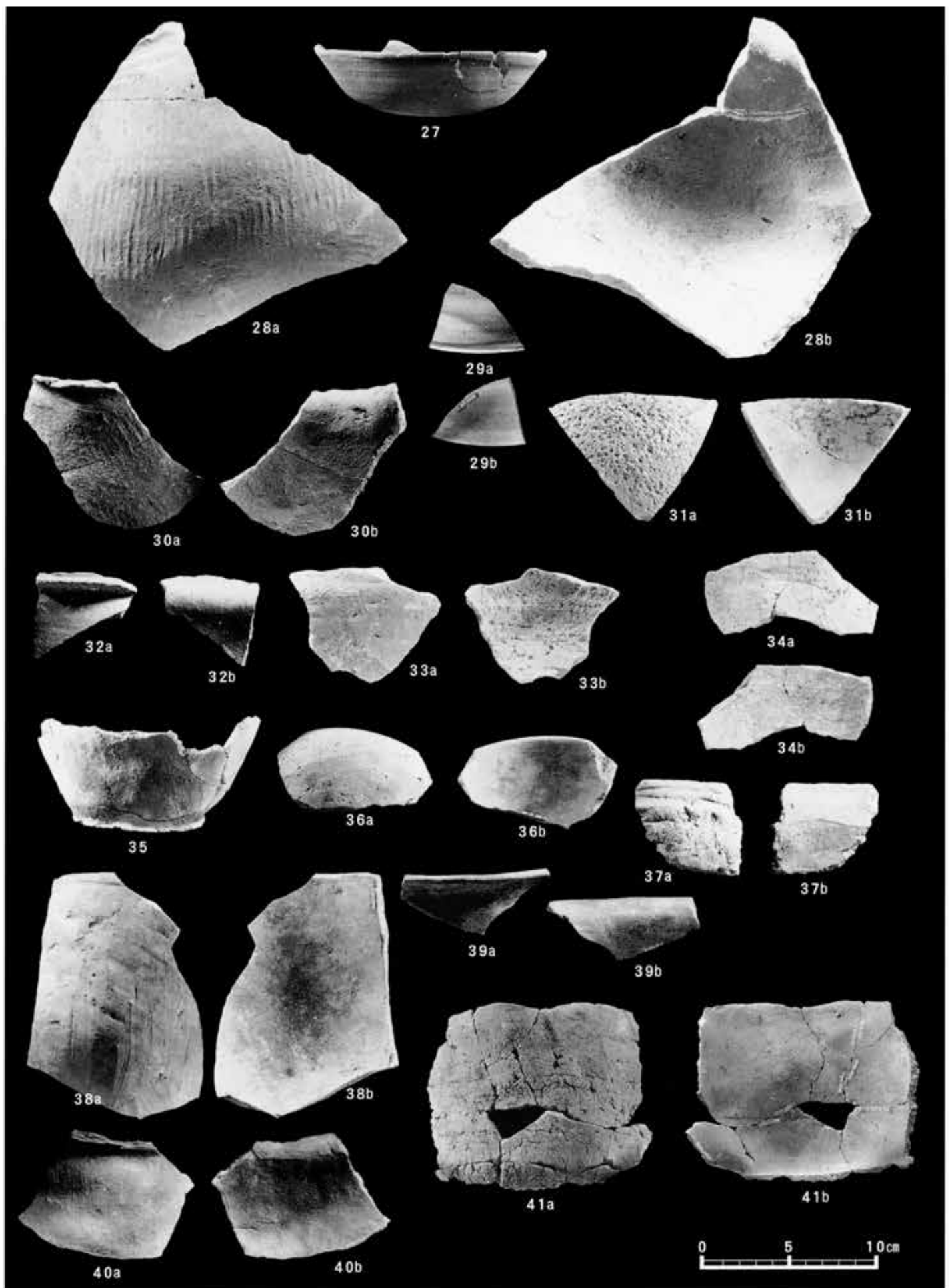


写真 30 西畑地点出土土器 (2) S= 1/3

27~41: 2号竪穴建物

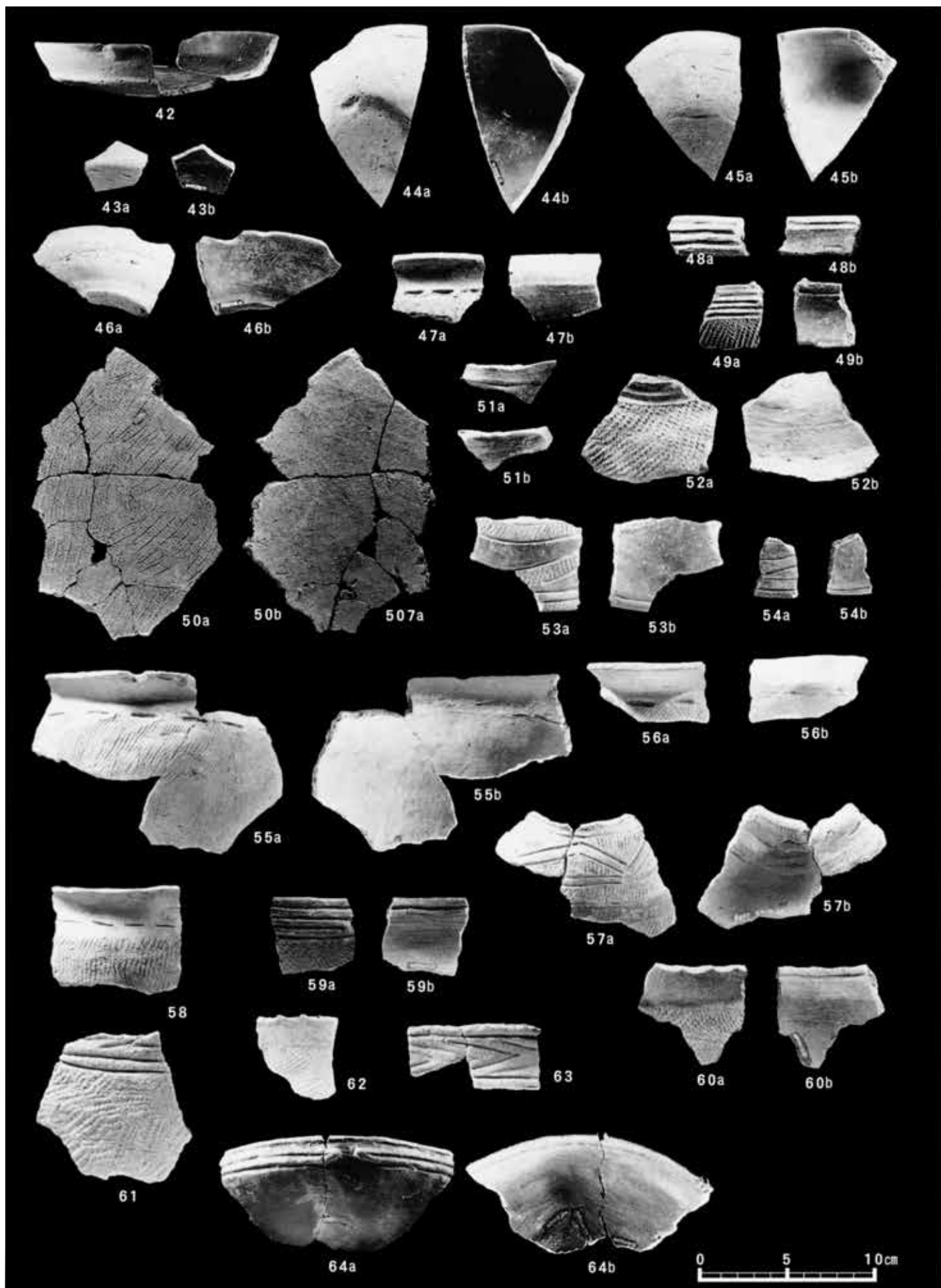


写真 31 西畑地点出土土器 (3) S= 1/3

42-52 : 3号竪穴建物 53-64 : 南北トレンチ6層

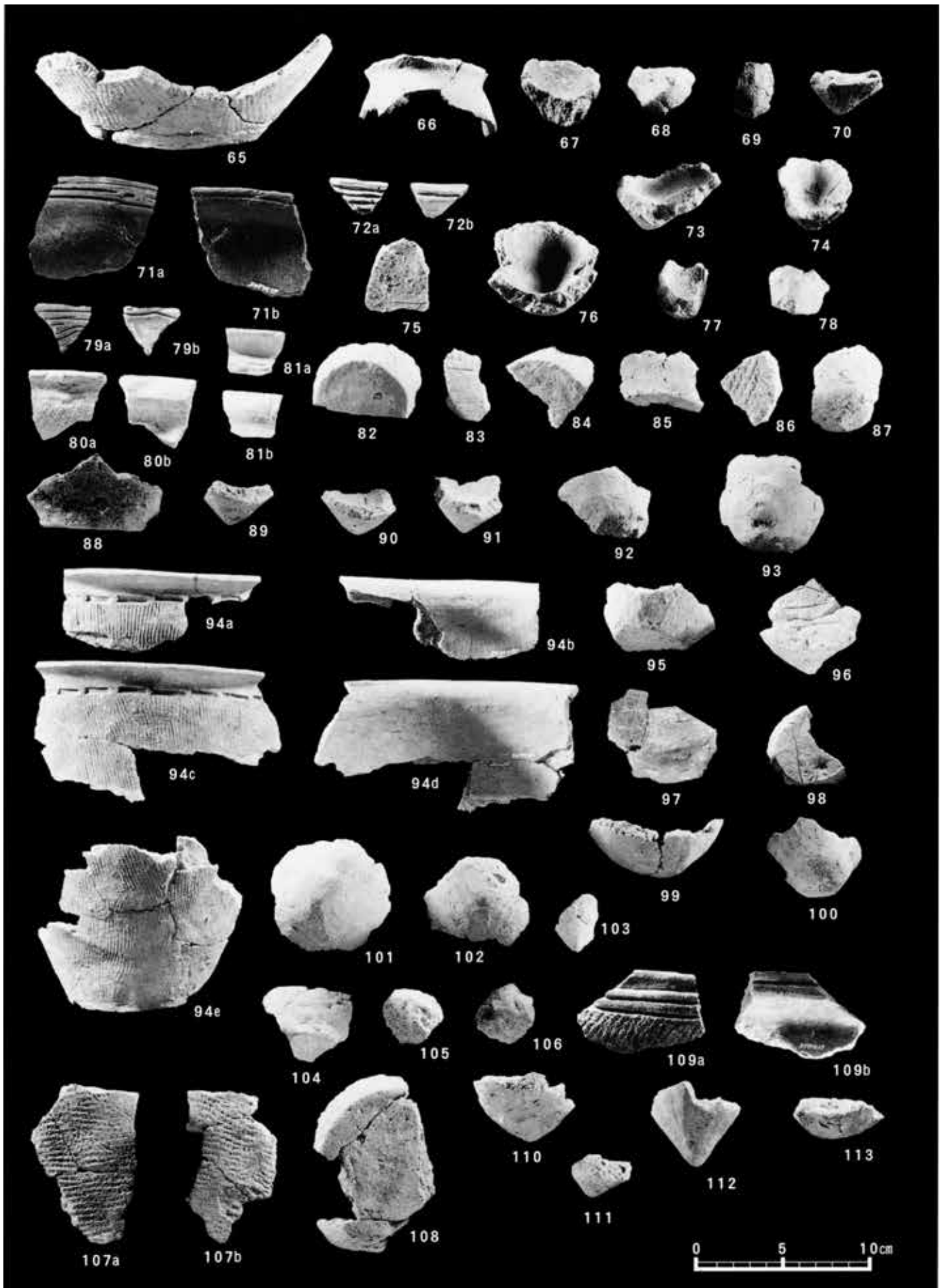


写真 32 西畑地点出土土器(4) S=1/3

北区出土 65~70 : 3層 71~78 : 5層 79~87 : 6層 88~93 : 7層 94~100 : 81層 101~106 : 9層 107~108 : 10層  
109~113 : 12層

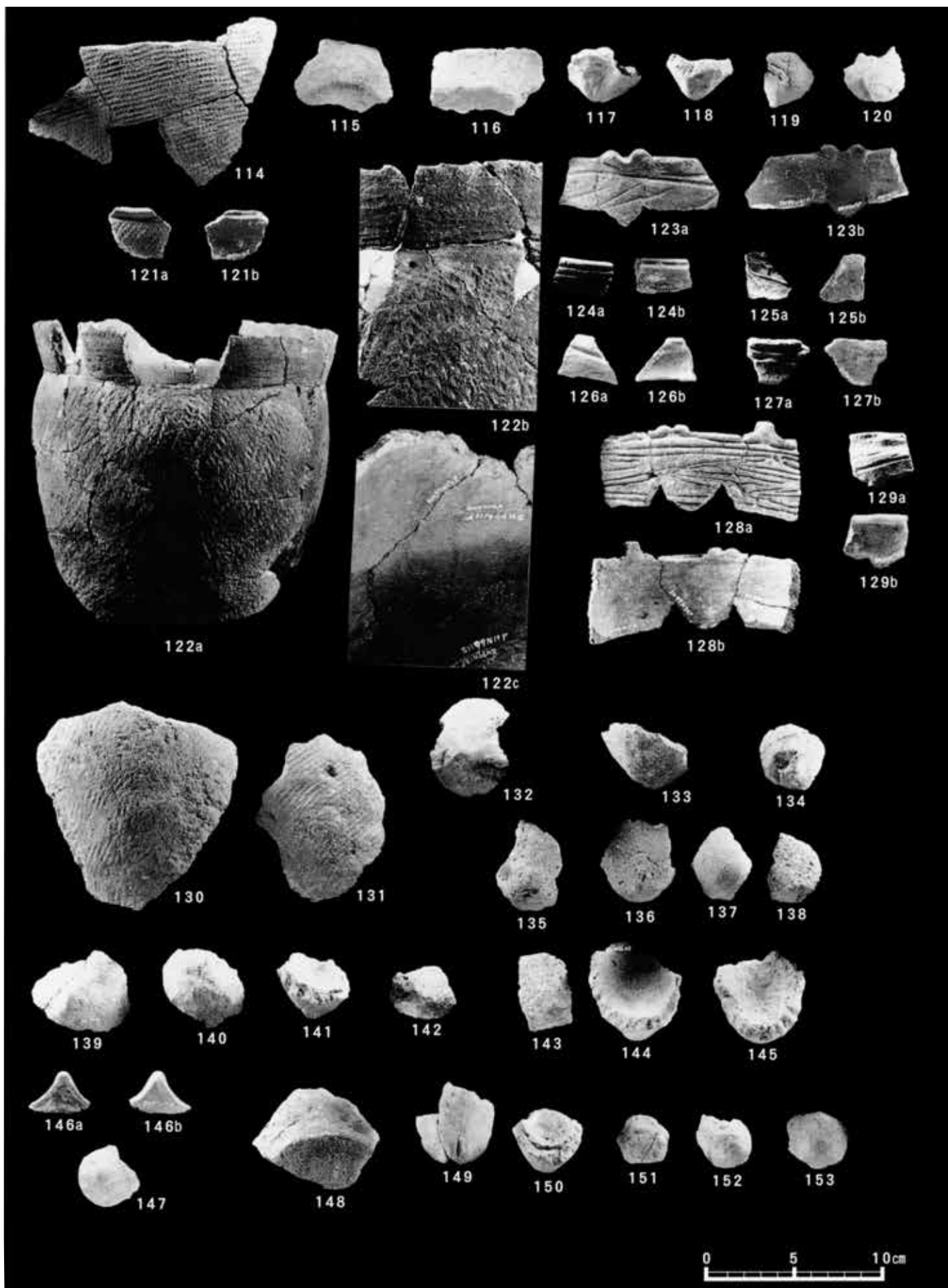


写真 33 西畑地点出土土器 (5) S = 1/3

北区出土 114~120:13層 121:14層 122~138:15層 139~145:16層 146~153:17層

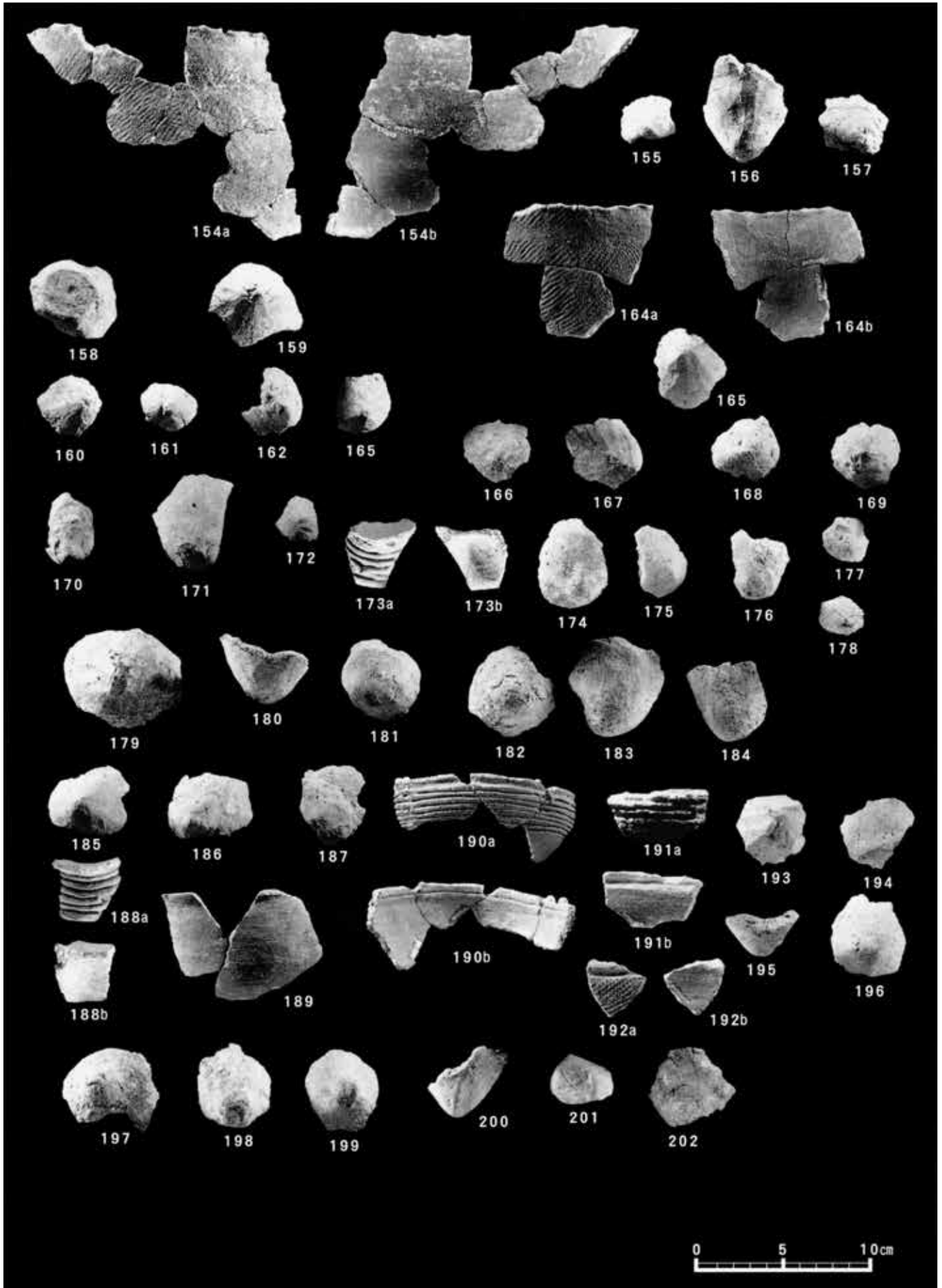


写真 34 西畑地点出土土器(6) S=1/3

北区出土 154~157 : 21層 158~163 : 24層 164~169層 : 25層 170~172 : 27層 173~178 : 30層 179~184 : 31層  
185~187 : 32層 188 : 34層 189 : 37層 190~196 : 38層 197~202 : 39層

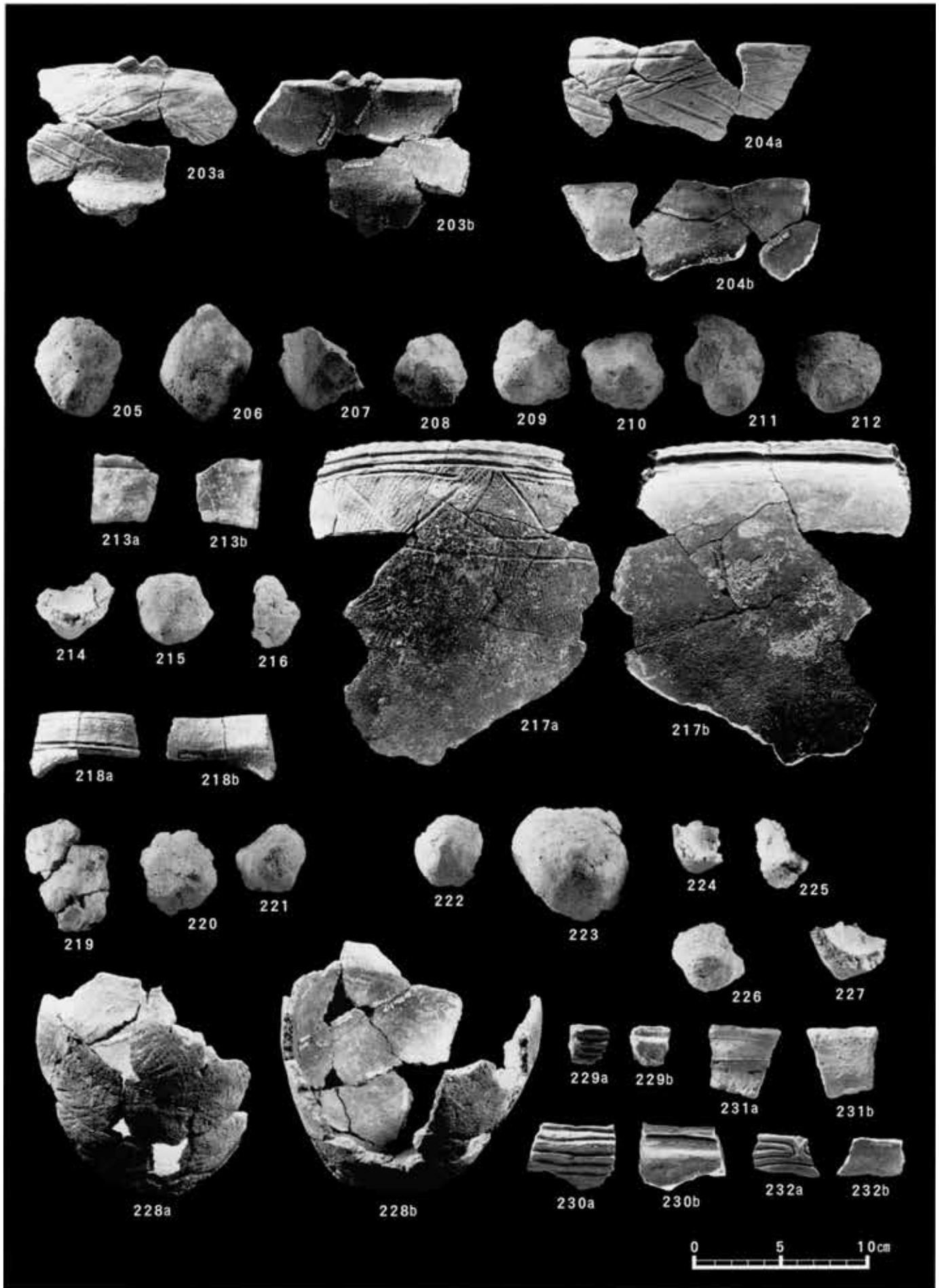


写真 35 西畑地点出土土器 (7) S = 1/3

北区出土 203~212: 411層 213: 42層 214~216: 43層 217: 44層 218~221: 48層 222~227: 49層 228~229: 51層  
 230: 56層 231: 57層 232: 59層

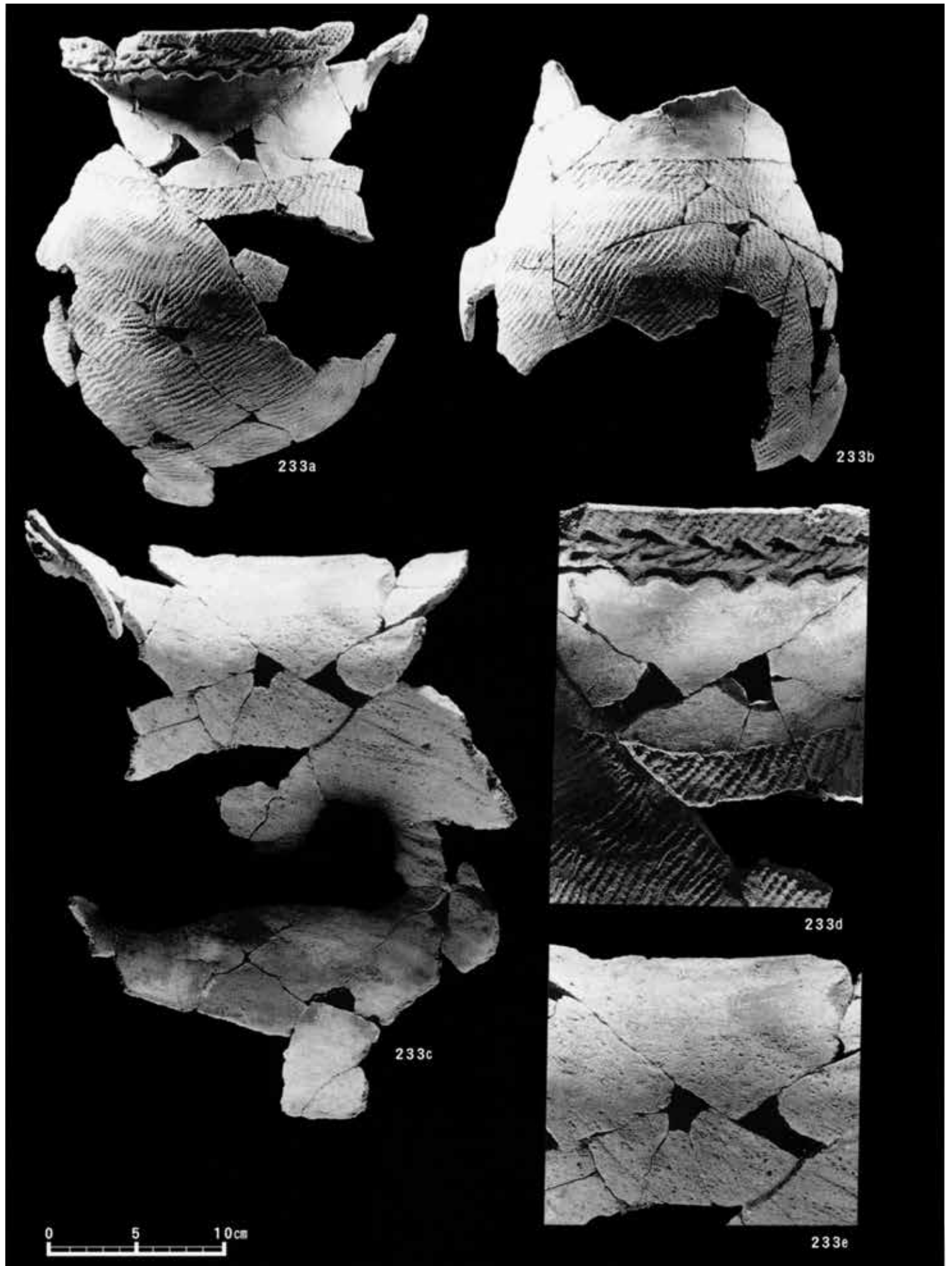


写真 36 西畑地点出土土器(8) S = 1/3

北区出土 233:62層

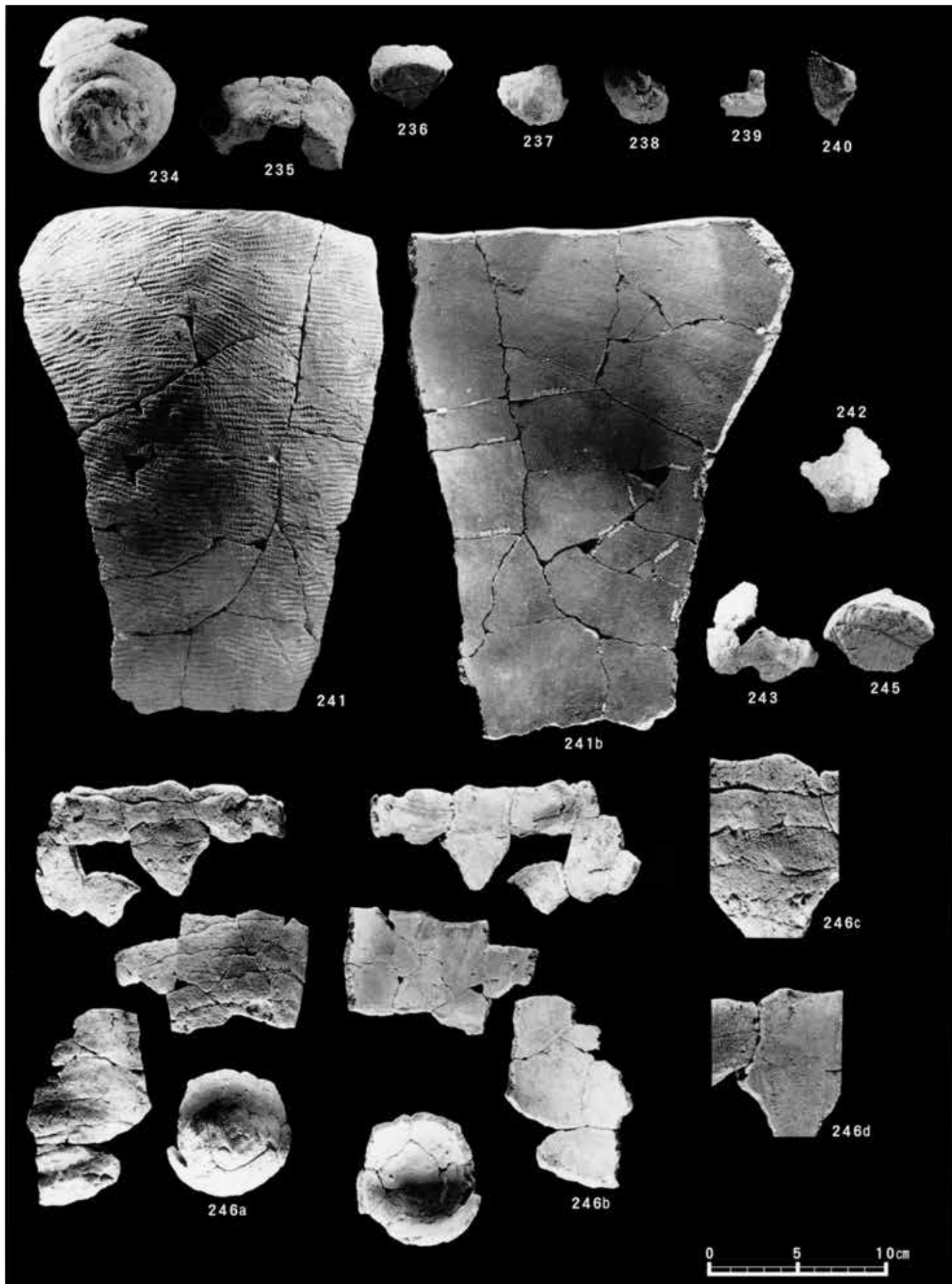


写真 37 西畑地点出土土器 (9) S = 1/3

北区出土 234~240 : 62層 241~246 : 64層

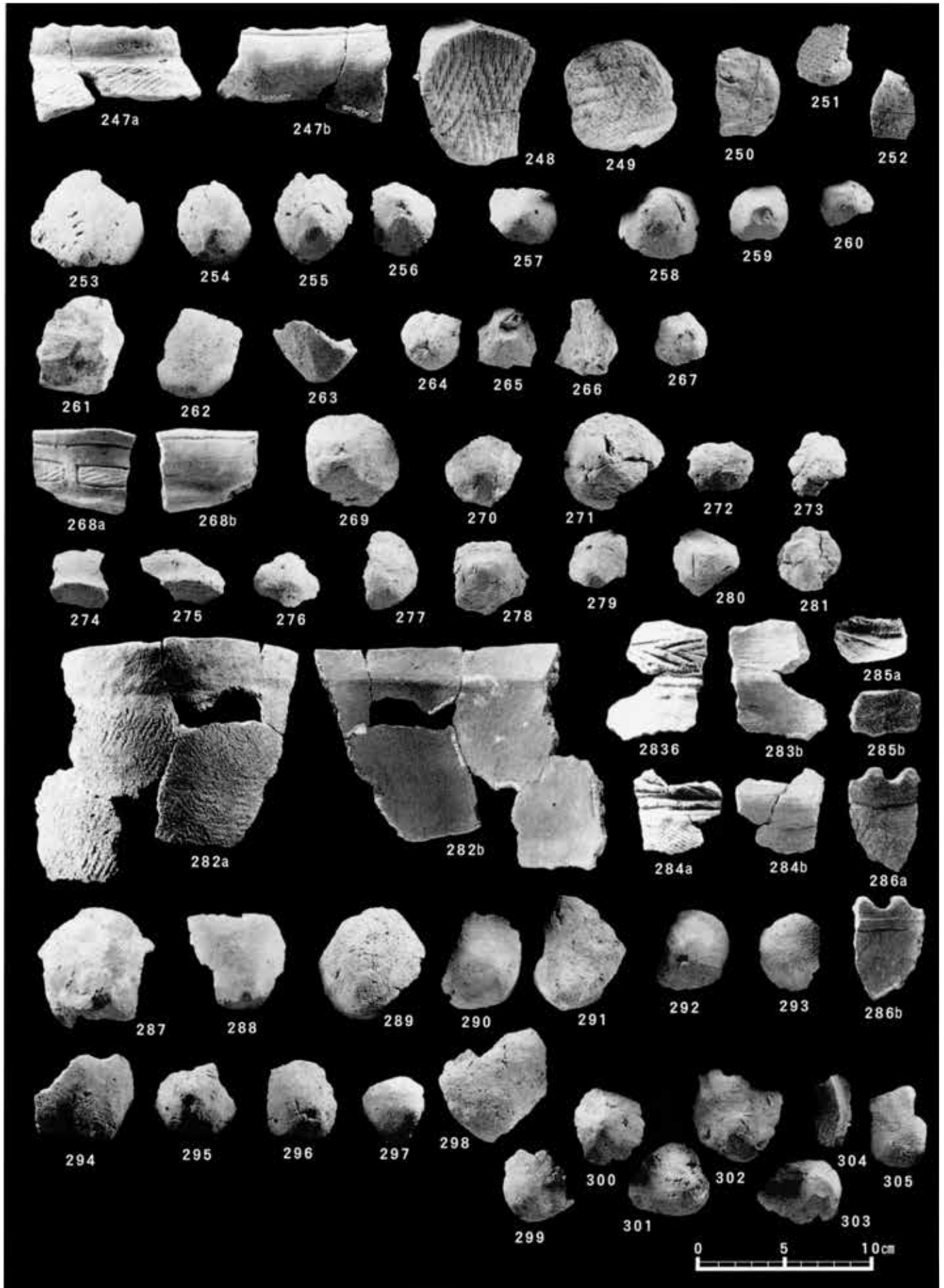


写真 38 西畑地点出土土器 (10) S = 1/3

北区出土 247 : 65層 248~260 : 70層 261~267 : 71層 268~273 : 72層 274~281 : 73層 282~305 : 74層

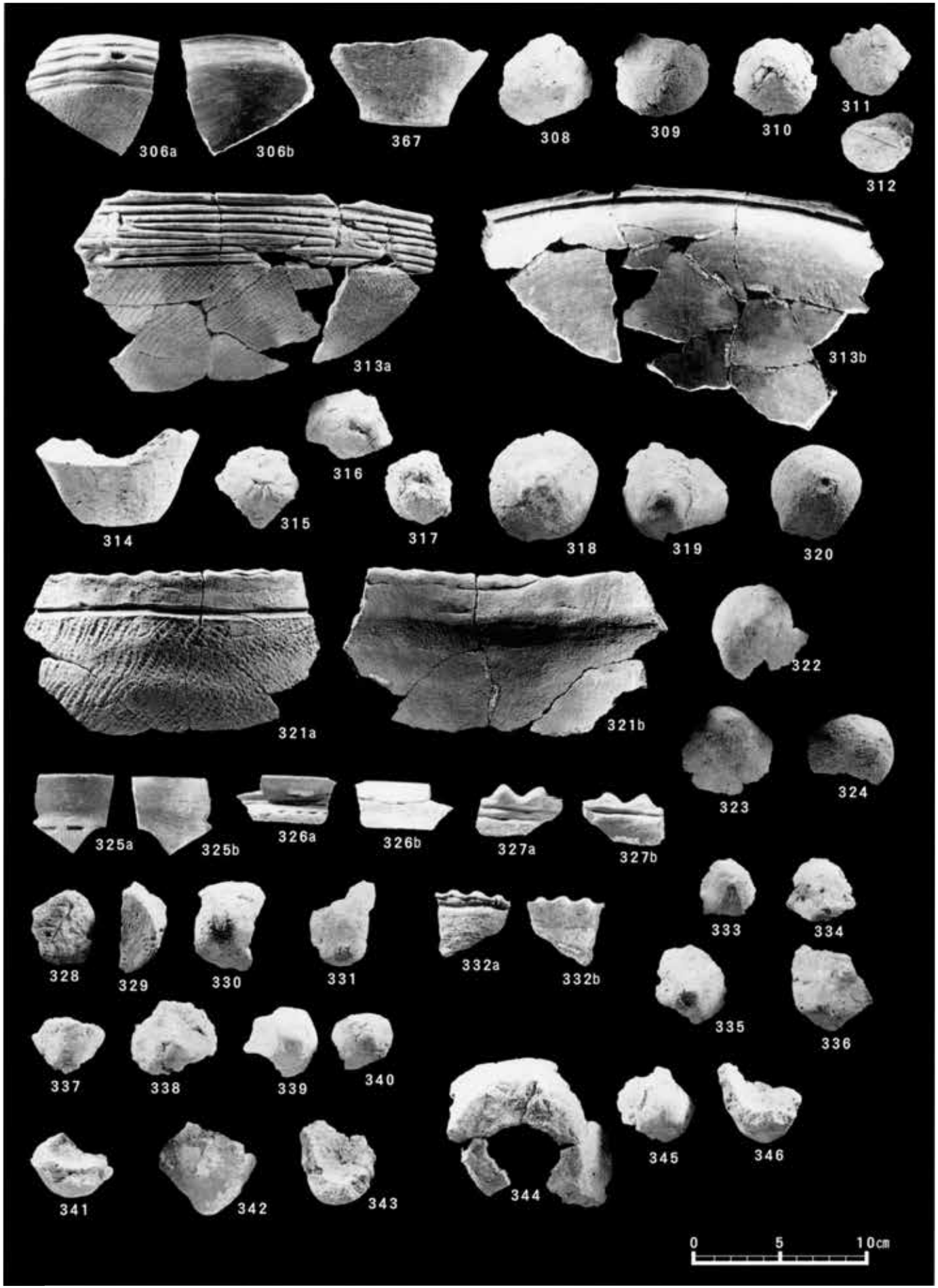


写真 39 西畑地点出土土器 (11) S = 1/3

北区出土 306~312 : 79層 313~320 : 81層 321~324 : 82層 325~331 : 83層 332 : 84層 333~336 : 85層  
 337~340 : 86層 341~346 : 93層

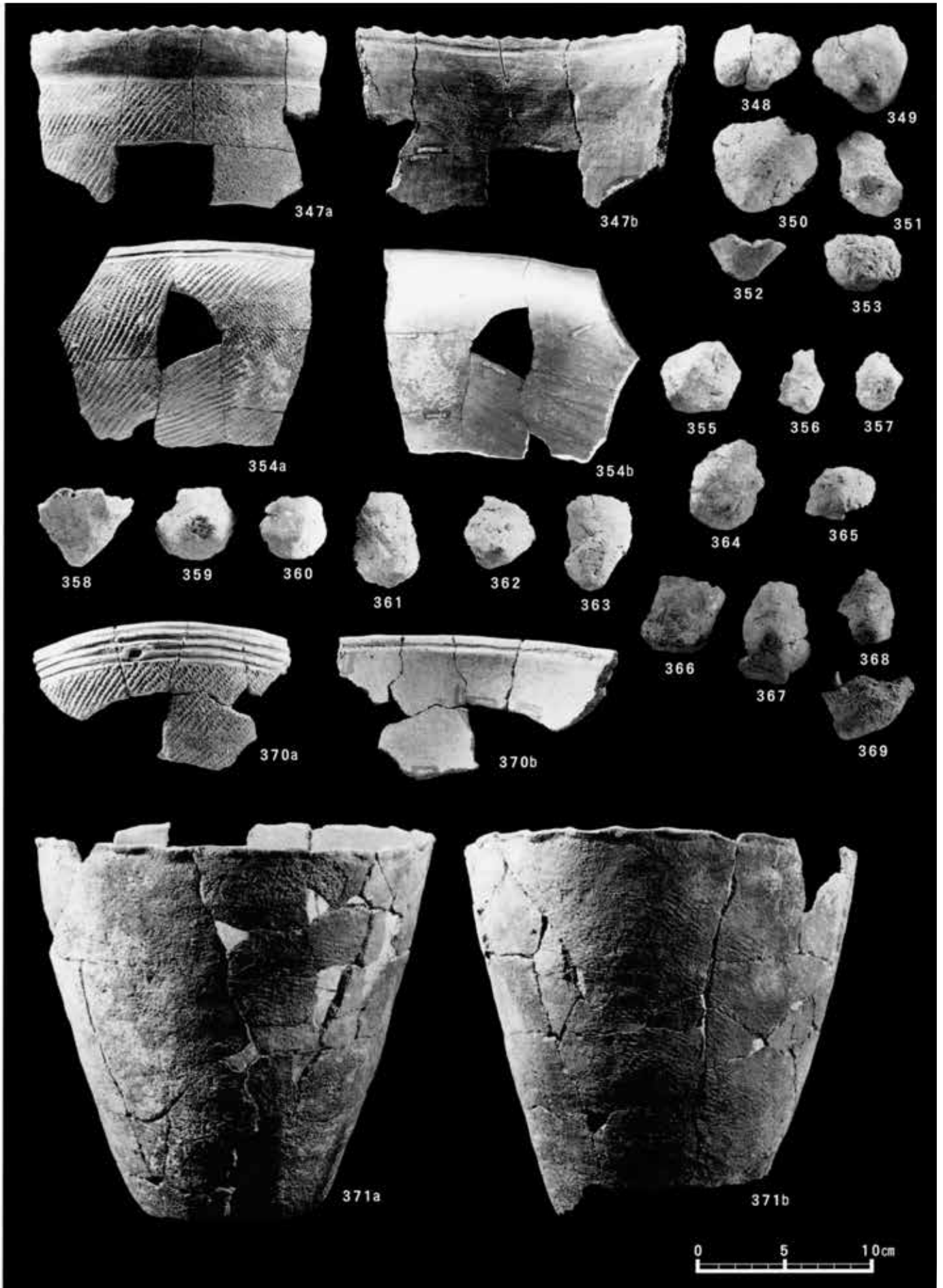


写真 40 西畑地点出土土器 (12) S = 1/3

北区出土 348 : 93層 348~353 : 5層 354 : 96層 355~357 : 100層 358~361 : 103層 362~363 : 104層  
364~365 : 105層 368~369 : 106層

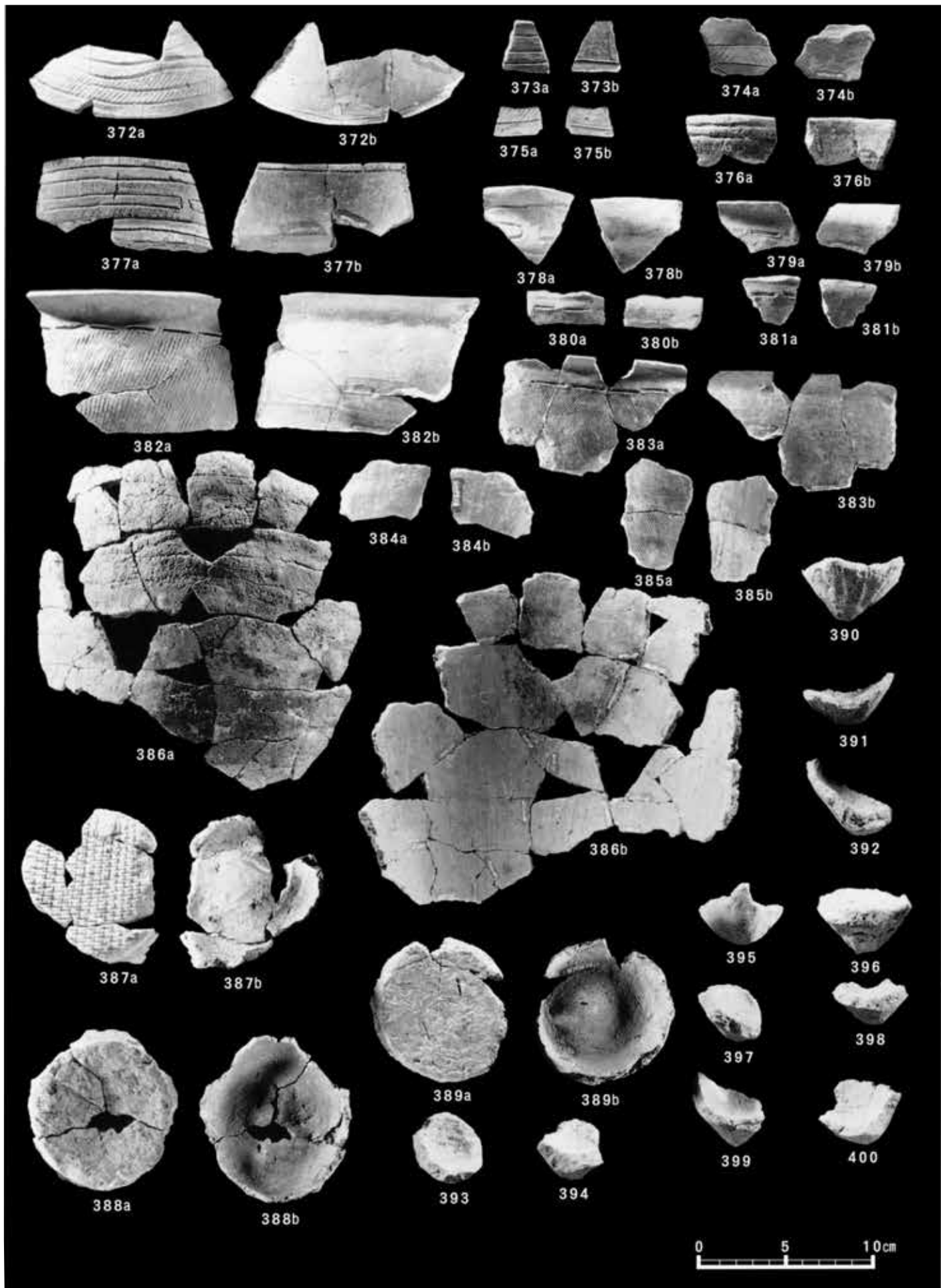


写真 41 西畑地点出土土器 (13) S = 1/3

北区出土 372~400 : 1号製塩炉

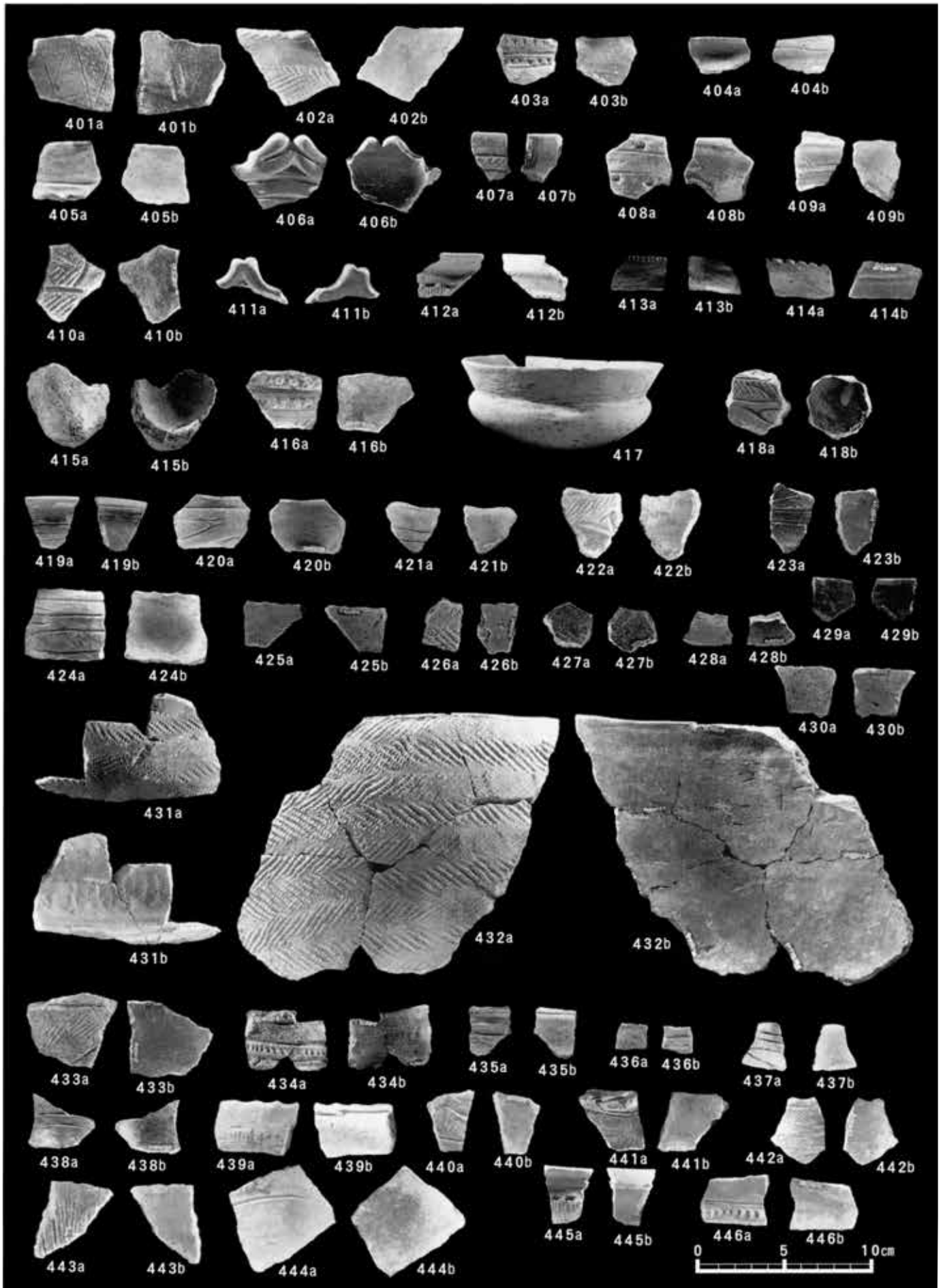


写真 42 西畑地点出土土器 (14) S = 1/3

南区出土 401~403 : 7層 404~410 : 9層 411 : 10層 412~416・431 : 12層 417 : 8号土坑 418 : 5号土坑 419~423 : 13層  
 424 : 14層 425~430 : 9号土坑 432~434 : 17層 435~436 : 10号土坑 437~443 : 18層 444 : 19層 445 : 20層

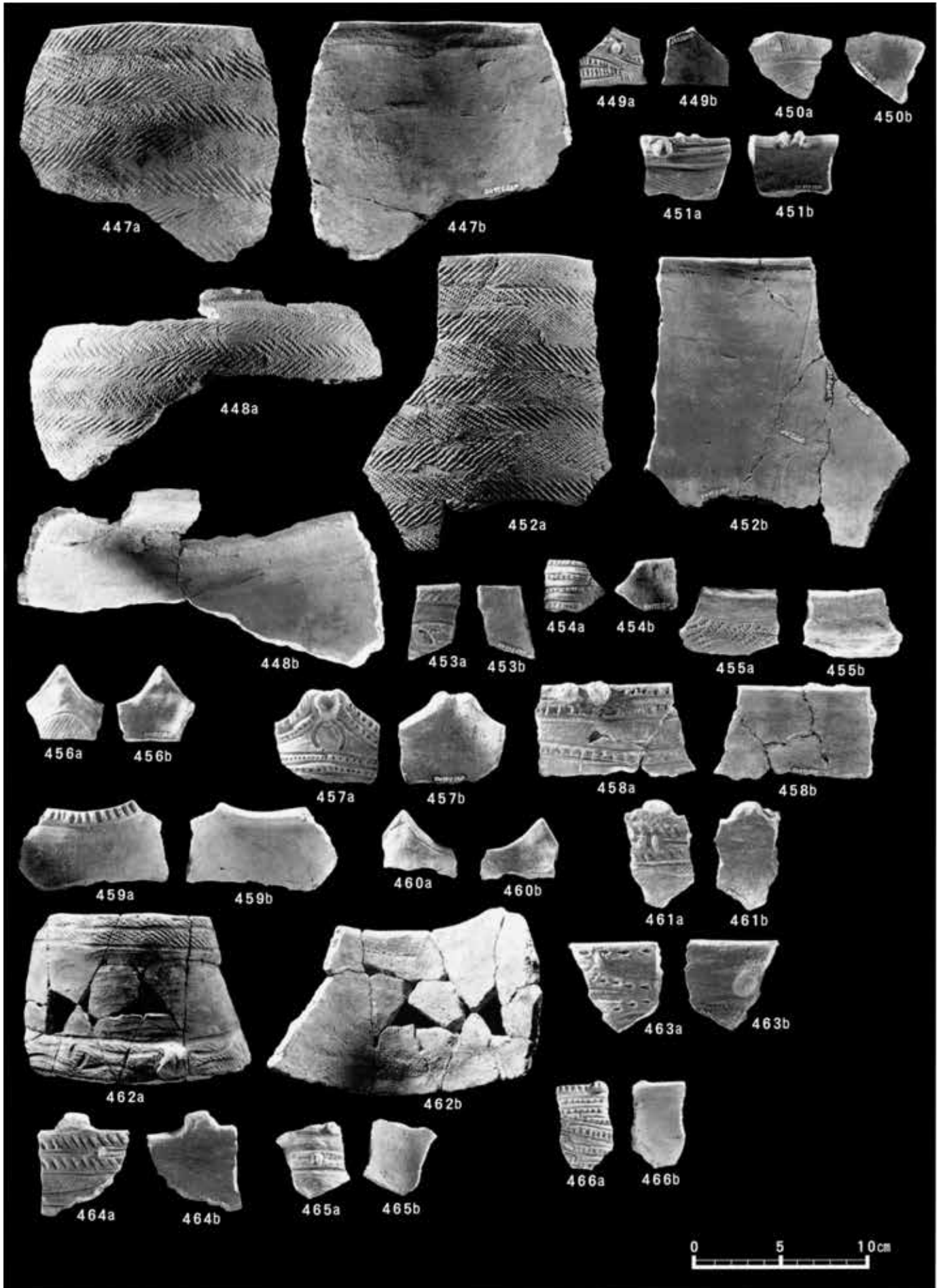


写真 43 西畑地点出土土器 (15) S = 1/3

南区出土 447 : 22層 448-452 : 23層 453-456 : 25層 457-458 : 26層 459-461 : 27層 462 : 28層  
 464-465 : 30層 466 : 31層

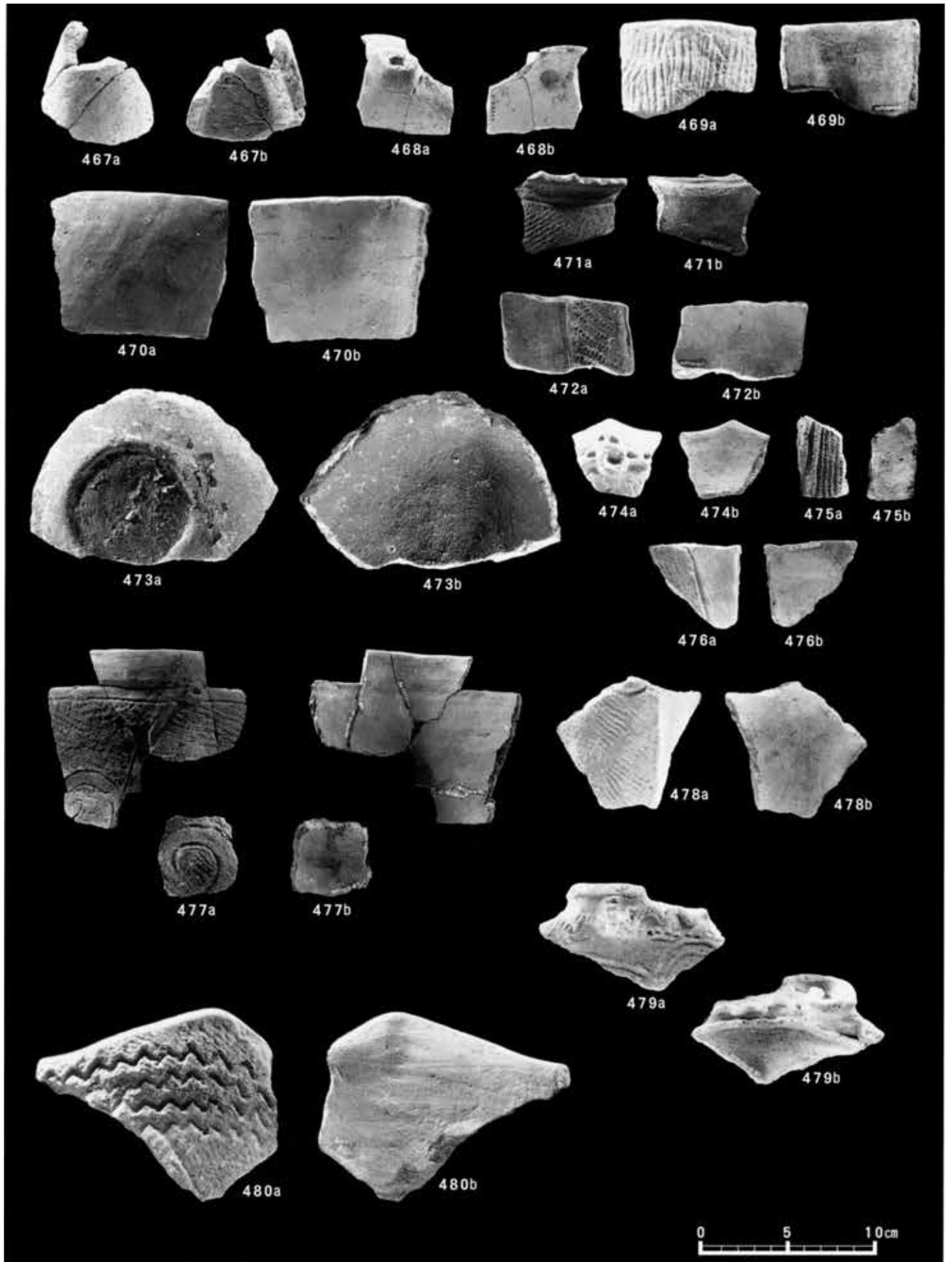


写真 44 西畑地点出土土器 (16) S = 1/3

東西トレンチ (西区) 467-469 : 5層 470-473 : 6層 474・475・477-479 : 8層 476 : 9層 480 : 礫層

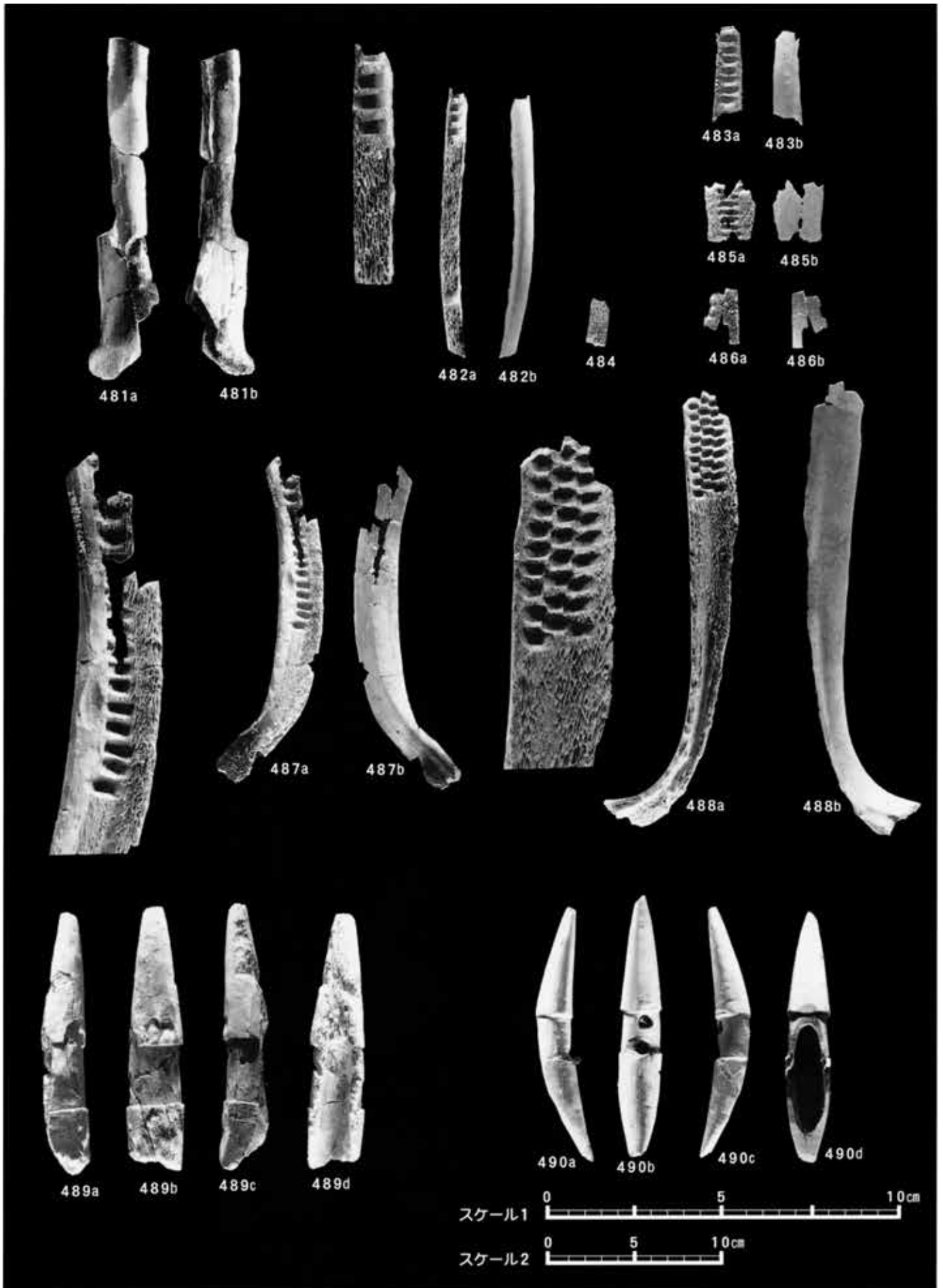


写真 45 西畑地点出土骨角器 (1)

481・482：1号竪穴建物 483：2号竪穴建物 484～488：3号竪穴建物 489：南区2層 490：南北トレンチ(G51-15)6層  
489・490はスケール1

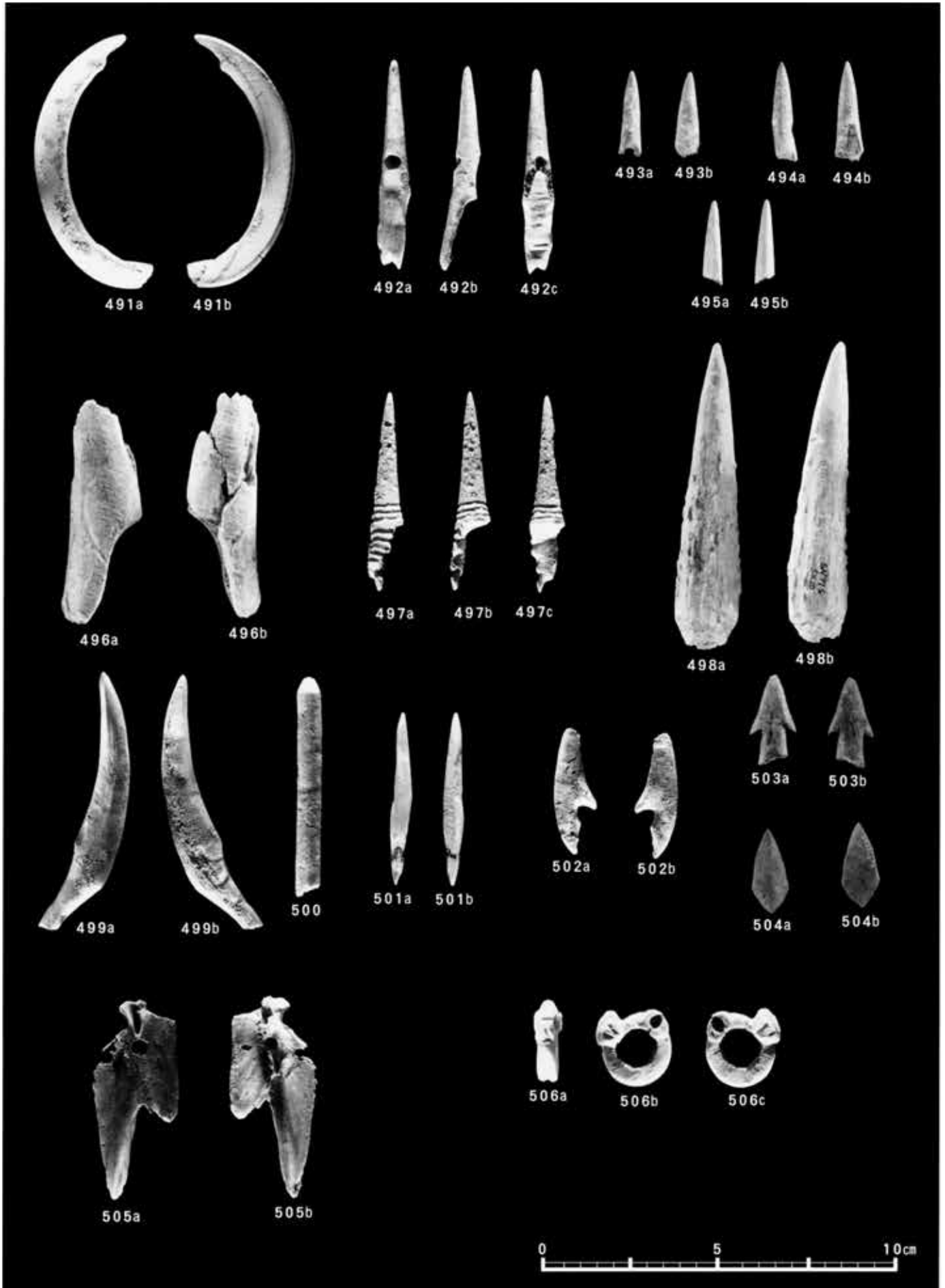


写真 46 西畑地点出土骨角器 (2)

491：北区1号製塩炉 500：南区7層 492~494・499：南区11層 502：南区13層 503：南区15層 497：南区26層 506：南区32層  
 504：南区9号土坑 495・96：南区12号土坑 498・501・505：南区10号土坑 506：32層

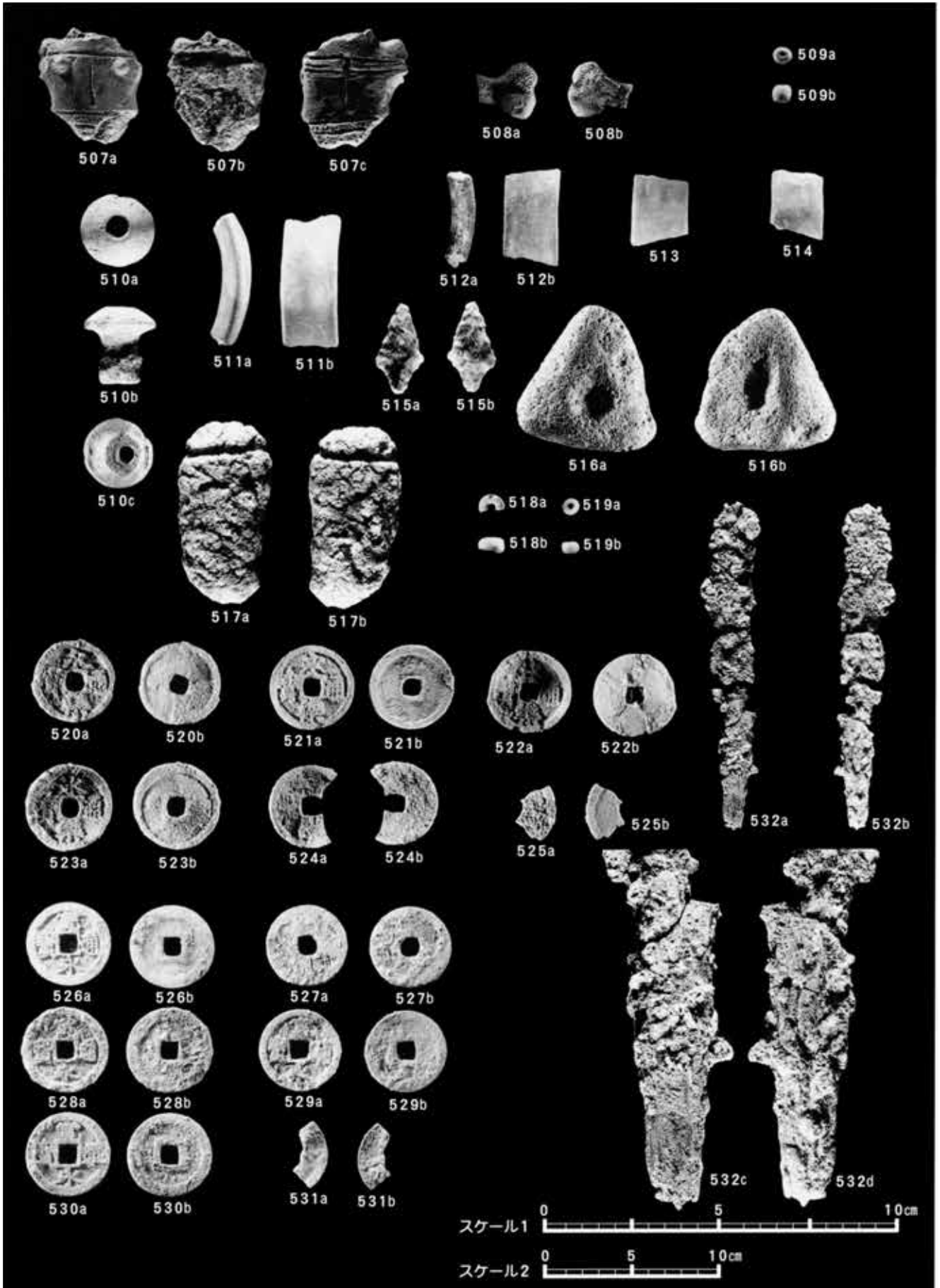


写真 47 西畑地点出土土製品・石製品・金属製品

507~508: 土偶 509: 土玉 510: 耳栓 511~514: 耳飾り 515: 石鏃 516: 凹石 517: 浮き 518~517: 玉 520~525: 永楽通宝 526~531: 寛永通宝  
 532: 刀子 (507: 南北トレンチ(G51-15)6層 508: 南区清掃土 507: 南区11層 510: 南区24層 511: 南区12層 512: 南区19層 513: 南区13層  
 514: 南区14層 515: 石鏃 516: 凹石 517: 浮き 518~517: 玉 520~525: 永楽通宝 526~531: 南区4号土坑 532: 南区12号土坑)  
 532はスケール2

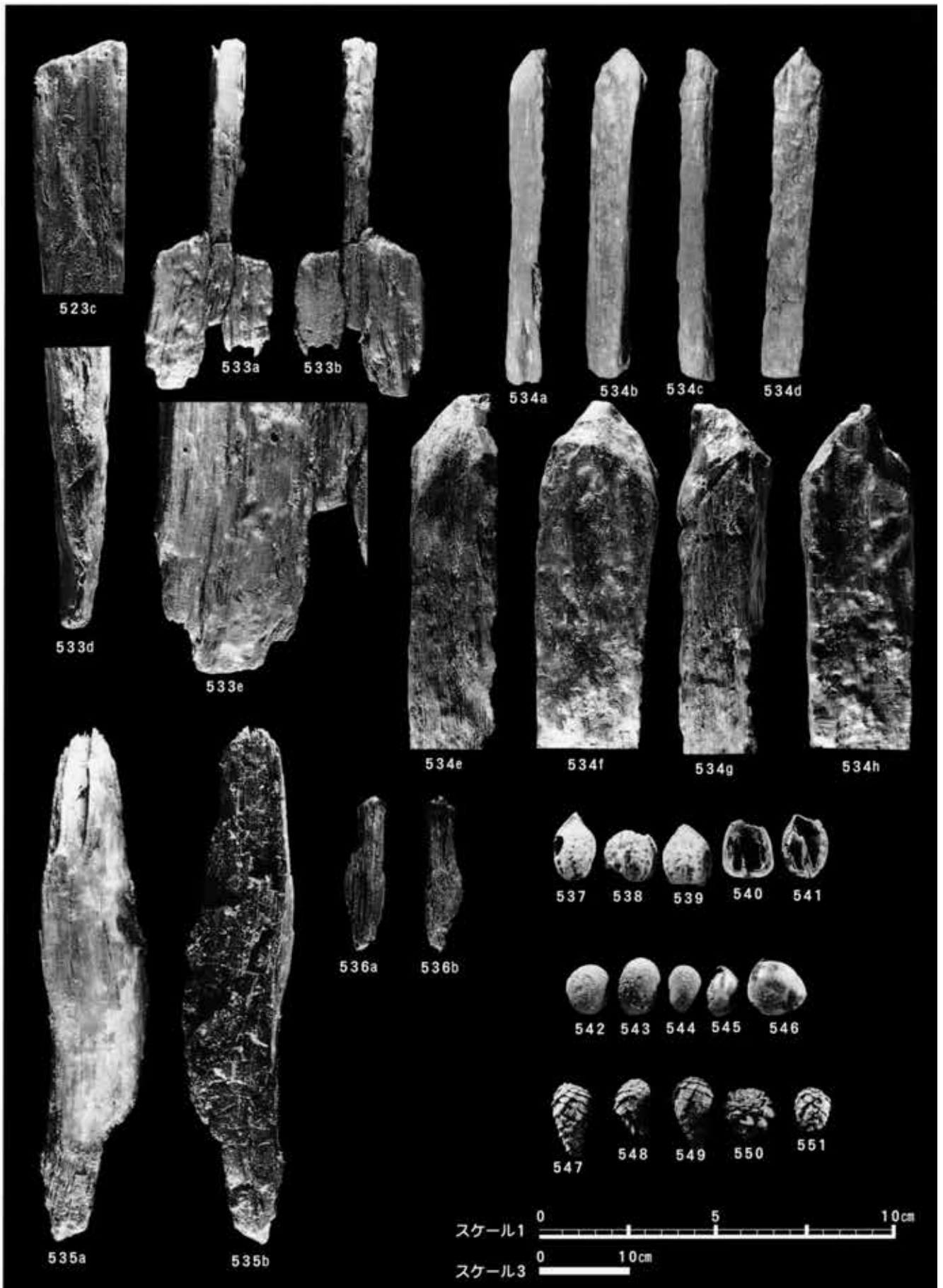


写真 48 西畑地点出土木製品、植物遺体

533: 籠状木製品、534: 角材、535、536: 焼けた木材 537~541: クルミの実 542~546: トチの実 547~551: マツ球果 (533~536: 東西トレンチ6層 537~551: 東西トレンチ8層) 533a.b、534a~d はスケール3

### (3) 平成13・14年度調査〈第7・8次調査〉

#### 西畑北地点（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）

##### ① 調査の方法と経過

###### a. 第7次調査（平成13年度）

東北歴史資料館によるボーリング調査（昭和56年）・西畑北地点の調査（昭和59～61年）、鳴瀬町教育委員会による第3次調査（平成9年度、東西トレンチ西区）の成果を踏まえ、西畑北地点の入江の奥に位置する低地部分を東西に横断するトレンチを2ヵ所設定して行った（第43図）。また、発掘調査と並行して、堆積物の自然科学的分析や花粉化石の抽出等を目的としたボーリングとサンプリング調査も実施した。

Ⅰ区は、晩期中葉の製塩遺構が検出された東歴の西畑北地点調査区の西側に隣接する。開田により大きく削平された調査区の東壁には、貝層（アサリ・マガキの純貝層）および製塩土器を多量に含む土層・灰層が露出している。低地部分の全域（東西約65m）にわたって調査した結果、調査区の東半部では、表土下で縄文土器、土師器・須恵器、製塩土器等の細片を多く含む黒褐色土の堆積が認められたが、それより下層では遺物は検出されず、砂礫層が1.5m以上も互層をなして厚く堆積していることがわかった。少なくとも現表土下2mの深さでは、湿地性の堆積は認められなかった。一方、Ⅱ区では、入江奥低地の東半部（東西約30m）を現在の海面より低い、表土下約2m（標高-0.7m）の深さまで調査し、泥炭層を含む湿地性の堆積層を確認した。堆積層はさらに下層にも認められ、Ⅰ区とは異なる堆積状況を示すことから、堆積当時のこの付近は、海岸の入江に後背湿地状に取り残された淡水性の沼沢跡であった可能性が考えられた。

###### b. 第8次調査（平成14年度）

第7次調査の結果を受けて、第8次調査では泥炭層の広がりや詳細な年代、堆積環境等を明らかにするため、Ⅱ区を西側に拡張し、さらに下層を調査するとともに、これと直交する調査区（Ⅲ区）とⅠ、Ⅱ区の間新たに調査区（Ⅳ区）を設定して行った（第43図）。併せて、第7次調査と同様に、ボーリングと土壌のサンプリング調査も実施した。

Ⅱ区では、東西約31.5mにわたって縄文時代の堆積層を確認するとともに、表土下約3m（標高約-1m）の無遺物層まで掘り下げ、入江奥の低地部分を横断する東西方向の堆積状況を確認した（写真52上）。泥炭層は、大きく3つの層群（A→B→C期）として捉えられた堆積層の最下部（A期）にあたり、低地部分のやや東寄り、厚さ約0.5m、東西約16.5mにわたって堆積が認められた。次に、入江奥低地を縦断する南北方向の堆積状況を確認するため、泥炭層のほぼ中央付近にⅡ区と直交する南北のトレンチ（Ⅲ区）を設定した（写真52下）。今回の調査で、泥炭層の南北方向の規模を明らかにすることはできなかったが、Ⅲ区北端部ではB期の砂礫層によって侵食されていることが確認され、泥炭層は低湿地から潮間帯付近まで広範囲に及んでいた可能性が高まった。第7次調査で推定した沼沢跡の可能性を否定する結果となった。また、東歴によるボーリング調査および町教委第3次調査との層序の対応関係についても明らかになり、入江状低地の谷奥部から海岸部にかけての堆積状況を、概ね把握することができた。

Ⅳ区は、微高地上の製塩遺構および西側斜面に形成された貝塚と、低地部分の堆積層との関係を明らかにすることを目的として行った。調査の結果、アサリ・マガキからなる晩期後葉（大洞A式）の純貝層と製塩土器層、そしてこれらを侵食する入江の堆積土および古代の土坑1基を検出した（第44・45図、写真52下）。

##### ③ 層の堆積状況

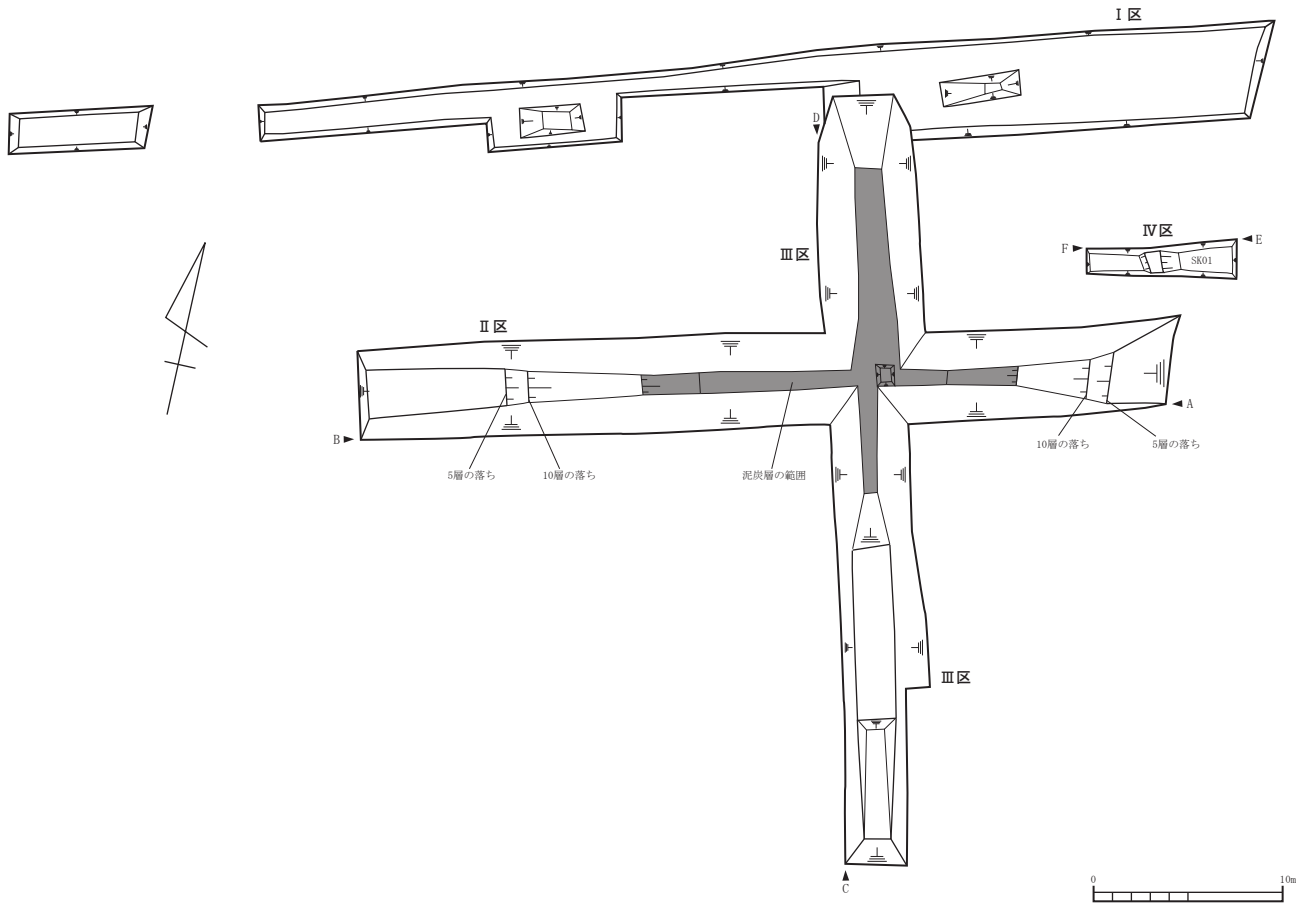
入江状地域の低地部分の堆積土は、粘土層、泥炭層（腐植質粘土層）、有機質遺体層（スクモ層）、砂層、砂礫層からなり、これらが互層をなして複雑に堆積している（第45図）。いずれも低地部分全体を覆って、ほぼ水平に堆積しているが、2枚の砂礫層（5・7層、10層）が入江奥低地の東西の基盤層と低地内の堆積層を開削（侵食）しており、この不整合面によって、堆積層は大きく3つの層群（A期：14～11層、B期：10～8層、C期：7層～）として捉えることができた。遺物は、6層・8層・11層で植物遺体が多量に出土しているが、縄文土器等の人工遺物については、縄文時代と古代の遺物が混在する4層を除くと、極めて少ない。

以下、各層の概要を記述する。

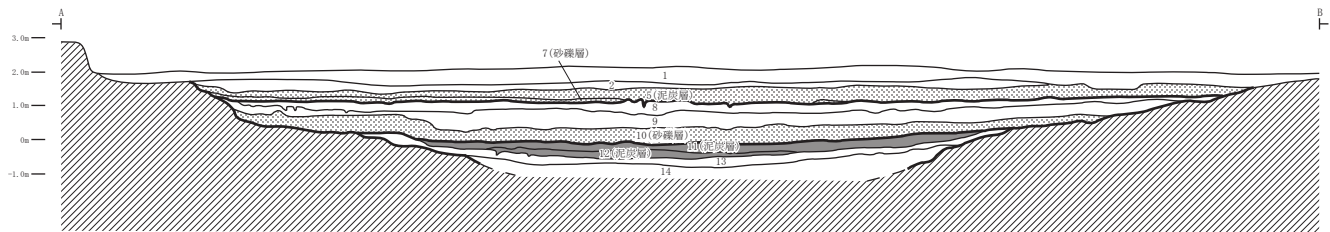


第43図 西畑・西畑北地点調査区位置図

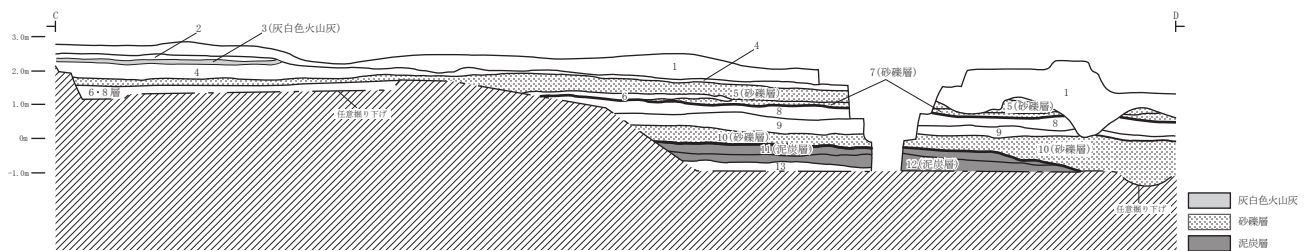
- 1層：表土、旧水田耕作土。黒褐色（7.5YR3/1）のシルト質粘土からなる。入江を干拓した水田のため、粘性が強い。
- 2層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。層厚約15cmで、標高の高いIV区南端部にのみ分布する。
- 3層：10世紀前葉に降下したとみられる灰白色火山灰層。層厚は5～10cm程で、III区南端部にのみ認められる。  
標高約2.3m付近に、ほぼ水平に堆積しており、これより北側では後世の水田耕作によって削平されたものとみられる。
- 4層：黒褐色（10YR3/2）シルト質粘土。層厚は15～40cm程で、調査区の全域に分布する。径3～10mm程の凝灰岩粒や地山ブロックを含み、海岸部に近いほど粘性・しまりが強い。縄文時代 晩期の貝層および製塩遺構に隣接するI・II区の東半部では、縄文土器、土師器・須恵器、製塩土器等の細片を多く含む。奈良時代以降の二次堆積層とみられる。
- 5層：灰褐色（7.5YR4/2）砂。調査区の全域に分布する砂・砂礫を主体とした堆積層で4層に細分される。東西の基盤層およびB期の粘土層（8・9層）を開削している。II区で東西幅約31.5m、層厚20～50cm程である。扁平な円礫や自然穿孔された礫、自然木などの海岸堆積物を多く含む、砂の水成堆積層なども介在するが、土器等の遺物は検出されなかった。
- 6層：黒色（7.5YR2/1）粘土。層厚は約20cmで、III区南半部にのみ分布する。細砂ブロックや植物遺体、自然木



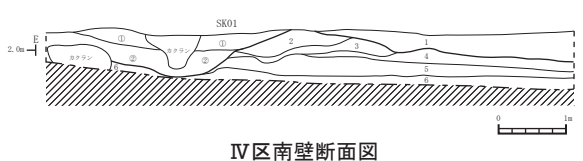
第44図 調査区全体図



II区南壁断面図



II区西壁断面図



IV区南壁断面図

IV区土層注記

- |   |            |       |               |
|---|------------|-------|---------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色 | シルト   | 貝層ブロックを含む     |
| 2 | 10YR3/2黒褐色 | シルト   | 純貝層(アサリ、カキ主体) |
| 3 | 10YR3/2黒褐色 | シルト   | 純貝層(アサリ、カキ主体) |
| 4 | 10YR3/4暗褐色 | シルト   | 製塩土器層         |
| 5 | 10YR2/3黒褐色 | 砂質シルト | しまり中、粘性弱      |
| 6 | 10YR3/4暗褐色 | シルト質砂 | しまり中、粘性弱      |

SK01土坑(古代)

- |   |             |                       |
|---|-------------|-----------------------|
| ① | 7.5YR3/2黒褐色 | シルト                   |
| ② | 10YR2/3暗褐色  | シルト 貝層(アサリ、カキ主体)の2次堆積 |

第45図 西畑北地点第8次調査区断面図

を含むが、土器等の遺物は検出されなかった。上下の砂礫層（5・7層）と、一連の堆積とみられる。

- 7層：灰褐色（10YR6/2）砂。基盤層起源の地山ブロックや凝灰岩礫・粒を多量に含む砂礫層で、調査区の東半部のみ分布する。層厚は10～20cmである。縄文時代前期の土器が出土している。
- 8層：黒色（10YR2/1）粘土。層厚は20～40cm程で、3層に細分される。調査区の全域に分布する。粘性・しまりが強い。薄い有機質層と粘土層が互層をなし、植物遺体を多量に含む。土器等の遺物は検出されなかった。
- 9層：黒褐色（7.5YR3/1）シルト質粘土。層厚は20～50cm程で、4層に細分される。調査区の全域に分布する。径10mm程の凝灰岩粒や礫、植物遺体を含む。縄文時代前期の土器が僅かに出土している。
- 10層：灰黄褐色（10YR4/2）砂。調査区の全域に分布する砂・砂礫を主体とした堆積層で、2層に細分される。東西の基盤層およびA期の泥炭層（11・12層）を開削している。II区で東西幅約26m、層厚30～50cm程であるが、海岸部に向かって厚く、III区北端部では1.4m以上の厚さで堆積している。下部で植物遺体を含み、砂の水成堆積層なども介在するが、土器等の遺物は検出されなかった。
- 11層：黒褐色（10YR2/2）粘土。植物遺体層と粗砂・細砂（水成堆積層）が互層をなす泥炭層で、4層に細分される。II区で東西幅約16.5m、層厚は約30cmである。植物遺体を多量に含む。縄文時代前期の土器が僅かに出土している。
- 12層：黒褐色（7.5YR2/2）粘土。層厚約20cmの泥炭層で、5層に細分される。11層と同様に植物遺体層と砂の水成堆積層が互層をなす。
- 13層：黒褐色（10YR3/1）の均質な粘土層からなる。層厚は約30cmで、植物遺体を含む。
- 14層：黒色（10YR2/1）粘土。層厚は約40cmで、2層に細分される。径3～30mm程の凝灰岩礫・粒を多く含む。

#### ④ 出土遺物

今回の調査では、I・II・IV区から縄文土器、製塩土器、土師器、須恵器等の遺物が出土したが、いずれも破片資料であり、全体の特徴が分かるものはない。以下では、出土した縄文土器のうち、個体認定の可能な口縁部と底部の資料を中心に、文様等の特徴や時期が明らかなものについて述べる（第46・47図、写真49）。

##### a. I区

調査区東半部の黒褐色土層（2層）から縄文土器、土師器・須恵器、製塩土器等の細片が多く出土した。時期的には、縄文時代晩期のものが主体をなし型式が判明したものとしては大洞C2式のものがある（第46図1・2）。器種は鉢で、口唇部にV字状の刻みを施し、口縁部に数条の平行沈線が巡る。また、そのうちの1本には刻みが施され、胴部にはRLの斜行縄文が施文される。このほかの土器は地文のみのものであるため、型式を特定することはできないが、大洞C2式に相当すると思われる。

##### b. II区

表土下の4層では、縄文時代前期と晩期のものが混在してみられたが、7層（砂礫層）以下の堆積層では、縄文時代前期のものに限定される。このうち、型式が明らかなものとしては、上川名II式、大木1式、大木2式がある。上川名II式は21、26～28である。器種は深鉢で、胎土には多量の繊維が含まれる。26、27は口唇部に刺突、口縁部から胴部にかけて結束羽状縄文が施されるものである。21はRLの斜行縄文が施される。また、26～28の内面には条痕が見られる。大木1式は20、22～25である。器種は全て深鉢で、胎土には繊維が含まれる。色調はいずれも灰白色を呈している。文様は口縁部に2～4段ほど重層してループ文を施文するもの（16、22、23）と胴部に施文するもの（25）がある。ループ文は羽状縄文と組み合わせて用いられており、羽状縄文は結束のもの（16、22、24）と非結束のもの（20、25）がある。原体は全て0段多条である。これらは接合しないものの、同一個体のものを含んでいる可能性が考えられる。大木2式は17である。胎土にはわずかに繊維が含まれ、色調は灰白色を呈する。口縁部には刺突列が巡り、その下に粘土紐による隆帯が貼り付けられる。隆帯には上下と隆帯上に刺突が加えられる。4層出土の18、19は縄文時代晩期と考えられる。これらは、上下で原体の異なる2種類のLR縄文が施されており、内外面には炭化物の付着が見られる。19には外面から穿った補修孔（外孔径7mm、内孔径5mm）が認められる。

### c. III区

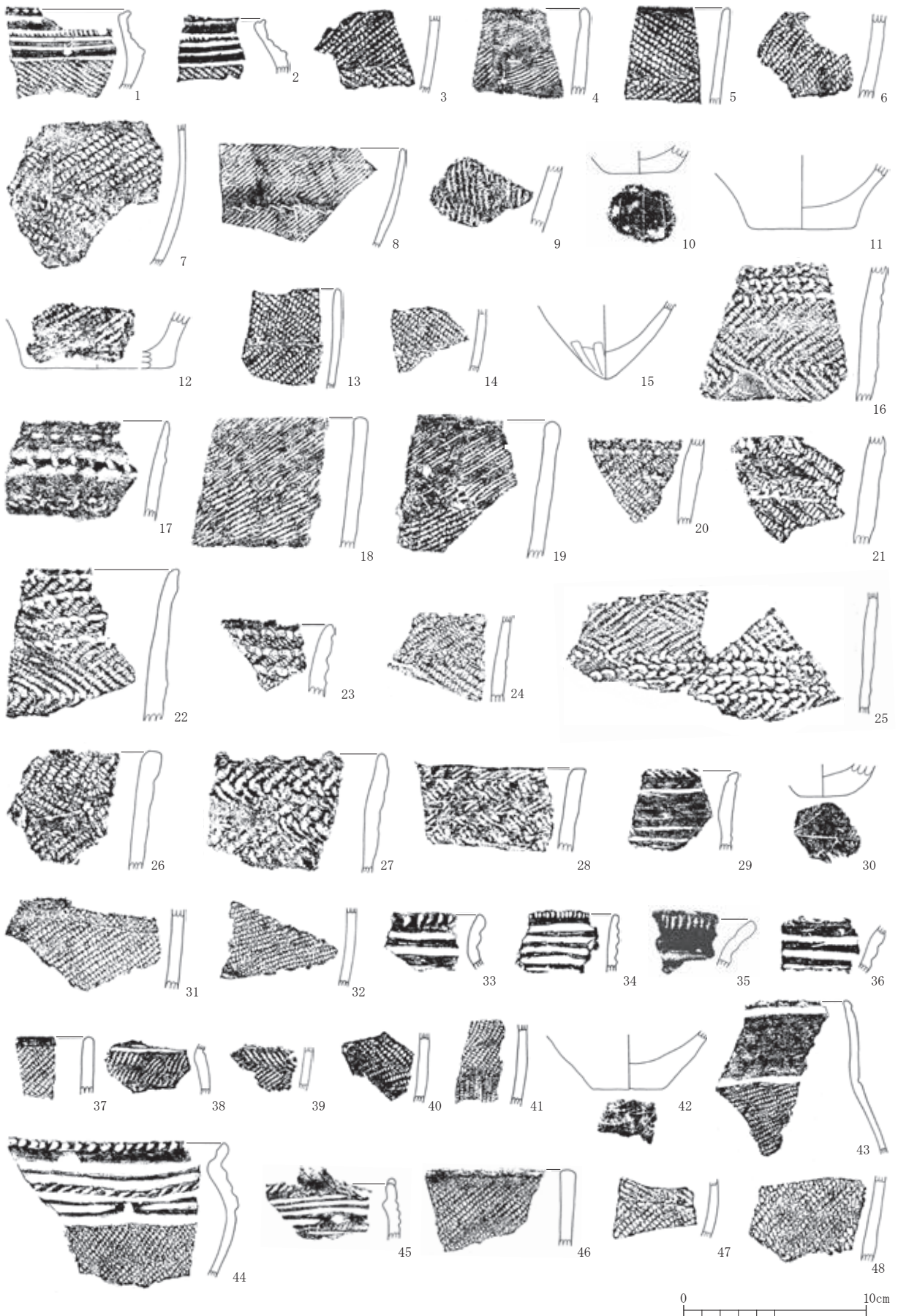
III区から出土した縄文土器は、晩期のものが主体をなす。型式の判明するものは、大洞B式、大洞A式である。大洞B式(50)は、平行沈線によって区画された部分に入り組み三叉文が描かれ、器面は丁寧なミガキが施されている。胴部にはRLの斜行縄文が施文される。

大洞A式は、口唇部に細い刻みを施すもの(33、35、45、60)と太い刻みを施すもの(34、44、51)があり、細い刻みを施すものには1個(45)、または2個1対(60)の突起が付けられる。口縁部には工字文が施される(33、44、45、52、60)。そのほかにも、小破片であるため確認できないが、工字文が施されていたと考えられるものがある(33、35、51)。

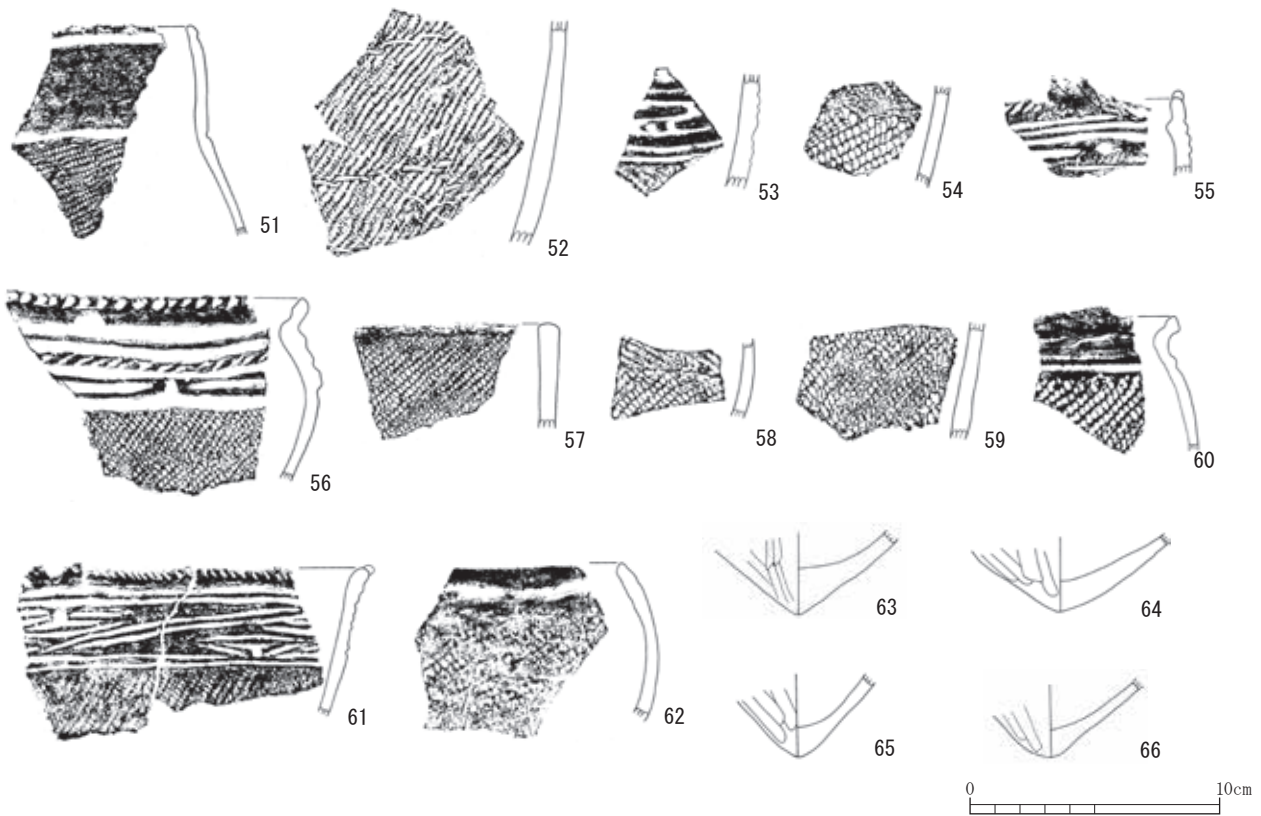
この他表土から製塩土器が4点出土している。いずれも尖底の底部片で、外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。これらのうち3点(63、64、66)は、底部が二重底となっているのが確認できた(写真49-63b)。町教委第3次調査の西畑地点第3トレンチでは、7層付近から多量の底部二重底の製塩土器が出土している(鳴瀬町教委他1997)。7層の時期は大洞A式期に比定されており、同じく表土から出土した資料にも大洞A式(60)があることから、これらの製塩土器は大洞A式期のものである可能性が考えられる。

### 2) 平成13・14年度(第7・8次調査)のまとめ

第3次調査で検出された西畑北地点の泥炭層の広がりを確認するとともに、詳細な年代や堆積環境等を明らかにするため、西畑海岸堤防近くに東西および南北にトレンチを設定して調査を行ったの結果、入江状地域は少なくとも縄文時代前期(約5,700年前)には干潟が形成され、その後海退し、縄文時代中期、後期の2回におよぶ津波もしくは高潮等の堆積によって埋没形成されたものであることが明らかとなった。また、縄文時代前期初頭頃の泥炭層の堆積土中に多量のクリ属花粉が含まれていることが明らかとなった。周辺にクリ林の存在と縄文人によるクリの管理・維持(栽培)が行われていた可能性が考えられた。詳細については、第4章第2節7、第5章第1節2、第2節2で述べる。



第46図 西畑北地点出土土器 (1)



第 47 図 西畑北地点出土土器 (2)

番号	出土区	層位	器種	文様、装飾等の特徴	型式	備考
1	I区	1・2層	鉢	口唇：刻み、口頸：平行沈線、刻み、胴：RL縄文	大洞C2	
2	I区	2層	深鉢	口唇：刻み、口頸：平行沈線、刻み、胴：RL縄文	大洞C2	
3	I区	1・2層	深鉢	胴：羽状縄文 (LR、RL)		
4	I区	2層	深鉢	口～胴：LR縄文		
5	I区	2層	深鉢	口～胴：羽状縄文 (RL、LR)		
6	I区	2層	深鉢	胴：LR縄文		
7	I区	2層	深鉢	胴：羽状縄文 (LR、RL)		
8	I区	2層	深鉢	口～胴：LR縄文(上端結束)		
9	I区	2層	深鉢	胴：撚糸文		
10	I区	2層	深鉢	底：木葉痕		
11	I区	2層	深鉢			
12	I区	2層	深鉢	胴：LR縄文		
13	I区	2層	深鉢	口～胴：羽状縄文 (RL、LR)		
14	I区	2層	深鉢	胴：羽状縄文 (LR、RL)		
15	I区	2層	深鉢	外面：ヘラケズリ、内面：ヘラナデ		製塩土器
16	II区	1層	深鉢	胴：ループ文 (LR)、結束羽状縄文 (LR、RL)	大木1	繊維、灰白色
17	II区	4層	深鉢	口：刺突、隆帯貼り付け (刺突)	大木2	繊維
18	II区	4層	深鉢	口～胴：LR縄文	晩期	炭化物
19	II区	4層	深鉢	口～胴：LR縄文	晩期	炭化物、補修孔
20	II区	7層	深鉢	胴：ループ文 (LR)、非結束羽状縄文 (LR、RL)	大木1	繊維、灰白色
21	II区	7層	深鉢	胴：RL縄文	上川名II	繊維、灰白色
22	II区	7層	深鉢	口：ループ文 (LR) 胴：結束羽状縄文 (LR、RL)	大木1	繊維、灰白色
23	II区	7層	深鉢	胴：非結束羽状縄文 (LR、RL)、ループ文 (LR)	大木1	繊維、灰白色
24	II区	7層	深鉢	胴：結束羽状縄文 (LR、RL)	大木1	繊維、灰白色
25	II区	7層	深鉢	口：ループ文 (LR)	大木1	繊維、灰白色
26	II区	9層	深鉢	口～胴：結束羽状縄文 (LR、RL)、内面：条痕	上川名II	繊維
27	II区	9層	深鉢	口～胴：結束羽状縄文 (LR、RL)、内面：条痕	上川名II	繊維
28	II区	11層	深鉢	内面：条痕	上川名II	繊維

第 7 表 西畑北地点出土土器観察表 (1)

第8表 西畑北地点出土土器観察表(2)

番号	出土区	層位	器種	文様、装飾等の特徴	型式	備考
29	IV区	1層	深鉢	口唇：刻み、頸：平行沈線、胴：LR縄文	大洞A	
30	IV区	1層	深鉢	底：線刻		
29	IV区	1層	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
30	IV区	1層	深鉢	胴：LR縄文		
31	IV区	2層	深鉢	口～胴：LR縄文		
32	IV区	2層	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
33	IV区	2層	深鉢	口唇：刻み、口縁：平行沈線	大洞A	
34	IV区	2層	深鉢	口唇：刻み、口縁：平行沈線	大洞A	
35	IV区	2層	深鉢	口唇：刻み、口縁：平行沈線	大洞A	
36	IV区	2層	深鉢	口縁～胴：LR縄文		
37	IV区	2層	深鉢	胴：平行沈線	大洞A	
38	IV区	2層	深鉢	頸：沈線、胴：LR縄文		
39	IV区	2層	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
40	IV区	2層	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
41	IV区	2層	深鉢	胴：LR縄文		
42	IV区	2層	深鉢	底：線刻		
43	IV区	2層	壺	口縁：小波状口縁、平行沈線、胴：LR縄文		
44	IV区	2・3層	鉢	口唇：刻み、口頸：平行沈線、刻み、LR縄文、胴：工字文	大洞A	
45	IV区	2・3層	鉢	口唇：小突起、刻み、口縁：平行沈線、LR縄文	大洞A	
46	IV区	2・3層	鉢	口縁～胴：LR縄文		
47	IV区	2・3層	鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
48	IV区	2・3層	鉢	胴：LR縄文		
49	IV区	3層	深鉢	胴：LR縄文		
50	IV区	3層	深鉢	胴：入組み三叉文、LR縄文	大洞B	
51	IV区	SK01	深鉢	口唇：刻み、頸：平行沈線、胴：LR縄文	大洞A	
52	IV区	SK01	深鉢	口唇：平行沈線LR縄文	大洞A	
53	IV区	SK01	深鉢	口～胴：LR縄文		
54	IV区	SK01	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
55	IV区	SK01	深鉢	胴：LR縄文		
56	IV区	SK01	深鉢	胴：LR縄文		
57	IV区	SK01	深鉢	底：木葉痕		
58	IV区	SK01	深鉢	底：木葉痕		
59	IV区	SK01	深鉢	胴：羽状縄文 (RL、LR)		
60	IV区	表土	鉢	口唇：小突起 (2個1対)、刻み、口縁：工字文、胴：LR縄文	大洞A	
61	IV区	表土	鉢	口縁：波状口縁、頸：平行沈線、胴：LR縄文		
62	IV区	表土	鉢	口縁：平行沈線、胴：LR縄文		
63	IV区	表土	鉢	外面：ヘラケズリ、内面：ヘラナデ、二重底		製塩土器
64	IV区	表土	鉢	外面：ヘラケズリ、内面：ヘラナデ、二重底		製塩土器
65	IV区	表土	鉢	外面：ヘラケズリ、内面：ヘラナデ		製塩土器
66	IV区	表土	鉢	外面：ヘラケズリ、内面：ヘラナデ、二重底		製塩土器

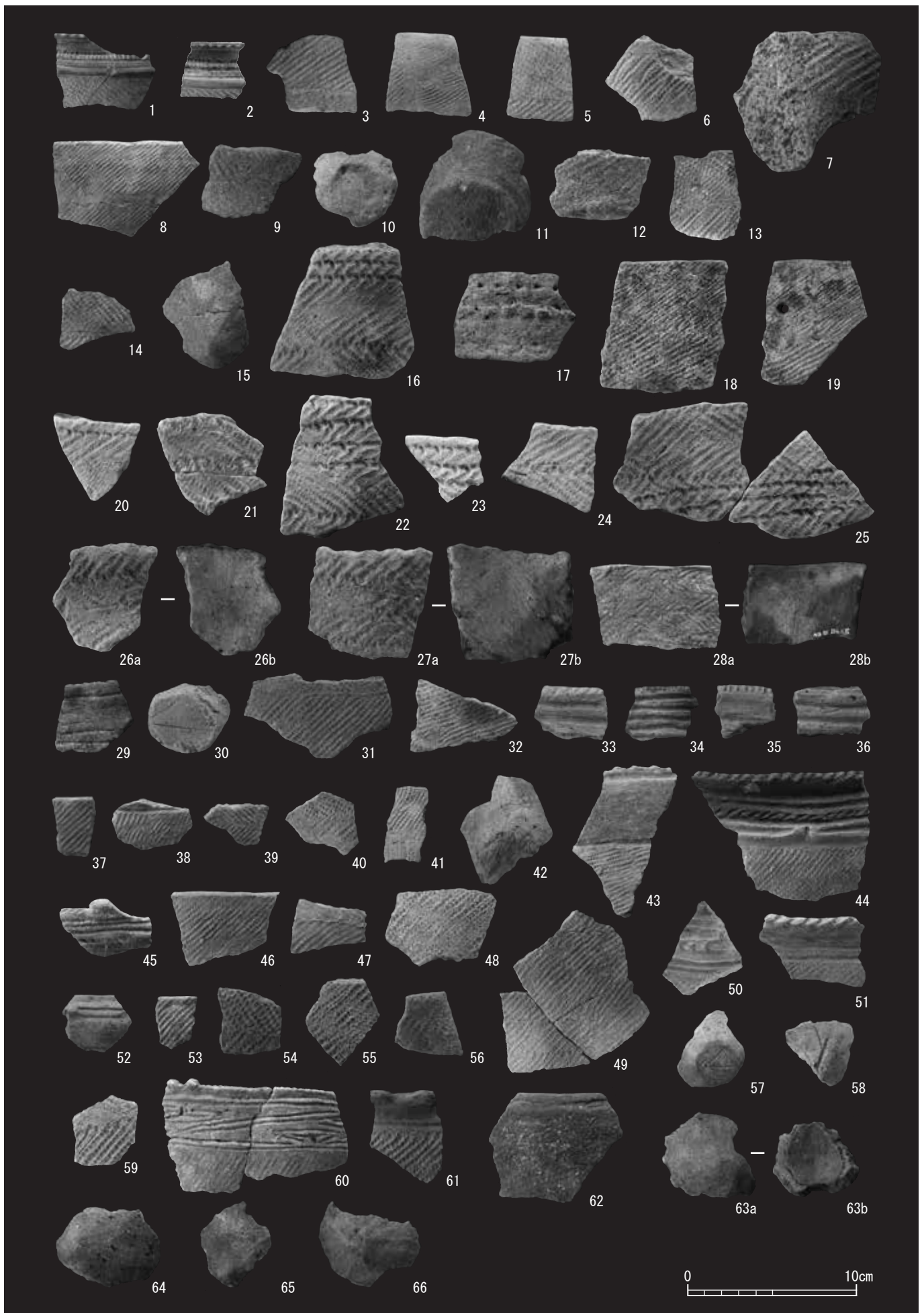
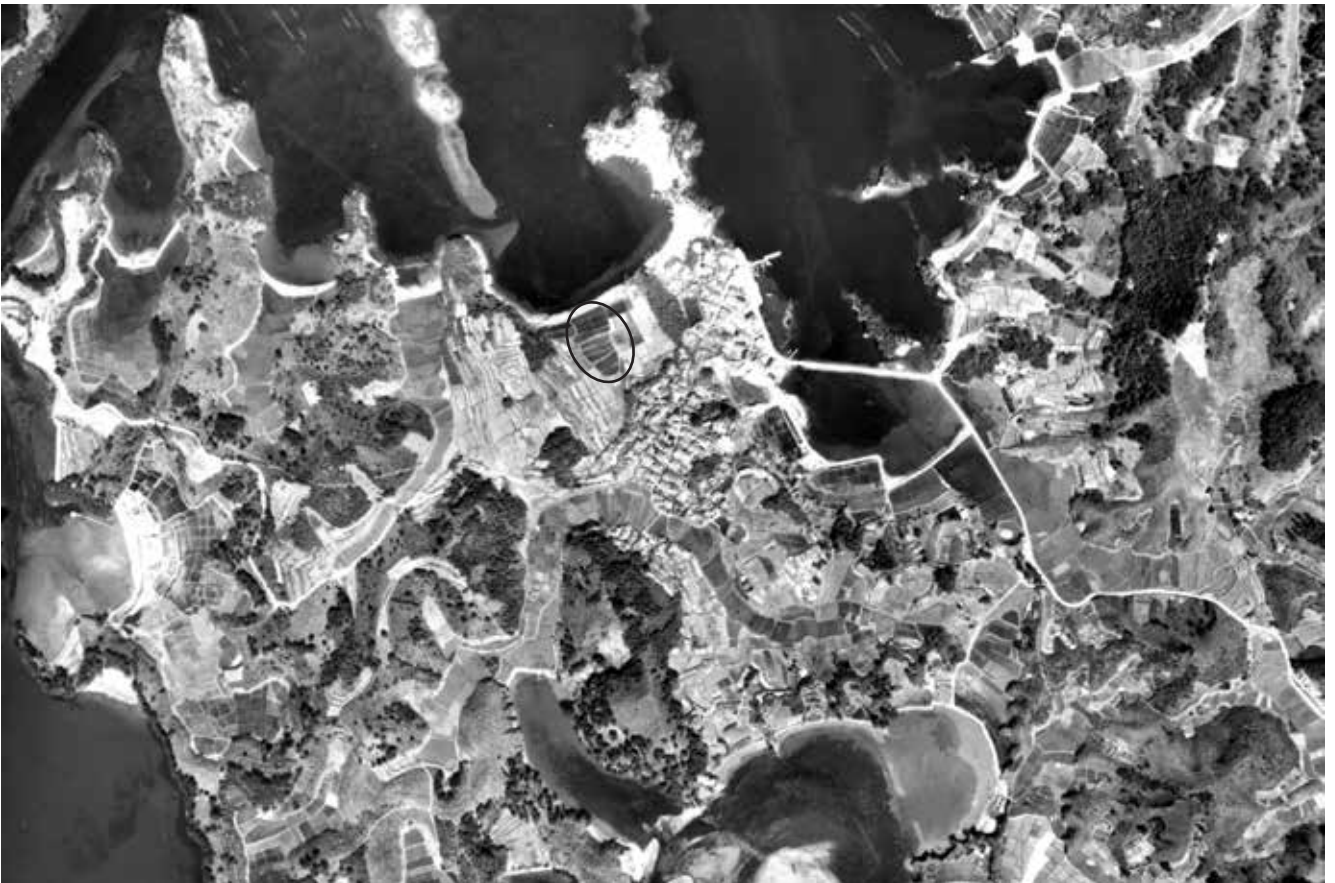


写真 49 西畑北地点 (第7・8次調査) 出土土器



里浜貝塚全景(南から) ○は調査地点



里浜貝塚周辺の空中写真(昭和61年撮影) ○は調査地点

写真 50 里浜貝塚全景と西畑北地点の位置



調査区(第8次調査)全景  
(西から)



調査区(第8次調査)全景  
(南から)



Ⅲ区(第8次調査)調査区全景



Ⅲ区南端部堆積状況(北から)  
白く見えるのが灰白色火山灰

写真 51 西畑北地点(第7・8次調査)(1)



Ⅱ区(第8次調査)南壁  
入江奥低地の堆積状況



Ⅱ・Ⅲ区(第8次調査)断面  
白っぽく見えるのが砂礫層



Ⅳ区(第8次調査)遺構および貝層の検出状況(北西から)



Ⅳ区(第8次調査)調査区北壁断面

写真 52 西畑北地点(第7・8次調査)(2)

#### (4) 平成 15・16 年度調査〈第 10・12 次調査〉

平成 15 年度から 18 年度にかけて、史跡整備計画に係る西畑地区と台圃地区を対象として確認調査を行った(第 48 図)。以下、各貝塚(第 3 節:北貝塚、第 4 節:西貝塚)、地点ごとに述べる。

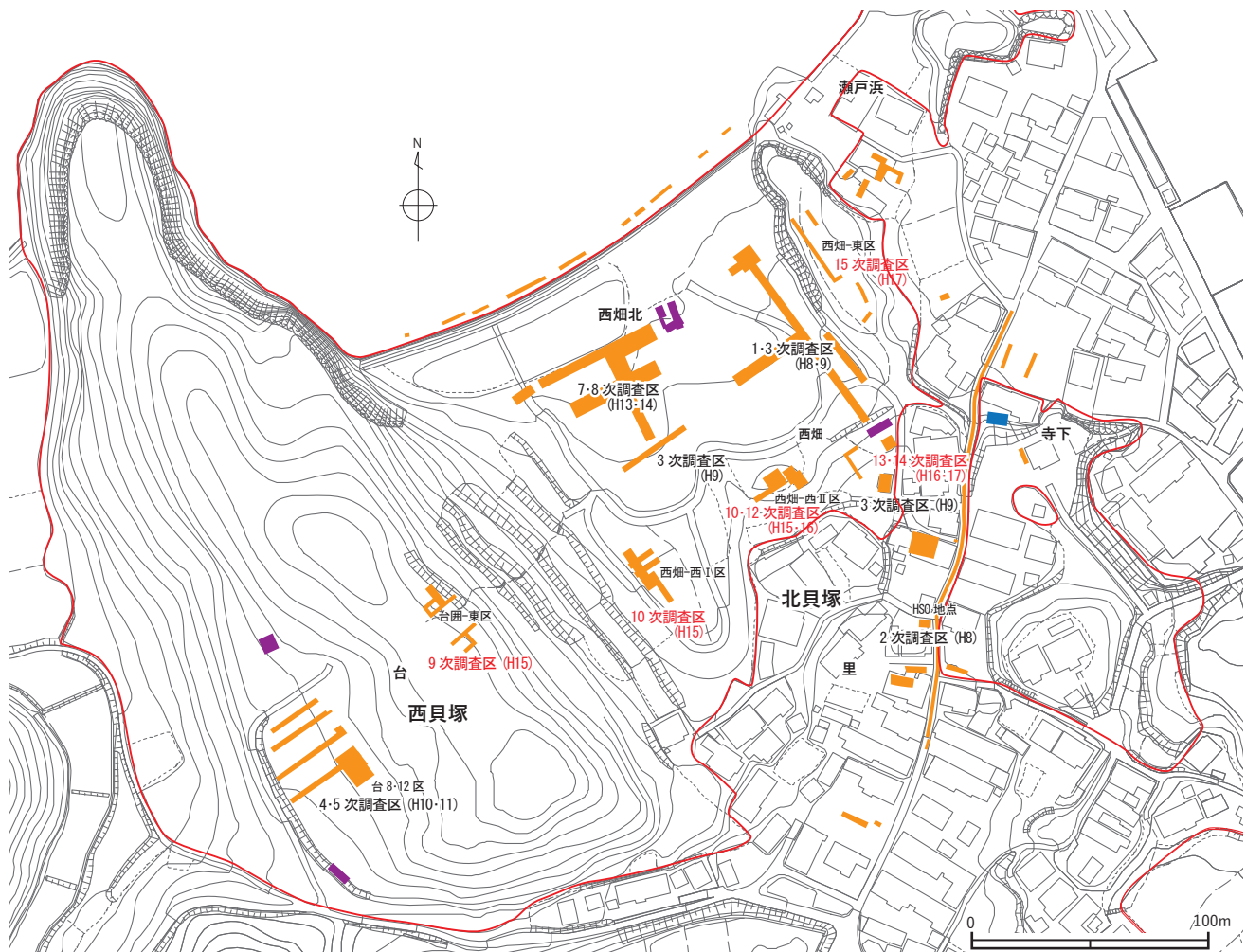
##### 1) 西畑-西 I 区〈第 10 次調査〉

###### ① 調査の概要

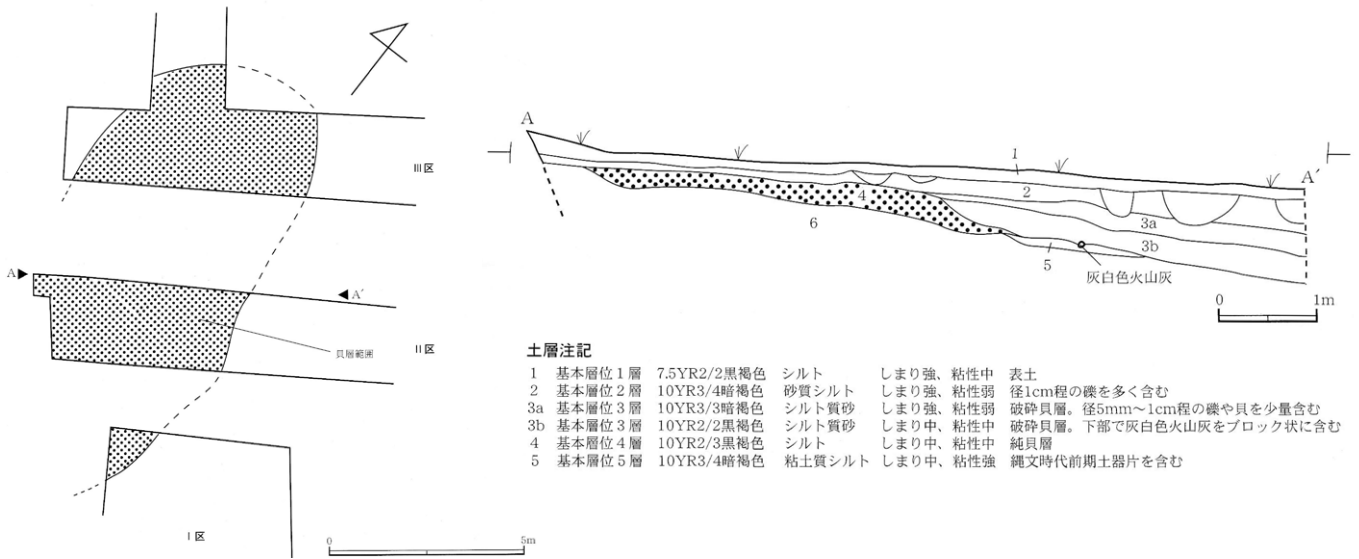
史跡の園路整備に係る西畑地点の南西部に分布する貝層の広がりや年代、内容物等を明らかにすることを目的として行なった(写真 54-3・4)。調査は幅 2 m 程のトレンチを設定して、貝層および遺構の有無、広がりを確認した(西 I 区)。調査の結果、西畑地点南西部の貝塚は、長径約 15 m、短径約 6 m の範囲に、20 ~ 30 cm 程の厚さで緩斜面に沿って形成され、灰白色火山灰(十和田 a 火山灰)との関係や出土遺物から、9 世紀後半頃の貝塚であることが明らかになった(第 49 図)。

###### ② 貝層の調査

貝層部分の調査では、貝層の堆積状況と内容を確認するため、II 区のトレンチの北壁際に約 30 cm 幅のサブトレンチを設定し、貝塚の時期および内容を明らかにするため、一部を悉皆的にサンプリングし、貝層土壌の水洗選別を行なった(写真 55-1・2)。貝層土壌のサンプリングに際しては、サブトレンチ西端から 1 m ごとに 6 m の地点まで小グリッドを設定して行なった。各グリッドから、整理用コンテナ(55 × 38 × 12 cm)を基準に、任意の量の貝層(および混貝土層)のサンプルを採取し、内容を分析した。貝層である 4 層のサンプルの総量は、約 315,590 cm<sup>3</sup>(整理用コンテナ 13 箱分)である。サンプル土壌はすべて 2 mm メッシュの篩を用いて水洗選別した。以下では、2 mm メッシュ上に残存した 4 層出土動物遺存体について報告する。



第 48 図 史跡整備工事に係る西畑・台圃地区の調査区位置図(第 9、10、12 ~ 16 次調査区)



第 49 図 西畑西地点調査区平面図および断面図

種の同定にあたっては、奥松島縄文村歴史資料館所蔵の現生骨格標本を使用し、適宜、図鑑等（参考文献参照）を利用した。なお、使用した現生標本の不備などから、同定し得る部位でありながら同定に至らなかった資料が少量残されており、今後の検討により、種名リストに記載される種が増加する可能性がある。同定した動物遺存体のリストを第 59 表に示した。

### ③ 動物遺存体

#### [貝類]

マキガイ綱 4 目 13 科 17 種（21 種類）、ニマイガイ綱 2 目 6 科 8 種（8 種類）が確認された。陸産貝類を含む微小な貝類には、同定に至らなかった個体が多い。今後の検討課題である。微小貝類は、食料として積極的に捕獲されたとは考えにくいサイズであり、海藻や他の貝殻等に付着した状態で持ち込まれた可能性が高い。陸産貝類は自然混入が考えられる。

4 層における微小貝類を除いた貝類の個体数組成をみると、アサリが卓越して主体となり、約 75% を占める。ついで、スガイが 12%、マガキ 6%、イガイ 5% である。その他の貝類は 1% 以下となる。いずれも潮間帯に生息する貝類であり、アサリは砂泥底域、スガイ・マガキ・イガイは岩礁域をおもな生息地とする。その他の貝類も、上記の主要貝類のいずれかと生息域をほぼ同一にするものである。

主体貝であったアサリの大きさのバリエーションを知るため、アサリ殻高の測定をおこなった。任意に選択した 1 グリッド分の資料（整理用コンテナ 4 箱）中から、殻高の測定が可能なアサリの左殻を抽出して測定し、1 mm 単位で集計した。標本数は 882 点である（アサリ最小個体数の約 12%）。平均 28.7mm、最小 21mm、最大 42mm で、29mm にピークがある単峰性の分布を示した。

#### [甲殻類]

フジツボ科の殻の破片が多く出土している。種の同定には至っていない。殻表は磨耗しているが、明確な縦走肋のみとめられるものがほとんどである。この特徴からは、チシマフジツボやシロスジフジツボが想定される。潮間帯の岩礁域におもに生息域する。

フジツボ類は、種によっては、食料としての利用が考えられる。また、マガキ等の岩礁性の貝殻など、波の影響を受ける海岸部からの搬入物に付着した状態で遺跡内に持ち込まれた可能性がある。

#### [魚類]

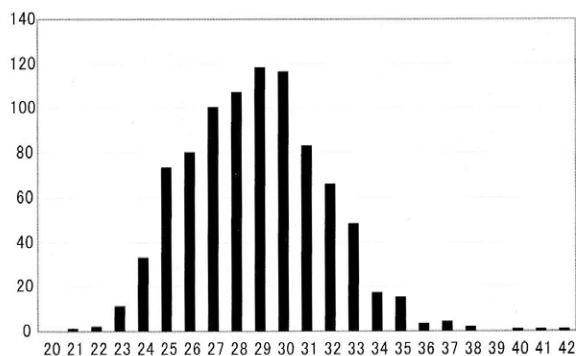
2 綱 7 目 10 科 5 種（13 種類）が確認された。なお、水洗選別に使用された 2 mm のメッシュでは、マイワシなど小

第9表 西畑西地点出土動物遺存体一覧表

マキガイ綱	最小個体数
ユキノカサガイ科	47
コシタカガンガラ	1
クボガイ	1
イシダタミガイ	8
スガイ	1223
タマキビ	166
オオヘビガイ	13
ウミニナ	62
ツメタガイ	2
アカニシ	48
チヂミボラ	4
レイシガイ	2
イボニシ	7
ヒレガイ	2
マルテンスマツムシガイ	1
ムギガイ	1
ヒメムシロガイ	1
キヌボラ	1
アラムシロガイ	1
ヒメエソボラ	3
キセルガイ科	5
マイマイ類	1

ニマイガイ綱	最小個体数
イガイ	503
ムラサキインコガイ	2
マガキ	582
アサリ	7546
オキシジミガイ	6
シオフキガイ	27
オオノガイ	5

アサリ殻高分布(左殻)



魚類

サメ類	椎骨	6
トビエイ科	歯板	2
マイワシ	主上顎骨	4   4
	角骨	6   5
	歯骨	2   1
	方骨	3   5
	舌顎骨	5   3
	前鰓蓋骨	0   1
	主鰓蓋骨	2   2
	上舌骨	1   0
	基後頭骨	4
	後側頭骨	0   1
	擬鎖骨	1   0
	第一椎骨	5
	第二椎骨	5
腹椎	45	
尾椎	111	
尾部棒状骨	2	
サヨリ	腹椎	1

スズキ	前上顎骨	1   2
	主上顎骨	0   1
	歯骨	1   1
	口蓋骨	2   0
	方骨	1   2
	前鰓蓋骨	1   0
	主鰓蓋骨	1   0
	肩甲骨	1   0
	第一椎骨	2
	腹椎	2
尾椎	10	
尾部棒状骨	1	
タイ科	尾椎	1
マアジ	舌顎骨	0   1
	腹椎	1   1
サバ属	前上顎骨	1   0
	主上顎骨	0   2
	腹椎	13
	尾椎	7
尾部棒状骨	-	

カツオ	腹椎	1
	尾椎	4
フサカサゴ科	前鰓蓋骨	0   1
	角骨	1   0
アイナメ属	第一椎骨	1
	第三椎骨	1
	腹椎	2
	尾椎	4
カレイ科	尾椎	-
カワハギ科	尾椎	1
フグ科	前上顎骨/歯骨	1

爬虫類

ヘビ亜目	椎骨	1
------	----	---

鳥類

鳥綱	尺骨・骨幹部	1
	指骨	1

哺乳類

ネズミ科	下顎骨	1   0
ネズミ科?	寛骨	0   1

型魚類の部位骨の一部が通過してしまっていて回収されないケースが確認されていることから、分析結果は、小型魚類の個体数が実態より少なく評価されている可能性がある。

4層のサンプル全体における最小個体数は、マイワシが6点と最も多く、スズキとサバ属が2点、その他がそれぞれ1点である。

マイワシは頭部から脊椎まで、全身の各部に渡って確認されている（ニシン科魚類のうち同定されているのはマイワシのみであることから、種不明ニシン科魚類の椎骨を、ここではマイワシのものと判断した）。スズキも、数量は少ないながら、マイワシと同様の傾向を示している。他の種においては、部位の多寡を検討しうるほどの数量が得られていない。スズキは大きさにバリエーションがあり、同定に使用した現生標本との比較による大雑把な体長推定によると、体長25cm以下の個体、体長30cm前後の個体、それより大きな個体（体長60cmよりは小さい）の3段階のサイズの差が見られた。また、他の魚類で、同様の観察により体長が30cmを超えると考えられたものは、アイナメ属の一部とカツオである。その他の魚種は30cmを下回る（ただし軟骨魚綱を除く）。

### [爬虫類・鳥類・哺乳類]

ヘビ類（ヘビ亜目）の椎骨1点、ネズミ科（ハタネズミ亜科）の上顎骨（右側第一臼歯含む）1点、ネズミ科の下顎骨（左側切歯含む）1点、ネズミ科のものと思われる寛骨1点が同定された。また、種不明鳥類の指骨と尺骨の骨幹部、鳥類骨の破片、小型哺乳類の骨の破片、ニホンジカあるいはイノシシ程度の大きさの哺乳類の骨の破片などが確認されている。

#### ④ まとめ

西畑－西Ⅰ区の調査区で9世紀後半頃の貝塚が確認された。アサリの純貝層で、量的には少ないもののイワシ、アジ、サバ、スズキ、アイナメ、フグ、タイ、カツオなど少なくとも14種の魚種が検出された。サンプルの量的・質的な問題はあっても、魚貝類の種類や組成は縄文時代後・晩期と変わらない。古代においても様々な魚種を対象とした漁携活動が行なわれていたことが明らかになった。

一方で、これまで西畑地点（第1次調査第3トレンチ、第3次調査北区）の調査で多量に出土している古代の製塩土器は、西畑地点の西Ⅰ区の貝層中からは1点も検出されなかった。古代の松島湾沿岸では製塩遺跡が密集して分布し、8世紀末から9世紀前半を中心に多賀城の管理の下、塩の生産が盛んに行われ、律令国家による蝦夷政策の転換等により9世紀後半には衰退した可能性が指摘されている（菅原 2022）。西畑地点の調査で検出された9世紀前半の竪穴建物や製塩土器、卜骨、ウシ・ウマ等は多賀城の製塩プロジェクトに関わるものとみられ、古代の里浜集落がその一端を担っていたことを示唆する。季節や漁携と製塩の作業の質、場の違いを示している可能性も考えられるが、松島湾沿岸における古代製塩の終焉を示しているものと思われる。

## 2) 西畑－西Ⅱ区（第10・12次調査）

### ① 調査の概要

平成15、16年度に、休憩施設（「大型四阿」）建設計画地内、西畑西地点（西Ⅱ区）の遺構確認調査を行った（第48図、写真55－4・5）。調査区は、東北歴史資料館による西畑地点調査区（東北歴史資料館 1982、1986～1987）の約40m西に位置し、西側の台地地点の丘陵と東側の牛山崎に延びる丘陵とに挟まれた入江状地域東側の谷頭部分に立地する。15年度に2本の南北トレンチを設定して調査を行い、2条の溝跡と古墳時代中期南小泉式期の赤彩された高坏が出土した。16年度の調査では、これらの溝跡の形状や規模、詳細な年代および性格等を明らかにするため、調査区を拡張し面的な調査を行った。

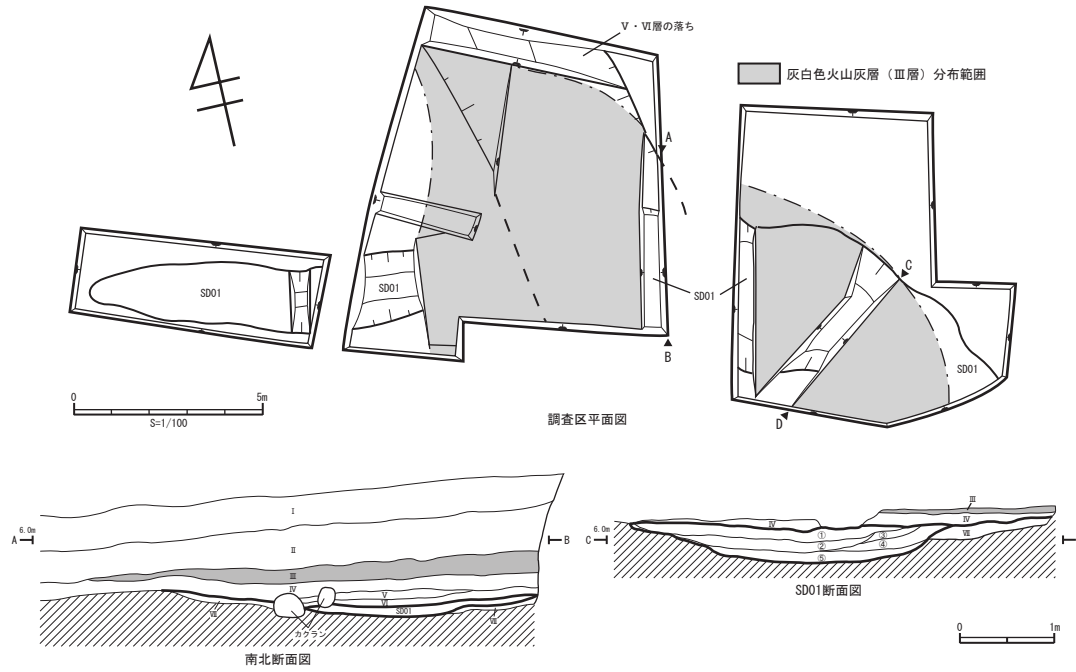
調査の結果、平成15年度検出した2条の溝跡がL字に巡る一連の溝跡（SD1溝跡）であることを確認するとともに、東西約20m、南北約5mにわたって検出し、さらに南側に延びることが明らかとなった（第50図、写真55－6・7）。溝跡の底面は、谷頭の中央付近にあたる調査区中央部で最も深く、西側および南側に向かって徐々に浅くなる。周辺の地形および溝跡の平面形や断面、堆積状況などから見て、周溝墓とは考え難く、調査区南側の丘陵上に立地する集落（居住域）の北と東を画する溝跡と推定された。

溝跡からは、古墳時代前期（塩釜式期）から中期（南小泉式期）にかけての土師器（高坏、甕、壺）や管玉などが出土した。とくに、溝跡堆積土の中位でまとまって検出され、焼けた凝灰岩礫群（写真55－8）とともに赤彩された高坏、管玉が出土した。

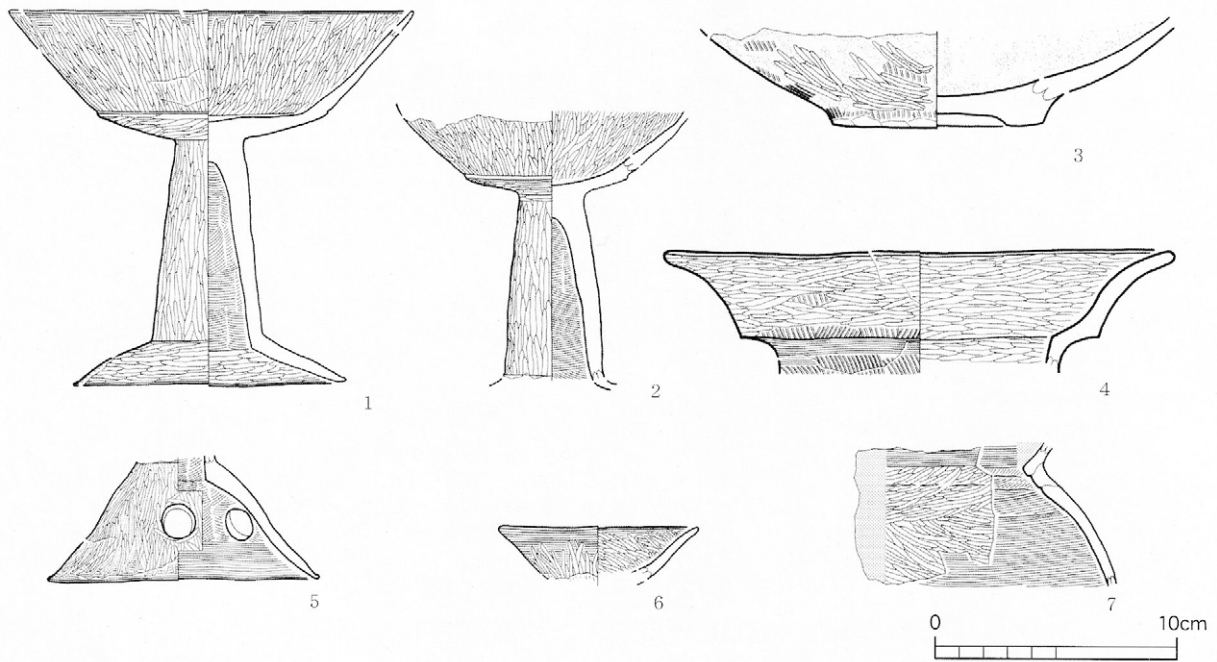
また、谷頭の中央付近にあたる調査区の中央部で、SD1溝跡を開析し入江に向かって延びる古代の溝跡（自然流路）1条を検出した。溝跡上層には、灰白色火山灰の堆積が認められた。堆積土中からは、縄文土器、土師器、須恵器などの破片が少量検出され、古墳時代と同様、調査区南側の丘陵上に当該期の遺構の存在が推定される。

### ② 出土遺物

SD1溝跡出土遺物で図化できたのは、高坏2点、器台2点、甕2点（うち1点は赤色塗彩甕）、壺1点の合計7点である（第51図、写真53）。この他にも多くの土師器破片が出土している。1、2は高坏で、いずれも有段丸底の坏部をもつ。外面と坏部内面はヘラミガキ調整で、丁寧なつくりであり、脚部内面はナデられている。1は残存状況が良



第50図 西畑-西Ⅱ区 (第10・12次調査) 平面および断面図



No.	器種	外面	内面	口径	底径	器高	残存	備考
1	土師器高坏	ミガキ・ヨコナデ 5YR7/8橙	ミガキ・ヨコナデ・ナデ 7.5YR7/6橙	(16.6)	(11.3)	15.3	3/4	
2	土師器高坏	ミガキ 7.5YR8/4浅黄橙	ミガキ・ナデ 7.5YR8/3浅黄橙	-	-	-	1/2	
3	土師器甕	ハケメ・ミガキ・ヨコナデ 7.5YR7/6橙	ミガキ 7.5YR7/8黄橙	(21.0)	-	-	1/4 以下	
4	土師器壺	ハケメ・ミガキ・オサエメ・マメツ 10YR6/3にぶい黄橙	マメツ 2.5YR6/6橙	-	8.6	-	1/4 以下	二重口縁甕
5	土師器器台 (脚部)	ミガキ・ヨコナデ 5YR7/6橙	ナデ・ヨコナデ 5YR6/6橙	-	(11.2)	-	1/2	3穴
6	土師器器台 (坏部)	ミガキ・ヨコナデ 5YR6/6橙	ミガキ・ヨコナデ 5YR6/6橙	(8.2)	-	-	1/4 以下	
7	土師器甕	ヨコナデ・ミガキ・赤色塗彩 7.5YR4/4にぶい赤	ヨコナデ・ハラナデ・赤色塗彩 7.5YR4/4にぶい赤・7.5YR8/6浅黄橙	-	-	-	1/4 以下	赤色塗彩

第51図 1号溝跡出土土器

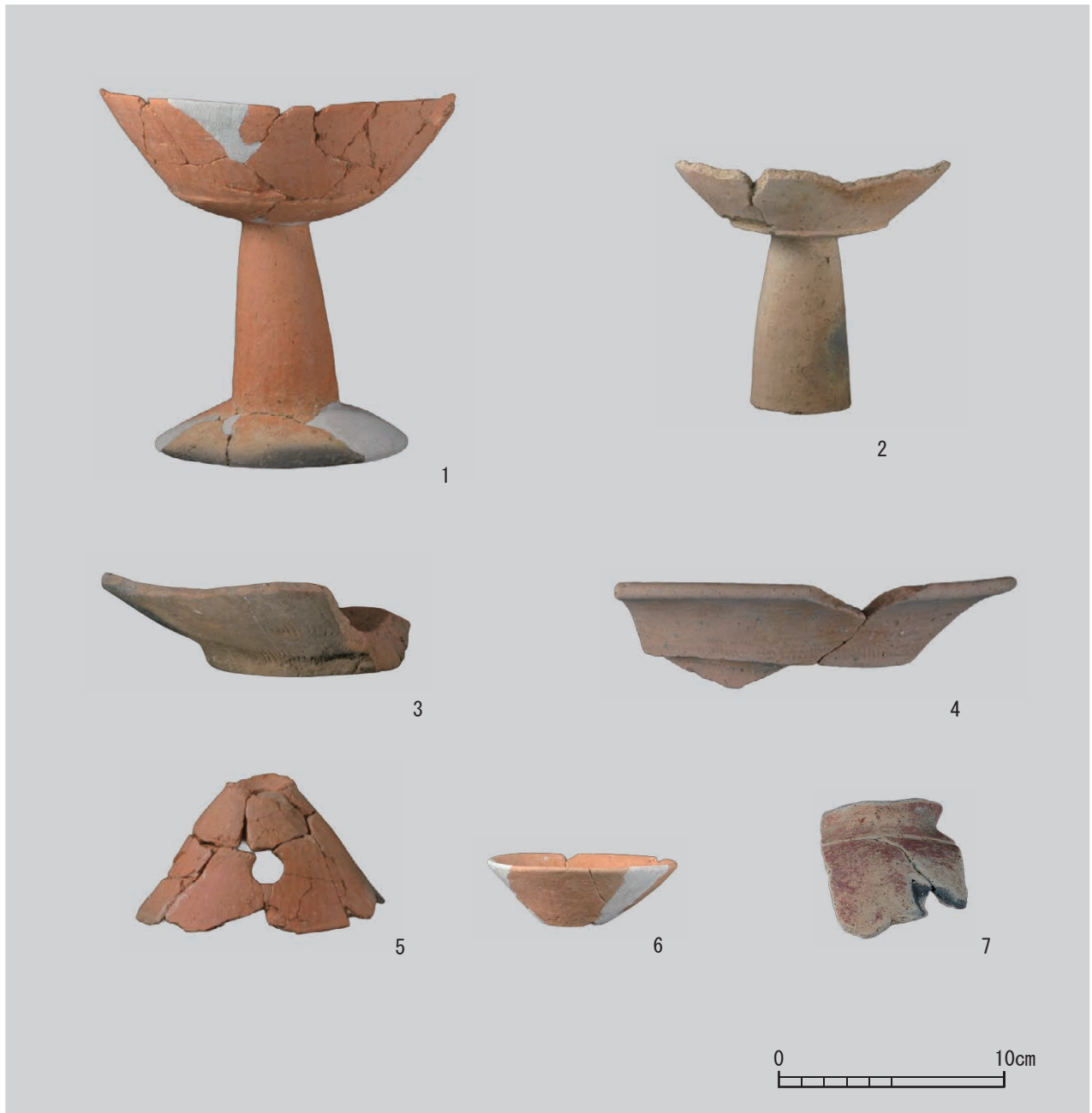


写真 53 西畑 - II 区 (第 10・12 次調査) 出土遺物

いもので、口径が 16.6cm、器高が 15.3cm である。6 は器台の坏部で、外面がヨコナデ後にヘラミガキ調整をし、口縁端部は外反している。脚部 (5) は円錐台状で、上部に貫通孔があり、やや上気味に 3 孔の丸窓がある。内面では坏部がヨコナデ後にヘラミガキ調整、脚部はナデ・ヨコナデ調整である。4 は口縁部のみが残存し、外面の調整はハケメ・ヨコナデ後にヘラミガキされ、口縁部が大きく外反し頸部に段を有する二重口縁の壺で、内面はヘラミガキされている。全形は不明だが、丁寧な作りである。7 は赤色塗彩甕で、外面がヨコナデ・ミガキ調整、内面がヨコナデ・ナデ調整が施されている。全形は不明であるが、外面は全体と内面口縁端部に赤色塗彩されている。これらの年代については 1～4 が古墳時代中期の南小泉式、5～7 が古墳時代前期の塩釜式に相当するものと考えられる。

このほか、このほか遺構外の堆積層から縄文時代晩期の深鉢、鉢、注口土器、壺の破片と、縄文時代前期の深鉢の破片が僅かに出土している。年代がわかるものとして晩期中葉 (大洞 C 2 式) の深鉢、鉢、注口土器、前期初頭 (大木 1 式、繊維痕あり) の深鉢がある。

### ③ まとめ

西畑－西Ⅱ区の調査では、調査区南側の丘陵上に立地する集落（居住域）の北と東を画すると推定される古墳時代前期から中期にかけての溝跡を検出した。寺下囲地点および西畑地点からは、これまでも該期の遺物が検出されており、現集落付近の低丘陵上に当時の集落も営まれていたことが明らかになった。堆積土中からは、縄文時代晩期の土器、土師器、須恵器などの破片も検出されており、古墳時代と同様、調査区南側の丘陵上に当該期の遺構の存在が推定される。

## (5) 平成 17・18 年度調査〈第 14・15・16 次調査〉

### 1) 西畑〈第 14・16 次調査〉

#### 調査の概要

昭和 54～59 年に東北歴史資料館によって継続的な調査が行なわれ、平成 8 年には鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館が範囲確認調査を実施している（第 1 次調査）。ただし、これまでの調査はいずれも部分的な狭い範囲の調査のため、年代をはじめ西畑地点貝塚全体の様相を明らかにするには至っていない。史跡整備後には貝層の野外展示を行う計画で、貝層の広がり把握するためトレンチによる範囲確認調査を行った（第 48 図）。また、東北歴史資料館調査区（昭和 54～59）の南側で、斜面下の緩斜面に東西 4 m、南北 5 m の調査区を設定し、西畑地点貝塚の始まりと内容の変遷等を明らかにするための内容確認調査を行った。

範囲確認調査の結果、西畑地点の貝塚は谷を埋めるように谷頭から形成され、東西約 25 m、南北約 35 m の広がりをもつ貝塚であることが確認された。

内容確認調査では、層のまとまりと平面的な広がり、上下関係を確認しながら行った。標高的に最も低い北西隅が層位的にも新しく、今年度は北西隅に連続してかかる廃棄層を悉皆的にサンプリングした。アサリ・オキシジミ・シオフキが主体をなす純貝層とマグロ・大型スズキ等の魚骨を多く含む風化凝灰岩層が互層をなして形成されており、当時の堆積状況が良く保存されている。遺物は、大洞 C2 式の浅鉢のほか、深鉢形の一括土器が出土しており、今回掘り上げた廃棄層の年代は晩期中葉と考えられる。ただし、破片資料ではあるが晩期前葉（大洞 B 式）の土器も出土し、さらに昨年度の調査で後期末の瘤付土器も出土していることから、後期末から晩期中葉にかけて連続して堆積している可能性が高まった。このほか、魚骨層と共伴して鹿角製のヤスや単純銚なども出土した。

第 14・16 次調査調査と第 1 次調査（第 1、2 トレンチ）の調査によって、西畑地点貝塚の平面的な広がりが明らかになるとともに、縄文時代後期末から晩期後葉（大洞 A 式）まで営まれたことが推定された。

### 2) 西畑－東区〈第 15 次調査〉

#### 調査の概要

史跡整備事業に伴い、西畑地点の東側を画する丘陵上の竹笹類の伐採・刈払いを行った結果、貝層および縄文土器の分布を確認し、竪穴建物跡等の遺構も存在する可能性が出てきたため、3ヶ所にトレンチを設定して確認調査を行った（写真 56）。

調査の結果、縄文時代の遺構・遺物は検出されず、平安時代とみられる土坑 1 基（SK1）、炭窯とみられる時期不明の土坑 2 基（SK2・3）のみ、検出された。貝層については、アサリとマガキを主体とし、丘陵の段差を埋めるように約 5 × 10 m の範囲に、最大約 50cm の厚さで確認されたが、年代的に新しいものであることが分かった。



1. 史跡整備後の西畑地区全景（北から）



2. 史跡整備後の西畑地区（西から）



3. 西畑 - 西 I 区（第 10 次調査）調査区全景（西から）



4. 貝層分布状況（南西から）

写真 54 西畑地点（第 10・12 次調査）(1)



1. 貝層分布状況（東から）



2. II区貝層堆積状況（北壁）



3. II区貝層検出状況



4. 西畑-西II区（第12次調査）調査区遠景



5. 西畑-西II区（第12次調査）調査区全景（北から）



6. SD1溝跡全景



SD1溝跡断面



SD1溝跡焼礫群検出状況

写真 55 西畑地点（第10・12次調査）(2)



1. 西畑 - 東区 (第15次調査) 調査区遠景



2. 調査区全景 (北から)



3. SK 2土坑 (時期不明、炭窯?)



4. SK 3土坑 (時期不明、炭窯?)

写真 56 西畑 - 東区 (第15次調査)

## 2. 里地点

### (1) 平成8年度調査〈第2次調査〉

#### 1) ヘアーサロン尾形 (HSO) 地点 (第16図B)

##### ① 調査の方法と経過

個人住宅の新築に伴い、遺跡への影響が想定される浄化槽埋設部分の調査を実施した。重機により地表下約70cmの客土を除去後、重機により掘削を行った。かつて井戸があったためその部分は挿鉢状に掘り窪められ、さらにそこから排水溝が道路方向に延び、一部の遺物包含層を破壊していた。4層中から人骨の一部が確認された。精査の結果、土坑も確認することができた。これを1号人骨(1号土坑)とする。その後の精査で2体の人骨の一部を確認した(2、3号人骨)。さらにその下層には、動物遺存体を大量に伴う縄文時代後期後葉の遺物包含層の堆積が認められた。調査は遺物を含まない9層まで行った。

##### ② 層序

基本層序は以下の通りである(第52図)。

1層の上には約70cmの盛り土が行われている。

1層 : 10YR3/2 黒褐色シルト。アサリを主体とする混貝土層、縄文晩期中葉の土器を含む。径1～5mmの赤色土粒をわずかに含む。粘性、しまり中。

2層 : 10YR3/2 黒褐色粘質シルト。径1～5mmの赤色土粒をわずかに含む。粘性やや強、しまりやや弱。

3層 : 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。径10～20mmの凝灰岩小礫を少量含む。径1～2mmの灰色土粒をやや多く含む。縄文晩期前葉の土器を含む。粘性中、しまりやや弱。

4層は上下に分層される。

上層 : 10YR3/1 黒褐色粘質シルト。径2～10mmの赤色土粒を少量含む。縄文晩期初頭の土器を含む。粘性やや強、しまり中。

下層 : 10YR4/4 にぶい黄褐色粘質シルト。径2～10mmの赤色土粒を少量含む。縄文晩期初頭の土器を含む。粘性中、しまりやや強。所々に5YR4/6 赤褐色の焼土ブロックを含む。

5層 : 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。径2～5mmの白色上粒を少量含む。縄文後期後葉の土器を含む。粘性やや強、しまり弱。

6層は上下に分層される。縄文後期後葉の土器を含む。

上層 : 10YR3/4 褐色シルト。魚骨を大量に含む。粘性、しまり中。

下層 : 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土。魚骨を大量に含む。粘性強、しまり中。

7層は4枚の層に細分した。縄文後期後葉の土器を大量に含む。

①層 : 10YR2/2 黒褐色シルト。カキ、アサリを主体とする混貝土層。粘性中、しまり中。

②層 : 10YR2/2 黒褐色シルト。カキ、アサリを主体とする混貝上層。炭化物を多く含む。粘性やや強。しまりやや強。

③層 : 10YR3/2 暗褐色シルト。魚骨層。炭化物を多く含む。粘性やや強。しまりやや強。

④層 : 10YR3/3 暗褐色シルト。魚骨層。粘性やや強。しまり中。

8層 : 10YR3/1 黒褐色～10YR/2 黒色シルト。縄文時代の土器を少し含む。動物遺存体は含まない。粘性やや強、しまりやや強。10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックをまだらに含む。

9層 : 10YR3/4 暗褐色シルト。無遺物。粘性やや強、しまりやや強。

以上の層に分層した。6層、7層は動物遺存体を大量に含有していたので、悉皆採集を行った。それらの土壌はまだ未水洗、未選別状態である。採集の際には、層の細分を行い取り上げた。ただし、遺物は上記の大別層を用いて取り上げている。

##### ③ 遺構

4層上面でいくつかの遺構を確認した(第52図、写真57-2)。

#### 1号土坑 (96-1号人骨埋葬土坑墓)

調査の最初に人骨が確認され、その輪郭を検出した。全体が確認されている（写真57-3）。土坑確認面の長軸長は123 cm、短軸長は81 cm、底面の長軸長は117 cm、短軸長は71 cmである。掘り込み面は確認できなかった。確認面から底面までの深度は9 cmである。1号人骨の埋葬頭位は真西を指し、顔は左を向いている。形質人類学による検討から若い壮年男性と推定されている。足元に中央部で破損した磨製石斧刃部（写真19-11）が出土している。出土レベルが人骨とほぼ同じことから、副葬品の可能性がある。この土坑は2号土坑に切られている。

## 2号土坑

全体の半分が発掘区内で確認されている。西側は発掘区外、北側は攪乱で破壊されている。この土坑は3層の下から掘り込まれている。4層が切れる部分なので確実に4層上面からの掘り込みかどうか確認できないが、1号土坑は4層を掘り込んでいることから、4層上面からの掘り込みと推定できる。土坑は楕円形と推定できる。そのほぼ中央に直立した深鉢下半部（図版写真19-12）が埋設してある。埋土は3層確認できた。上から埋土1：10YR3/3 暗褐色シルト。径0.5 mmのガラス質砂粒、径5～10 mmの炭化物を少量含む。径0.5 mmの赤色土粒をわずかに含む。埋土2：10YR2/1 黒色シルト。炭化物を多く含む。粘性、しまり弱。埋土3：10YR2/3 黒褐色粘質シルト。混貝土層。一部ブロック状に貝（アサリ、ハマグリ）の集中が見られる。骨角器（写真61-3・9）が出土している。土坑の埋土と土器の関係を見ると、土坑が埋まった後、土坑上面に深鉢を設置したと判断できる。この土坑は埋土3が混貝土層であることから、開口した土坑への廃棄とも埋没とも考えられる。2号土坑はさらに14号土坑も切っている。

## 3号土坑

全体のほぼ2/3が発掘されている。土坑は3層下、5層上面から掘り込まれている。4層がこの域まで広がっていないが、平面的には4層上面で確認しているため、3層堆積以前のものと推定される。形状は楕円形で、長軸長76 cmである。長軸はほぼ東西を指している。埋土は2層確認されている。埋土1：10YR3/3 暗褐色砂質シルト。粘性、しまりなし。直径1～3 mmの凝灰岩粒をやや含む。埋土2：埋土1とほぼ同じであるが、凝灰岩粒をやや多く含む。この土坑内からは大洞B C式の鉢（写真19-10）が出土している。

## 4号土坑

土坑全体が発掘されている。長軸長120 cm、短軸長66 cm、長軸は磁北に対して西に70度振れている。この土坑の長軸、北西隅に2点の塗朱された精製壺形ミニチュア土器（写真19-8・9）が埋設されていた。4号土坑の埋土は1層で、人為堆積層と判断した。他に人骨などの出土はなかった。埋設されていたミニチュア土器の内長頸壺は横倒し、無頸壺は目録部が長頸壺の頸部によりかかるようにして出土した（写真58-2・3）。長頸壺（8）は高さ85 mm、口径63 mm、胴部径76 mm、底径39 mm、器壁厚3.5 mmである。破損のために部分的にしか残っていないが、そこから推定すると目録部はやや肥厚し外反している。頸部は長く、無文で入念に磨かれている。頸部と胴部の境に幅3 mmの沈線が2本めぐる。沈線の中には幅0.7 mmの残沈線が部分的に残っている。沈線上の1ヵ所に突起がある。この部分が正面であろう。底部は一段くぼむ平底である。外面は底部も含め全面が磨かれている。内面は目録部から約55 mm下の胴部張り出しの直上まで磨かれている。内外面に朱彩の痕跡が残る。胎土には海綿状骨針が含まれている。さらに器体表面は火膨れ状に肥厚したり、円形に剥落する部分がある。これらは器壁内から外に向けて押し出されているような剥落痕跡である。このような剥落の原因のひとつには水溶性の物質が器壁内に留まり、結晶化した場合などが考えられる。この土器の場合、全面にそのような痕跡が認められることは、内容物を推定する上でも興味深い。もう一点の無頸の壺（9）は口縁部全体が破損しており、器高は現状以上に高かったと推定できる。現存器高は45 mm、口径54 mm、胴部径81 mm、底径29 mm、器壁厚3 mmである。この土器の胎土には海綿状骨針を含まない。頸部には幅9 mmの範囲に沈線を用いて、潰れたような三叉文またはシダ状文が施文されている。沈線の幅は2.2 mm前後で、幅0.5 mmの残沈線が部分的に残る。この文様帯の一ヵ所に前者同様の突起がある。底部は一段くぼむように作られている。外面は全面磨かれている。内面も底部まで磨かれている。このことから、失われた頸部は前者ほど高くはなかったと推定できる。また、内外面に朱彩の痕跡が残る。口縁部の割れた面は滑らかで、頸部を失ってから使い込まれていたことを示している。また、この土器には前者のようなあばた状の表面剥離痕はない。この2点の土器は大洞B C式に属すると考えられる。

このような土坑は人骨が残存しない遺跡では土坑墓と判断される可能性が高い。しかしながら、里浜貝塚の場合、土坑墓であれば人骨が残存する条件が整っている。4号土坑の場合、副葬品とも考えられる土器が2点出土しているが、



人骨はなかった。墓域内にある墓の形成時期と近接するこのような土坑は、埋葬に先立つ儀礼の存在を考えさせる。6、7、8、9、10号土坑

4号土坑に先行して作られた、長軸長30cmから50cmの小土坑である。中から遺物は出土していない。

#### 11号土坑 (96-2号人骨埋葬土坑墓)

長軸長113cm、短軸長63cm、土坑深度30cmである。土坑は3層上面から掘り込まれ、5層上部にまで達している。その上を2層が覆っている。2層からは三叉文、シダ状文の施文された土器が出土しており、この土坑は縄文晩期前葉に構築されたと推定できる。埋土は1層で、10YR3/3暗褐色砂質シルト、粘性やや強、しまり弱。径1～5mmの凝灰岩粒を少し含む。埋葬人骨の頭位方向は北から西へ57度振れている。頭部は右下方向を向いている。埋葬姿勢は仰臥屈葬である。上顎両犬歯が抜歯されている。この人骨の放射性炭素年代は2980±50yr.BPである。この土坑埋土から玉髄製石匙(写真62-7)が出土している。この石匙は土坑埋土の上部(写真57-4)、縦膝にした大腿骨の中央横から出土しており、埋葬された人物が携帯する位置から多少離れており、副葬品ではなく、埋土への紛れ込みと考えられる。

#### 12号土坑 (96-3号人骨埋葬土坑墓)

残存長軸長90cm、短軸長(推定)60cm、土坑深度50cmである。土坑は3層上面から掘り込まれ、底面は6層上部まで達している。12号土坑は1層に覆われている。層位的所見から11号土坑同様、晩期前葉の年代が与えられよう。この土坑の約1/3は後世の攪乱によって失われている。発掘区北西隅の大規模な攪乱は井戸の掘削に伴うもので、この井戸は現在も使用されている。さらにかつてはこの井戸から流れ出る用水路が存在し、それが土坑の一部を壊したと推定できる。埋土は1層で、10YR3/3暗褐色砂質シルト。粘性やや強。しまり弱。径3～4mmの凝灰岩粒を少し含む。埋葬人骨の頭位方向は頭部が失われていることから正確には復原できないが、椎骨の位置から推定すると、南から西へ20度振れている。土坑内には副葬品はなかった。埋葬姿勢は仰臥屈葬である(写真58-1)。形質人類学によれば、未成人で男性的との所見である。この人骨の放射性炭素年代は2620±50yr.BPである。

これらの遺構の他に断面で確認された、13号、14号土坑がある。4層以外では遺構は確認できなかった。

### ④ 遺構外の出土遺物

#### 1層出土遺物

1層からはほとんど遺物は出土していない。有文土器の代表的なものを図版化した(写真59-1～5)。

1、2、4は三叉文が施文された鉢である。1は口径120mm、器壁厚3.8mm、2は口径260mm、器壁厚4.3mm、4は口径90mm、器壁厚3.1mmである。3、5は三叉文が施文された深鉢である。3は口径340mm、器壁厚5.2mm、5は口径300mm、器壁厚5mmである。

写真62-11は砂岩製の砥石である。縁辺にU字形のくぼみが11ヵ所にある。それらは直径3～5mmで、細長い骨角器の研磨に用いられたものと推定される。写真63-1は磨製石斧である。敲打により成形された痕跡が多い。刃部は研磨により両刃が作出されている。基端部近くで写真a面方向からの加圧で折れている。砂岩製である。写真63-4は全面に磨痕を残す磨石である。長軸長100mm、短軸長75mm、厚さ58.6mm、重量637グラムである。

#### 2層出土遺物

2層からの遺物も少ない。写真59-6は入組文の施文された鉢、口径180mm、器壁厚4.4mmである。7は台付鉢脚部、脚径120mm、器壁厚5.5mmである。写真62-10は多面体石器である。石核として限界まで使用され、その後叩き石として転用されたものである。縁辺には全周にわたり敲打痕が認められる。硬質頁岩製。写真63-5は磨石である。両面の中央にくぼみがある。最大長86cm、最大幅81.5cm、最大厚42.2cm、重量432グラムである。安山岩製。

#### 4層出土遺物

4層出土の遺物も少ない。写真59-8は入組文の施文された深鉢である。口径400mm、器壁厚6.8mmである。入組文内にはキザミが充填されている。9は三叉文が施文された深鉢である。口径400mm、器壁厚5.7mmである。

#### 5層出土遺物

5層からは多少まとまった遺物が出土している。写真59-10は壺である。口径120mm、器壁厚6.2mm、頸部高46.6mmである。頸部と体部のくびれ部に区画の沈線が1本(幅2.2mm)巡っている。一部で引き損じかおり、沈線が

2本になっている部分もある。体部にはLR単節縄文（原体長18mm、節長3mm）が帯状に巡っている。頸部内外面は磨かれているが、体部内面はナデ調整で終わっている。11は有文深鉢である。推定口径280mm、器壁厚6.6mmである。文様は口縁部下にのみ施文されている。体部はナデ調整で、文様帯の部分だけ磨かれている。文様は沈線と間隔の広いキザミから構成される。キザミは口縁部下と沈線間の三帯に充填されている。施文方法は先端の鋭利な棒状の工具で突き刺して、掘り起こしている。沈線幅は4.2mmである。沈線の底には幅0.5mm程度の残沈線が認められる。入組文は下書きした後、半乾燥時に棒状骨角器の凸部で引かれたものである。入組文の内側はナデ調整の無文である。外側は磨かれていることから、ナデとミガキのコントラストを用いた文様表現といえる。12は有文深鉢のくびれ部体部破片である。沈線、キザミ、縦割瘤、縄文（LR単節、節長1.4mm）、ミガキ（光沢無しで装飾されている。沈線は幅2.4mm、沈線底には幅1mmの残沈線が認められる。文様には菱形文、入組文が認められる。内面は横ミガキがなされている。13は推定口径260mm、器壁厚5mmの深鉢。沈線（幅2.8mm、残沈線あり）と縄文（LR単節、節長1.8mm）、瘤とミガキで装飾されている。14は推定口径380mm、器壁厚5.8mmの深鉢である。沈線（幅2mm、残沈線あり）、縄文（L無節、幅1.8mm）、貼瘤で装飾されている。文様は入組文が施文されている。15は推定口径360mm、器壁厚5.8mmの深鉢である。沈線（幅2.6mm）、縄文（LR単節、節長1.7mm）、凸端による掘起し瘤、貼瘤によって装飾されている。文様は小破片のため不明。16は推定口径120mm、器壁厚5.2mmの壺であろうか、内面はナデのみ。沈線（2.2mm、残沈線あり）、縄文（LR単節、節長1mm）、ミガキを有し、隆帯によりX字の文様が施文されている。小破片のため、文様は不明。写真62-6は錐、9は横形石匙である。共に頁岩製である。6の最大長、最大幅、最大厚は33.0mm、13.4mm、5.1mm、9はそれぞれ85.5mm、37.1mm、7.4mmである。9の横形石匙の刃部は腹面側に再生されている。摘み部には紐の痕跡がある。

## 6層出土遺物

6層からは多くの遺物が出土している。写真59-71は深鉢の下半部である。底部径70mm、器壁厚6.4mmである。連続貼瘤による区画帯の下に入組文がある。入組文は上段がLR単節縄文（節長1.2mm）、下段はLR単節縄文（節長1.8mm）により充填される。その下にはLR単節（原体長9.5mm、節長1.4mm）、LR単節（原体長10.5mm、節長2mm）が5段に渡って交互に施文されている。ただし、2~4段目は半周したところで、原体が入れ替わる。内面は横方向に磨かれているが光沢はない。18は口径130mm、器高113mm、底径40mm、器壁厚4.8mmである。体部上半には沈線で区画された細い入組文の内部を列点で充填し、連結部には貼瘤がある文様が施文されている。中央のくびれ部に帯状に列点が充填された区画線があり、その下に入組文が施文されている。この入組文にはLR単節縄文（節長2mm）が充填されている。下半部中程に沈線の区画線があり、その下はLR単節縄文（原体長14mm、節長1.6mm）が不規則に施文されている。沈線の幅は1.5から2mm、部分的に幅0.6mmの残沈線が残る。列点は幅2.6mm程度の棒状工具の端部圧痕である。底部は外周を一段高く作りだしている。内面は横に磨かれているが光沢はない。19は縄文施文の深鉢である。口径250mm、器高260mm、底径70mm、器壁厚4.8mmである。表面はLR単節縄文（原体16mm、節長1.8mm）で無文部をおきつつ帯状に施文されている。

6層出土の骨角器には固定モリ（写真61-1）、棒状角器（5、7）、ヤス（8）、固定モリ未製品（11）、骨篋（写真62-2）、管状骨器（5）がある。土製品には耳飾り破片（12）がある。石製品には石棒頭部破片が2点（13、14）ある（表10）。

## 7層出土遺物

7層からも多数の遺物が出土している。写真60-1は鉢である。口径130mm、器壁厚4.4mmである。口縁部下の外面に沈線で文様が施文されている。沈線幅は1.5mm、5本の横走沈線が4カ所で菱形と内括弧により切られている。残沈線が認められないことから、半乾燥時の1回だけの施文の可能性がある。他は内外面ともにミガキにより仕上げられている。ただし、光沢はない。文様の特徴から北陸系の土器と推定される（関根達人、邊見秀子氏の教示による）。2は深鉢である。口径180mm、器壁厚4.6mmである。器形は下半部が球形に近く、上半部は目縁部に向けて開く。文様は貼瘤と沈線で構成されている。貼瘤には2種あり、瘤状のものと瘤の上から刺突により盲孔がつけられたものがある。前者の貼瘤は粘土が軟らかい状態の時に貼付されている。半乾燥状態の時に器面は粗く磨かれている。既に貼瘤がある部分は磨きが行われていない。次に沈線による施文が行われている。沈線内に残沈線は認められないことから、下書き無

しの施文と推定される。後者の貼瘤は沈線施文後に行われてる。これは沈線との切り合いから明らかである。沈線幅は2mm前後、盲孔の直径は2.8mm、施文工具の先端は尖るようである。沈線と盲孔の施文工具の形態は異なる。ただし、7層出土の棒状骨角器(写真61-6)のように尖部と凸部をもつ施文工具であれば、一本の工具で施文可能である。内面は横方向に磨かれているが、表面にやや凹凸があり、磨き残しが認められる。3は口径150mm、器壁厚5.5mm、表面にはR無節(原体長16mm)の縄文が不整に施文されている。下半部外面はミガキ調整を行っている。内面はナデ調整で終わっている。作りは粗雑である。5は口径270mm、器壁厚6.7mmの深鉢である。器面はナデ調整後、幅約3mmの沈線を約20mm間隔で右あがりの斜めに引き、さらに同様の間隔で右下がりに引いている。その結果器面は縦に長い菱形文が連なる。内面はヨコナデの調整が行われている。その後に光沢の生じないミガキがなされている。また、内面には使用時の炭化物の付着が認められる。6は口径260mm、器壁厚6.2mmの有文深鉢である。器形は上半部のみ残存しているので、下半部は推定になるが、写真60-2のように下半部が球形に近く、くびれて目縁に向かって開く器形と考えられる。文様は沈線と角状の貼瘤で表現されている。口縁部の突起は約38mm間隔なので、22個あったものと推定される。くびれ部の突起は口縁部の突起の数の半分が約58mm間隔で貼付されている。口縁部突起よりもやや大きい。器体上半には口縁部下20mm、81mm、112mmの所に文様を区画する沈線がある。この沈線は他の沈線よりも太く(幅約5mm)、内面は光沢がある。さらに幅約1mmの残沈線が部分的に残る。これらの沈線で区画された文様帯の内、最上段は右上がりの沈線(間隔約7mm、沈線幅1.5mm)、次の文様帯は右上がりの沈線と右下がりの沈線による菱形間隔約11mm、沈線幅約1.7mm、右上がりの沈線の後右下がりの沈線の施文)、その下の文様帯は口縁部下と同様の右上がりの沈線(間隔約7mm、沈線幅1.8mm)で構成される。下半部はミガキ調整がなされている。内面はヨコミガキで調整されている。この土器の製作にあたり、2種の沈線が用いられている。ひとつは生粘土状態で施文された幅1.5mm前後の細い沈線、もうひとつは半乾燥状態時に残沈線上に重ねて引く幅5mmの沈線である。沈線幅から推定して尖形と凸形の異なった施文工具を用いている。7は無文深鉢である。口径240mm、器壁厚6mmである。外面の上半部はナデ、下半部はミガキが施

第10表 HSO地点出土石器・骨角器属性表

No.	出土層	器種	名称	長さ(mm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	素材	図版番号
1	6層	骨角器	固定モリ	95.5	13.3	8.2	9.0	鹿角	図版18-1
2	6層	骨角器	棒状角器	(108.3)	7.4	5.1	4.0	鹿角	図版18-5
3	6層	骨角器	棒状角器	(62.8)	4.8	4.8	2.0	鹿角	図版18-7
4	6層	骨角器	ヤス	(69.7)	10.6	7.8	6.0	鹿角	図版18-8
5	6層	骨角器	固定モリ未製品	146.4	19.0	8.6	24.0	鹿角	図版18-11
6	6層	骨角器	骨篋	110.0	16.0	8.0	12.0	骨	図版19-2
7	6層	骨角器	管状骨器	38.0	8.0	7.8	1.0	鳥骨	図版19-5
8	6層	石器	石棒	(45.2)	25.0	13.0	17.0	粘板岩	図版19-13
9	6層	石器	石棒	(47.0)	28.6	15.5	21.0	ホルンフェルス	図版19-14
10	7層	骨角器	固定モリ	70.5	14.0	7.8	5.0	鹿角	図版18-2
11	7層	骨角器	離頭モリ	64.6	10.0	9.0	4.0	鹿角	図版18-4
12	7層	骨角器	棒状角器	96.0	5.2	4.2	3.0	鹿角	図版18-6
13	7層	骨角器	釣り針未製品	114.9	23.0	10.0	22.0	鹿角	図版18-11
14	7層	骨角器	篋状角器	108.7	19.2	8.8	17.0	鹿角	図版18-12
15	7層	骨角器	板状骨器	107.0	50.7	13.0	466.0	鯨骨	図版19-1
16	7層	骨角器	骨篋	90.2	21.3	12.5	11.0	シカ中足骨	図版19-3
17	7層	骨角器	骨篋	(56.3)	9.1	4.2	4.0	シカ中足骨	図版19-4
18	7層	骨角器	骨刀	288.0	32.8	15.8	156.0	鯨骨	図版19-6
19	7層	石器	石匙	54.2	26.8	9.0	10.0	頁岩	図版19-8
20	7層	石器	磨製石斧未製品	(82.8)	74.1	36.0	290.0	安山岩	図版20-2
21	7層	石器	磨石	96.1	62.6	39.0	351.0	安山岩	図版20-3
22	7層	石器	石棒	(169.0)	44.8	(26.0)	359.0	粘板岩	図版20-7
23	7層	石器	石棒	(150.2)	38.3	(13.0)	127.0	粘板岩	図版20-8

されている。内面はミガキが行われている。8は発掘区の断面抜取り資料である。注口土器、または異形土器である。器壁厚約5mm。器面の文様は貼瘤、沈線、斜線で構成されている。貼瘤には大きさにより3種類（径約4.2mm、径約9mm、径約14.5mm）あり、最大の貼瘤には穿孔がなされている。それぞれの貼瘤は沈線（幅約1.2mm）と斜線（幅約0.3mm）、キザミ（幅約0.6mm）によって構成される2帯一単位の帯状文（幅約6mm）の連結点に貼付されている。帯状の内部は上半部が斜線、下半部がキザミで充填されている。帯状文の間の無文部分は光沢はあまりないがミガキ調整がなされている。内面は簡単なナデが行われている程度で、粘土帯の積み上げ痕跡が明瞭である。30mm前後の粘土帯を器形の屈曲に合わせて積み上げている。また、上半部の筒状部と下半部の球状部を連結する部分は大きさと屈曲を合わせるためかシボリが行われており、内面にその歪みが残っている（8b）。

7層出土の骨角器には固定モリ（写真61-2）、離頭モリ（4）、棒状角器（6）、釣り針未製品（11）、篋状角器（12）、鯨骨製板状骨器（写真62-2）、骨篋（3、4）、鯨骨製骨刀（写真63-6）がある。石器には石匙（写真62-8）、磨製石斧未製品（写真63-2）、磨石（3）、石棒（7、8）がある（第3表）。

#### ⑤まとめ

10㎡にも満たない狭い範囲の調査であったが、事前調査によりこれまでの調査の歴史で初めて里区の集落内の様相の一端をかいまみることができた。縄文時代晩期初頭から前葉の墓域がこの地域に存在することがわかった。さらに墓域として利用される以前には、縄文時代後期後葉の廃棄場として利用されていたことがわかった。縄文時代後期後葉の瘤付土器を中心とした一群は1950年代の台囲地点の調査で多数得られている（後藤 1962）。また、大正8年の松本彦七郎博士の調査（松本 1919 a、b、c、d、会田 1995）では最下層の第18貝層から同時期の遺物が検出されている。台囲地点とは直線距離で300mほど離れている。台囲地点は晩期初頭まで利用されて以後、貝塚の形成は里、寺下囲地点に移る。この時期の廃棄場の検出は、里浜貝塚における土地利用の時間的変遷を考える上で重要な資料を提供した。さらに、検出された廃棄場は貝層というよりも魚骨層と形容すべきほど、魚骨を中心とした動物遺存体が豊富に含まれていた。これらの資料は土ごと悉皆採集しており、水洗後分析を行う。晩期中葉の西畑地点の貝層とは異なった層相であり、場の機能を考える上でも重要な資料となろう。



1. ヘアースロン尾形（HSO）地点調査区全景



2. 4層上面遺構（人骨）検出状況



3. HSO地点1号人骨



4. HSO地点2号人骨



5. HSO地点2号人骨頭部



HSO地点3号人骨



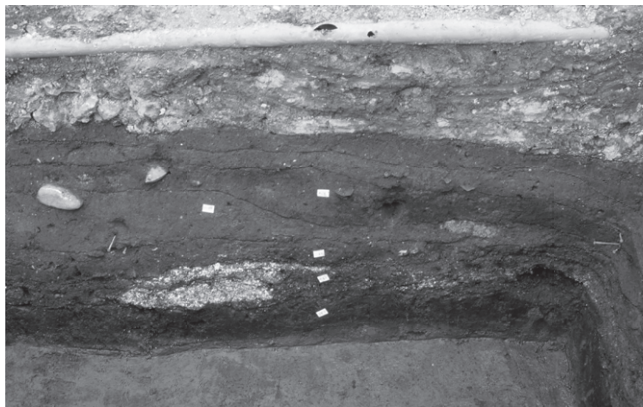
2. 4号土坑土器出土状況



3. 4号土坑



4. 調査区北壁断面(北東隅)



5. 調査区南壁断面(西半部)



6. HSO地点完掘状況(9層上面)

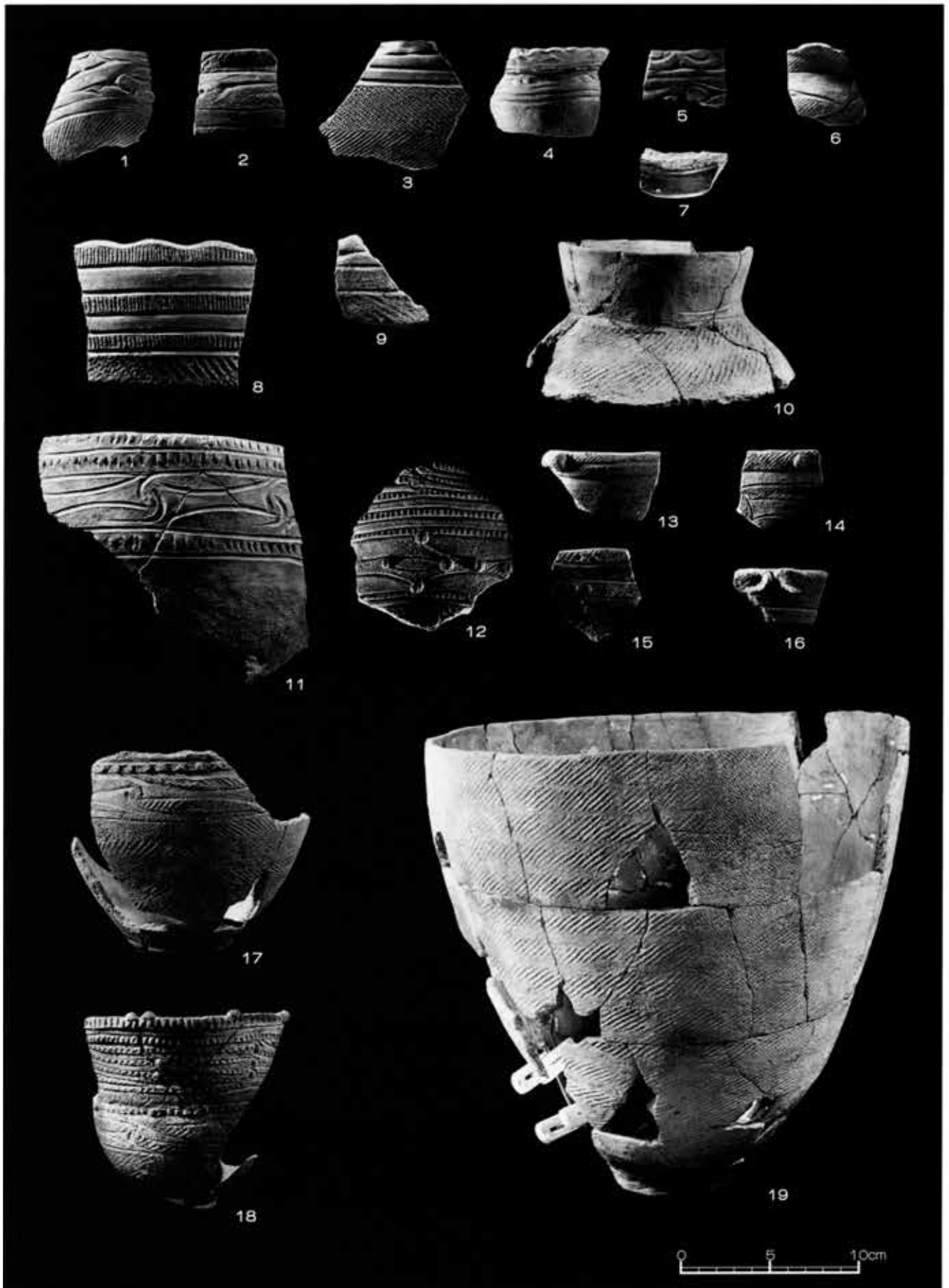


写真 59 HSO 地点出土縄文土器(1)

1~3:1層 4~7:2層 8,9:4層 10~16:5層 17~19:6層

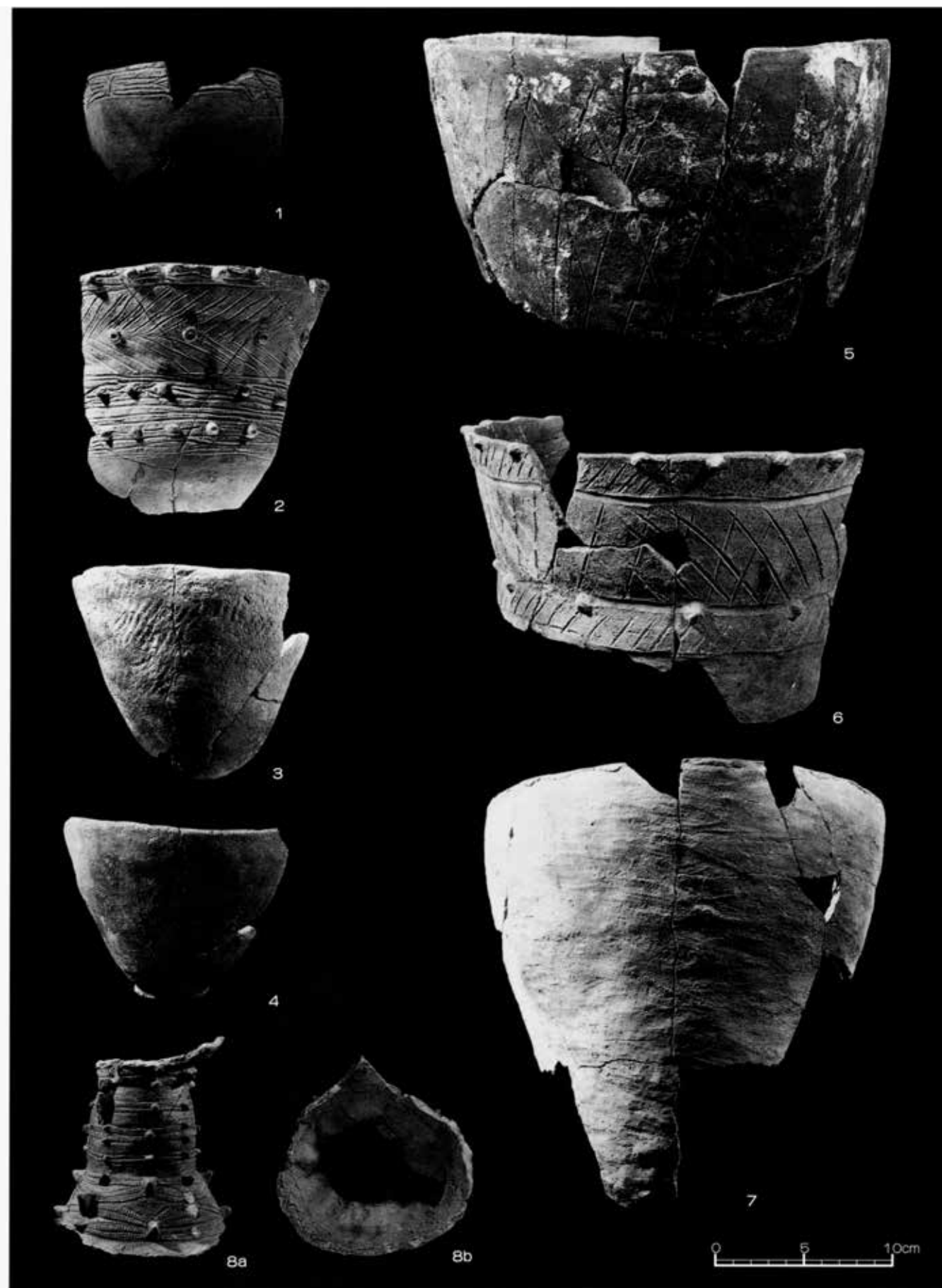


写真 60 HSO 地点出土縄文土器 (2)

1-8:7層

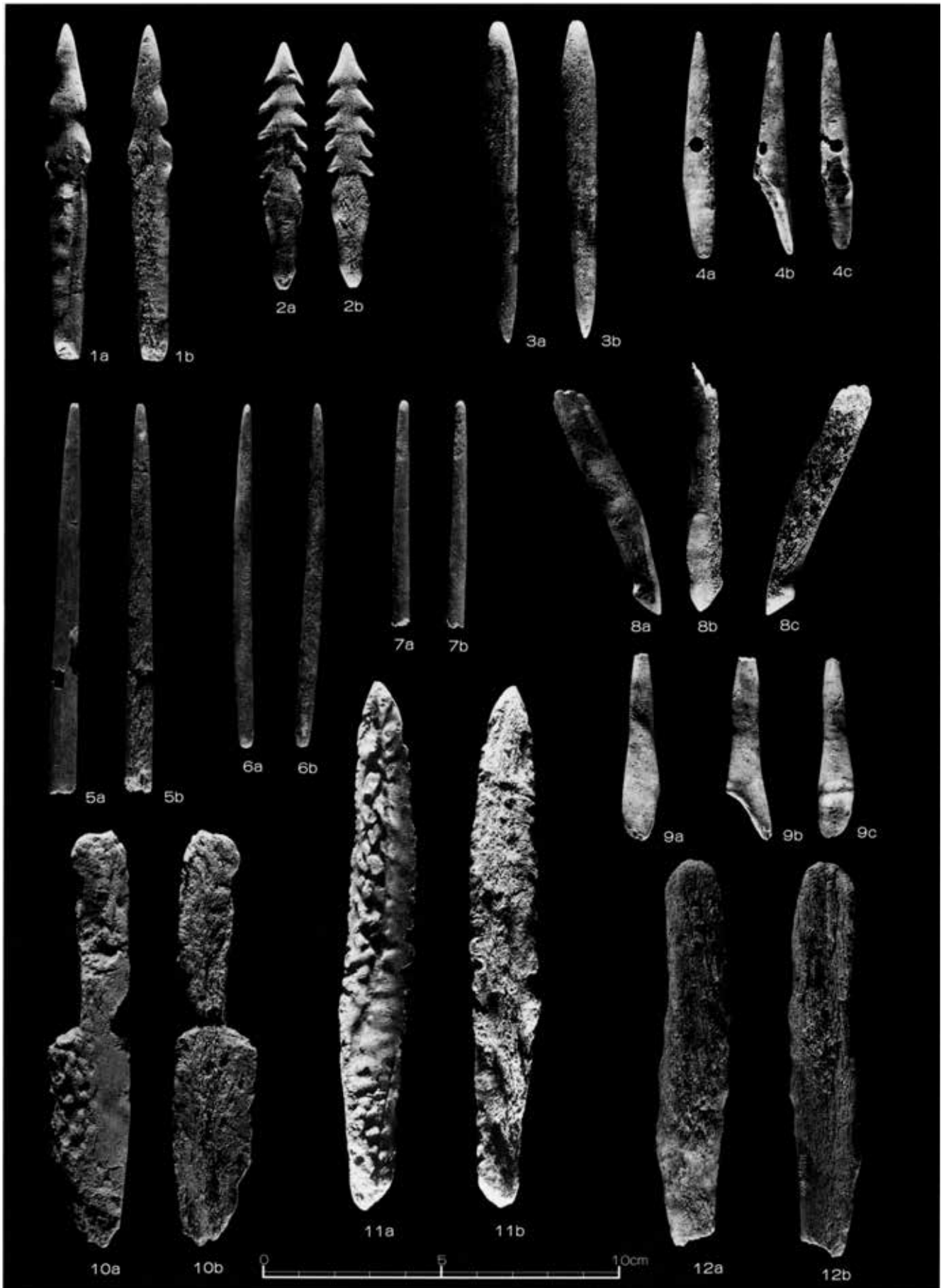


写真 61 HSO 地点出土遺物 (1)

1・2：固定モリ 3：単純モリ 4：離頭モリ 5～7：棒状角器 8：ヤス 9：離頭モリ未製品 10：釣り針未製品  
11：固定モリ未製品 12：筥状角器 1・5・7・8・11：6層 2・4・6・10・12：7層 3・9：2号土坑埋土 3

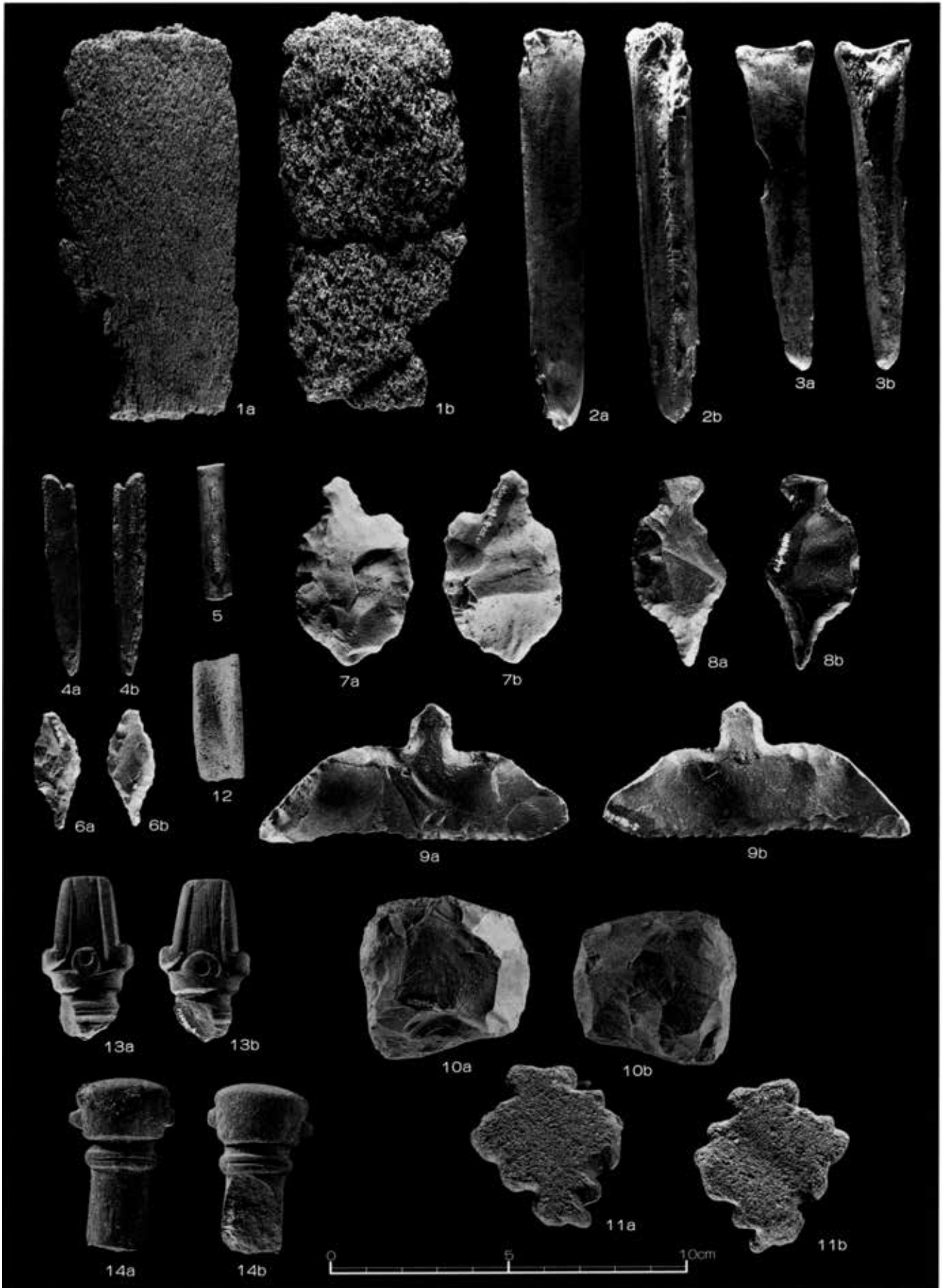


写真 62 HSO 地点出土遺物 (2)

1: 鯨骨製板状骨器 2~4: 骨筥 5: 管状骨器 6: 石錐 7~9: 石匙 10: 多面体石器 11: 砥石 12: 耳飾り  
 13・14: 石棒 7: 11号土坑(2号人骨)埋土 11: 1層 10: 2層 6・9: 5層 2・5・12・13: 146層 1・3・4・8: 7層

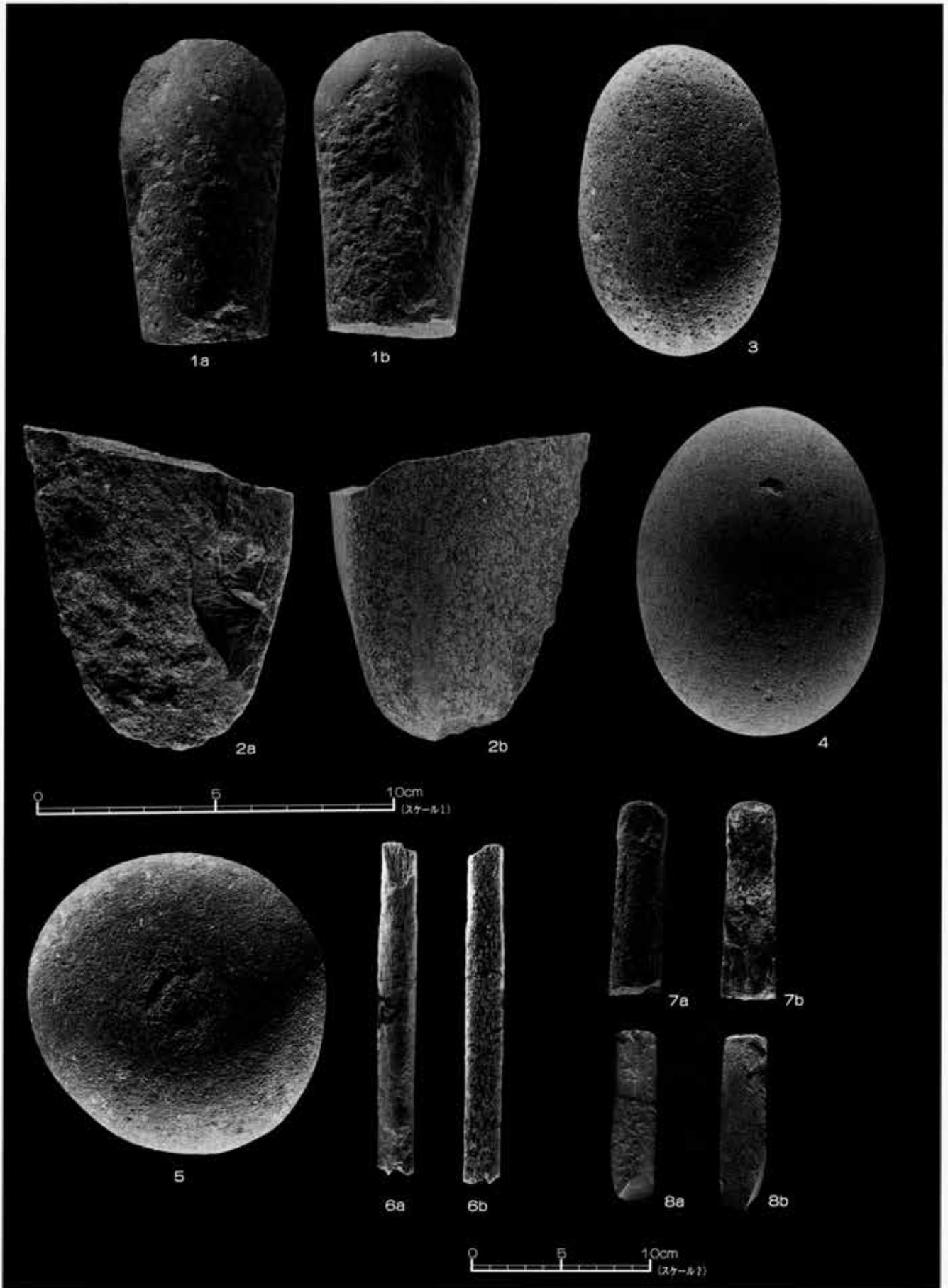


写真 63 HSO 地点出土遺物 (3)

1・2：磨製石斧 3～5：磨石 6：骨刀 7・8：石棒 1・4：1層 5：2層 2・3・6・7・8：7層  
1～5はスケール1 他はスケール2

## (2) 平成 11 年度調査〈第 6 次調査〉

### 1) 里 13 地点

#### ① 調査の概要

里 13 の調査は現状が畑になっているところに、2 m × 10 m のトレンチを設定した (第 53 図)。この場所は、水田に客土し、畑に転用したところで、重機により客土を除去し、旧水田の床土まで除去し、2 m × 3 m の範囲を重機で地表下約 2 m まで掘り下げ堆積状況を確認した。

#### ② 層序

基本層序は以下の通りである。

- 1 層 : 客土 : 最下部は中礫、その上位は黄褐色ローム質土、層厚は約 30cm。
- 2 層 : 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト、粘性高い。水田耕作土。中粒 > 粗粒砂 砂は比較的多い。2 ~ 3 mm の細礫点在 (最大 15mm)、中部に土器片あり。層厚 27cm。
- 3 層 : 黒褐色 (10YR3/1: 灰色より) 細粒砂質シルトないシルト質中 ~ 細粒砂 10 ~ 30mm の緑灰色凝灰岩礫が点在、ブロック ~ 不定形に暗青灰色 (5BG4/1) 中 ~ 細粒砂が混入上部約 8 cm には上位層が混じり、漸移層的である。層厚 27cm。
- 4 層 : 黒褐色 (7.5YR3/1 灰色系) 有機質細粒砂質シルト、海側で厚くなる。上位層より黒褐色より。1 ~ 4 mm の凝灰岩質の極粗粒砂から細礫含む。砂礫は下部ほど多く、上部に向け減少し細粒になる。上位層との境は、明瞭な部分とそうでない部分である。層厚 18cm。
- 5 層 : 砂礫、凝灰岩礫から構成される。堆積構造は認められない。塊状。
- 5 a 層 : 平均葉粗粒 ~ 中粒砂、10 ~ 20mm の中礫点在。最下部は約 2 cm は粗粒な堆積物からなり細礫 ~ 中礫を含む。上部には土器片 (平安時代の須恵器、土師器) を比較的多く含む。層厚 11mm。
- 5 b 層 : 平均は粗粒中粒砂 5 ~ 10mm の中礫点在。層厚 11cm。
- 5 c 層 : 平均は極粗粒砂 (1 ~ 2 mm) まれに最大 40mm の礫を含む。層厚 11cm。
- 6 層 : 黒褐色 (7.5YR 2/2) 分解から弱分解質の有機物砂質泥。(泥炭質であるが凝灰質砂を多く含む結果、有機物量が 50% 以下である) 下位層に似るが凝灰質砂 (中粒砂) を比較的多く含む。一部上部層が柱状に落ち込む。層厚 15cm。
- 7 層 : 暗褐色 (7.5YR3/4) が黒褐色 (7.5YR2 /2) に急変、有機質中粒砂質泥、直径 5 ~ 15mm の木材化石が点在する (上位と同様に泥炭質)。層厚 8 cm。
- 8 層 : 黒褐色 (7.5YR3/1) 有機質砂質シルトないシルト質砂。凝灰岩質粗粒 ~ 極粗粒砂。層厚 6 cm。
- 9 層 : オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 礫混じりシルト質砂 (極粗粒)、塊状 2 ~ 3mm の細礫が混じる。5 ~ 10cm の木材化石が最上部に含まれる。層厚 12cm。
- 10 層 : 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂質シルト、比較的均質凝灰岩質極粗粒砂が点在する。
- 11 層 : 灰色 (5Y4/1) 中 ~ 細粒砂質シルト 粗粒砂混じる。中部に 10 ~ 20mm で貝片が層状に堆積する。
- 12 層 : 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂質シルト (泥質)。最下部 10 ~ 15mm には 2 ~ 5 mm (最大 7 mm) の凝灰岩質細礫が比較的多くはいる。貝片を比較的多く含む。少量の植物遺体を含む。層厚 18cm。
- 13 層 : 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 極細粒砂質シルト、比較的均質凝灰岩質極粗粒砂、貝片を少量含む。層厚 21cm。
- 14 層 : 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1 : 上位よりいくぶん明るい) 細粒砂、細礫から中粒砂まじる (最大 5mm)。アサリの完形 (半殻) が含まれる。層厚 4 cm <。砂礫の眼疾はすべて凝灰岩に由来する粒子 (凝灰岩礫、軽石、石英、ガラス、重鉱物など) からなり、軽石は円摩されている。

#### ③ 出土遺物

4 層からややまとまって遺物が出土している。須恵器杯 (写真 64 - 1 ~ 5)、須恵器壺 (6)、土師器杯 (7 ~ 9)、

土師器甕 (10～16)、土師器高杯 (17)、砥石 (18)、製塩土器 (19)、弥生土器 (20) が出土している。回転切りの須恵器杯があること、ロクロを用いた土師器長胴甕があることなどから、平安時代のものと推定される。

8層から若干の遺物が出土している。大洞C 2式の壺 (21)、鉢 (同 23)、無文の注口 (22) である。これらのことから、8層は縄文晩期中葉以降の堆積、4層は平安時代以降の堆積と推定される。

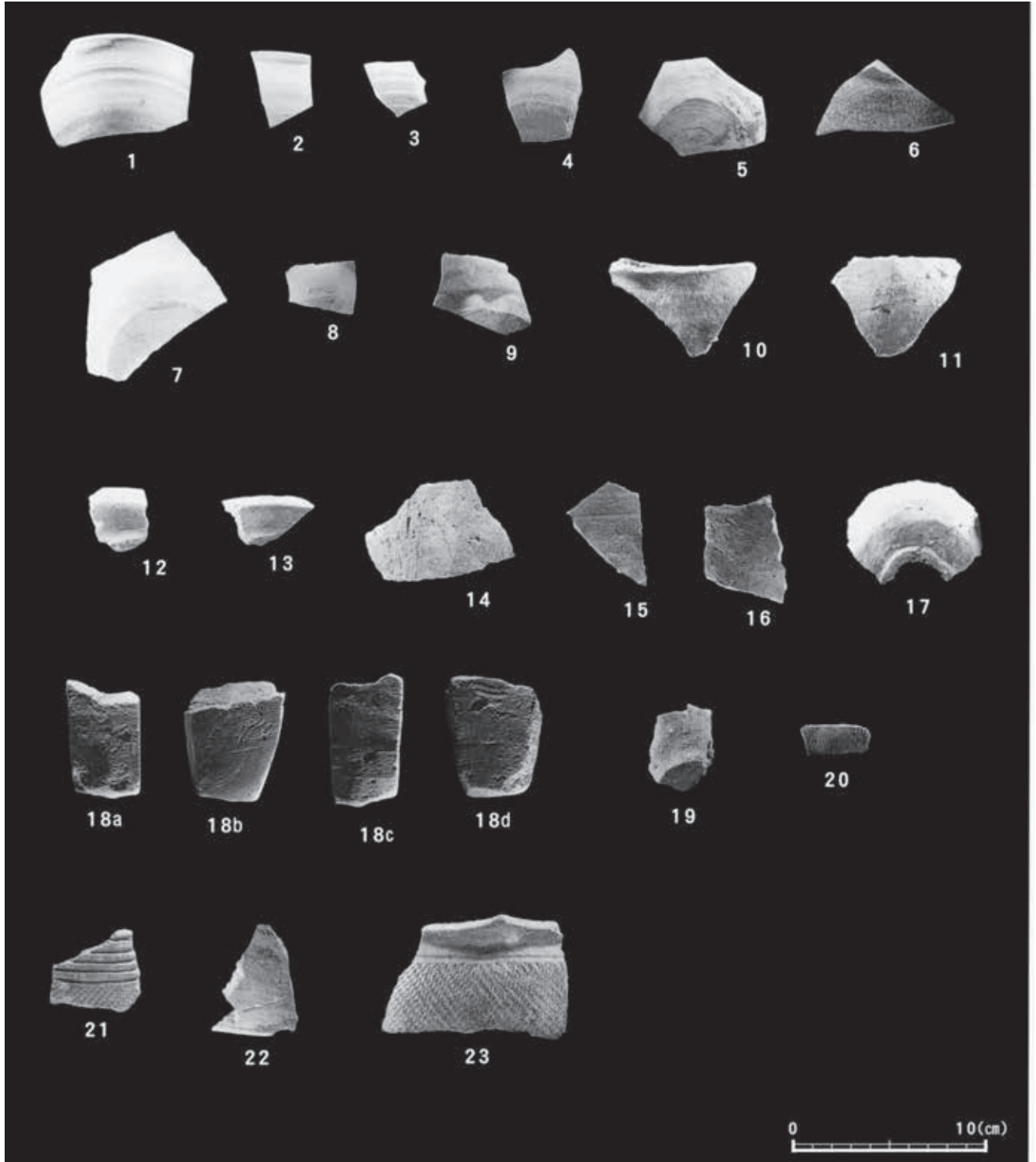


写真 64 里 13 地点出土遺物

1～6：須恵器 7～17：土師器 18：砥石 19：製塩土器 20：弥生土器 21～23：縄文土器 1～20：4層出土  
21～23：8層出土

(3) 平成 23 年度調査〈第 18・19 次調査〉

1) 里 21 地点〈第 18 次調査〉

① 調査にいたる経過

今回の調査は震災した住宅の再建に伴うものである。調査地点は里浜貝塚の北端部に位置し、史跡指定地に隣接する(第 53 図)。現在は南北に延びる市道によって分断されているが、寺下囲地点貝塚と一連の貝塚である。比高差約 6 m の斜面に沿って、貝層の堆積が確認されている。一方、住宅および海苔加工施設、倉庫等が建つ平坦な宅地部分は西側の丘陵を削平して造成されており、すでに大きく地形が改変されている。住宅の建替えは、全壊家屋の基礎や浄化槽をそのまま利用し、地下遺構には影響を及ぼさない計画となっている。

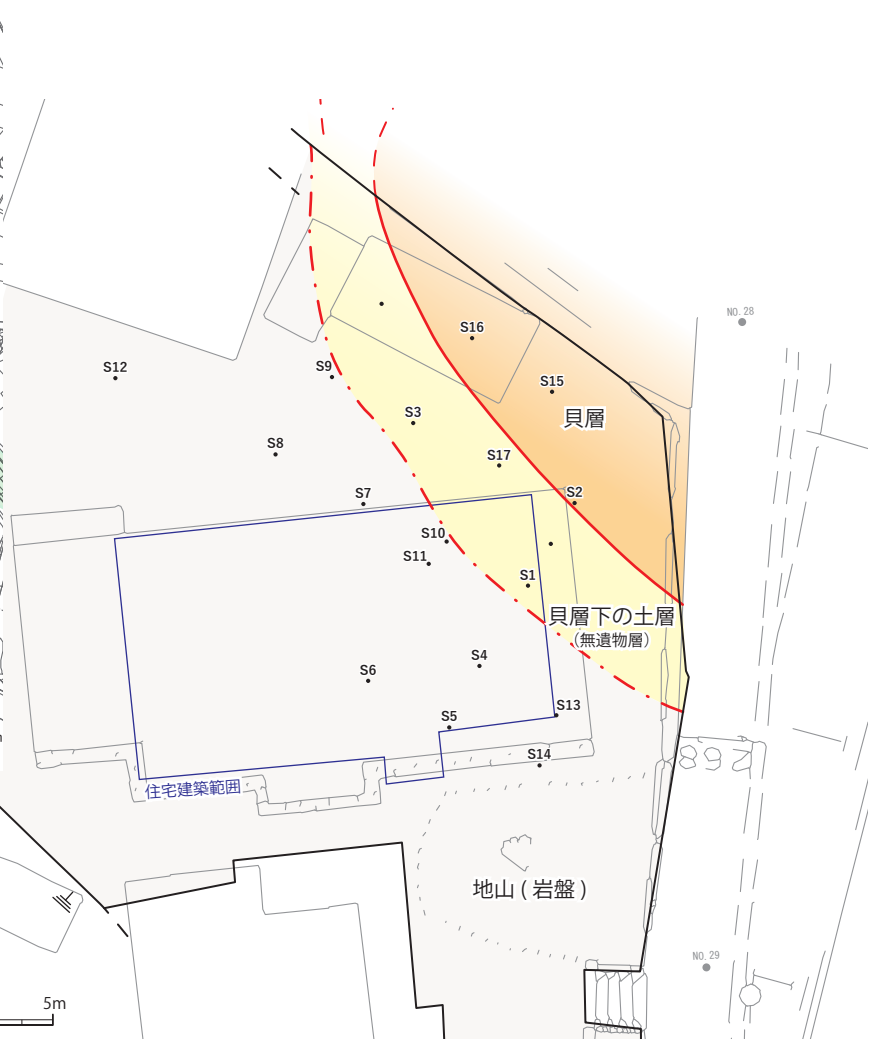
こうした状況を踏まえ、今回の調査では、すでに削平された部分を明らかにするとともに、平坦部の末端部における貝層および遺物の包含状況、遺構の存在の可能性を確認するため、ハンドオーガーによる分布調査を実施した。

② 調査の概要

調査は堆積土が存在する宅地の北東部を対象とし、3 m 間隔でハンドオーガーによるボーリングを行った(第 54 図)。その結果、宅地の大半が凝灰岩の岩盤まで削平されており、今回の計画による影響はないことが確認された。貝層は宅地の北東隅に改変前の斜面に沿って、現表土下 0.6 ~ 1.5 m 付近に東西約 15 m の範囲で分布し、比高差約 6.5 m の北側宅地との間の斜面に沿って堆積していることが明らかとなった。貝層は寺下囲地点と同様にアサリ主体で、縄文時代晩期中葉~後葉にかけての縄文土器が採集された。



第 53 図 里・寺下地区調査区



第 54 図 里 21 地点ボーリング調査箇所

## 2) 里 66 地点〈第 19 次調査〉

### ① 調査の概要

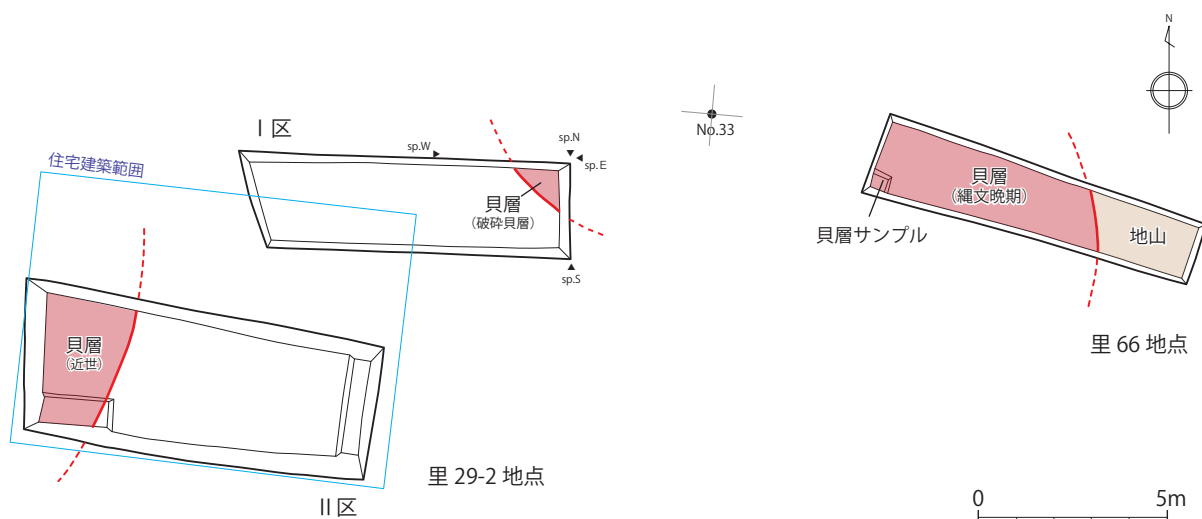
調査は震災により全壊となった倉庫の建替えに伴うもので、地下遺構に影響を及ぼさない計画となっているが、貝層が分布している可能性が高いことから、計画地全体を対象とした確認調査（約 20 m<sup>2</sup>）を行うこととした（第 55 図、写真 68 - 1）。

### ② 調査の概要

調査地点は、南から入り込む谷の東側の緩やかな斜面上に立地する。調査の結果、表土下 0.4 m でアサリを主体とした純貝層が斜面に沿って約 6 m の範囲で確認され、地形的に低い調査区の南西隅で約 70 cm の厚さをもつことが明らかになった（写真 68 - 2・3）。平成 15 年に同敷地内で実施した住宅の建替えに伴う北側の発掘調査では、貝層および遺構・遺物は検出されておらず、今回検出した貝層は当時の居住域からはやや離れた場所に位置し、調査区西側の市道に沿って南側から入り込む谷に沿って形成された捨て場と推定される。

周辺では、これまでに同じ斜面上で、今回の調査地点よりも低い、南に隣接する八木氏宅から、縄文時代晩期中葉（大洞 C 1 ~ C 2 式）の貝層とともに、縄文土器や製塩土器、骨角器、動物遺存体等の遺物が採集されている（東北歴史資料館 1982）。また、市道を挟んだ西側の HSO 地点では、10 m<sup>2</sup> にも満たない調査面積にもかかわらず、縄文時代後期後葉の捨て場とともに、晩期初頭から前葉にかけての土壙墓および 3 体の埋葬人骨が検出され（奥松島縄文村歴史資料館 1997）、谷に沿って南北に延びる市道の下にも貝層が分布することが水道管の付替え工事の際に確認されている（第 53 図）。現在は後世の埋め立てにより谷地形が改変されているが、現地表下に谷に沿って貝層が分布している可能性も考えられる。また、調査では南小泉式期の遺物も検出されており、周辺に古墳時代中期の集落が営まれていた可能性が高いものと思われる。

今回の調査は、貝層の有無とその広がりを確認することを目的としたため、貝層の詳細な調査は行っていない。出土した遺物は貝層の範囲確認の際に採集した遺物と調査区南西隅（50 × 50 cm）から土壌ごと悉皆採取したブロックサンプルから抽出されたものである。



第 55 図 里地点（里 66、29-2 地点）調査区

### ③ 出土遺物

#### a. 縄文土器

本地点出土土器は、後期後葉から晩期前葉の時期となり、その中でも晩期前葉大洞 BC 式が主体となる（写真 65、第 11 表）。いずれの土器も器面の保存状態は良く、ミガキ等の調整も良好に確認できる。とくに主体となる大洞 BC 式土器は、細い工具による丁寧なミガキが認められる。なお、4、5 の土器は、大洞 B 2 式期の装飾的な壺形土器と見られ朱が付着しているが、本地域では出土事例は少ない（註）。

註) 市川健夫（八戸市埋蔵文化財センター）のご教示を得た。



写真 65 里 66 地点出土土器

第 11 表 里 66 地点出土土器属性表

番号	時期	型式名	器形	部位	器厚 (mm)	文様
1	後期後葉	西ノ浜式	深鉢	口縁部	7.7	口唇部に粘土貼付し突起成形した後に、器面に粘土粒貼付。口唇部付近では粘土粒を起点として、三方向に沈線を施す。縄文RL縦。
2	後期後葉	宮戸IIIb式 新段階	深鉢	口縁部	6.7	口唇部に粘土貼付し突起成形した後に、頂部に左右に分割するような沈線を引く。横方向の沈線を二条施す。縄文RL縦。
3	後期末葉～晩 期初頭	-	深鉢	口縁部	6.7	口縁直下縄文部RL横方向施文、沈線1条を横方向に施す。以下丁寧に磨き無文部とする。
4	晩期前葉	大洞B2式	壺	胴部下半	4.0	縄文LR施文後に、破片のため詳細不明であるが、沈線にてX字文が描かれる。前面に朱が付着。5と同一個体か。内面未調整。
5	晩期前葉	大洞B2式	壺	胴部下半	5.0	縄文LR?施文後に、沈線で渦巻文等。4と同一個体か。内面未調整
6	晩期前葉	大洞BC式	深鉢	口縁部	5.9	口唇部に連続刻目の後に横方向の沈線のほか、口唇部直下に右下がりの弧線と横方向沈線を組み合わせた文様を施す。

番号	時期	型式名	器形	部位	器厚 (mm)	文様
7	晩期前葉	大洞BC式	深鉢	口縁部	6.1	6と類似する文様であるが、口唇部直下の文様は左下がりの弧線。沈線がやや太い。縄文LR?横。
8	晩期前葉	大洞BC式	深鉢	口縁部	5.3	平行沈線を3条巡らせる。下部は縄文RL横。
9	晩期前葉	大洞BC式	深鉢	口縁部	6.7	口唇部前面に連続的に刻みを入れる。2個1対粘土粒を口唇部貼付。中央と左側に右下がりの弧線、右側に垂線、横方向沈線と接続。平行横走沈線4条、間に連続する縦位刻目。縄文LR横。
10	晩期前葉	大洞BC式	深鉢	口縁部	4.6	口唇部端面に刻み。平行する横走沈線間に下部から連続する縦方向の刻み。下部には縄文RL横。
11	晩期前葉	大洞BC式	鉢	口縁部～ 胴部上半	4.0	口唇部端面に粘土粒を貼付、中央と左右端に刻み。粘土粒の前面中央と左右端から下方へと伸びる線を引き、その下部の横走沈線と連結。平行横走沈線間に連続する縦位刻目。縄文LR縦横にて羽状縄文。
12	晩期前葉	大洞BC式	鉢	口縁部	3.6	口唇部端面に2個1対粘土粒貼付。口唇部前面部に連続する刻みを施し、その下部の横走沈線に接続。噛み合わない羊歯状文。縄文LR縦。
13	晩期前葉	大洞BC式	鉢	口縁部	3.0	平行沈線5条。間に連続的な刻目。その下には弧線等で文様。
14	晩期中葉	大洞BC式	鉢	口縁部～ 底部	3.0	平行沈線4条。その間に連続する刻目。その下部には入組三叉文を配した文様。底部付近に沈線1条。縄文LR横。底面は一段凹む。
15	晩期前葉	大洞BC式	不明	脚部	7.7	端部は遺存していないが、連続する刻目。その上部に横走する平行沈線。その間に連続する刻目を施す。
16	晩期前葉	大洞BC式	不明	脚部	5.3	最下部に沈線を巡らし、その上部に連続する渦巻文。渦巻文が接する部分の上下はやや深く彫り込む。
17	晩期前葉	大洞BC式	注口	口縁部	5.8	沈線1条の下部に噛み合わない羊歯状文。下に1条沈線を挟み刻目。
18	晩期前葉	大洞BC式	注口	胴部上半	4.7	頸部に沈線を2条。その下部に三叉文や渦巻文等が配される。
19	晩期前葉?	-鉢		底部付近 胴部	3.1	縄文RLを横・縦方向に施し羽状縄文とし、その下に沈線1条引き、以下は丁寧に磨き無文部とする。
20	晩期前葉?	-深	鉢	口縁部	5.2	縄文RL横。補修孔有。
19	晩期前葉?	-深	鉢	口縁部	5.3	縄文RLを横・縦方向に施し羽状縄文とする。
22	晩期前葉?	-深	鉢	口縁部	5.2	端面から縄文をRL横、LR横、LR縦の順に施し羽状縄文とする。
23	不明	-深	鉢	胴部下部 ～底部	5.9	基本的に縄文LR横。
24	不明	-不	明底	部7	.0	-
25	不明	-	台付鉢?	底部	7.9-	
26	晩期前葉?	-	深鉢か鉢	胴部下部 ～底部	6.0	底部付近に沈線1条。底部外側が粘土貼付に盛り上がり上げ底となる。

#### b. 石器

石器は定型的な剥片石器は出土していない。磨製石斧（写真6-1・2）および未製品（3）、磨石（5・6）、石刀（5・6）がある。

#### c. 骨角・貝製品

骨角器には、燕尾式の離頭モリ（写真67-1）、骨篋（2、3）およびその破損品とみられる先端部分（4・5）、刺突具の未製品（6）、頂部に孔を穿った骨製品（7）がある。離頭モリは小形のタイプ。骨篋はシカ中足骨を素材とし、骨の長軸方向に沿って前後あるいは左右に2分割し整形している。残存する先端部はいずれも摩滅が著しく、6には先端縁辺に直交方向の擦痕が認められる。6の刺突具の未製品、7の不明骨製品はシカ中足骨を4分割にした素材を加工している。また、落角や角座の残る鹿角、素材取りされた鹿角片が目立つ。

貝製品には、アカガイ製貝輪の未製品（8、9）、サルボウガイ製貝輪未製品（8）がある。

#### d. 動物遺存体

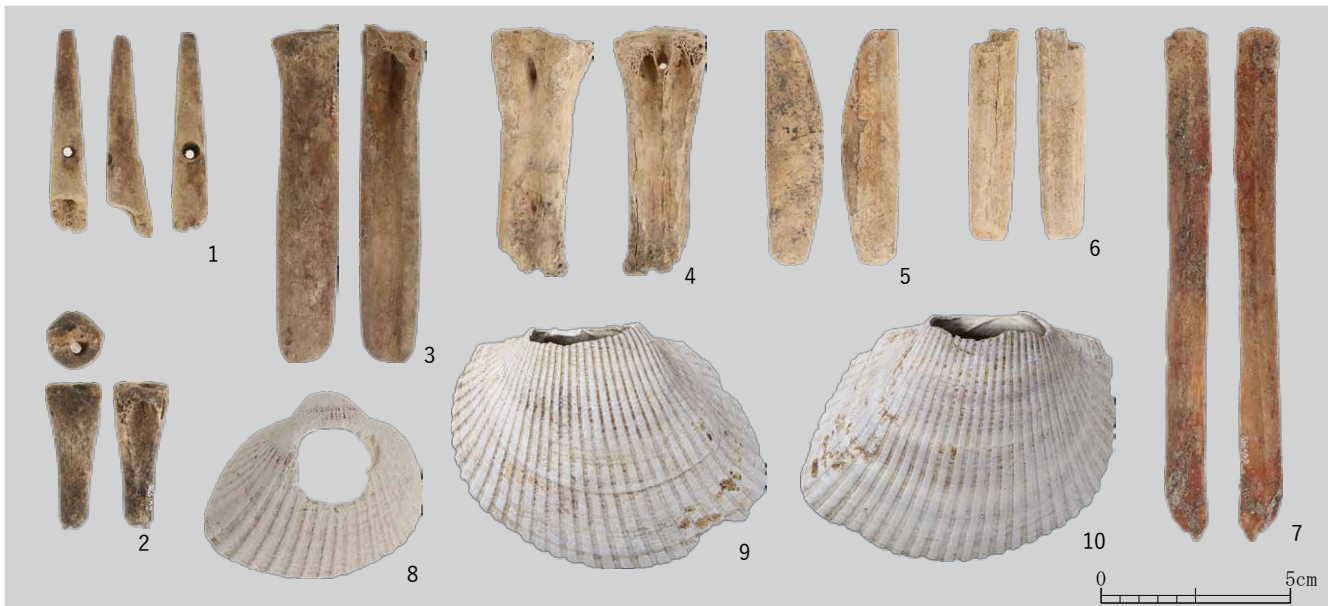
動物遺存体は貝層の範囲確認の際に目視で採集したもの（以下、目視資料）と、調査区南西隅（50×50cm）から採取した貝層サンプルを5mm、3mm、1mmの篩を用いて水洗選別し、抽出したものに分けられる（以下、5mm資料、3mm資料、1mm資料）。そのうち目視資料はすべて、5mm資料と3mm資料については全体の半量を、1mm資料についてはさらにその半量（全体の4分の1）を対象として分析をおこなった。資料の年代は出土土器の型式から晩期前葉（大洞BC式）に比定される。

種同定は奥松島縄文村歴史資料館および筆者が所有する現生標本との比較によりおこない、原則として以下の基準を満たすものを同定対象とした。貝類のうち、腹足綱は殻頂部もしくは殻口部が残存するもの、二枚貝綱は殻頂部が残存



No	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	備 考
1	磨製石斧	122.5	53.0	28.0	271.6	安山岩	刃部に若干の刃こぼれ、全面に敲打痕
2	磨製石斧	87.0	46.5	33.5	201.4	砂岩	基部・刃部折れ、全面に敲打痕
3	打製石斧未製品	123.0	63.4	39.4	398.6	ひん岩?	表面摩滅
4	石剣	159.5	33.0	22.5	183.1	粘板岩	上部に2条の沈線、上端滑らか、下端摩滅、全面に敲打痕
5	石剣	42.5	37.9	16.2	46.5	粘板岩	両端破損
6	磨石	53.0	60.5	26.4	110.9	安山岩?	上部および裏面割れ
7	磨石	128.2	74.0	40.6	562.9	粘板岩?	上下に敲打の痕跡あり

写真 66 里 66 地点出土石器・観察表



No	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	素 材	備 考
1	銚頭	64.2	9.8	11.2	鹿角	燕尾式、先端・尾部欠損、径3.7mm、策孔径2.8mm
2	骨筥	89.0	17.8	13.3	シカ中手骨(R)	完形、縦割り2分割(外側)、先端部の摩滅顕著
3	骨筥	68.5	27.3	20.0	シカ中足骨(L)	先端部欠損、横割り2分割(前面)
4	骨筥	62.5	13.2	5.5	シカ中足骨(LR?)	先端部破片、縦割り2分割
5	骨筥	81.5	23.7	10.0	シカ中足骨(LR?)	先端部破片、横割り2分割(後面)、側辺に傷・凹み
6	刺突具未製品	135.6	9.1	7.8	シカ中足骨(R)	近位～体中央、4分割(前面・内側)
7	不明骨製品	39.0	14.8	13.5	シカ中足骨(R)	4分割(前面・内側)、近位端に穿孔(径約4mm)
8	貝輪	56.9	48.5	—	サルボウガイ(R)	未製品
9	貝輪	83.5	62.8	—	アカガイ(L)	未製品
10	貝輪	82.9	64.0	—	アカガイ(R)	未製品

写真 67 里 66 地点出土骨角貝製品・観察表

するものとした。アワビ類、マテガイ科については上記の基準を満たさない破片資料が大半であったため、出土の有無を記録するにとどめた。魚類、鳥類、哺乳類などの脊椎動物は関節部や骨端部が残存するもの、椎骨は椎体が2分の1以上残存するものとした。また、ウニ類、フジツボ類の破片については整理作業の時間的な制約や、少量であったことから算定はおこなわず、種名表にのみ記載した。

同定した動物遺存体は92分類群、総破片数は13,658点にのぼる。内訳は腹足綱25分類群1,895点、二枚貝綱19分類群8,746点、軟骨魚綱4分類群53点、硬骨魚綱28分類群2,868点、ウニ綱1分類群1点、軟甲綱1分類群2点、爬虫綱2分類群4点、両生綱1分類群2点、鳥綱5分類群26点、哺乳綱6分類群61点である(第12～14表)。

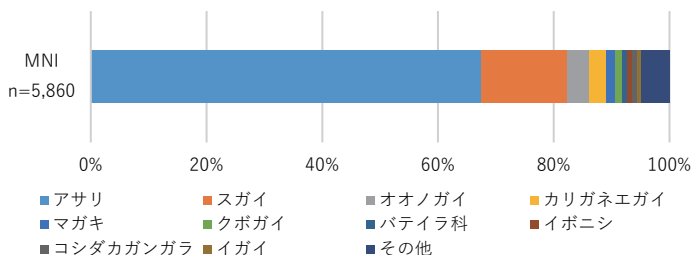
### [貝類]

貝類は目視資料から28点、5mm資料から8,810点、3mm資料から1,545点、1mm資料から258点、計10,641点を同定した。陸産貝類を除いた最小個体数で最も多く出土したのはアサリで3,954点(左3,670/右3,954)、次いでスガイ873点、オオノガイ219点(左208/右219)、カリガネエガイ176点(右176/左176)、マガキ90点(右90/左64)、クボガイ62点などが多くみられた。主体種であるアサリは全体の69%、スガイは15%であり、この2種で8割以上を占める結果となった(第56図)。マガキは幼貝とみられる小さな個体が多く出土している。東北歴史資料館(1986・1987)に従って生息環境ごとに分類すると、アサリやオオノガイなどの内湾砂泥底に生息する貝類が7割以上を占めており、スガイやカリガネエガイなどの内湾岩礁域に生息するものが約2割であった。また、1mm資料中にはオカチョウジガイ属やバツラマイマイなどの陸産貝類が比較的多く含まれていた。

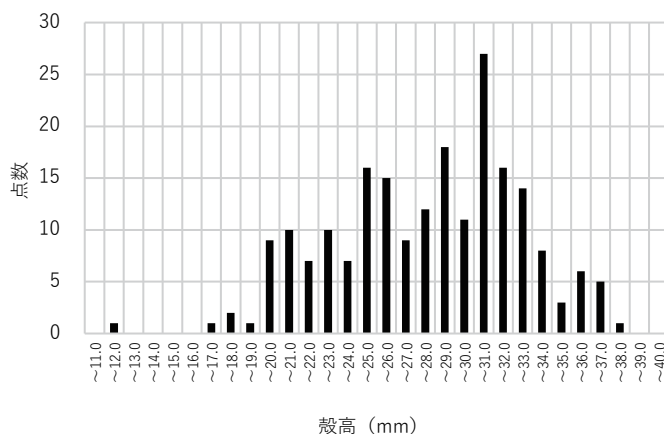
アサリに関しては、貝層サンプルから200点を目安として任意に左殻を抽出し、殻高を0.5mm単位で計測してサイズ分布を検討した。計測点数は209点である。その結果、殻高は11～38mmの範囲に分布していたが、20mm以下の個体は非常に少なかった。ピークは30～31mmにみられ、平均サイズは27.3mmであった(第57図)。

### [魚類]

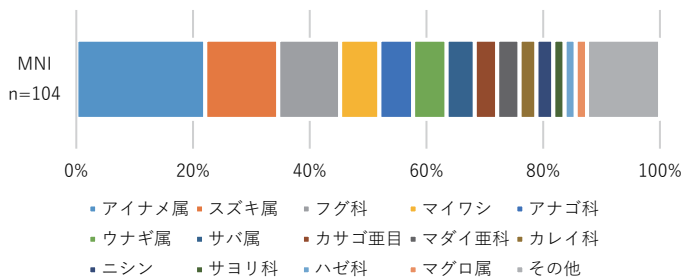
魚類は目視資料から143点、5mm資料から179点、3mm資料から1,849点、1mm資料から750点、計2,921点を同定した。同定破片数(NISP)で最も多く出土したのはアイナメ属で1,123点、次いでフグ科261点、ニシン科253点、スズキ属229点、ウナギ属225点、アナゴ科128点などが多くみられた。メッシュ別にみると、現場採集資料と5mm資料ではフグ科、マグロ属、スズキ属、アイナメ属が多く、3mm資料ではアイナメ属が圧倒的に多かった。1mm資料ではニシン科、アイナメ属、ウナギ属が多かった。



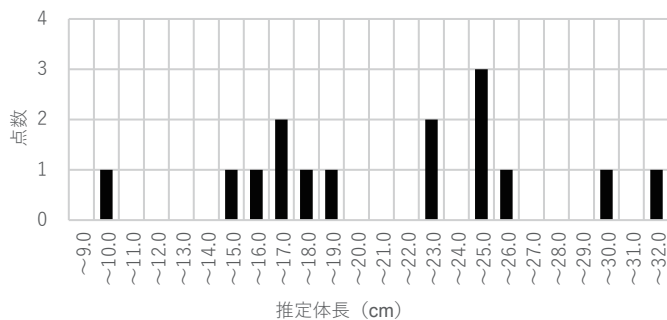
第56図 里66地点の貝類組成



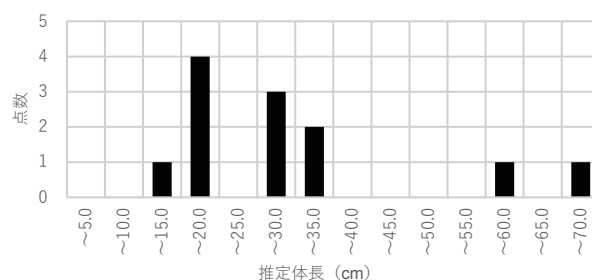
第57図 里66地点のアサリ殻高分布



第58図 里66地点の魚類組成



第59図 里66地点のアイナメ属体長分布



第60図 里66地点のスズキ属体長分布

最小個体数 (MNI) でみると最も多かったのはアイナメ属で23個体、次いでスズキ属13個体、フグ科11個体、マイワシ7個体、アナゴ科とウナギ属が各6個体、サバ属5個体、カサゴ亜目とマダイ亜科が各4個体などであった (第58図)。

最も多かったアイナメ属とスズキ属については、赤澤 (1969) および奥松島縄文村歴史資料館所蔵の現生標本に基づいて歯骨の計測値から体長推定式を作成し、体長復元をおこなった。左右は区別せずに出土した計測可能な歯骨すべてを対象とした。アイナメ属は15点を計測し、体長9cm程度の小形のものから体長30cmを超える個体が含まれていると推定された (第59図)。計測可能な資料が多くなかったため、ピークについては不明瞭である。一方、スズキ属は12点を計測し、体長13cmから70cm近いものが含まれていると推定された。ただし、大形の個体は少なく、体長35cmよりも小さいセイゴ・フッコサイズの個体が多い傾向がみられた (第60図)。また、フグ科については体長復元をおこなっていないものの、現生標本との比較から体長10cm以下の非常に小さな個体から40cm以上とみられる大形の個体が含まれていた。科レベル以下の同定は難しいが、おそらく複数種が含まれていると考えられる。

主体種であるアイナメ属、スズキ属、フグ科は全身の部位が出土しており、出土部位の偏りはあまり見られなかった。ただし、スズキ属とフグ科の大形個体に由来すると思われる椎骨はほとんど出土しておらず、タイ科 (マダイ亜科) とカサゴ亜目についても頭部骨に対して椎骨の出土数が少ない傾向がみられた。分析サンプル量が少ないため、サンプリングバイアスを考慮する必要はあるものの、魚種および体長によって部位の出現頻度に差異がある可能性が示唆される。

#### [爬虫・両生類]

爬虫・両生類は目視資料から2点、5mm資料から1点、3mm資料から2点、1mm資料から1点、計6点を同定した。爬虫類はウミガメ科の甲板と指骨、ヘビ亜目の椎骨で、両生類は無尾目 (カエル目) の椎骨である。

#### [鳥類]

鳥類は目視資料から14点、5mm資料から6点、3mm資料から6点、計26点を同定した。同定破片数で最も多く出土したのはカモ科で12点、次いでウ科7点、カイツブリ科2点、アビ科、ウミスズメ科が1点ずつであった。カモ科には複数種含まれていると推測されるため、東北大学考古学研究室 (1995) の分類法に従って骨格サイズからA~Eタイプに分類した。

カモAタイプ: マガモ、カルガモ相当 (全長58cm程度、上腕骨長90~100mm程度)

カモBタイプ: クログモ、オナガガモ、ヨシガモ相当 (全長47cm程度、上腕骨長70~80mm程度)

カモCタイプ: スズガモ、オシドリ相当 (全長45cm程度、上腕骨長60~70mm程度)

カモDタイプ: トモエガモ、ミコアイサ相当 (全長41cm程度、上腕骨長50~60mm程度)

カモEタイプ: コガモ相当 (全長38cm程度、上腕骨長40~50mm程度)

その結果、カモAタイプ (マガモ・カルガモ相当) が3点、カモC~Dタイプ (スズガモ・オシドリ~トモエガモ・ミコアイサ相当) が6点であった。また、この他にカルガモよりも大きいカモ科幼鳥の足根中足骨が1点出土している。ウ科にはヒメウサイズが5点、ウミウサイズが2点含まれていた。

[ 哺乳類 ]

哺乳類は目視資料から48点、5mm資料から4点、3mm資料から5点、1mm資料から4点、計61点を同定した。同定破片数で最も多かったのはニホンジカで44点、次いでネズミ科8点、イノシシ6点、イヌとキタオットセイが1点ずつであった。ニホンジカは44点のうち角が25点、角座骨が2点、中手骨と中足骨が合わせて10点あり、加工痕が残されているものが多くみられた。また、落角も3点含まれており、大部分が骨角器製作に関わる素材や廃材であると推測される。キタオットセイは右下顎骨が1点出土しており、サイズからメスの成獣である可能性が高い。

[ 小結 ]

里66地点における発掘調査では、限られた調査範囲ではあったものの晩期前葉の大洞BC式期の貝層が検出され、保存状態の良好な動物遺存体が多数出土した。概報では大型の資料を中心に分析結果を報告したが、今回最小1mmメッシュで回収した動物遺存体の分析をおこなったことで、微細な魚骨等を含めた定量分析データを得ることができた。

貝類ではアサリ、スガイ、オオノガイ、カリガネエガイが多く出土しており、内湾の砂泥域を中心に岩礁域における採貝活動を組み合わせていたと考えられる。魚類も同様に内湾に生息するアイナメ属やセイゴ・フッコサイズのスズキ属が主体となっており、マイワシなどの表層性回遊魚も一定の割合を占めていた。また、少ないながら外洋性の魚類が含まれていたことから、内湾域を中心としつつ湾外での漁撈活動もおこなっていたと想定される。一方、鳥類や哺乳類はサンプルサイズの小ささから出土数は少なかった。鳥類では河口から沿岸に生息するものが多く含まれ、哺乳類は骨角器素材として多用されるニホンジカの角や中手骨、中足骨に偏りが見られた。

第12表 里66地点動物遺存体集計表（貝類）

分類群	目視	5mm	3mm	1mm	総計	分類群	目視	5mm	3mm	1mm	総計
<b>腹足綱</b>						<b>二枚貝綱</b>					
カサガイ目			3		3	カリガネエガイ	0/1	168/168	8/6	0/1	352
ベッコウガサ	1				1	アカガイ	1/2				3
イシダタミ		3			3	サルボウガイ	0/1				1
スガイ	2	871			873	イガイ		11/11	19/18	2/6	67
スガイの蓋		332	249		581	ムラサキインコ			6/11	11/12	40
バテイラ科			34	28	62	ヒバリガイ			1/1		2
クボガイ	1	61			62	マガキ	1/3	20/40	41/40	7/7	159
コシダカガンガラ		46			46	アズマニシキ	0/1	2/1			4
アワビ類		+	+		-	チリハギガイ科				2/2	4
ウミニナ		26	3		29	オニアサリ		4/3			7
タマキビ		2			2	アサリ	0/1	3148/3392	514/551	8/10	7,624
クビキレガイ科				3	3	ハマグリ	1/0	0/1			2
ツメタガイ	1				1	オキシジミ	2/4	5/3			14
ネコガイ		1			1	ヒメシラトリ		2/2	1/2		7
マルテンスマツムシ			3		3	シオサザナミ科		0/1			1
ムシロガイ		2	3		5	マテガイ科		+	+		-
ヒメエゾボラ	1	1			2	シオフキ		11/7			18
ヒレガイ		2			2	クチバガイ		7/5		1/0	13
オウウヨウラク		1			1	オオノガイ	0/1	198/200	9/18	0/1	427
レイシガイ	1				1	不明二枚貝		1/0			1
イボニシ	1	50			51	二枚貝綱合計	19	7,411	1,246	70	8,746
アカニシ	1	1			2	総計	28	8,810	1,545	258	10,641
キセルガイ科			2	3	5	※左右があるものは“左/右”、同定基準は満たさないが破片が出土しているものは“+”で示した。					
オカチョウジガイ属				110	110						
バツラマイマイ				14	14						
オナジマイマイ科				16	16						
不明巻貝				3	3						
不明巻貝(陸産?)			2	11	13						
腹足綱合計	9	1,399	299	188	1,895						

第 13 表 里 66 地点動物遺存体集計表（魚類）

	分類群	部位	点数	総計
四 溝	板鰓亜綱	椎骨	2	2
	ネズミザメ上目	椎骨	1	1
	アナゴ科	腹椎	1	1
	ウナギ属	尾椎	4	4
	ニシン科	尾椎	2	2
	カサゴ亜目	方骨	0/1	1
		主鰓蓋骨	1/0	1
		前鰓蓋骨	1/0	1
		腹椎	1	1
	スズキ属	前上顎骨	1/2	3
		歯骨	2/0	2
		角骨	1/0	1
		主鰓蓋骨	2/5	7
		角舌骨	0/1	1
		上舌骨	0/1	1
		擬鎖骨	1/0	1
		腹椎	0/3	3
		尾椎	1	1
	ブリ属	歯骨	0/1	1
		尾椎	1	1
	タイ科	角舌骨	0/1	1
		腹椎	1	1
		尾椎	1	1
	マダイ亜科	歯骨	2/0	2
		口蓋骨	1/0	1
		主鰓蓋骨	1/1	2
	マダイ	歯骨	1/1	2
		上後頭骨	1	1
	ウミタナゴ科	腹椎	1	1
		尾椎	4	4
	アイナメ属	角骨	0/1	1
		第一椎骨	1	1
		腹椎	8	8
尾椎		8	8	
マグロ属	腹椎	10	10	
	尾椎	20	20	
	椎骨	3	3	
カレイ科	腹椎	1	1	
	尾椎	3	3	
フグ科	前上顎骨	5/1	6	
	歯骨	4/1	5	
	腹椎	11	11	
	尾椎	13	13	
不明魚類	尾部棒状骨	1	1	
目視合計		143	143	
5mm	板鰓亜綱	椎骨	5	5
	コイ科	尾椎	1	1
	ウグイ属	第一椎骨	1	1
	サヨリ科	腹椎	1	1
	カサゴ亜目	前上顎骨	0/1	1
		歯骨	0/1	1
		舌顎骨	0/1	1
		主鰓蓋骨	0/1	1
		後側頭骨	0/1	1
		上擬鎖骨	0/1	1
		第一椎骨	1	1
		腹椎	3	3
		尾椎	1	1
スズキ属	主上顎骨	1/0	1	
	前上顎骨	1/3	4	
	歯骨	0/1	1	
	角骨	1/0	1	

	分類群	部位	点数	総計
5mm	スズキ属	方骨	0/1	1
		主鰓蓋骨	0/1	1
		前鰓蓋骨	0/1	1
		後側頭骨	0/2	2
		耳石	0/3	3
		基後頭骨	1	1
		第一椎骨	1	1
		尾椎	9	9
		ブリ属	尾椎	1
	タイ科	上擬鎖骨	0/1	1
		腹椎	2	2
		遊離歯	1	1
	クロダイ属	歯骨	1	1
	マダイ亜科	角骨	0/1	1
		方骨	1/0	1
	マダイ	歯骨	1/1	2
	アイナメ属	主上顎骨	1/1	2
		歯骨	2/0	2
		角骨	1/1	2
		方骨	2/3	5
		基後頭骨	1	1
		副蝶形骨	2	2
		腹椎	12	12
	尾椎	7	7	
	マグロ属	肩甲骨	1/0	1
		尾椎	4	4
		尾部棒状骨	1	1
	カレイ科	尾椎	9	9
	フグ科	主上顎骨	6/0	6
		前上顎骨	5/5	10
		歯骨	3/1	4
		方骨	4/3	7
		口蓋骨	5/0	5
舌顎骨		0/1	1	
主鰓蓋骨		2/1	3	
角舌骨		3/1	4	
上擬鎖骨		1/1	2	
基後頭骨		1	1	
腹椎	11	11		
尾椎	16	16		
尾部棒状骨	6	6		
5mm合計		179	179	
5mm	板鰓亜綱	椎骨	28	28
	カスザメ属	遊離歯	2	2
	エイ上目	楯鱗	7	7
	アナゴ科	主上顎骨	0/6	6
		前上顎骨+篩骨+鋤骨版	3	3
		歯骨	0/3	3
		角骨	1/1	2
		方骨	0/1	1
		舌顎骨	0/1	1
		基後頭骨	1	1
第一椎骨		2	2	
腹椎		32	32	
尾椎	22	22		
ウナギ属	前上顎骨+篩骨+鋤骨版	3	3	
	歯骨	0/4	4	
	角骨	0/3	3	
	方骨	1/1	2	
	舌顎骨	0/1	1	
	基後頭骨	2	2	
第一椎骨	1	1		

	分類群	部位	点数	総計	
3mm	ウナギ属	腹椎	47	47	
		尾椎	67	67	
	ニシン科	腹椎	25	25	
		尾椎	41	41	
	ニシン	主上顎骨	1/0	1	
		角骨	1/0	1	
		第二椎骨	1	1	
	コイ科	腹椎	2	2	
		尾椎	1	1	
	ウグイ属	遊離歯	4	4	
	サヨリ科	第一椎骨	2	2	
		腹椎	37	37	
		尾椎	19	19	
	カサゴ亜目	主上顎骨	0/1	1	
		前上顎骨	1/1	2	
		歯骨	3/1	4	
		涙骨	1/0	1	
		方骨	3/0	3	
		主鰓蓋骨	0/1	1	
		上舌骨	1/1	2	
		後側頭骨	1/0	1	
		耳石	1/0	1	
		腹椎	5	5	
		尾椎	4	4	
	スズキ属	主上顎骨	3/4	7	
		前上顎骨	2/4	6	
		歯骨	6/5	11	
		角骨	2/3	5	
		方骨	3/4	7	
		舌顎骨	1/1	2	
		前鰓蓋骨	2/2	4	
		角舌骨	0/1	1	
		肩甲骨	1/2	3	
		後側頭骨	1/0	1	
		上擬鎖骨	0/1	1	
		擬鎖骨	1/0	1	
		耳石	6/10	16	
		鋤骨	2	2	
		基後頭骨	1	1	
		第一椎骨	1	1	
		腹椎	23	23	
		尾椎	51	51	
		アジ科	腹椎	4	4
			尾椎	3	3
	タイ科	尾椎	2	2	
		遊離歯	60	60	
ウミタナゴ科	方骨	0/1	1		
	鋤骨	1	1		
	腹椎	8	8		
	尾椎	22	22		
ベラ科	前上顎骨	0/1	1		
	腹椎	1	1		
	尾椎	3	3		
アイナメ属	主上顎骨	9/4	13		
	前上顎骨	11/15	26		
	歯骨	5/8	13		
	主上顎骨	9/4	13		
	前上顎骨	11/15	26		
	歯骨	5/8	13		
	角骨	6/8	14		
	方骨	8/7	15		
	口蓋骨	8/2	10		
	舌顎骨	0/1	1		

	分類群	部位	点数	総計
3mm	アイナメ属	主鰓蓋骨	3/2	5
		間鰓蓋骨	1/1	2
		角舌骨	7/4	11
		上舌骨	3/2	5
		肩甲骨	0/1	1
		後側頭骨	7/3	10
		上擬鎖骨	5/10	15
		鋤骨	13	13
		基後頭骨	5	5
		副蝶形骨	2	2
		尾舌骨	3	3
		第一椎骨	19	19
		腹椎	181	181
	尾椎	531	531	
	尾部棒状骨	10	10	
	ゲンゲ亜目	尾椎	1	1
	ハゼ科	主鰓蓋骨	1/0	1
	サバ属	主上顎骨	2/0	2
		歯骨	0/1	1
		角骨	0/1	1
		方骨	0/2	2
		第一椎骨	2	2
		腹椎	28	28
		尾椎	34	34
	カレイ科	方骨	0/1	1
		主鰓蓋骨	1/0	1
		上擬鎖骨	0/1	1
		尾舌骨	1	1
		腹椎	2	2
		尾椎	13	13
フグ科	主上顎骨	2/4	6	
	前上顎骨	1/0	1	
	歯骨	3/1	4	
	角骨	2/1	3	
	方骨	2/2	4	
	口蓋骨	6/4	10	
	舌顎骨	1/2	3	
	角舌骨	3/2	5	
	上擬鎖骨	1/3	4	
	基鱗骨	1/0	1	
	基後頭骨	1	1	
	腹椎	56	56	
	尾椎	44	44	
	尾部棒状骨	3	3	
不明魚類	耳石	0/1	1	
	第一椎骨?	1	1	
	腹椎	5	5	
	尾椎	53	53	
3mm合計			1,849	1,849
1mm	板鰓亜綱	遊離歯	1	1
	カスザメ属	遊離歯	2	2
	エイ上目	楯鱗	5	5
	アナゴ科	主上顎骨	2/0	2
		主鰓蓋骨	0/1	1
		腹椎	17	17
		尾椎	34	34
	ウナギ属	歯骨	0/1	1
		角骨	2/0	2
		方骨	1/0	1
基後頭骨		2	2	
第一椎骨		5	5	
腹椎		32	32	
尾椎		48	48	

	分類群	部位	点数	総計
1mm	ニシン科	角骨	0/1	1
		基後頭骨	1	1
		腹椎	88	88
		尾椎	93	93
		尾部棒状骨	2	2
	ニシン	第二椎骨	2	2
	マイワシ	主上顎骨	0/1	1
		第一椎骨	4	4
		第二椎骨	7	7
	カタクチイワシ	腹椎	1	1
		尾椎	1	1
	ウグイ属	遊離歯	3	3
	ボラ科	腹椎	1	1
	サヨリ科	腹椎	15	15
		尾椎	23	23
	カサゴ亜目	歯骨	1/1	2
		角骨	0/1	1
		腹椎	1	1
	スズキ属	主上顎骨	0/1	1
		前上顎骨	0/1	1
		歯骨	2/1	3
		肩甲骨	0/1	1
		上擬鎖骨	2/0	2
		腹椎	14	14
		尾椎	16	16
		尾部棒状骨	2	2
	アジ科	尾椎	1	1
		稜鱗	7	7
	タイ科	遊離歯	46	46
ウミタナゴ科	尾部棒状骨	1	1	
ペラ科	方骨	1/0	1	
	尾椎	2	2	

	分類群	部位	点数	総計
1mm	アイナメ属	主上顎骨	1/1	2
		前上顎骨	2/2	4
		歯骨	1/1	2
		方骨	2/0	2
		口蓋骨	3/0	3
		主鰓蓋骨	2/2	4
		後側頭骨	2/2	4
		鋤骨	1	1
		基後頭骨	1	1
		尾舌骨	1	1
		第一椎骨	3	3
		腹椎	29	29
		尾椎	105	105
		尾部棒状骨	6	6
	ハゼ科	歯骨	1/0	1
		主鰓蓋骨	1/0	1
		第一椎骨	1	1
		腹椎	1	1
	サバ属	方骨	1/0	1
		腹椎	5	5
		尾椎	8	8
		尾部棒状骨	5	5
	カワハギ科	腹椎	1	1
	フグ科	歯骨	1/0	1
		腹椎	3	3
		尾椎	1	1
	不明魚類	腹椎	7	7
		尾椎	41	41
		尾部棒状骨	1	1
		遊離歯	7	7
1mm合計			750	750
総計			2,921	2,921

※左右があるものは“左/右”で示した。

第 14 表 里 66 地点動物遺存体集計表 (鳥・哺乳・爬虫・両生類)

	分類群名	部位	部分	点数	総計	
四端	鳥綱					
	カモ科	尺骨	遠位端	1/0	1	
			近位端～遠位端	0/1	1	
			骨幹～遠位端	0/1	1	
			手根中手骨	近位端～遠位端	1/0	1
		上腕骨	骨幹～遠位端	1/0	1	
			遠位端	0/1	1	
		カイツブリ科	足根中足骨	近位端～遠位端	1/0	1
				近位端	0/1	1
		ウ科	鳥口骨	近位端～遠位端	1/1	2
			尺骨	近位端～骨幹部	0/1	1
			上腕骨	遠位端	0/1	1
	近位端～遠位端		1/0	1		
	脛足根骨	骨幹～遠位端	1/0	1		
	哺乳綱					
	イヌ	イノシシ	遊離歯	上顎C	0/1	1
			指骨	基節骨	1	1
			手根骨	中間手根骨	0/1	1
			上腕骨	骨幹～遠位端	1/0	1
			足根骨	第四足根骨	0/1	1
大腿骨			骨幹部	0/1	1	
頭蓋骨			頬骨	0/1	1	

	分類群名	部位	部分	点数	総計	
四端	ニホンジカ	頭蓋骨	角座骨	1/1	2	
			角	角座	0/2 (1)	3
			破片	18	18	
		分岐部	0/2	2		
			肩甲骨	遠位端	1/0	1
		指骨	基節骨	2	2	
		上腕骨	骨幹部	0/1	1	
		中手骨	遠位端	(1)	1	
		中足骨	近位端	1/1	2	
			遠位端	(4)	4	
		近位端	2/0	2		
	椎骨	胸椎	1	1		
	キタオツセイ	下顎骨	下顎体	0/1	1	
	ヒト	頭蓋骨	脳頭蓋片	1	1	
爬虫綱						
ウミガメ科	甲骨板	破片	1	1		
	指骨		1	1		
目視合計				64	21	

	分類群名	部位	部分	点数	総計
5mm	鳥綱				
	カモ科	烏口骨	近位端	0/1	1
		尺骨	遠位端	2/0	2
	アビ科	上腕骨	近位端	0/1	1
	ウ科	上腕骨	遠位端	1/0	1
	ウミスズメ科	脛足根骨	遠位端	0/1	1
	哺乳綱				
	ニホンジカ	角	破片	1	1
		足根骨	第2+3足根骨	1/0	1
		中手or中足骨	骨幹部	(1)	1
		脛骨	近位端	0/1	1
爬虫綱					
ウミガメ科	甲骨板	破片	1	1	
5mm合計				11	11
3mm	鳥綱				
	カモ科	手根中手骨	近位端	1/0	1
		橈骨	遠位端	0/1	1
	カイツブリ科	肩甲骨	遠位端	1/0	1
	不明鳥類	環椎	椎体	1	1
		指骨	完存	1	1
		手根骨	完存	0/1	1

	分類群名	部位	部分	点数	総計
3mm	哺乳綱				
	ニホンジカ	角	破片	1	1
		ネズミ科	下顎骨	下顎体	1/0
	寛骨		腸骨	1/0	1
	上腕骨		近位端~遠位端	0/2	2
	爬虫綱				
	ヘビ亜目	椎骨	椎体	1	1
	両生綱				
	無尾目	椎骨	椎体	1	1
	3mm合計				13
1mm	両生綱				
	無尾目	椎骨	椎体	1	1
	哺乳綱				
	ネズミ科	上腕骨	近位端	0/1	1
		椎骨	腰椎	1	1
			尾椎	1	1
		遊離歯	臼歯	(1)	1
1mm合計				5	5
総計				93	93

※左右があるものは“左/右”、不明のものは“( )”で示した。  
指骨は左右を判別していない。

### 3) 里 29 - 2 地点 (第 20 次調査)

#### ① 調査にいたる経過

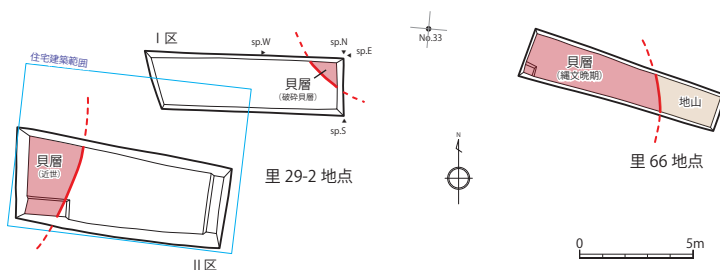
調査は震災で被災した住宅の再建に伴うものである。里 66 地点の市道を挟んだ西側に位置する。市道に沿って南から延びる支谷を埋め立てて家を建てた市道西側の宅地は、今回の震災の大きな揺れで軒並み被災し、ほとんどの家屋で建て替えが必要となった。本地点は、東に里 66 地点、八木氏宅地点、北に HSO 地点に接しており、貝層および墓域の広がりが予想された (第 53 図、写真 68 - 1)。住宅再建にあたっては、浄化槽の設置や地盤の弱い地形に対応するためパイル工法を用いることとなった。地下遺構に影響を及ぼすことも予想された。

#### ② 調査の概要

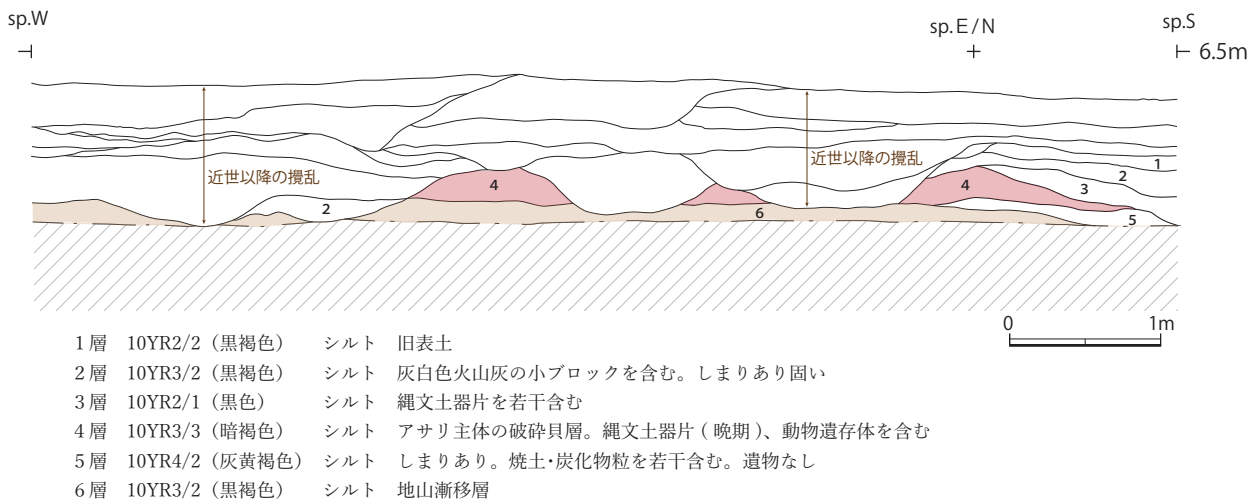
浄化槽に係る部分 (I 区:20 m<sup>2</sup>) と住宅部分 (II 区:40 m<sup>2</sup>) の確認調査を行った。調査の結果、北側の調査区 (I 区) 北東部で貝層の一部が検出されたが、近世以降の攪乱によって大きく分断されており、面的な広がりについては十分な確認を行うことができなかった。

貝層はアサリを主体とした破碎貝層 1 層のみで、二次堆積の可能性も否定できない (第 61 図、写真 86 - 4)。貝層の遺物も希薄で詳細な年代も明らかではないが、破片の多くが晩期のものとみられる。1 点のみであるが、組み合わせ式ヤスの基部が出土している。動物遺存体の出土状況は、里 66 地点と同様で、内湾砂泥性の貝類、魚類では大型のスズキやマダイ、フグが目立ち、鳥類ではウ類、カモ類が検出されている。

また、今回の調査では、南西側の調査区 (II 区) の西端部で近世以降のものと思われる約 50cm の厚さの貝層を検出した (写真 68 - 5)。里集落の市道沿い (「スクナカドオリ (宿中通り)」) の家並みは、江戸時代にまで遡る。谷を埋め立て、通りの両側に集落を形成したことが明らかになっているが、今回検出した貝層は、埋まりきらなかった西側の谷を埋めるように廃棄されたものと考えられる。多種類の貝類が検出されているが、アサリが圧倒的に多い。



里 66、29-2 地点調査区



第 61 図 里 29 - 2 地点 I 区北・東壁断面図

第15表 里29-2 地点出土動物遺存体種名表

<p>軟体動物門 MOLLUSCA</p> <p>腹足綱 Gastropoda</p> <p>クボガイ <i>Chlorostoma lischkei</i></p> <p>スガイ <i>Lunella coronata coreensis</i></p> <p>ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i></p> <p>ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i></p> <p>アカニシ <i>Rapana venosa venosa</i></p> <p>イボニシ <i>Reishia clavigera</i></p> <p>オオウヨウラク <i>Ocenebra japonica</i></p> <p>ヒメエゾボラ <i>Neptunea arthritica arthritica</i></p> <p>二枚貝綱 Bivalvia</p> <p>サルボウガイ <i>Scapharca subcrenata</i></p> <p>イガイ <i>Mytilus corsucus</i></p> <p>マガキ <i>Crassostrea gigas</i></p> <p>ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i></p> <p>ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i></p> <p>アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i></p> <p>オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i></p> <p>シオフキガイ <i>Mactra veneriformis</i></p>	<p>脊椎動物門 VERTEBRATA</p> <p>硬骨魚綱 Osteichthyes</p> <p>マダラ <i>Gadus macrocephalus</i></p> <p>スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i></p> <p>マダイ <i>Pagrus major</i></p> <p>クロダイ属 <i>Acanthopagrus</i> sp.</p> <p>フグ科 Tetraodontidae gen. et sp. indet.</p> <p>鳥綱 Aves</p> <p>ウ属 <i>Phalacrocorax</i> sp.</p> <p>カモ科 Anatidae spp.</p> <p>哺乳綱 Mammalia</p> <p>ニホンジカ <i>Cervus nippon</i></p> <p>ウマ <i>Equus caballus</i></p> <p>ヒト <i>Homo sapiens sapiens</i></p>
---	---

※ 学名ゴシックは、縄文時代の破砕貝層から出土したもの

第16表 里29-2 地点ブロックサンプル貝類出土集計表 (近世)

	サンプル①(17,200cc)		サンプル②(12,900cc)		サンプル③(10,700cc)		サンプル④(15,000cc)		サンプル⑤(12,900cc)	
	出土量	組成比	出土量	組成比	出土量	組成比	出土量	組成比	出土量	組成比
クボガイ	8	0.9%	0	0.0%	4	0.7%	18	2.8%	14	2.7%
スガイ	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ウミニナ	0	0.0%	3	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
イボニシ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%
オウヨウラクガイ	0	0.0%	0	0.0%	1	0.2%	1	0.2%	1	0.2%
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
サルボウガイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
イガイ	25	18	14	7	7	5	2	2	0	0
マガキ	28	21	22	21	18	23	6	7	3	3
ヤマトシジミ	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
ハマグリ	1	0	1	2	0	0	1	1	0	1
アサリ	773	744	589	583	492	510	568	609	489	474
オキシジミ	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0
シオフキ	9	10	4	1	3	3	2	0	0	1
合計	845	100.0%	636	100.0%	548	100.0%	645	93.2%	510	100.0%



里HSO地点（第2次調査）  
 里66地点（第19次調査）  
 里29-2地点（第20次調査）

1. 里地点第19・20次調査区（東から）



2. 里66地点 貝層分布状況（東から）



3. 里66地点 貝層の堆積状況  
 （ブロックサンプル採集箇所）



4. 里29-2地点 I区調査区全体（南西から）



5. 里29-2地点 II区調査区全体（北東から）

写真 68 里 66・29-2 地点発掘調査状況（第19・20次調査）

(4) 平成26年度調査〈第27次調査〉

1) 里16地点

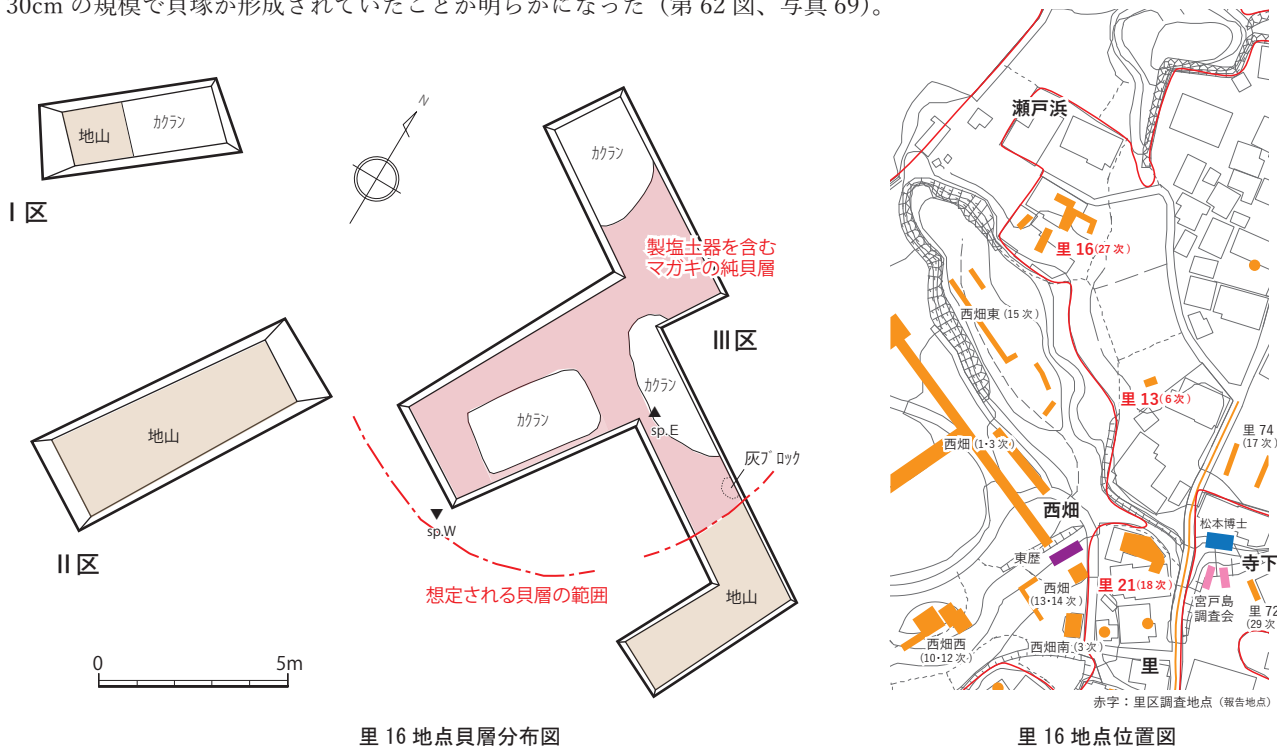
① 調査にいたる経過

平成25年度に東日本大震災震災により崩落した西畑地点東側丘陵の法面復旧工事の際に、斜面下に隣接する解体後の宅地内(里16地点)で、縄文時代晩期～弥生時代中期のものと思われる製塩土器と貝層の二次堆積ブロックを確認した。周辺を含めた表面的な分布調査では、貝層および製塩遺構等の有無や広がり、年代等についても確認できなかったため、周辺の旧地形を明らかにするとともに、範囲確認の調査(調査面積約80㎡)を実施した。

② 調査の概要

調査地点は、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての製塩遺構が検出されている西畑北地点の丘陵を挟んだ東側の入江部分にあたる。これまでは古代の製塩遺跡(旧遺跡名:瀬戸浜遺跡)として周知されてきたが、前面の海岸部でも縄文土器や製塩土器の分布が認められることから、該期の製塩遺構の存在が想定されていた。

調査は丘陵の裾部から入江を横断する方向(東西方向)にトレンチを入れながら行い、貝層が確認されたⅢ区では、その範囲を確認するため南北方向にトレンチを拡張した。建物等による攪乱が多く、範囲を確定することはできなかったが、現在の海岸線から約50m奥まった場所で貝剥き作業が行われ、少なくとも径約10mの範囲に、層厚20～30cmの規模で貝塚が形成されていたことが明らかになった(第62図、写真69)。



- |    |               |       |   |
|----|---------------|-------|---|
| 1層 | 10YR3/1 (黒色)  | シルト   | 混貝土層(マガキが目立つ)。古代(9C代)の製塩土器を含む。                |
| 2層 | 10YR3/3 (暗褐色) | シルト   | マガキ主体の純貝層。破砕貝が多い。とくに下面で焼けた礫・破砕貝が目立つ。しまりなし。    |
| 3層 | 10YR3/3 (暗褐色) | シルト   | マガキ主体の純貝層。縄文土器片(大洞C2)を若干含む。しまりなし。サンプル採取(第6表)。 |
| 4層 | 2.5Y3/1 (暗褐色) | 粘質シルト | 旧表土。炭化物粒が目立つ                                  |

里16地点Ⅲ区断面図

第62図 里16地点調査区

### ③ 貝層と出土遺物

貝層はマガキが大半(約60%)を占め、これにアサリ、イガイが続く(第17表)。貝層中には多量の製塩土器が含まれる。縄文土器が少なく、詳細な年代は明らかではないが、製塩土器の底部に尖底のものではなく、径6～7cm程の平底を呈することから、貝層及び製塩の年代は縄文時代晩期中葉頃(大洞C2式)と推定される。赤変が著しく、剥がれて碎片となったものが多く見られることから、周辺に製塩炉があった可能性が高い。また、製塩土器は純貝層上面の混貝土層中からも出土している。細片が多く、底部を含め形態等明らかではないが、僅かながらロクロ土師器の坏や須恵器坏・長頸瓶等が出土しており、9世紀前半頃にもこの場所で製塩と採貝活動が行われていたと考えられる

第17表 里16地点ブロックサンプル貝類出土集計表(縄文晩期)

	サンプル① (60,000cc)		サンプル② (90,000cc)		サンプル③ (90,000cc)		サンプル④ (60,000cc)	
	出土量	組成比	出土量	組成比	出土量	組成比	出土量	組成比
腹足綱								
マツバガイ	21	3.9%	14	0.9%	11	0.7%	8	1.0%
クボガイ	1	0.2%	13	0.9%	6	0.4%	4	0.5%
ヘソアキクボガイ	8	1.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
イシダタミガイ	3	0.6%	15	1.0%	1	0.1%	1	0.1%
スガイ	28	5.3%	106	7.1%	58	3.5%	31	3.7%
タマキビ	8	1.5%	5	0.3%	2	0.1%	1	0.1%
オオヘビガイ	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ウミニナ	9	1.7%	51	3.4%	23	1.4%	8	1.0%
イボニシ	1	0.2%	5	0.3%	2	0.1%	0	0.0%
レイシガイ	2	0.4%	0	0.0%	3	0.2%	1	0.1%
アカニシ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%
オウヨウラクガイ	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ヒメエゾボラ	2	0.4%	2	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
マツムシ	2	0.4%	6	0.4%	4	0.2%	3	0.4%
ムシロガイ	1	0.2%	10	0.7%	3	0.2%	2	0.2%
二枚貝綱	L	R	L	R	L	R	L	R
カリガネエガイ	2	8	14	12	8	6	9	10
イガイ	49	35	63	79	682	738	125	114
マガキ	318	248	521	623	355	424	403	386
ウネナシトマヤガイ	0	0	6	4	0	0	0	0
ハマグリ	0	1	0	0	0	0	0	0
ウチムラサキガイ	0	0	1	0	0	0	1	0
アサリ	66	62	530	514	293	301	71	94
オキシジミ	0	1	0	1	0	1	0	0
オオノガイ	0	1	5	4	45	65	120	145
ナミマガシワ	0	0	0	1			0	0
合計	532	100.0%	1,487	100.0%	1,650	100.0%	838	100.0%



里16 地点調査区全景（南西から）



里16 地点調査区全景（北西から）



III区 貝層の検出状況



III区南壁 貝層の堆積状況  
(カキの純貝層)



III区 製塩土器の出土状況

写真 69 里16 地点発掘調査状況（第27次調査）

(5) 令和3年度調査〈第30次調査〉

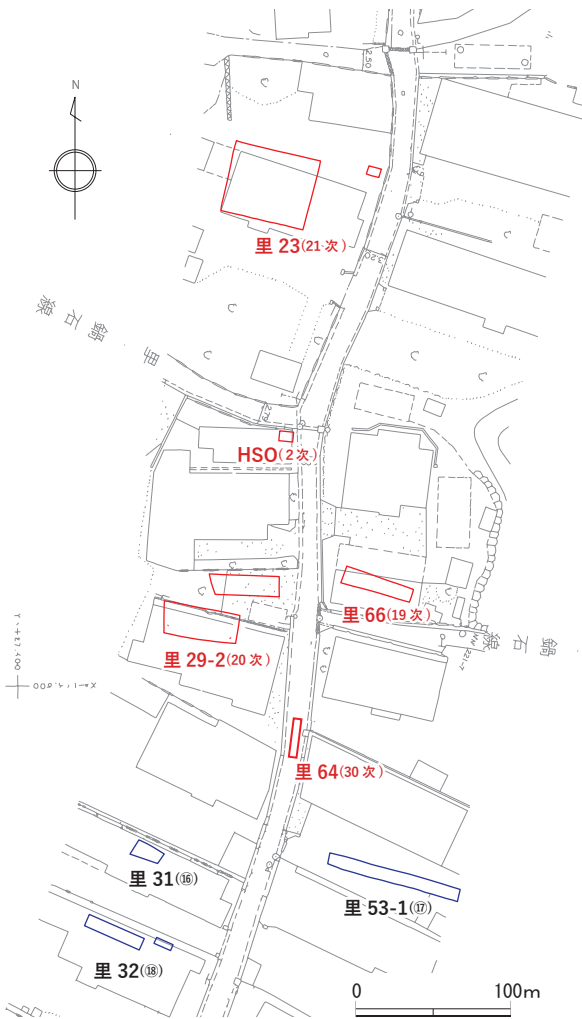
1) 里64地点〈第30次調査〉

① 調査概要

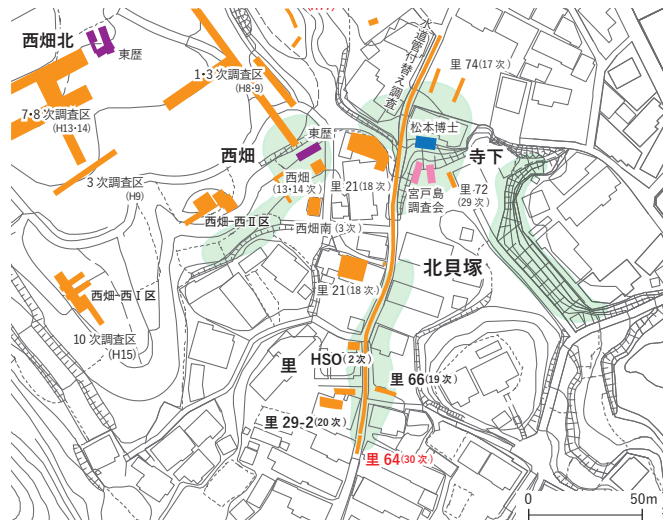
本調査は、里地区を南北に貫く市道下に埋設されている水道管の入替え工事に伴うものである。里浜貝塚里地点を東西に分ける、南から入り込む谷の上に位置する。北に20m離れた里66・29-2地点、40mほど離れたHSO地点では、谷の東斜面に沿って縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての貝層の分布が確認されている。また、里地点から寺下囲地点に至る市道下でも既設水道管の埋設に伴う攪乱層の中から多量の縄文時代晩期中葉から後葉にかけての縄文土器や骨角器、動物遺存体が出土している（第63図）。

今回の調査では、既設水道管の攪乱層から遺物の採集を行うとともに、里地点貝塚の南側への広がりを確認することを目的に実施した。調査は、工事に係る東西約1.5m幅で、南北約10mの範囲で行った。調査の結果、既設水道管の攪乱層から縄文時代晩期中葉を主体とした縄文土器とともに、石器、骨角牙製品が出土した。また、調査区の東壁断面で貝層の南側への伸びと末端部分の堆積状況を確認した。貝層の検出面は地表下60cm（標高約5.5m）で、層厚約20cm、アサリを主体とした混土貝層で、上部は破碎貝を多く含み二次堆積の可能性も考えられる（写真70）。

なお、本調査区より南に位置する調査区では遺構遺物は見つかっていない。里53-1地点では調査区中央付近で、南から入り込む谷の東側の落ち際を検出し、里31・32地点では谷の中央部で近世以降堆積層を確認したが、縄文時代の遺構や貝層・遺物包含層の広がりには確認されず、本調査区付近が北貝塚の谷を挟んだ東側の末端部と推定される。



第63図 里64地点調査区位置図



里64地点位置図

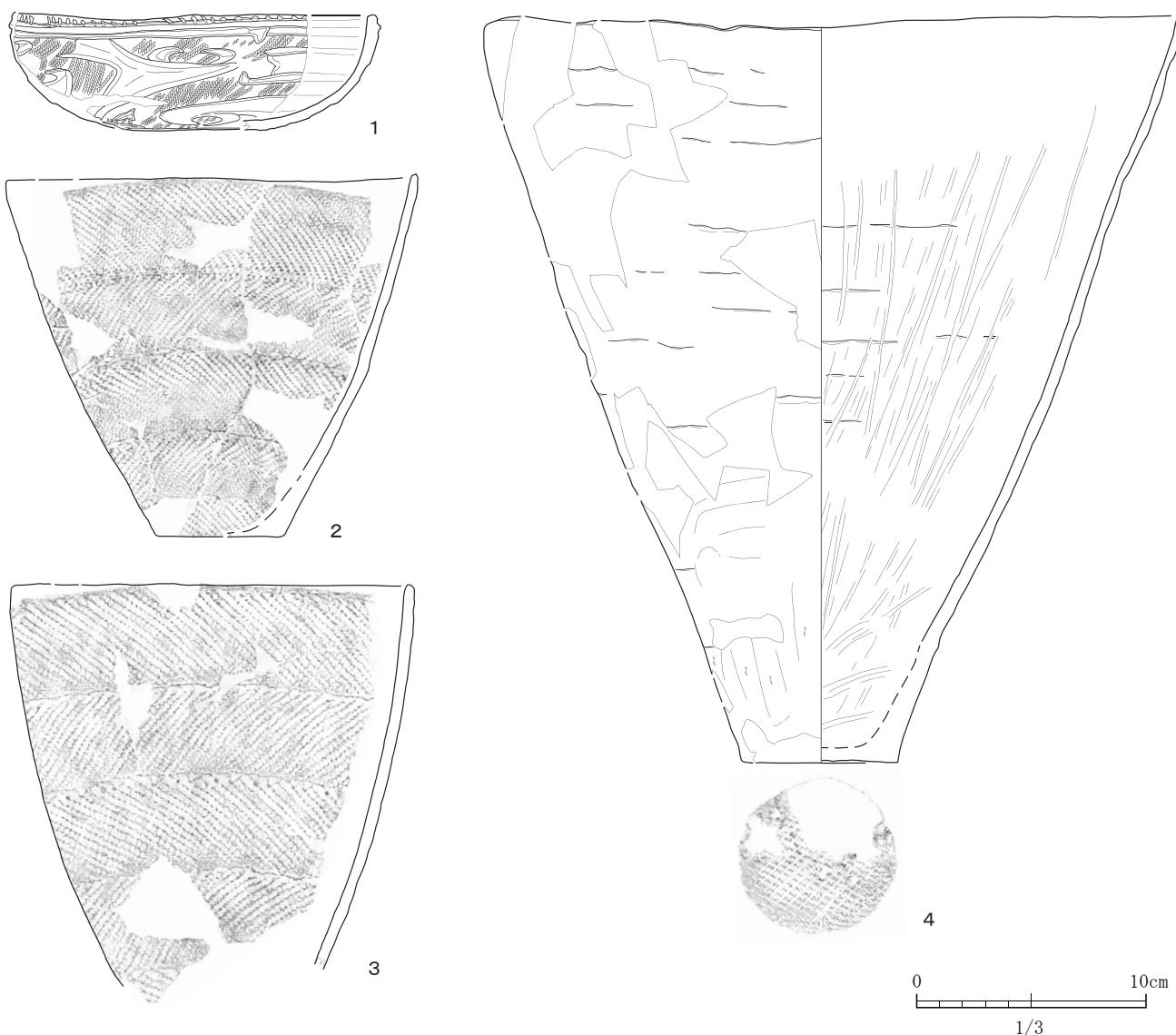


写真70 里64地点貝層の検出状況

② 出土遺物

a. 縄文土器

本地点出土土器は、縄文時代晩期中葉を主体とする時期となる（第64図、写真71・72）。後期末葉以降の土器群に関しては、器面の遺存状態も良く、ミガキ等の調整も良好に確認できる。全容のわかるものが少なく、図化できたのは浅鉢1点（第64図1）、粗製の深鉢2点（2・3）、製塩土器1点（4）のみである。浅鉢は平縁の口縁部に刺突列を巡らせたもので、大洞C2式の胴部文様に大洞C1式の特徴を備えている。内外に赤彩が施されている。朱の付着は鉢・浅鉢・皿や、壺とみられる破片資料の中にも認められるものがあり、これらについても赤彩されていた可能性が高い（写真72-10・11・16・18・24）。製塩土器は全容のわかる数少ない資料である。平底の底部から直線的に外傾して立ち上がる深鉢形で、西畑地点出土（東北歴史資料館 1988）と同じタイプのものである。内外面ともにケズリおよびケズリに近いミガキ調整によって成形され、器壁を薄く5mm程に仕上げられている。二次焼成の痕跡は認められず、未使用の製塩土器とみられる。



番号	時期	型式名	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様
1	晩期中葉	大洞C2式	浅鉢	(16.0)	(6.4)	5.0	平縁、刺突列+平行沈線。雲形文(磨消し縄文)。縄文LR。内外面赤彩。
2	晩期中葉	-	深鉢	17.7	5.4	15.9	平縁。羽状縄文RL+LR。内面ナデ・ミガキ(縦方向)。
3	晩期中葉	-	深鉢	(17.6)	-	(17.7)	平縁。羽状縄文RL+LR。内面ナデ・ミガキ。内面体上部に煤付着。
4	晩期中葉	大洞C2式?	製塩土器	30.0	6.8	32.8	平縁。外面ナデ・体下部ケズリ、内面ケズリに近いミガキで器壁を薄く成形している。底部網代痕。

第64図 里64地点出土土器

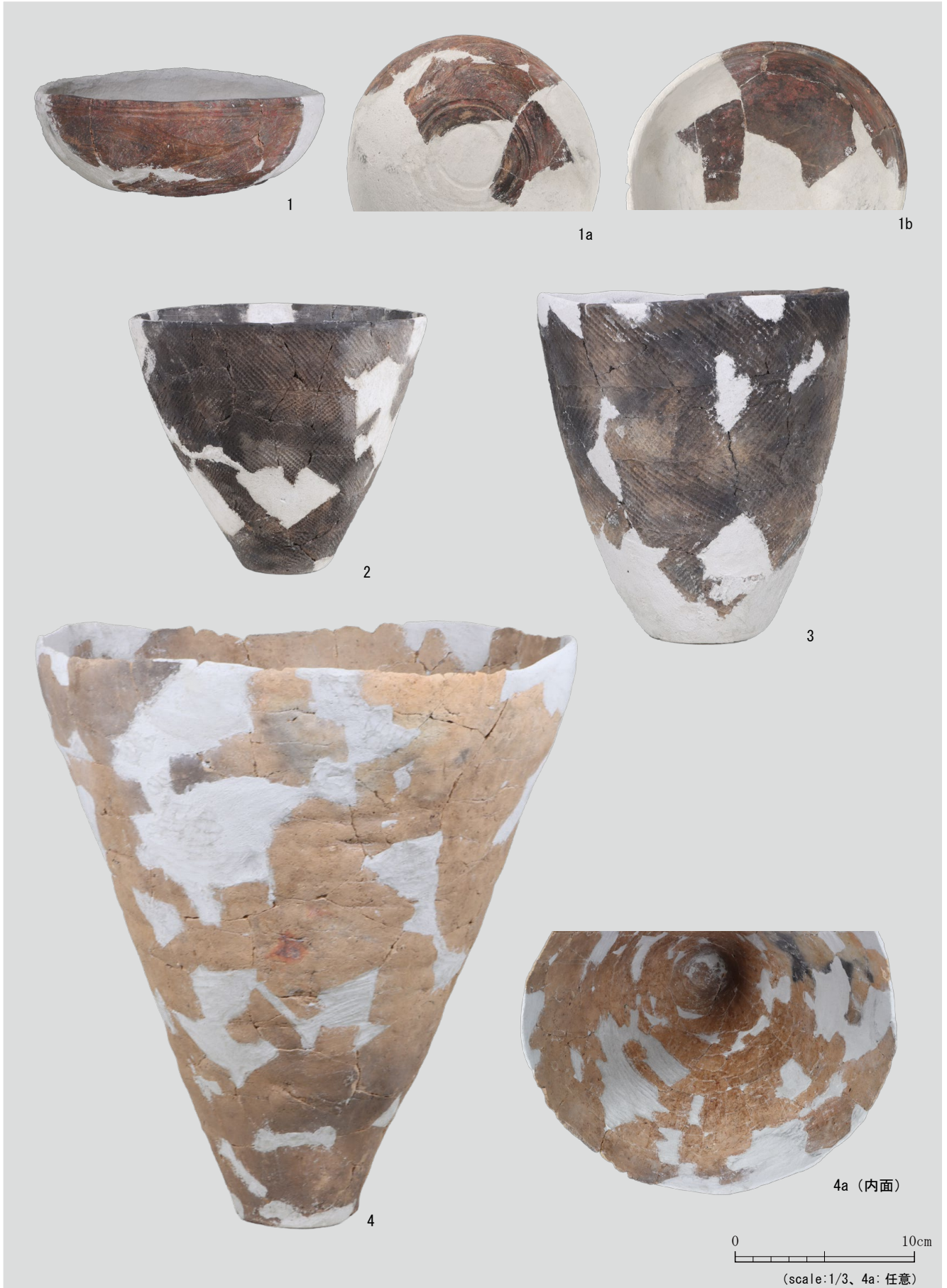


写真 71 里 64 地点出土土器 (1)



番号	時期	型式名	器形	部位	器厚 (mm)	文様
5	後期中葉～ 後葉	-	深鉢	口縁部	7.8	縄文RL縦・横による羽状縄文。沈線2条。
6	後期後葉	西ノ浜式～ 宮戸IIIa式?	深鉢?	口縁部	6.5	縄文RL縦後、横方向沈線3条。粘土粒を口唇部直下、沈線の間に貼付。
7	後期末葉	宮戸IIIb式 古段階	深鉢	胴部上半	5.3	横走沈線を4条引き、左下方から刺突を連続的に行う。刺突痕右側の粘土が多少盛り上がる。弧線文あるいは入組文により横走沈線の上下を連結する文様となるか。文様下に縄文L横。
8	後期末葉?	-		口縁部	4.9	粘土貼付により丸みある突起を形成。口唇部下に沈線1条、斜線・弧線で文様描く。縄文RL?後に磨消。
9	晩期初頭	大洞B1式	深鉢	口縁部	6.3	縄文LRを縦・横。平行沈線4条施し、間を磨いて無文部とする。
10	晩期前葉	大洞BC式	鉢	口縁部	6.2	3条の横走平行沈線の間に連続する右下がりの刻目。沈線下部に弧線。縄文LR横。裏面に朱付着。
11	晩期中葉	大洞C1式	皿?	口縁部	6.6	端面やや前面に2個1対の粘土粒貼付。粘土粒の間に沈線。その下部に沈線2条。全面に朱付着。
12	晩期中葉	大洞C2式	鉢	口縁部	5.0	端面に沈線。口唇部に連続刻目。その下部に半円状の工具で連続的に刺突。3条の平行沈線。最下部には縄文が認められるが詳細不明。
13	晩期中葉	大洞C2式?	鉢・ 浅鉢	口縁部	4.1	端面に連続する刻目。平行沈線2条、その下に弧線等で文様。縄文LR横。
14	晩期中葉	大洞C2式	浅鉢	口縁部～ 胴部	5.1	端面に沈線。端面前面に左方向からの連続的な押圧。沈線1条、弧線等で雲形文。縄文LR横。
15	晩期中葉	大洞C2式	浅鉢・ 皿	口縁部	6.0	端面に粘土粒貼付による低い突起を形成し沈線を引く。沈線1条巡らし、その下に弧線等で文様。縄文LR横。
16	晩期中葉	大洞C2式	壺	口縁部	5.5	端面に粘土粒貼付で突起を形成し沈線を引く。前面にかけて2個1対の粘土粒貼付を行う。その下部に沈線2条。前面に朱付着。
17	晩期中葉	大洞C2式	浅鉢・ 皿	口縁部	5.0	端面に粘土粒貼付と沈線。口縁直下に平行沈線2条、その下部に右下がりの弧線等。口縁部裏に段。縄文LR横。
18	晩期中葉	大洞C2式	浅鉢・ 皿	口縁部	3.2	端面に粘土粒を貼付、沈線を巡らせる。表面に沈線3条。全面に朱付着。
19	晩期中葉	大洞C2式	皿?	口縁部	4.7	端面に沈線。端面やや前面に連続的な押圧。口唇部直下に沈線1条。その下部に弧線等で渦巻文等。
20	晩期中葉?	-	鉢	口縁部～ 胴部上半	5.4	横走する平行沈線2条。縄文LRとRLで羽状縄文。
21	晩期中葉	大洞C2式	皿?	胴部下半 ～ 底部	4.5	5条の沈線で文様を描く。その間に縄文LR横。底面外側に沈線1条を巡らす。
22	晩期中葉	大洞C2式	皿?	胴部下半 ～ 底部	6.0	平行沈線3条と弧線で文様を描く。縄文LR横。底部外面に沈線1条巡らす。
23	晩期中葉?	-	鉢?	口縁部	5.2	口縁直下に2本の平行沈線を巡らし、その間に竹管により垂直の刺突を連続的に施す。
24	晩期中葉～ 後葉	-	壺?	口縁部～ 頸部	3.3	端面に沈線。沈線3条。沈線間の無文部を丁寧に磨く。裏面口唇部直下と下方に段を形成する。全面に朱付着。

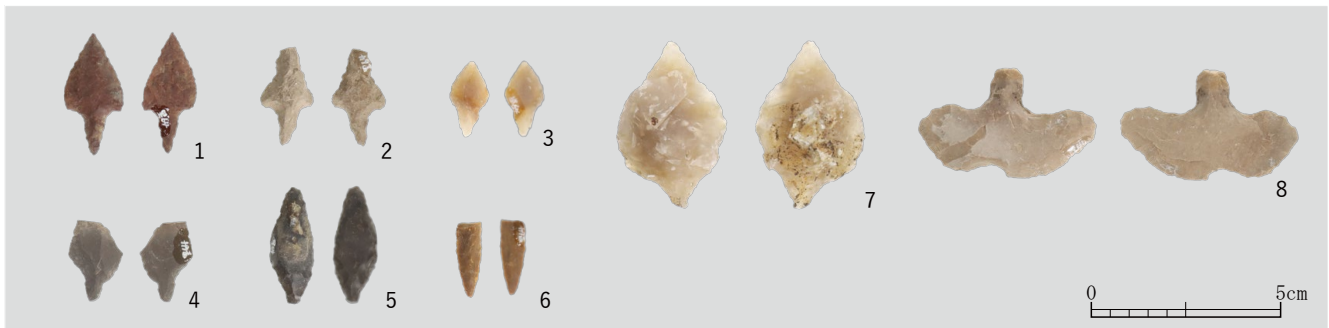
写真 72 里 64 地点出土土器

b. 石器

石器は、石鏃、石錐、尖頭器、石匙が出土している（写真 73）。

c. 骨角・牙製品

骨角器には、釣針、銚頭、ヤス、鈎先、鏃、骨篋、刺突具、篋状角器、鹿角未製品、髪飾り、管玉がある（写真 74）。狭い調査区の攪乱層にもかかわらず、各種骨角器が出土した。釣針は晩期中葉以降に出現し、西畑地点や沼津貝塚などで特徴的に出土する大形のタイプのものである。銚頭には基部に張出しのある単純銚（2・3）と燕尾式銚（4・5）がある。ヤスは全て組合せヤスである。7には逆刺の除去し先端を尖らせた再加工の跡がみられる。鈎先は全体の形状がわかるものはないが、孔の位置やアスファルトの付着状況からみて、西畑地点（東北歴史資料館 1985、小井川・山田 2002）で多く出土しているものと同種のものと思われる。このほか、加工の痕跡が残る鹿角片が多く出土している。また、牙製品としては、イノシシ下顎犬歯を加工した腕輪（写真 75-28）、垂飾（29）がある。



No	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	石鏃	32.2	15.6	5.1	1.6	鉄石英	完形
2	石鏃	25.9	14.0	6.6	1.4	珪質頁岩	先端部欠損
3	石鏃	20.5	10.5	4.4	0.7	玉髓	完形
4	石錐	21.0	14.6	3.6	0.9	珪質頁岩	身部欠損、先端部摩滅
5	石錐	31.1	11.6	7.7	2.4	黒色頁岩	両端折れ、下端部摩滅
6	石錐	20.3	6.5	4.0	0.6	碧玉	身部欠損
7	尖頭器	44.2	28.3	16.1	13.2	玉髓	未製品？加工粗雑
8	石匙	47.4	29.2	8.9	9.4	珪質頁岩	刃部パテナ新しい、つまみ部にアスファルト付着

写真 73 里 64 地点出土石器・観察表



写真 74 里 64 地点出土骨角牙製品 (1)



写真 75 里 64 地点出土骨角牙製品 (2)

第 18 表 里 64 地点出土骨角牙製品観察表

No	種 別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	素 材	備 考
1	釣針	76.8	7.1	6.1	鹿角	軸部～湾曲部残存、チモト付近にアスファルト付着
2	銚頭	93.8	15.6	7.8	鹿角	単純銚、先端部欠損、有肩
3	銚頭	60.6	16.3	10.2	鹿角	単純銚、先端～身部欠損、有肩、両側辺に溝状の抉り
4	銚頭	19.9	7.3	7.7	鹿角	燕尾式、尾部欠損、策孔径4.2mm
5	銚頭	51.7	16.1	9.8	鹿角	燕尾式、先端および背面欠損、尾部三分？ 策孔径6.5mm
6	ヤス	117.3	13.5	6.3	鹿角	組合せヤス、完形、
7	ヤス	87.6	9.1	6.8	鹿角	組合せヤス、完形(再加工)、先端摩滅、左右に逆刺の痕跡
8	ヤス	96.0	14.2	10.4	鹿角	組合せヤス、完形、先端丸く棒状、側辺に溝状の抉り
9	ヤス	74.5	11.6	8.3	鹿角	組合せヤス、先端部欠損
10	ヤス	46.9	11.0	6.4	鹿角	組合せヤス、先端～身部欠損
11	ヤス	60.0	15.0	9.0	鹿角	組合せヤス、先端～身部欠損
12	鉤先	47.1	14.6	7.3	鹿角	孔2箇所、孔径5.4mm、孔内にアスファルト付着
13	鉤先	50.1	11.8	7.5	鹿角	側辺に2箇所の抉り、対辺にかけてアスファルト付着
14	鉤先	35.6	7.9	5.2	鹿角	基部のみ、アスファルト付着
15	鉤先	36.6	8.3	6.3	鹿角	基部のみ、1側辺に3条の溝状の抉り、アスファルト付着
16	不明角器	34.8	7.4	6.1	鹿角	基部のみ、鉤先か？
17	鏃	56.4	8.1	5.4	鹿角	完形、基部にアスファルト付着
18	鏃	45.9	6.6	5.2	獣骨	完形
19	鏃	35.7	6.0	4.4	獣骨	完形
20	鏃	34.4	6.0	4.3	獣骨	完形
21	鏃	72.5	15.2	5.5	シカ中足骨(L)	近位端欠損、横割り2分割(前面)、先端部擦痕・摩滅
22	鏃	58.9	9.2	6.3	シカ中手/中足骨	先端部1/2、縦方向に割れ、先端部磨滅
23	不明角製品	64.0	2.4	6.9	獣骨	完形(つまみ部再加工か?)、先端部摩滅
24	刺突具	64.0	2.4	6.9	獣骨	完形(つまみ部再加工か?)、先端部摩滅
25	筥状角器	94.7	36.6	10.0	鹿角	完形、基部側切断痕、半截後の整形雑、先端側辺に傷・凹み
26	鹿角未製品	64.7	41.8	15.2	鹿角	鹿角枝分岐部、角幹側に切断痕、基部削出し
27	棒状角製品	131.8	14.2	6.0	鹿角	角幹分割後に先端丸状加工、周縁に擦痕
28	腕輪	71.6	8.7	4.0	イノシシ下顎犬歯	折れ、孔径2.5mm
29	垂飾	10.9	20.9	3.0	イノシシ下顎犬歯	縦横破損、孔部1/2残(孔径約2.5mm)
30	髪飾り	42.5	14.0	4.7	シカ中手/中足骨	4分割、全体磨き
31	管玉	41.9	6.0	5.2	鳥骨	完形、両端に横方向・中間に螺旋状の溝、漆?付着の痕跡
32	管玉	17.7	4.6	4.0	鳥骨	完形、全体黒色化